

モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる
交渉に関する民族誌

堀田 あゆみ

総合研究大学院大学
文化科学研究科
地域文化学専攻

平成 26 年度
(2014 年)

目 次

はじめに	6
注記	7
序章 モンゴル遊牧民のモノをめぐる研究	8
第1節 研究の目的	9
第2節 本研究の位置づけと課題	9
2-1. モノをめぐる研究	9
2-2. モンゴルの物質文化研究	11
第3節 本研究の視座と方法論	14
第4節 調査方法	15
4-1. 調査内容	16
4-2. 調査期間	17
第5節 本論文の構成	17
第1章 現代におけるモンゴル遊牧民	19
第1節 モンゴルにおけるポスト社会主義期と現在	19
1-1-1. 市場経済化とネグデルの解体	20
1-1-2. 遊牧人口	21
第2節 調査地の概要	23
1-2-1. アルハンガイ県の地理と産業	23
1-2-2. ホトント郡の概略	23
1-2-3. サント・バグの遊牧民E一家	24
第3節 遊牧民の生計	25
1-3-1. 畜産物による現金収入	25
1-3-2. 定期収入と不定期収入	27
1-3-3. 支出用途と物価	29
1-3-4. 物々交換	34
小結	35
第2章 モンゴル遊牧民の生活世界	36
第1節 遊牧民一家の暮らし	37
2-1-1. 夏営地の一日	37

2-1-2. 冬営地の日	39
第2節 共営世帯と人の往来	42
2-2-1. 宿営地の選定	43
2-2-2. 共営世帯の役割	44
2-2-3. 宿営地における人の往来	46
第3節 人の往来がはたす役割	47
2-3-1. 他家への訪問	48
2-3-2. 情報の収集	50
2-3-3. 情報の内容と取り扱い	51
小結	57
第3章 生活世界にあるモノ	59
第1節 E家の生活空間	59
3-1-1. 居住空間の構成	59
3-1-2. 宿営地の空間利用	60
第2節 E家における悉皆調査	61
3-2-1. 調査の目的と方法	61
3-2-2. モノの所在と収納場所	62
3-2-3. モノの目録	67
第3節 モノについての語り	70
3-3-1. モノの来歴	70
3-3-2. 移動への言及	75
小結	78
第4章 モノの移動をめぐる交渉	80
第1節 モノのやり取り	80
4-1-1. 貸借	80
4-1-2. 貸借に関する原則と実態	84
4-1-3. 貸借か譲渡か	91
第2節 モノの移動をめぐる交渉	93
4-2-1. 交渉の条件	93
4-2-2. 社会関係が交渉に及ぼす影響	94
第3節 交渉にみる情報量の偏在	105
4-3-1. 情報の傾斜分布	105
4-3-2. 情報の分配	113
小結	116

第5章 モノの情報をめぐる交渉.....	118
第1節 モノの情報収集.....	118
5-1-1. ソニルホホ 〈sonirkhokh〉	119
5-1-2. オハハ 〈ukhakh〉	123
5-1-3. 交渉への転換.....	127
第2節 モノの情報管理.....	132
5-2-1. ダルド・ヒーヒ 〈dald khiikh〉	132
5-2-2. お披露目	137
5-2-3. ガエホーラハ 〈gaikhuulakh〉	142
5-2-4. 陳列	147
第3節 情報の操作と交渉.....	148
5-3-1. 情報の戦略的利用	148
5-3-2. 交渉の場としてのゲル	152
5-3-3. 交渉が作る人間関係	153
小結	155
終章 結論	156
謝辞	160
参考文献	161
図・表・写真	
巻末資料	

図・表・写真・巻末資料一覧

【図】 図 1-1 遊牧民人口の推移

図 1-2 モンゴル国の地形とアルハンガイ県の位置

図 1-3 ホント郡の位置

図 1-4 サント行政区と E 家の宿営地の位置

図 1-5 親族関係図〔2012 年時点〕

図 2-1 共営世帯の家族構成

図 3-1 ゲルの空間構成

図 3-2 夏営地の空間利用〔2009 年時点〕

図 3-3 夏季における家財道具の配置

図 3-4 冬季における家財道具の配置

図 5-1 情報管理戦略図

【表】 表 1-1 産業別就労者構成比

表 1-2 乳製品価格〔2008 年冬季〕

表 1-3 ツェツェルレグの市場価格〔2009 年 8 月当時〕

表 1-4 ナイマーの商品価格〔2009 年 8 月当時〕

表 2-1 夏の一日の過ごし方

表 2-2 冬の一日の過ごし方

表 2-3 E 家の共営世帯

表 2-4 E 家の訪問者件数とその主な目的

表 4-1 E 家の貸借記録

【写真】 写真 1-1 E 家の夏営地を訪れたナイマーから商品を購入する M（2009 年 7 月）

写真 2-1 E 家の夏営地（2012 年 7 月）

写真 2-2 アイル・ヘセへの様子（2010 年 6 月）

写真 3-1 固定式物置小屋（2011 年 8 月）

写真 5-1 親戚 B 家夫人のオハハに応える M（2012 年 7 月）

写真 5-2 弾丸携帯用の腕輪（2012 年 8 月）

写真 5-3 ホイモルの西側に置かれた貴重品用の長持（2010 年 6 月）

写真 5-4 親戚へのお披露目の様子（2010 年 6 月）

写真 5-5 陳列の様子（2010 年 6 月）

【巻末資料】 E 家の生活世界にあるモノ目録

はじめに

はじめて映像で目にした瞬間からモンゴルは私の憧れであった。人間と自然の共生について悶々と悩んでいた中学時代のある日、遊牧に生きるモンゴルの人々をテレビ番組を通して知り衝撃をうけた。彼らから自然と共に生きる術を学びたいと切に願うようになり、関連する書籍を読み漁った。

モンゴルに関する知識が増えていくことは喜びであったが、次第に私の関心は共生の術からモンゴルの人々そのものに向かうようになった。遊牧民に関する数多くの記述の中で、名前も知らない旅人をもてなすホスピタリティーやモノに執着しない精神性に触れられていたからである。自分と比べなんと懐の深い人々なんだろうと驚嘆し、いかにして彼らがそのような境地に至ったのか直接聞いてみたいと考えるようになった。高校生になってはじめて実際にモンゴルを旅し、卒業後に首都ウランバートルへ留学した。想像していた通りのモンゴルと本で読んでいたのとは異なるモンゴルを目の当たりにし、ますます彼らのことが知りたくなった。

遊牧民のモノをめぐる交渉について研究したいと思ったきっかけもこの違和感にあった。移動生活のため必要最低限のモノしか持たないといわれていたが、ゲル（移動式住居）の中を見回せば、置物などの装飾品があり、家具の中を覗けば一年に一度も使わない箱入りの茶器セットや衣類が仕舞い込まれている。モノに執着しないといわれるが、目新しいモノに目敏く、他家のモノに対して逐一「それどうしたんだ」と入手経緯を尋ねたり、気に入れば譲るよう交渉を持ちかけたりと忙しい。私の持ち物も例外なく情報収集と交渉の対象とされ、交渉を交渉だと気づけていなかった当初は、身包みはがれるのではないかと不安を覚えたほどである。

いきいきとモノのやり取りをする彼らの日常を見るにつけ、これほど生活と密着し、人柄まで偲ばせるモノを介した人と人との関係について自分がまったくの無知であったことを痛感した。自然の中で物欲少なに生きている人々という偏見をもち、勝手に違和感をいだいていたことに気づかされた。そこで、同時代を生きているモンゴル遊牧民が、どのようなモノを生活に取り込んでおり、それらのモノをめぐる周囲の人々とどういったやり取りをしているのかを忠実に描き出そうと決意した。これまで着目されてこなかったモノをめぐる実践を明らかにすることで、彼らの新たな一面を提示することができれば幸いである。

注記

- ・本論文において「モンゴル」という表記を使用する際には、特に断らない限り現在のモンゴル国を指す。
- ・モンゴル語の表記は、モンゴル国でおよそ 70 年間通行しているキリル文字をラテン転写したものを用いる。なお、固有名詞やキータームとして提示するモンゴル語には、カタカナ表記を併せて付する。

モンゴル・キリル文字	ラテン文字	モンゴル・キリル文字	ラテン文字
А а	A a	П п	P p
Б б	B b	Р р	R r
В в	V v	С с	S s
Г г	G g	Т т	T t
Д д	D d	У у	U u
Е е	Ye ye	Ү ү	Ü ü
Ё ё	Yo yo	Ф ф	F f
Ж ж	J j	Х х	Kh kh
З з	Z z	Ц ц	Ts ts
И и	I i	Ч ч	Ch ch
Й й	i	Ш ш	Sh sh
К к	K k	Э э	E e
Л л	L l	Ю ю	Yu/Yü yu/yü
М м	M m	Я я	Ya ya
Н н	N n	Ы ы	y
О о	O o	Ь ь	'
Ө ө	Ö ö	Ъ ъ	-

- ・モンゴル語の訳語は、1994 年刊行の小沢重男編纂『現代モンゴル語辞典 改訂増補版』に依拠し、カタカナ〈原語:訳語〉と表記する。
- ・会話文「 」中の〔 〕の部分は、筆者による補足を示す。
- ・人物の名前はアルファベット一～二字で表記する。実名の頭文字にすると重複する人々がいるためこれを避け、同一人物が特定できるように世帯ごとに便宜上のアルファベットを固定する。世帯主以外でも登場頻度の高い人物には、アルファベットを付している。

序章 モンゴル遊牧民のモノをめぐる研究

本研究が対象とするのは現代のモンゴル国において遊牧を営む人々である。遊牧は中央ユーラシアあるいは北アジアと呼ばれる地域で、今から1万年から4000年くらい前にはじまったとされており〔杉山 2005: 26; 松川 1998: 17〕、モンゴル遊牧民は少なくとも13世紀から遊牧を行ってきた。遊牧という言葉は、遊と牧、それぞれ異なる次元の概念が組み合わせられたものである。遊は定住か、半定住か、漂泊かといった生活圏の空間的な広がり様態を表し、牧は家畜の飼育で生活をたてるという生業基盤を示す〔松井 2001: 11〕。つまり遊牧民とは、「一定の生活圏のなかを、一年の一定期間簡単な持ち運びのできるテントのような住居に住んで、家畜とともに移動し、家畜を中心とするその牧畜生産物によって、おもに生活をたてている人たち」のことを指す〔松井 2001: 14〕。

もともと牧畜は、完全な自給を達成するものではないため、交易や略奪によって外部世界との交流を維持してきた〔松井 2001: 13〕。モンゴル遊牧民の場合は、漢民族との交易が物流を支えてきたため、きわめて牧畜専門的であった〔松井 2001: 19〕。それゆえ、モンゴルの遊牧民に関しては、放牧・去勢・搾乳などの牧畜技術や牧畜経営にかかわる実践など、人と家畜の関係に関する多くの研究が積み上げられてきた。その一方で、遊牧民を取り巻く物質文化は副次的な扱いとなり、物量の少なさや簡素さへの言及が見られる程度であった。その理由も家畜を連れた季節移動を簡便にするためであるといった合理性や、モノに執着しないといった精神論に帰結されてきた。

はたして地理的に分散独居している遊牧民が、自家の生活を支えるモノに頓着しないということがあるだろうか、遊牧民を遊牧民足らしめているのは家畜の存在だけなのだろうかという疑問が筆者に生じた。本研究はモンゴル遊牧民を対象としながらも、焦点を家畜ではなくモノに絞り、モノとの関係から遊牧民の生き方を探ろうとする試みである。

われわれの生活世界にはさまざまなモノが取り込まれている。ここでいうモノとは、何らかの経緯で生活世界に存在し、形と質量をもち、目で見、手で触れることのできるモノすべてを指す。筆者自身の生活世界にあるモノを振り返ったとき、それら一つ一つが手元にきた経緯を把握しているとはとてもいえない。必要か否か決めかねたまま、何十年と死蔵しているモノも存在する。外的な働きかけがない限りモノが自発的に移動することはなく、置かれた場所に置かれた時の状態で（エントロピーの法則により経年劣化しつつも）存在し続ける、はずである。筆者はこのようにモノを静態的に捉えていたがゆえに、安心して放置しておくことができた。

しかし、自分のモノを手元に留め置くことが困難で、かつその必要性もないと考える人々がいる。本論文が対象としているモンゴル遊牧民にとって、モノは時の流れと人の往来とともに移ろいゆくものである。だからこそ手元に留め置くためには相応の働きかけをしなければならない。そうしたモノの存在が契機となって引き起こされる人々の反応や相互行

為に焦点をあてるところから本研究は始まっている。生活世界におけるモノの在りようから、モノへの働きかけ、その先にある生存戦略へと視点を移しながら、モンゴル遊牧民のモノをめぐる交渉の世界を読み解いていく。

その際筆者が考察に用いるのが、モノの「情報性」というアプローチである。モノの物質性から情報性へと視点を切り替えることによってはじめて、モンゴル遊牧社会においてモノが移ろうという現象を解明することが可能となる。

以下では、研究の目的、先行研究と本研究の位置づけについて概観したあと、本研究の視座および調査方法について述べる。

第1節 研究の目的

本研究の目的は、モンゴル遊牧民のモノの世界が彼らの相互行為によって生成されていることを例証し、モノが世帯を超えて移動するという現象を遊牧の社会的文脈から読み解くことである。そのために、モノをめぐる遊牧民の日常実践を分析し、モノの情報性という観点から考察を行う。

まず第一に、ポスト社会主義期を経験した現代の遊牧民の生活世界とそこに取り込まれているモノの全容を詳らかにする。悉皆調査とモノについての語りを通して、どのようなモノがどのように存在しているのかを提示する。第二に、モノが貸借や譲渡によって世帯間を移動している様子を描き出し、移動を決定づけている条件が何であることを分析する。

そして第三に、モノをめぐる交渉を有利に展開するために、当事者間でどのような相互行為（＝交渉）が行われているのかを例示し、そのような日常実践が遊牧社会の基盤を形成していることを議論する。

第2節 本研究の位置づけと課題

2-1. モノをめぐる研究

モノをめぐる研究にはさまざまなアプローチがあり、モノを通して何を明らかにするかによってモノのどの側面に焦点をあてるかが異なる。文化人類学や民族学において古くから研究対象とされてきた「物質文化」は〔内堀 1997: 4〕、家屋の造りや着衣といったローカルな社会において作りだされる、モノそれ自体への関心が牽引してきた。

1970年代後半以降に消費社会論が登場すると「商品」という枠組みでモノが捉えられるようになった〔伊藤 1997: 113〕。生産過程から消費へと関心が移りゆくなかで、使用価値や商品価値といったモノの記号性・象徴性が主張される一方、Appadurai らによってモノの物質性、時間性に焦点があてられるようになった〔伊藤 1997: 121-123〕。モノは物質性を

帯びていることにより、一定の空間と時間を占める。Kopytoff は、モノには「文化的履歴 (cultural biography)」があり、モノは時間と記憶の枠組みに埋め込まれていると主張した [Hurdley 2013: 102]。モノは社会的な生活において「商品 (commodity)」状態を出入りしているという。交換可能性が広く開かれた状態が「商品化 (commoditization)」であり、その対極にあるのが交換不可能な「個別化 (singularization)」の状態である。モノがその両端を多様な速度で、可逆的に往還しているというのが彼の主張である [Appadurai 1986:13; Kopytoff 1986: 69-70]。

モノを個人や社会の表象として捉えるのではなく、物質性をもって人の間を移動するという観点から捉えたこの研究アプローチを筆者も踏襲する。ただし、Kopytoff は「商品」を、資本主義生産体制をもつ社会だけでなく、モノの交換が行われるどの社会においても見られるものだと述べているが [Kopytoff 1986: 68]、「商品」そのものがモノの価値やサービスの交換可能性、つまり対価の支払いによる所有権の移転を暗黙の前提としているところに議論の余地が残る。交換可能性の議論では、交換を意図しないモノの移動という現象を説明することができないからである。その点については終章で触れたい。

1990 年以降グローバル化によるモノの越境性と均質化に議論が向かうと、特定のモノのローカル社会における位置づけ、社会を構成する個人とモノとの関係性に焦点が当てられるようになる。そこでは、個人による自伝的語りを通して積極的な意味づけがモノに対してなされる様子が研究の対象となった [Hurdley 2013: 102]。例えば、ミラーは分析単位を個人として、物質世界からの働きかけがそれとなくわれわれの行動を規定しているという観点から、特定の場所における特定のモノと個人の関係を通して社会との接合の仕方を分析しようとした [Miller 2009]。

また、ハードレイらは家族と個人の関係を家庭におけるモノの存在から議論するために、ディスプレイされたモノやモノの語りに注目し、語りの内容だけでなく、どう語られるかにも着目した [Hurdley 2013]。チクセントミハイら [2009] は、モノの意味に焦点をあて、家庭にある特別なモノの語りを家族の表象として提示した。モンゴルに関しては、エンブソン [2007] が、遊牧民のベッドの装飾に施されているシカの刺繍について、それがその家の子どもの数を表しており、家族関係がモノに埋め込まれていることを明らかにしている。

これらの研究では、モノのディスプレイとモノの語りが調査の対象とされていることからわかるように、モノは記号性・象徴性へと回収されていく。しかも、語りの対象とされるのはその個人にとって「特別なモノ」に限定される。モノの意味づけがいかに変化しようと、家庭や職場など生活世界に取り込まれたモノは閉じられた空間において静的な存在として扱われる。筆者は生活世界にあるモノの語りからモノと個人の関係を分析するという手法が有効であると認めるが、モノと個人、あるいはモノと家族という閉じられた二つの対象間での議論だけでは、モノが動くというダイナミクスを捉えることはできないと考える。

本研究の位置づけは、モンゴルの遊牧社会においてモノの社会的文脈を探るというものである。研究の関心は形状や用途や数量といったモノ自体にあるのではなく、個人にとってのモノの意味でもない。特定のモノを通して社会の表象として扱うのではなく、日常にあるモノを媒介にして人と人がどのように関わっているのかを明らかにすることにある。モノを物質的実在と規定した場合、「それは一定の時空間を占めて存在し続けるものであり、そうそう簡単に消えてなくなるものではない」[床呂ほか 2011:4]と考えられている。しかし、筆者が対象とするのはモノが所有者の意思とは無関係に簡単になくなってしまう社会である。そのような社会、人々の間においてモノが果たす役割を解明することが本研究の課題である。

2-2. モンゴルの物質文化研究

1) 脱牧畜研究の試み

モンゴルの遊牧社会の研究には多くの蓄積がある。まずは、家畜に関する人間の営みに焦点をあてた研究があげられる。放牧、去勢、搾乳といった家畜管理技術や乳製品の加工技術のほか、毛色や年齢、性別による家畜の名称体系や個体識別、家畜に関することわざや儀礼を通じた文化研究などである[梅棹 1990; 小長谷 1992, 1996; 鯉淵 1995; 風戸 1999; 長沢ほか 2008]。そのほか、遊牧民が家畜を一方的に管理するのではなく、人間と家畜が声や身ぶりを通してコミュニケーションを図り、互恵的な共存関係を築いていると報告する民族誌などもある[Fijn 2011]。

次に、世界で二番目に成立した社会主義国として、70 年間におよぶ経験を有することから、ソ連型計画経済から市場経済への移行期を対象とした社会変容に関する研究があげられる。社会主義化に伴う牧畜生産組織化、さらに市場経済への移行による組織の解体という変革を二度も経験したモンゴルの遊牧民が、それらをどのように受容し、牧畜経営を行ってきたのかを明らかにするものである[小長谷 2002; 風戸 2009; 辛嶋 2010; 富田 2013]。また、市場経済化以降の牧地利用の変遷が土地と家畜と人間の関係に与えた影響を検討する研究もある[小長谷ほか 2005; 富田 2010; Endicott 2012]。他方、ポスト社会主義期における、遊牧民の市場アクセスと商取引に着目した辛嶋[2010]や、都市部における社会主義時代から市場経済化を経て現代にいたるまでの商売に対する倫理の変容を探る滝口[2014]など、商いを主題とする研究も登場している。

とはいえ、遊牧社会や遊牧民の生活に関する研究においては、常に家畜との関わりに主眼がおかれた牧畜研究が支配的であった。モノ研究の観点から見ると、モンゴル遊牧社会は、家畜という生きた動産を通して描かれてきたのである。その一方で、細々としかし貴重な物質文化研究も行われてきた。梅棹[1990]は 1940 年代の半ばに、現在の中国内モンゴル自治区において調査を行い、遊牧民の住居、家財道具、装身具、牧畜用具の精緻なスケッチと聞き取りの記録を残している。それらの資料は、異なる時代や地域における変容

過程を示す歴史的価値をもった民族誌資料として小長谷ら〔2013; 小長谷ほか 2012〕によって再評価されている。

そのほか、旅行記や民族誌の形で記述の一部を、遊牧民の生活世界にあるモノにあてているものがある。1950 年代後半にモンゴルを訪れたハンガリー民俗学者のア・ロナ・タシ〔1966〕は、当時の人々の暮らしぶりを記述するとともに、ゴビ地域に暮らす遊牧民世帯の家財道具とその配置について図示している。野沢〔1991〕は、1980 年代後半における遊牧民の住居（ゲル）の構造と家財道具の配置を詳細に図解しているほか、牧畜用具、家財道具全般、装身具、玩具などのスケッチには名称と用途を付し、それらの道具が使用される状況について述べている。三秋〔1995〕は 1990 年代初頭のゴビ地域におけるゲルの内装、家具配置、生活道具類について調査を行っている。いずれも当時の社会体制を反映した物質文化を知る手掛かりとなる貴重な資料であるが、「どのようなモノが存在するのか」が提示されているのみで、それらが社会や人々の間でどのような役割を担い得るのかといった考察は行われていない。

したがって、本研究では現代遊牧社会のモノの世界を対象とし、「どのようなモノが存在するのか」のみならず、遊牧民の生活様式に落とし込んで「モノがどのように存在するのか」を丹念に描く必要がある。

2) 研究対象の展開

モンゴル遊牧民の物質文化研究で扱われてきたのは、遊牧という生業に関わる牧畜用具や移動式住居の構造、あるいは伝統的な彩色模様が施された家財道具、銀製の装身具といった特定のモノであった。例えば、モンゴル国のダルハト・モンゴルのシャーマンが儀礼に供する道具〔Pedersen 2007〕や、美意識の表出として家財道具や装飾品に施された文様〔阿拉坦宝力格 2007〕などの特別なモノである。あるいは、遺構から出土した品々や絵画に描かれた生活財、および著者らが収集したかつて遊牧生活で使用されていた品々である。それらの素材や種類や利用法を通して、伝統的な遊牧生活の世界観を説明し、過去 20 年における遊牧民の消費文化の変容により、何千年と続く文明のなかで育まれた物質文化が急速に失われていることに警鐘を鳴らす研究がある〔Batsaikhan ほか 2009〕。伝統的な物質文化が次世代へ継承される必要性を説く彼らは、遊牧民の家庭における物質文化の一例として、用途にあわせて作られた銅製、鋼鉄製、鋳鉄製、真鍮製、青銅製、木製、陶器製の大小さまざまな器、鍋、やかん、水差し、桶、壺、盆などを紹介し、日常の用に供するためだけではなく装飾品となるよう、木工や細工職人が趣向を凝らしていたと述べる。しかし、失われゆくモノに関心が向けられるあまり、現在の遊牧生活を支える物質文化とはかけ離れたものになっている。プラスチック製、アルミ製、ステンレス製の大量生産された既製品に置き換わってもなお、遊牧生活が維持されている事実こそ注目すべきであると筆者は考える。

そこで、物質文化の転換期を探てみると、第一の転換期はソ連型社会主義体制の下、牧畜協同組合化が完了した 1959 年ごろであると考えられる〔辛嶋 2010: 192〕。モンゴル人民共和国の遊牧地域では、1950 年代後半から 1990 年代初頭までネグデル (negdel) (現在の行政区分である郡に相当) と呼ばれる協同組合が組織されていた。人々に計画経済を実行させる生産組織であると同時に、遊牧民に現金や生活必需品を給付する流通機構としての役割を担っていた〔風戸 2009: 135〕。ネグデルが設立されたのを機に、ポリタンク、トランプ、絨毯、かまどといった工業製品がソ連を中心とするコメコン¹経済圏から流入するようになった〔辛嶋 2010: 192〕。第二の転換期は、市場経済へと移行した 1990 年代前半であろう。耐用年数を過ぎたコメコンの工業製品は、安価な中国製品へと置きかわっていき、モンゴル国はグローバルな資本主義経済に接合されていった〔辛嶋 2010: 193〕。

第二の転換期から 20 年以上が経過した現在の遊牧民世帯には、携帯電話、ソーラー・パネルなどかつてなかったモノが次々と流入している。もはや中国製品だけでなく、韓国や欧米製の新品、中古品が流通するようになり、消費者の選択の幅を広げている。安価で軽いプラスチック製品が木製や革製の台所用品に取って代わり、韓国産の中古トラックの普及にともなって、これまで季節移動の際に用いられてきた牛車が姿を消しつつある。家畜の放牧や家族揃っての外出に中国製のオートバイが利用されるようになると、相対的にウマが乗用される機会が少なくなった。このように、チクセントミハイ〔2009〕のいうモノと人間との相互作用によって、新たなモノの普及は遊牧民の物質文化だけでなく、生活にも変化を起こしている。現在の遊牧民を取り巻くモノの世界は、こうした製品も含めて捉える必要が生じている。

3) 解釈をめぐる問題

モンゴル遊牧民の物質生活を特徴づけるものとして、しばしばモノの少なさが指摘されてきた。先述の梅棹が「家財道具は比較的すくない」と述べているのにはじまり〔梅棹 1990: 567〕、小澤も「家財道具は非常に簡素」と述べている〔小澤他 1992: 39〕。モノが少ない理由として遊牧民の移動性がとりあげられ〔阿拉坦宝力格 2007〕、限られた居住空間を最大限に利用するための工夫であり〔野沢 1991〕、移動の際の妨げにならないようにするためだというのが一般的な言説である。鯉淵は「遊牧に生きるモンゴルの人びとの生き方は、衣食住をはじめ生活のあらゆる部分から、徹底して余分なものを取り去ってしまうことに腐心したものの典型」と述べており、小澤も「いかに物を少なくするかが文化の基本」としている〔鯉淵 1992: 39; 小澤他 1992: 41〕。

これらの先行研究にみられるように、遊牧民とモノとの関係が語られる場面においては、モノの量的側面に焦点があてられてきた。観察した人間の側から見て、相対的にモノの数が少ないという事実がメディアを通して強調された結果、「モンゴルの遊牧民はモノに執着しない」といった誤った解釈が生み出されたと考えられる。モノの数が少ないというこ

¹ COMECON (経済相互援助会議)

とがいつの間にか物欲が少ないという精神性に転換され、遊牧民に最小限のモノで満ち足りる術を知っている素朴な人々という幻想を押しつけてきた可能性については、別稿〔堀田 2012〕で述べた通りである。量的側面だけに着目して遊牧民の物質文化を語ることは、実態を見誤らせる危険性をはらんでいる。

第3節 本研究の視座と方法論

本研究で扱うのは、モンゴル遊牧民の生活世界に取り込まれたモノであるが、モノの形状や材質、製作方法や用途の解明に主眼をおくものではない。また、扱うモノの範囲を居住空間のなかに限定せず生活世界としたのは、これまでの研究枠組みに対するアンチテーゼである。モノが存在する空間に境界を設定し、その中にあるモノとそれを利用して生活する人というモノと個人間の閉じられた世界のなかでモノを捉えようとする研究には、モノを静態的な存在としてみる無自覚が働いているといえる。しかしながら、それでは世帯を超えて移動し、社会関係を表し構築する存在としてのモノ〔Appadurai 1986〕の動態性を看過してしまうことになる。そこで本研究では、モノの「移動性」という概念をもちこみ、何らかの経緯で生活世界に取り込まれたモノがそこに留まり続けるという前提を疑うことから始める。

本研究はモノを扱いながらも、従来の物質文化研究とは距離を置き、モノとそれを利用して生活する人との相互作用の枠を超え、モノの存在が契機となって引き起こされる人と人の相互行為を関心の中心に据える。相互行為として想定しているのは、所有と分配、収集と発信、交渉（言語・非言語含む）である。与え手と受け手という双方の役割が明示的な分配・発信のみならず、社会関係のなかで規定される所有・収集も相互行為と捉える。このようなモノを発端とする相互行為のあり方を、法的・制度的な枠組みからではなく、日常生活における実践から提示しようという試みである。なお、婚姻や家畜の贈与などハレの場における儀礼的なモノのやり取りは本論文では扱わない。むしろ日常が舞台であり、世帯間や個人間の何気ないやり取りに焦点を絞っている。

モノ研究の方法論については、今和次郎が提唱した「普通の常識ではなんらの価値のないような品物をもていねいな態度で記入します。そうしてどのような偶然をも見のがさない態度で全部記入しておくのです」〔今 1990: 225〕という考現学の着眼点と、「李さん一家生活財調査」〔朝倉他 2002〕の手法を取り入れ、網羅的な悉皆調査を行った上で、モノ一つ一つに関する聞き取りを行った。しかしその目的は、博物学的なカタログ作りや分類のためではなく、語られた内容を分析することによりモノがどのようなメディア（他者のメッセージを媒介して発信するもの・情報を媒介するもの）〔奥野 2009: 106〕として捉えられているのかを明らかにすることであった。本研究では、モノそれ自体に価値が内在するのではなく主体によって様々な価値が与奪されているという立場に立ち〔Appadurai 1986〕、モノの意味も、文化・社会的環境という文脈のなかにある程度埋め込まれてはいるものの、

それぞれの家族によって個別に付与されていると考える [チクセントミハイ他 2009; Hurdley 2013]。

最後に、本研究に独創性を添える着想として、モノの「情報性」について述べたい。これは、現地調査で観察された現物の移動を伴わない、モノの情報のみによる分配という現象を読み解く分析概念として筆者が提唱するものである。モノの情報性とは、物質性をもったモノの使用価値や交換価値ではなく、モノに付随した情報に価値を見出す視点である。モノに付随した情報（例えば、材質や性能といった五感で知覚できるモノ自体がもつ情報。生産地・価格・入手経緯・入手時期など所有者に尋ねることで得る情報。誰から誰の下へ渡り、今どこにあるかというモノの移動履歴と現在の所在地情報など）と述べたが、これは、モノの存在がすでに認知されている場合において収集の対象となる情報であり、そもそもモノが存在する（か否か）という事実自体が情報としての価値をもつ。

本論文を通して、モンゴル遊牧民のモノの世界を理解するためには、モノを情報としてみるという視点が有効であることを実証していく。

第4節 調査方法

本論文が依拠しているデータは、2009年7月から2012年8月までの計七回、約五ヶ月間にわたって、アルハンガイ県ホトント郡サント行政区、X地域を中心に実施したフィールド調査から得たものである。調査はモンゴル国の標準語であり、現地でも使用されているハルハ・モンゴル語で行った。

遊牧民のモノについて調査を行うために、第一に遊牧が盛んな地域であり、第二に物流の中心である首都ウランバートルから近すぎず遠すぎずという点を考慮したうえで、第三に一つゲルの下での住み込み調査を受け入れてくれる家族を探すことから始めた。幸いにも首都から500km以内で、モンゴル有数の遊牧地域であるアルハンガイ県に筆者を快く受け入れてくれる家族が見つかった。夫婦とその二人の子どもの四人で暮らすゲルに居候させてもらうことになり、筆者には子ども達が二人で使っていた西側のベッドがあてがわれた。

調査は、参与観察と聞き取りによって行った。家畜を中心にまわる一家の生活に密着しているため、放牧や搾乳の合間あいまに見聞きした出来事をノートに書きつけ、モノや人々の生活の様子をデジタルカメラやビデオカメラで記録するという日々であった。記録したモノについては、家族が取り出して使っている時などを見計らって話を聞くように努めた。

彼らには日々の暮らしがあり筆者の調査に構ってられない時があれば、筆者が体調を崩して調査どころでないこともある。両者がやる気になっても、時間を問わず頻繁に訪れる客人の前での聞き取りは憚られたため（その理由は第5章第1節にて詳述）、全てのモノのデータを収集するにはかなりの根気が必要であった。一定量のデータが集まったのはひとえにE家の協力の賜物である。

4-1. 調査内容

筆者は2009年7月に初めてサントのE家を訪ねた。住み込みで調査をさせてほしいと願い出たところ、家長のEが即断で了承してくれた。その日から居候となり、E家の家族と寝食を共にしながら参与観察を始めた。この第一回目の調査（2009年7月～9月）では、1）E家や共営世帯の家族構成・訪問者との社会関係の把握、2）夏営地での生活サイクルおよび放牧・搾乳・清掃・搜索といった家畜に関する作業の把握、3）夏営地におけるE家の生活世界にあるモノの悉皆調査を行った。

第二回調査（2010年1月～2月）では、冬営地に移動したE家を豪雪の中探し当て、1）共営世帯の家族構成・訪問者との社会関係の把握、2）冬営地での生活サイクル・家畜の世話に関する作業の把握、3）冬営地におけるE家の生活世界にあるモノの悉皆調査を行った。

季節移動の際にはゲルの模様替えが行われる。通気性を優先する夏と、断熱性を考慮し室内を隙間なく家具で埋め尽くす冬とでは家具の数も配置も変化する。家具の増減に従ってゲル内のモノの量も増減するため、E家の生活世界にある全てのモノの利用状況を調査するためには四季を通じた観察が必要となる。E家の場合、模様替えや衣替えで一時的に不要となった家財道具や衣類を、夏営地と冬営地の中間地点に設置した木造の固定式物置小屋に保管しているので、そうした保管物のほか、ゲルの外に置かれている家畜用具なども記録した。

春営地で実施した第三回調査（2010年6月）では、これまでに収集した生活世界にあるモノについてE家の家族から聞き取りを行った。夏と冬の悉皆調査では、ベッドの隙間や長持の底にあるモノまで全て取り出し、写真やスケッチでデータを記録していた。それらのデータを紙媒体にプリントしたカタログを持参し彼らに見てもらうことによって、以前の調査で聞き漏らした情報や追加の情報を聞き取った。

第四回調査（2010年10月）では、秋営地への移動を確認するつもりであったが、調査期間中に移動は行われなかったため夏営地に留まったままで、また第五回調査（2011年5月）では、春営地から夏営地への移動を観察する予定であったが、冬営地に留まったままであったのでそこで聞き取り調査を継続した。第五回調査では、これまでの調査で記録したモノのカタログを持参し、現在それらのモノがどうなったのかを確認するとともに、共営世帯や訪問者のモノについての語りや、彼らとE家および筆者との間で交わされるモノについての会話、モノに対する反応、モノをめぐる交渉などの記録を集めた。

第六回調査（2011年8月）は、これまでの調査とは状況が異なるため、少し補足説明を行う。筆者が調査を行ってきたE家のゲルおよび生活世界にあるモノ一式が、大阪府にある国立民族学博物館に買い取られることになった。筆者が第五回調査の折りに博物館側の意図をE家に打診したところ、驚くほど前向きな答えが返ってきたため、交渉を進め2011年8月にゲルとモノ一式が引き渡される運びとなった。筆者もE家のゲルが解体されトラックに積まれていくところに立ち会った。その際筆者が注目していたのは、E家の家族が何

を手放しどんなモノを手元に残しているのか、また、親族や近隣世帯の人々がどのような反応を示しているのかという点であった。

その後の E 家の生活がどうなったのかということを確認すべく第七回調査（2012 年 7 月～8 月）を行った。E 家の新調されたゲルに居候しつつ、共営世帯や訪問者とのモノのやり取り、貸借状況、交渉の様子などを観察した。

4－2．調査期間

以上のように、調査期間は、2009 年 7 月から 2012 年 8 月までの計七回、約五ヶ月間である。調査を複数回に分けて実施したのは、夏、秋、冬、春というそれぞれの宿営地における生活の様子とモノの様相を観察するためであった。毎年決まった場所に固定されている冬営地と、ある程度選好場所が決まっている夏営地への移動は行われても、秋と春の移動はその時々天候や草や水の状態によって大きく左右されるため、行われないこともある。

秋、春営地をみようとは何度も訪問を重ねることになった結果、E 家や関わりのある世帯との信頼関係が深まるという経験をした。長期間ともに過ごす方が信頼醸成に有効だと思われるかもしれないが、彼らの世界では遠方からわざわざ自分たちに会うためにやって来たという事実の方が尊重される。第一回目の調査で二ヶ月間滞在した筆者には、E の妹という家族内でのポジションが与えられた。「また来ます」といって実際に第二回目調査で E 家を訪れた時、豪雪に阻まれ午前二時という到着時刻であったにも関わらず、喜んだ E が共営世帯や近隣世帯の人々を呼びに行き、日が昇るまで宴に興じるということがあった。一ヶ月ほどの滞在であったがその後の調査では、日本で学んでいる E 家の子どもという扱いになり、さらに距離が縮まった。

第 5 節 本論文の構成

本論文は序論（序章、第 1 章）、本論（第 2 章から第 5 章）、結論（終章）で構成される。序章で研究の目的と視座、および調査方法について述べる。第 1 章では、ポスト社会主義期を経たモンゴル国の概況とモンゴル遊牧民のおかれている現状を概観する。そのうえで、調査地であるアルハンガイ県ホトント郡サント行政区に暮らす遊牧民一家に焦点をあて、彼らを取り巻く社会関係や経済状況について記述する。

第 2 章では、遊牧民の生活を把握するために、E 家の夏営地、冬営地におけるそれぞれの典型的な一日の過ごし方を紹介し、季節ごとの生活・社会環境の違いについて述べる。そして生活の基盤となる社会関係、つまり家畜の放牧を協力して行う共営世帯や親類縁者、一日に数十人を数える来訪者の存在について述べる。

遊牧民の暮らしは、季節ごとに変化する家畜の活動時間によって起床時刻や食事時間がかわることからもわかるように、基本的に家畜の世話を中心に回っている。だが一日中家畜の側で過ごしているわけではなく、搾乳、放牧地までの誘導、囲いの清掃など作業と作業の合間には自由にできる時間をもっている。その間に家事やモノづくりをするのであるが、それと同じくらい重要な日課となっているのが他家への訪問である。共営世帯や親戚、友人、近隣の世帯など、その日その時々状況に合わせて他家を訪れさまざまな情報を交換する。そこで、第2章の後半部では、実際に誰がどれほどの頻度で調査世帯を訪問しているのかということを明らかにし、他家への訪問と情報収集がモンゴル遊牧民の日常生活の核であることを実証する。

第3章では、遊牧民の生活世界にあるモノとその在りようを描き出す。まずは生活の場である住居（ゲル）や宿営地の一般的な空間構成について先行研究を参照しながら、E家の空間構成とその利用について概観する。次にE家で実施したモノの悉皆調査の結果を示し、季節ごとの様相や収納場所に関する規定について述べるとともに、モノの数や種類に関する言説と実態の相異点を指摘する。そして、モノについての家族の語りを分析し、遊牧民のモノに対する認識を明らかにする。

第4章では、第3章で明らかになったモノの移動という現象を掘り下げ、モノが世帯間を頻繁に出入りする様子を描き出す。また、貸借に関する原則や実態に触れながら、彼らのモノのやり取りには貸借と譲渡が包括されていることを提示し、モノのやり取りには交渉が不可欠であることを述べる。具体的な交渉の事例をもとに、モノの情報量の多寡が交渉を左右しており、情報量の偏向は意図的に創出されているという事実を明らかにする。

第5章では、モノからモノの情報へと目を転じる。遊牧民が他家のモノの情報を収集し交渉に利用している一方、所有者はモノの情報を秘匿あるいは積極的に発信することによって情報管理を行っている。当事者間のそうした相互行為の実態を事例を通して提示する。また、情報の分配が社会関係に基づいて行われるばかりでなく、情報分配による交渉機能を逆手に取ることによって、人間関係をも操作し得る可能性について考察する。

終章では、各章で明らかにした点を総合して考察する。モノの情報自体が交換の対象となり得るモンゴル遊牧社会が情報社会であり、交渉社会であることをあらためて主張する。

第1章 現代におけるモンゴル遊牧民

本章は、1990年の市場経済化から20年以上が経過した現在のモンゴル国とモンゴル遊牧民のおかれている状況を把握することを目的としている。まず、モンゴル国の経済や社会の変化が遊牧民にどのような影響を与えているのかを概観したあと、調査対象となることを快く引き受けてくれた遊牧民E家と彼らが暮らすアルハンガイ県ホトント郡サント行政区の概要について説明する。また、一家を中心としたサントの遊牧民の経済状況について述べ、市場経済と遊牧民がどのように接合しているのかを次章以降の議論の前提として提示したい。

第1節 モンゴルにおけるポスト社会主義期と現在

モンゴルは1921年に社会主義政権が誕生して以降、ソ連に次ぐ世界で二番目の社会主義国家として約70年間計画経済を進めてきたが、1990年に一党独裁を放棄し、民主化、市場経済化へと舵を切った。このようなソ連型の社会主義体制の崩壊から市場経済・民主化への移行期をさして、ポスト社会主義²期という。

ソ連型の社会主義体制というのは、政治、経済、社会、文化、科学の全領域、および日常生活にいたるまで影響力を及ぼしていたシステムであった〔風戸 2009: 10〕。そのシステムが新自由主義へと移行する過程には、西洋近代化に対抗するような民族主義の台頭、宗教・慣習・社会組織における伝統回帰などさまざまな社会変容がみられた〔風戸 2009: 10〕。

モンゴルでは、1990年に突入したポスト社会主義期から20年以上が経過した。時代区分としてポスト社会主義期を捉えた際、現在はすでにその「有効期限」が切れ、「ポスト『ポスト社会主義』」的状況が出現しているといわれている〔尾崎 2008〕。モンゴル遊牧民社会のポスト社会主義期について尾崎は、体制移行直後においては、家畜の私有化と物不足により自給傾向が強かったと述べている〔尾崎 2008: 483〕。その後の自然災害を起因とする家畜の喪失による首都への人口流入の加速、2000年代に始まる鉱山開発ブーム、経済的に裕福な遊牧民層の出現による流通システムの再構築といった現象は、1990年代の混乱期を想定させるポスト社会主義期の射程を外れ、「ポスト『ポスト社会主義』」に突入しているという〔尾崎 2008: 483-484〕。国内における人々の生活水準の格差は拡大する一方であるが、鉱山資源開発によって現在の国家経済は安定している。本論文が扱う現代とは、

² 「ポスト社会主義」は、「人類の壮大な歴史的実験であったソ連の社会主義体制の評価と、社会主義体制崩壊後の旧社会主義国家の行方」〔佐々木 1998: 6〕を対象とする、1991年のソ連の崩壊後に旧社会主義国家で起きた社会変容や、変化への対応として現れた現象を通文化的に研究するための概念である。

調査を行った 2009 年から 2012 年にかけての時期である。筆者はポスト社会主義期、およびポスト「ポスト社会主義」という経験と連続性をもった時間として現代を捉えている。

1-1-1. 市場経済化とネグデルの解体

1990 年の民主化以降、輸入の八割を占めていた独立国家共同体（CIS）からの物流が途絶え、燃料、原料、交換部品の品切れのために工場は閉鎖を余儀なくされ、失業が深刻な問題となった〔ロッサビ 2007: 69〕。都市部では砂糖やバターなど主要な食品が入手できなくなり、肉、米、マッチなどの必需品は配給制となった。草原地域では、肉や乳製品はあっても、小麦粉、砂糖、アメなどが手に入らなかったほか〔ロッサビ 2007: 70〕、衣類、茶、煙草、紙、電池、陶器類、歯磨き粉などが不足した〔三秋 1995: 61〕。

苦渋の末、資本主義世界と手を結ぶこととなったモンゴル国では、世界銀行、アジア開発銀行（ADB）、国際通貨基金（IMF）といった国際機関や資本主義諸国の主導により、「ビックバン型」あるいは「ショック療法」と呼ばれる急激な市場経済化が推し進められた。その結果、経済は混乱し、消費財の価格が 91 年から 95 年にかけて平均で 36.6 倍に跳ね上がり、都市部の住民は食料の確保にさえ苦しむことになった〔加茂 2003: 210〕。

草原地域の遊牧民にも変革の波が押し寄せた。社会主義時代、遊牧民の集団化、組織化を進めた国は、全国各郡にネグデルと呼ばれる協同組合を設置した。遊牧民は組合員となり、家畜や畜舎はネグデルの共有財産とされた〔風戸 2009: 7〕。国はネグデルを通して、遊牧民が生産した肉や羊毛などの畜産品の回収、輸送、販売を統轄すると同時に、遊牧民に給料を支払い、生活用品の流通も担っていた〔ロッサビ 2007: 150〕。

1991 年にネグデルが解体されると、民営化により遊牧民は完全な自営となり、国は家畜の購入を保証せず、生産物を市場へ輸送することもなくなった〔ロッサビ 2007: 156〕。そのため、遊牧民は小麦粉や砂糖、その他の生活用品を入手するために、自分で家畜や畜産物を市場に運んで販売しなければならなくなった。市場から遠く、インフラの整備されていない地域の遊牧民ほど条件が悪くなり、自ら市場にアクセスする手段をもたない場合や相場の変動に疎い人々は、行商の言い値で買ったたかれることもあった。家畜の取引に有利な市場へのアクセスを求めて、遊牧民が都市部や定住地域、幹線道路の近くに宿営するようになった結果、家畜の過密による草地の荒廃が進んだことも問題視されている〔森他 2002; ロッサビ 2007〕。

また、ネグデルが解体したことにより、遊牧民の自然災害に対する脆弱性が高まった。遊牧というのは自然への依存度が極めて高く、毎年の気象や降水、牧草の生育状況などさまざまな不確定要素の上に成り立っている。旱魃、洪水、猛吹雪などに襲われれば家畜の死に直結する。そのような災害にあった遊牧民に対して、失った家畜頭数の回復を支援し、越冬用の干し草を備蓄・運搬し、家畜の病気に獣医を派遣するなどの対策を行ってきたのがネグデルであった〔ロッサビ 2007: 151-152〕。災害のリスクを軽減していたネグデルの

消失により、遊牧民は吹雪から家畜を守る畜舎や干し草・飼料の備蓄をすべて自分で行わなければならない、災害で家畜を失っても補てんしてもらうことはできなくなった。

調査中、遊牧民に市場経済がどのように受け止められているのかが垣間見える一コマがあった。モンゴル語で市場経済のことをザハ・ゼール（*zakh zeel*³: 市場）という。ある日、筆者の居候していた E 家に親戚の C 家一家がやってきた。ヨーグルトを分けてもらうことになり、E 家夫人は茶碗二つを C 家の娘に託した。C 家の娘が茶碗をもって自宅へヨーグルトをとりに駆け出したところに E 家の次男 U（6 歳）が戻ってきた。U は C 家の娘が手に持った茶碗を見とがめると、「人の家のモノを取っていくな！」と大声で叫びながら追いかけて行った。しばらくして、「茶碗が取られた。返せって言っても返さない！」とべそをかきながら、U がゲルに戻ってきた。それを聞いていた C 家夫人は呆れつつ、「まさにザハ・ゼール（市場経済）の子ね⁴」といって笑い、「怖がりなさんな。モノを取りに行っただけよ」となぐさめた（2010 年 6 月 4 日）。

このように、ザハ・ゼールは遊牧生活の基盤を揺るがしただけでなく、モノの利用や所有に対する人々の考え方にも変容をもたらした。そして多くの場合その変容は人間性の荒廃として捉えられている。

1-1-2. 遊牧人口

モンゴル国の人口は 1990 年の 209 万 7,700 人からこの 20 年間で 68 万 3,100 人増加し、2010 年現在は 278 万 800 人である [NSOM 2010: 87, 226; 2001:132-133]。遊牧民の人口を見てみると、1990 年時点では 14 万 7,508 人で、人口に占める割合は 7%であった。それが 5 年後には 39 万 539 人に急増し、人口の 17%を占めるに至った。そして 2000 年に 42 万 1,329 人（18%）で最大となった後は、徐々に減少している。2010 年には 32 万 7,154 人になっており、10 年間でおよそ 10 万人が草原を離れ中心地や都市部などの定住地へ移ったことになる。2010 年現在の人口に占める遊牧民の割合は 12%であり、これからも通減傾向はつづくと思われる [図 1-1]。

このような遊牧人口推移の背景には、体制の転換に伴う社会・経済環境の変化と気象・自然環境の変動が大きく関わっている。1990 年から 2000 年にかけての遊牧人口の増加の要因をみてみたい。市場経済化にともなう経済の混乱、失業、食糧不足により 1990 年代前半は、地方都市や郡の中心地といった定住区に暮らしていた人々の、草原地域やウランバートルへの移住が急増した [藤本 2005: 48]。

草原地域への移住が増加した理由は、国営企業の民営化や経営破綻によって都市部に失

³ モンゴル語で「市場経済」の翻訳語として定着した「ザハ・ゼール: *zakh zeel*」の概念が、西洋の市場概念や自由な個人間の取引とは異なる含意をもつという Wheeler [2004] や Pederson [2007] の議論は、滝口がまとめている [滝口 2014: 59]。

⁴ *Yag l zakh zeeliin khüükhed.*

業者が増加するなか、国有財産の私有化により家畜の分配を受けて遊牧民へと転身する人が多かったためである。草原は生計を立てる手段を失った人々を吸収する受け皿となっていた。1990 年と 1997 年の産業別就労者構成比を比べて見ると、鉱工業、建設、運輸・通信部門の就労者比率がのきなみ低下している一方、農牧業と商業の就労者比率が上昇している〔表 1-1〕。

地方都市部の失業者がウランバートルに移住した理由は、商人や担ぎ屋に転身した人々が市場を求めたためであると考えられる。このように体制移行直後の経済混乱期には、職を失った地方都市労働者の遊牧民への転身と、ビジネス機会を求めたウランバートル市への移住という二つの潮流が見られた。

1990 年代後半から徐々に経済が回復してくると、生活水準の向上を求める人々が草原地域から都市部へと移動する動きも出はじめ、遊牧人口の急激な増加に歯止めがかかる結果となった。

1999 年と 2000 年には人口の 18%を占めた遊牧民の数は 2000 年を境に減少に転じる。それには全国各地の草原地域で発生したゾド〈zud〉が大きく関係している。ゾドとは、家畜が厳しい冬を越せずに春にかけて大量死することであり、大量の積雪により家畜が牧草を食べられない事で生じる「白いゾド〈tsagaan zod〉」、積雪量の少なさからくる水不足によって生じる「黒いゾド〈khar zod〉」、降雪が溶解した後再び凍結する事で草も水も得られなくなる「鉄のゾド〈tömrin zod〉」などがある〔森永他 2003: 573〕。

1998 年から 1999 年にかけ、冬に黒いゾドと白いゾドが発生して家畜の体力を消耗させたが、1999 年の夏には厳しいガン〈gan:旱魃〉が襲ったために、越冬用の干し草の備蓄が十分にできなかった。そこへ 1999 年末から 2000 年の冬にかけて鉄のゾドが発生したため、全国 13 県で 45 万人が直接影響を受け、約 350 万頭の家畜が失われた〔今岡 2007:117〕。1999 年には 3,300 万頭であった家畜数が 2002 年には 2,400 万頭以下にまで激減し、これに伴って遊牧民の数も減少した〔藤本 2005; 森他 2002〕。生活の糧である家畜を失い、首都圏に職を求めて移住する遊牧民が現れたからである〔赤塚他 2003〕。後述する、筆者が調査を行っていたアルハンガイ県の遊牧民 E も 2009 年から 2010 年にかけて起きたゾドのあと、「子ども達が大きくなって大学に入る頃にはそれ〔首都ウランバートルへの移住〕もありだと思っている」と語り、ウランバートルで暮らすことも視野に入れていた。E の兄がウランバートルで石材加工会社に勤めており、その会社の上司はアルハンガイの E の家にも何度か遊びに来たことがある。兄の口利きで会社に雇ってもらおうという話も出ているという（2010 年 6 月 7 日）。

この事例でも言及されていたように、遊牧離れが進む背景には、就職や就学の機会を求めて都市部に移動せざるを得ない遊牧民の実情がある。ゾドや草原火災などの自然災害によって生活基盤を失ったことを契機として、生計を立てるために親戚を頼って、あるいは市場経済社会で必要とされる、専門職に就くための高等教育を子どもに受けさせるために移住するのである〔赤塚他 2003; ボルガンザヤー 2007〕。

第2節 調査地の概要

1-2-1. アルハンガイ県の地理と産業

アルハンガイ県〈Arkhangai aimag〉はモンゴル国中西部の森林ステップ地帯に位置しており、その名アル〈ar: 北の〉、ハンガイ〈khangai: 高原状で森林が多く水の多い肥沃な土地〉が示す通り比較的降水量が多く緑豊かな地域である〔図 1-2〕。突厥、ウイグル、モンゴルと8世紀から13世紀にかけてそれぞれモンゴル高原を支配した遊牧民の遺跡が集中するハンガイは、「遊牧中原」とも称される〔小長谷 1998: 36〕、最も遊牧に適したところである。

アルハンガイ県の標高は1,200～3,600 m、平均標高2,424 mの高原で、一月の平均気温はマイナス20～25℃、七月の平均気温は10～15℃と比較的冷涼である。5万5,300 km²の土地の70.7%を放牧地が、15.7%を森林が占め、1.8%が草刈り場として、0.6%が農耕地として利用されている。年間降水量は348mmで、844の河川、188の湖沼、674の湧水、50以上の鉱泉があり、450種以上の野性生物が生息している〔Baatarbileg 2009〕。

2009年のデータによると人口は9万2,500人で、その内のほぼ20%が都市部（定住地）に暮らしており、残りの80%は草原で生活している。家畜頭数はウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ラクダを合わせて361万9,100頭であり、ウマ、ウシ、ヒツジの保有頭数では全国第一地位を占めている。農牧業が県のGDPに占める割合が77.7%と全国で最も高い、モンゴル国有数の遊牧地域である⁵。統計によれば遊牧で生計を立てている世帯は1万5,732戸、3万1,256人であり〔NSOM 2010: 225-226〕、県民の三人に一人は遊牧民である。

1-2-2. ホトント郡の概略

首都ウランバートル（以後 UB と表記する）から車で西南西へ365kmほど走るとウヴルハンガイ県〈Övörkhangai aimag〉に入り、モンゴル帝国時代の都であったハラホリン〈Kharkhorin〉（カラコルム）が見えてくる。そこから県境を越えてさらに北西へ35km進むと、アルハンガイ県の南東部に位置するホトント郡〈Khotont sum〉の中心地に到着する〔図 1-3〕。アルハンガイ県は19の郡行政区に分けられており、県の中心地はエルデネボルガン郡〈Erdenebulgan sum〉のツェツェルレグ市〈Tsetserleg khot〉に置かれている。アルハンガイ県最大の都市であるツェツェルレグ市には約1万7,000人が暮らしている。このツェツェルレグ市からホトント郡の中心地までは91 kmの距離である。

⁵ 2009年度におけるアルハンガイ県のGDPは1,427億3,730万トゥグルクで、モンゴル国のGDP6兆5,906億3,710万トゥグルクから首都ウランバートルのGDPを差し引いた2兆6,767億3,460万トゥグルクの5%を占め、首都ウランバートルを除く全21県中第五位であった〔National Statistical Office of Mongolia 2010〕。

ホトント郡の面積は 2,417 km²で、2006 年時点では 17 万 5,502 頭の家畜がおり、4,874 人が暮らしている [Baatarbileg 2009]。郡の中心地には、役所、銀行、11 年制学校、ガソリンスタンド、携帯電話会社 2 社の受信アンテナ、商店などが設けられており、定住区も広がっている。

ホトント郡はさらにバグ〈bag〉と呼ばれる六つの下位行政単位に分けられる。ホトント郡の中心地から南西に 30km、草原の轍をたどって自動車で 1 時間ほど走ると、サント・バグ⁶の中心地が見えてくる。バグの中心地の規模は小さいが、9 年制学校や商店があり定住する人々の家屋もある。筆者が初めて訪れたとき、ちょうどサント 9 年制学校の 70 周年記念がバグの中心地で開催されていた。サント・バグにはおよそ 300 世帯が暮らしている (2011 年時点)。

バグの中心地から、もう 1 時間かけて道なき道を南西に 12 km ほど進むと、E 家が暮らす X 地域に到着する [図 1-4]。2,000 m 以上の山地の間をツァガーン・スミーン・ゴル〈Tsagaan sūmiin gol〉と呼ばれる川が北東に向かって流れており、この川とその支流に広がる平野部に二、三世帯がかたまって点在する。この地域では、E 家を含む 22 世帯が遊牧生活を営んでいる。

1-2-3. サント・バグの遊牧民 E 一家

E 家の家長は、E で 1976 年生まれ、妻の M は 1978 年生まれである。初めて調査で出会った 2009 年当時は 33 歳と 31 歳であった。二人はサント地域で遊牧民の家庭に生まれ育ち、小学校 1 年生から 4 年生までは同じクラスであった。2000 年に結婚し、7 歳と 5 歳の息子がいる。ウマ、ウシ（ヤクおよびハイナク⁷を含む）、ヒツジ、ヤギを合わせ約 200 頭の家畜を放牧している。アルハンガイ県の保有家畜頭数を県内の遊牧民世帯総数（1 万 5,858 世帯、2008 年）で割ると、平均して一世帯当たり 213 頭の家畜を有している計算になる。従って E 家は県内で標準的な遊牧民世帯であるといえる。地域には、400~700 頭程の家畜をもつ世帯も存在する。そういう世帯はたいてい 40 代以上の年長者世帯であり、婚期を迎えた子ども達がいることから、ライフステージに合わせた家畜経営が行われていることが窺える⁸。

E と M は双方の両親が他界しているため、家族付き合いは互いの兄弟世帯が中心である [図 1-5]。E は八人兄弟の末っ子である。五人いる兄のうち、上から二番目と四番目の兄

⁶ かつてはウンドゥルサント・バグ〈Öndörsant bag〉とよばれていたが、1994 年に再編されサント・バグになった。

⁷ ハイナク〈khainag：ヤクとウシの混血種〉

⁸ 「各世帯は婚姻する際に双方の親から家畜を分与される。したがって、婚姻当初は飼養家畜頭数が少ない。この家畜が順調に増えれば、成長した子が多くいる頃が最も飼養家畜頭数が多くなっていると考えられる。そして子が婚出する際、子に分与し、少しずつ減少してゆくと考えられる」 [日野 2001:119]

H 世帯は UB に、一番上と三番目の兄世帯はアルハンガイに住んでおり、すぐ上の兄 B 世帯が同じサント地域で遊牧をしている。二人の姉のうち D はツェツェルレグ市に住んでおり、もう一人の姉は同じくサントで遊牧していたが 2007 年に他界した。その亡姉の夫 F と長男世帯の A 家、長女 I 家はサントで遊牧しており、未婚の次男 N は UB の建設現場へ出稼ぎにいつている。

一方、妻 M も六人兄姉の末っ子である。四人いる兄のうち、K 家はツェツェルレグ市に、W 家はハラホリンに住み、あとの L 家と C 家はサントで遊牧をしている。姉世帯の R 家もサントの中心地の側で遊牧をしている。近くで遊牧生活を営んでいる兄姉世帯との連絡や行き来は非常に密であるが、ツェツェルレグ市など離れた所に住む兄姉とも、夏休みや通学の折りに子どもを預け合ったり、年に数回お互いを訪ねあうなどして交流をもっている。

E は結婚以前の 1998 年ごろ、一時期兄の子ども達の世話をするために UB で暮らしていたことがあり、教育や物流面における都市生活のメリットを熟知している。と同時に、現金収入がなければ食事にさえありつけないというリスクも理解しており、遊牧で生活できるのならその方がよいと考えている。M も結婚前にダルハン〈Darkhan〉（モンゴル第三の工業都市）の絨毯製造工場で働いた経験があるが、都市部の生活は自分にはあわず、UB は怖くて行くのも嫌だという。

個人差はあれど、普段は草原にいる遊牧民も畜産物の販売や商品の購入、親戚・友人訪問、子どもを学校へ入れるなどの理由で都市部へでかける機会がある。日常雑貨などちょっとした買い物であれば、サントの中心地やホトントの中心地で済ますことができるが、食料を大量に買い込んだり、子どもの新学期の準備をするとなると、ツェツェルレグ市や隣接するウヴルハンガイ県のハラホリンまで足をのばす。乳製品が高く売れるという情報が入れば、ウヴルハンガイ県の県都⁹や UB にも出かけていく。首都から約 450 km というのは、天候と路面の状態にもよるがおよそ自動車で 8～10 時間の距離であり、アクセス条件として悪い方ではない。

第 3 節 遊牧民の生計

遊牧民の経済活動を支えるモノやサービスのやり取りは、現金によって行われるのが一般的である。だが、さまざまな場面において物々交換もみられる。本節では、E 家を中心とするサントの遊牧民の事例を通して、どのような経済活動が行われているのかを概観するために、主だった収入源と支出用途について述べる。

1-3-1. 畜産物による現金収入

⁹ アルワイヘール〈Arvaikheer〉：サントの中心地から南へ約 130km の距離に位置する。

1) 家畜

まず、一年で最も多くの現金収入をもたらすと期待されているのが、カシミヤの販売である。春に梳いて集めたカシミヤは、その年によって変動するが 1 kg あたり 5 万 4,000 トゥグルク〈mögrög¹⁰〉（以後₮と表記する）で業者に買い取られる。2010 年の 5 月に E 家では 50 頭のヤギからとれたカシミヤで 80 万₮（約 5 万円）を得た。ただし、この年ヤギが 50 頭しかいなかったのには深刻な理由がある。

モンゴル国では 2009 年暮れから 2010 年春にかけて気温の低下による家畜の大量死ゾドが発生し、モンゴル全土で 840 万頭の家畜が死んだ。E 家もサントの他の世帯同様に被害を受け、17 頭いたウマが 6 頭に、96 頭のヤギが 40 頭に（その後 10 頭を購入）、70 頭のヒツジが 12 頭に、4 頭いたウシ（ヤク・ハイナク含む）は 0 頭になった。もし、ゾドに見舞われず順調に家畜が増え 150 頭のヤギがいれば 250 万₮（約 15 万 8,000 円）が得られるはずであったという。こうした収益の高さが遊牧民が好んでヤギを増やす誘因である。

カシミヤに限らず、羊毛や毛皮の買い付け額も時期によって大きく変動する。調査期間を通じて羊毛は 1 kg あたり 200～500₮の値で取引された。ヤギの毛皮は最も安くて 1 枚 500₮、高い時には 1 万₮を超えることもあった。ヒツジの毛皮は 1 枚 300～2,000₮の間で推移していた。そのため、遊牧民は常に出先で情報を集め時価の動向を注視している。刈り取った毛や毛皮は一時的に蓄えておかれ、現金の必要が生じた時や、買い取り業者が来た時、価格が上昇する時を待って売却される。

生きた家畜の売買もまとまった収入をもたらす。家畜の年齢や大きさ雌雄によって細かく異なるが、目安として聞き取った額によると、雄ウシが 50 万～130 万₮、雌ウシが 20 万～70 万₮。ウマは 25 万～70 万₮。E 家では 2009 年の 8 月に 61 万₮で種ウマを売却している。大型のヤギや雄ヤギは 8 万₮、小型のヤギや雌ヤギおよび仔ヤギは 2 万～6 万₮、子持ちのヤギは 4 万 5,000₮である。そして、雄ヒツジが 8 万₮、雌ヒツジが 6 万₮ということであった。E 家では、自家消費が中心であり、ウマ以外で生きた家畜が売却されることはほとんどなかった。

2) 乳製品

仔家畜が生まれ、授乳が行われる夏季には、乳を加工してタラグ〈tarag: ヨーグルト〉、ウルム〈öröm: クリーム〉、アールツ〈aarts: 高発酵半乾性チーズ〉、エーズギー〈eezgii: 低発酵凝固チーズ〉、アーロール〈aarul: 高発酵乾性チーズ〉、アイラグ〈airag: 馬乳酒〉などが作られる。大量に作った乳製品から自家で消費する分を残し、余剰分を販売している。販売は世帯ごとに行うのではなく、トラックをもつ世帯か車を調達できた人が地域の各世帯を回って乳やアイラグなどを買い取り、都市部へ運んで販売し利鞘を稼いでいる。例えば、2009 年 9 月にはサントの遊牧民 JM 家夫婦がトラックに 200 ℓサイズのポリ容器二つを積んで E 家らの宿営地を訪れ、アイラグ 1 ℓあたり 200₮で買い付けていた。E 家は

¹⁰ モンゴル国の通貨。1 円＝15.85₮〔2010 年 9 月時点〕

30 l を渡したので 6,000₮ を得る計算になるが、実際には 2,000₮ の儲けだという。なせなら、以前に JM 家が市場に行った際に子ども用品を買って来てもらっており、その時の借金が 4,000₮ 分あるからということであった。

乳製品の価格は、乳の採れなくなる冬に上がるため、夏にこしらえたものを保存しておき、11 月末から 12 月の頭頃に UB へ売りに行く。表 1-2 は 2009 年に聞き取った昨年の乳製品の販売価格である。E 家や G 家の夫によれば、UB にある四か所の市場（ナラントール、ハンガイ、デンジーンミャンガ、ハラホリン）で販売しているという。

ゾドで家畜が激減し乳製品が手に入らなくなっていた 2010 年の 1 月には、ウルムから熱分離させて採れるシャル・トス（shar tos: バター）の価格が高騰し、サントで 1 kg あたり 4,000₮ の値が付き、ウウルハンガイ県のハラホリンでは 6,000₮ で販売されているという話であった。

1－3－2. 定期収入と不定期収入

1) 子ども手当と年金

月に一度、遊牧民がおめかしをしてホトントの中心地へ出かけていく日がある。子ども手当を受け取るためである。政府から毎月子ども 1 人当たり 3,000₮ が、18 歳以下の子どもがいる家庭に支給されている。各世帯には、人間開発基金¹¹と書かれた手帳が人数分配布されており、それを持って銀行に行くとお金が受け取れる。ホトントの中心地に行ってきた人から今月分のお金が届いているという知らせを聞くと、「お金〔を取り〕に行く」といって親たちは近日中に中心地へ行く段取りを始める。E 家は銀行に口座を持っておらず、銀行で手帳を見せて現金を受け取っている。中心部へ出かけたついでに、買い出しをするものの常である。

子ども手当の額などは選挙の度に公約によって変更される。遊牧民からは確実に手に入る現金収入として期待されているため、選挙では子ども手当の額や四季の給付金など、少しでも高い額を提示する候補者に票が流れる傾向がある。2010 年の 6 月時点では、新たな公約として子ども手当に加え、各世帯の大人にも四季ごとに 5 万₮ が支給されることに決まっていたが、実際に給付されるかどうかは定かではないという。遊牧民 GM によれば、子ども手当も元々 3,000₮ という話であったが、支払えず 2,000₮ になった経緯があるという。

もう一つの定期的な現金収入に年金がある。男性は 60 歳、女性は 55 歳から受給できる。受給資格は 20 年以上働いていることであり、働いた年数によって受給額は異なるが、国の家畜を預かっていた場合には多くもらえ、個人の家畜を放牧していた場合は安いという。最低でも月に 8 万₮ が給付される。

¹¹ 人間開発基金（khūnii khögjliin san）：地下資源収入を全国民へ平等に還元することを目的とした政策により誕生した。国民一人当たり 150 万₮ を現金や株式などで支給する[津江 2013]。

2) その他の不定期収入

アルハンガイは火山の多い地域であったため各地に鉱泉、温泉が湧いている。サントにもハンジャランタエン・ラシャーン〈Khanjarantain rashaan〉という名で地元の人々に親しまれている鉱泉がある。ツァガーン・スミーン温泉〈Tsagaan sümiin khaluun rashaan〉として出版物でも紹介されており、観光・療養地になっている。その他、豊かな自然の中での乗馬、トレッキング、遊牧民との交流などを目的とした国外からの観光客も夏から秋にかけて訪れる。このような外国人観光客への同行案内やホームステイの受け入れが季節限定の収入源となっている。

毎年観光客のホームステイを引き受けているG家によると、外国人一人につき一泊4,000₮というのが2011年の相場であったが、2012年には8,000₮に値上げしたという。言葉の通じない相手に一宿一飯の世話をするというので、誰もがホームステイを引き受けたがるわけではなく、希望者は地元の関係者に事前に名乗りを上げておくということである。

ホームステイに関わっていなくとも、観光客を乗せたバスや乗馬を楽しむ観光客が夏営地の近くを通ったりゲルに立ち寄ったりするため、観光客と全く交流のない遊牧民というのはほとんどいない。特に子ども達は観光客が来るのを楽しみにしている。お菓子がもらえるからである。日本人がくれるお菓子はおいしいと評判で、日本人観光客がよく被っている顎紐のついたつばの広い帽子は「ヤポン・マルガエ〈yapon malgai: 日本帽〉」とちまたでは呼ばれており、それを見かけると喜んで駆けていく。2009年の7月にE家の前を馬に乗った4人組の男性旅行者が通りかかり、糞置場でゴミを焼いていたE家の子ども達と筆者を見て「お姉ちゃんと兄弟だねー」と言っているのが聞こえた。日本人だと気づくと兄弟は「アメもらってくるー!」と喋りながら近づいていき、「男梅」というアメをもらってきた。しかし、予想を裏切るすっぱさにアメを吐き出し、筆者にくれたことがあった。

森林資源の豊富なハンガイ地域において、サマル¹²の採取・販売も重要な季節収入源になっている。サマルというのは、クルミやクリのような硬い殻に覆われた木の実のことであり、ここではホシ¹³の木の実のことを指す。採取はホシの木をゆすって枝についているサマルを落とし拾い集めるという方法で行う。業者の買い取り価格は1 kgあたり2,300₮である〔2012年時点〕。生では食さず炒った後に市場や路上で売られる。歯で殻を割り中の実だけを食べる嗜好品である。

昔から採取する人はいたものの、1 kgあたり300₮と低い値しかつかず、収穫量も少なかったという。ところが近年価格が800、1,000と上昇したため、人々はこぞって山にとりに行くようになった。E家もバイクで山に何度か入り朝から晩まで拾い集め、一度につきMは50 lの袋に2袋分、Eは70 lの袋に3袋分採取し、2012年は二人合わせて400万₮以上を稼いだという。

¹² samar

¹³ khush: ヒマラヤスギ属の樹木

その他に予期せぬ形で臨時収入が入ることもある。モンゴル全土がゾドによる家畜の大量死に見舞われた 2009 年の暮れから 2010 年の春にかけて、家畜の大半を失った遊牧民のもとに国際機関や政府、企業、個人などから見舞金や支援物資が散発的に届けられた。2010 年の 1 月にはサントの各世帯に、胃薬や抗生物質、ビタミン剤などが配付された。エルデネット市にある企業の社長がゾドの被害を受けたモンゴル全土の各世帯に常備薬を配っており、選挙への出馬を目論んでいるのだろうと人々の間で話題になった。

3 月にはサントの各世帯に対し、モンゴル政府からの支援物資が配付された。その内容は被害状況により世帯ごとに異なっていたが、336 頭いた家畜の約 9 割を失い 37 頭しか残らなかった A 家には、小麦粉 25 kg、キビ 25 kg、植物油 2 l、マッチ 2 包、ロウソク 2 束、常備薬・ビタミン剤、ロシア製ブーツ 1 足、家畜飼料 50 kg が支給された。家畜の 74% (285 頭→59 頭) を失った B 家には、キビ 10 kg、粉ミルク 5 kg、ミルク粥の素、家畜の疥癬用薬が、55% (187 頭→58 頭) を失った E 家には、キビ 10 kg、粉ミルク 5 kg、植物油 2 l、ロシア製ブーツ 1 足がそれぞれ届いた。

一方、700 頭いた家畜のうち 60% が死に 200 頭になった J 家には、他家に比べ生き残った家畜が多いという理由で人工飼料 1 袋しか支給されなかった。また、186 頭の家畜のうち 59% を失い、54 頭になっていた GM 家には一切物資が届かなかったという。

ロシア、日本、フランス、国連、モンゴル各県などから集まった支援金や物資は、中央に集められる。支援物資の分配に際しては、まずサント・バグの行政長が各世帯を回って被害状況を確認し、どのレベルの支援が受けられるかを定めたリストを作成する。このリストをもとにバグから郡へ、郡から県へ、県から中央へと要請が送られ、国会で承認されると再び同じルートを通して支援がおりてくるという仕組みになっている。

ところが、被害調査の時点で世帯の記載漏れがあったか何らかの原因によって、支援がもらえない遊牧民がでてきた。深刻な被害を受けていたにもかかわらず、見舞金 3,000₮ も物資ももらえなかった GM は、サントで集会が開かれた際に、分配に多寡があると抗議したが、行政長たちは支援の分配はすでに終了しており何も残っていないといって取り合ってくれなかったという。GM のみならず、支援物資を受け取った人々も、各世帯の要望が聞かれず、郡やバグの職員によって分配の内容が決められているといい、わずかの物品しか届いていないことに対する不満から、県や郡やソムといった行政機関を経てくる途中でピン撥ねが行われているに違いないと口々に語っていた。

その他の不定期収入としては、所有するバイクやトラックの売却、中心地やハラホリンなどの建設現場で日雇い労働をするなどがある。

1-3-3. 支出用途と物価

現金の主な支出用途は食料品、衣料品、日用雑貨の購入や、交通・通信費などである。サントの遊牧民が食料品、衣料品、日用雑貨を購入するのは、サントやホントンの中心地

にある商店、およびツェツェルレグ、ハラホリン、UB の市場などである。夏季には月に二、三回ほどの頻度でやって来るナイマー〈naimaa〉と呼ばれる行商も利用する。

草原では常に現金を必要とするわけではなく、ナイマーがやって来た時や診療を受けに行く際、子どもの送り迎えといった機会にまとめて買い出しを行っている。また、自然の猛威を受けやすい遊牧生活においては、ガンやゾドが起きると、突発的な対応費が発生することもある。

1) サントの商店

サントには、自然や鉱泉を求めてやってくる国内外の観光客を対象とした宿泊施設（複数のゲル、トイレ、シャワー、商店などを備えている）がいくつか存在しており、地元の人々にバーズ¹⁴と呼ばれている。E 家の夏営地から 5～6km ほどのところにアルジャラント〈Ar Jarant〉というバーズがあり、電気が通っており商店や診療所が併設されていることから地元の遊牧民もよく利用している。ここで携帯を充電したり診察を受け処方箋を書いてもらったり点滴¹⁵を受けたりしている。

M と訪れたアルジャラントの商店では、子ども服、靴（男女、子ども）、パンツ、石鹸、アメ、仏具、水、ジュースなどの食料品、生活用品が売られていた。M は茶菓子用のビスケットを 350¥、金たわしを 500¥で購入し、その他に膨らし粉を 3 パック購入した。しかし、M の探していたロウソクがなかった。

そのため、アルジャラントの店を出て、バーズの側にある丘の上の商店に向かった。店の棚にはきれいに商品が陳列されており、衛生用品という表示があった。石鹸、粉洗剤、下着（パンツ）、軍手、生理用品、セロハンテープ、歯磨き粉、トイレットペーパー、御香などがそこに置かれていた。ミネラルウォーター500ml が 350¥、UB では 700¥で販売されていたジュースが 900¥で売られており、全体的に 200～300¥ほど高い値がつけられていた〔2009 年 8 月当時〕。M はその店で、ウエハウス（1,200¥）と、韓国製のカップラーメン 4 個（1,000¥）、ミントガム（350¥）を買った。しかし、この店にもロウソクはなく、結局その日は手に入らなかった。翌日、E 家と共営していた G 家の夫婦が折よくサントの中心地へでかけるというので、M はロウソクを頼んだ。

アルジャラントや丘の上の店が E 家にとっては最寄りの商店であり、M がサントで買い物をする時にはよく利用しているという。とはいえ、起伏のある草原を徒歩で荷物をもって移動するのは困難なため、バーズやサントの中心地に車で向かう親戚・知人が便乗させてくれる時に限られる。そのため、普段はバイクで放牧や他家へ出かける夫の E が買い出しを引き受けている。

¹⁴ baaz: ロシア語で基地の意

¹⁵ M が診療所を訪れた際、医者に処方されたビタミン剤は 1,500¥であった。点滴の中で一番高価なものが 1 万 2,000¥、通常のもので 9,000¥だという。

2) ツェツェルレグの市場

アルハンガイ県一の大都市であるツェツェルレグ市には、大きな市場や中古衣類専門店、家具、絹布、小物、洋服などを扱う各種商店が立ち並び、警察署、インターネットカフェなどもある。サントの中心地から約 75km、夏場ならばジープで片道 3 時間ほどのところにある。家畜の世話を人に任せていかねばならないため、頻繁に行き来することはないが、ツェツェルレグ市の学校に通わせている子どもの学期始めや終わりに送り迎えをしたり、親戚を訪ねたりするために年に数回訪れている。

E 家の長男 (7 歳) は、サントの親元を離れ、ツェツェルレグ市の小学校に通っている。同市に暮らす M の兄 K のところに、他の親戚の子ども達と共に下宿している。K 一家はもともとホトントで遊牧をして暮らしていたが、子ども達を学校に入れるために 2003 年にここへ移り、父親はセメント工場で働いていた。夏休みをサントの自宅で過ごした長男を 9 月の新学期にあわせて送り届けるために、M は 2009 年 8 月 31 日に次男 (5 歳) を連れ、E の姉 D と知人の車に同乗して出発した。E は家畜の世話をするために残った。

ツェツェルレグ市に到着すると、早速子ども達を連れて市場へ向かい、翌日の始業式に備えて学用品一式を揃えた。制服用のズボン、カッターシャツ、革靴、スニーカー、古着の長袖シャツ、リュックサック、ハサミ、ノートカバー (10 枚)、ボールペン (2 本)、ボールペン用替え芯 (10 本)、鉛筆削りなどを次々と購入ししめて 4 万 6,800¥ の買い物であった [表 1-3]。

M は翌日も市場へ出かけ、小麦粉 25 kg、米 5 kg、茶葉 5 kg、砂糖 3 kg、塩 500 g、チョコ各種 500 g、揚げパンなどの食料品や、トイレットペーパー、歯磨き粉、洗濯用石鹼 (10 個)、粉末洗剤 800 g などの消耗品を購入した。25 kg の小麦粉を兄の家まで運んでもらうために 1,000¥ 支払った他、商店で板チョコ (1,050 ¥)、アイス (650~700 ¥)、ジュース (700 ¥) などを子ども達に買ってやりみんなで食べた。

ツェツェルレグ市の物価はほぼ UB と変わらず、サントよりも安いいため、まとまった買い物をする際には便利である。M は食料品と日用雑貨をあわせて 5 万¥ほど購入した。

3) ナイマー 〈naimaa: 行商〉

ナイマーというのは本来「商売、貿易、取引」という意味であり、商人や小売人といった人を指す場合にはナイマーチ 〈naimaach〉あるいはナイマーチン 〈naimaachin〉という。サントでは車に商品を乗せてやって来る行商や家畜の買い付けにやって来る人々を総称してナイマーと呼んでいる。

2009 年 7 月 24 日に E 家らの宿営地にナイマーの車がきた。月に 2 回ほどアルハンガイや UB から不定期にやって来るという。トラックの荷台には車の部品、座席には食料品が積まれており、その日はヒツジの毛皮を 1,500 ¥/kg で買い取っていた。M は 1,200 ¥ の小麦菓子 2 袋、ウエハウス (400 ¥)、クッキー (800 ¥)、砂糖 1kg (1,500 ¥)、マッチ (40 ¥×10)、計 5,500¥ を現金で購入した [写真 1-1]。

2009年8月22日に最寄りのCA家の宿営地にナイマーのワゴン車がきたので、Mは次男を連れて歩いてCA家まで出かけた。衣類を中心にツェツェルレグの市場と同じかそれより少し高い値段で売られていた。商品の値段を聞き取ったものが表1-4である。筆者が確認したところ全て中国製品であった。G家の長女によれば、このナイマー一家は中国から安値で品物を仕入れてきているのだという。ワゴン車の後部座席には120ℓサイズのポリ容器が三つ置かれており、アイラグ（馬乳酒）の買い取りも行っているようであった。

カッターシャツ、ブラウス、ズボン、タイツ、靴下、パンツ、ブラジャー、革靴、スニーカーのほか、学用品もあり、学校に通う子ども達が買いに来ていた。Mも長男のためにノート10冊と、Eの兄Hから預かっている甥っ子S（16歳）のためにズボン（3,000円）を購入した。しめて5,000円であった。衣料品を見る時は売り手に断ることなく次々と自由に袋から出して広げていたが、試着することはなかった。

ナイマーは商品を売るだけでなく家畜の毛や毛皮、乳製品の買い取りも兼ねていることが多いため、現金を介さずに物々交換での購入も可能である。ナイマーの側から物々交換を持ちかけることもある。2009年の9月7日にUBから野菜を積んだトラックがやって来て各宿営地を回っては、仔ウシやヤギでじゃがいもを買わないかと声をかけていた。「ウルム（クリーム）でどう？」と尋ねた婦人に対し、ウルムでも交換するとナイマーは答えたが、その時は誰も交換しなかった。遊牧民の食生活の中心は肉であり、小麦粉は練って麺にしたり肉あんを包んだりして毎日の料理に使うが、野菜はじゃがいもと玉ネギが少量利用される程度である。ニンジンや葉もの野菜は人気がなくほとんど食されない。ナイマーのトラックには野菜しか積まれていなかったため、集まっていた女性たちも関心がなさそうであった。

4) 交通費・通信費

遊牧民の日常的な交通手段は、ウマ、バイク、車のいずれかであり、目的や移動人数に応じて使い分けている。家畜の放牧や他家の訪問などサント地域内を移動する際には、ウマかバイクが活用される。ホトントやハラホリンなど少し距離のある場所への移動はバイクが使われ、遠距離の場合は車が中心となる。サント内でも家族で一緒に出かける場合や荷物が多い場合には車が利用される。ウマで複数名が移動しようとする人数分のウマが必要となり、ウマの数だけ鞍を用意しなければならない。その点バイクであれば、両親と子ども3人くらいまでならば一台で移動することができる。そのため、最近ではどの世帯にも中型バイクが見られるようになった。その一方で、季節移動の際には欠かせないトラックや自家用車を持っている家はまだ限られている。それゆえ、車での移動が必要な場合は、乗り合いマイクロバスを利用するか、知人の車に乗せてもらうことになる。

乗り合いバスの料金は、サント—UB間が片道1万5,000～2万円、子どもは1万円である〔2009年9月時点〕。サント—ツェツェルレグ間は片道7,000円、子ども4,000円で、サント

ーハラホリン間は夏季が片道 6,000¥、冬季が片道 1 万 3,000 ¥である〔2010 年 6 月時点〕。そしてサントからホトントの中心地までは、往復で 3,000¥であった〔2009 年 9 月時点〕。

宿営地からサントの中心地まで親戚・知人の車に乗せてもらう場合には一家族 1,000¥ほどである。サントの中心地はE家らの夏営地から東の方角におよそ 12 km のところにある。普段はウマやバイクで行き来するが、中心地で催しがある時など一家そろって出かける機会には親戚・知人のトラックや車に乗せてもらっている。M が長男をツェツェルレグ市に送って行く際にも知人の車に同乗させてもらったが、その時は片道 7,000¥に値上がりする以前の 5,000¥で清算した。

親戚や知人に乗せてもらう方が乗り合いバスより安くなるのは確かであるが、車の持ち主に出かける予定がないと便乗も頼めないため、必要時に折よく調達できない時もあるという難点がある。

トラックやバイクを自家で所有している場合は、燃料代が出費となる。ホトントの中心地にあるガソリンスタンドでは 1 ℓあたり 1,455¥、UB では 1,380¥/ℓ〔2010 年 6 月時点〕であり、移送コストの分地方では割高になっている。

携帯電話を利用していれば、ネグジ〈negi〉と呼ばれる通話料を入金するためのカード（および通話可能度数）をあらかじめ購入しておく必要がある。カードには 500～1 万 5,000¥までの六つの価格帯が設定されており、ネグジ（通話可能度数）がなくなるとその都度カードを購入する。大手モビコム（Mobi-com）社の場合、会話 1 分間につき 100¥、メール一件 40¥である¹⁶。

5) ゾドへの対応費用

2009 年暮れから 2010 年の春にかけて大規模なゾドがモンゴル国を襲い、家畜を失った遊牧民には見舞金、支援物資という形で臨時収入があったと先に述べた。しかし、それらの支援が何の足しにもなっていないことは、彼らがゾドに対処するために費やした額を見れば明らかである。遊牧民はゾドになるのを手をこまねいて見ていたわけではなく、例年通り越冬の備えを行っていた。しかし、春先に気温がマイナス 50℃まで低下し、立ったまま家畜が凍死するなど、彼らが経験したことがないようなゾドになってしまったのである¹⁷。

そもそも、ゾドというのは寒冷的な気候が続くという現象のみをいうのではなく、夏の旱魃の後に冬の大雪が重なり、春の雪解け期に再び気温が低下して凍結する、といった複合的で長期的な自然災害によって引き起こされる家畜の大量死のことを指す。長年草原で暮らしている遊牧民は、夏の草生えや秋の降雨などの様子から、越冬のためにどれだけの干し草や飼料が必要かをある程度予測することができる。2009 年の秋には数世帯の男性が総出で干し草用の牧草刈りをして備えていた。ところが、ゾドによって放牧地の草が不足し、備蓄しておいた干し草も尽きてしまった。

¹⁶ 他社間の通話料。モビコム同士であれば会話 1 分間 70¥、メール一件 19¥〔2011 年時点〕。

¹⁷ 調査地域における 2010 年のゾドの詳細については別稿に譲る〔堀田 2010〕。

そこで多くの遊牧民が家畜に与える雑穀や人工飼料を購入しようと奔走し、飼料の価格は高騰した。E もハラホリンで飼料を購入したが、当初 20 kg で 5,000₮だった飼料は 7,000₮に、40 kg で 1 万₮だった雑穀は 1 万 4,000₮に値上がりした。その他、もみ殻は 25 kg で 1 万 2,000₮、ホルゴルジン〈khorgoljin〉と呼ばれる固形人工飼料は 40 kg で 1 万 6,000₮という価格であった。E 家は合計でおよそ 120 万₮を飼料のために使った。本来ならカシミヤで稼いだ収入で 2010 年には韓国産のトラックを買う予定であったが、ゾドに消えてしまったという。

ゾドは毎年起きるわけではないが、近年深刻な被害をもたらす大規模なゾドが頻発する傾向にあるといわれている。2009 年のゾドを乗り越えることができたとしても、小規模なゾドが続いたり、再び大規模なゾドが起きれば遊牧民の生活基盤は簡単に崩されてしまう。遊牧が農耕以上に自然の影響を受けやすい生業であることがゾドによって可視化されているといえる。

1－3－4．物々交換

行政サービスや店頭など物々交換を受け付けない場面では現金が用いられているが、交渉の余地のある個人対個人の取引の場面では物々交換も併用されている。先ほどあげたナイマーとの取引においても、M は飾りのついたハーフパンツを、エーズギー（低発酵凝固チーズ）12 個と交換したと見せてくれた。

E は以前所有していたバイクを 2007 年にウヴルハンガイ県の知人に 75 万₮で売却したと話す一方で、以前乗っていた白いトヨタ車は知人に譲ったと語った。いくらで売却したのかと尋ねると、現金ではなく仔持ちのヤギ 6 頭と交換したという。

また、2010 年の 4 月に E 家では 100 kg の小麦粉を木材と交換で手に入れた。E によると、ゾドによってウマを失ったサントの遊牧民は、貴重な現金収入源であったアイラグ（馬乳）を作ることができなくなり、森林を伐採し木材として売ることによって収入を得ようとしていた。そんな折、UB からやって来た業者に、100 kg の小麦粉を用意する代わりに山から木材を伐り出しておいてくれと商談をもちかけられた。建設ラッシュに沸く首都で、建築現場の足場を組むための木材として利用するためだという。E は 100 本の木を伐って業者に引き渡し、ロシア産の小麦粉を受け取った。本来商業用の伐採は禁じられているが、地元の人々が薪炭材として利用することは認められている。ゾドの爪痕が残るなか、サントの遊牧民によるこうした伐採行為は大目にみられていたようである。

このようにナイマーであれ、知人であれ、現金でやり取りすることもあれば、その時々状況や必要にあわせて家畜や乳製品による交換が行われている。市場経済と接合しながらも相手の要求や自家の状況に応じて柔軟に交換方法を使い分けている様子が窺える。

小結

市場経済の浸透した今、モンゴル遊牧民は市場の動向をみながら現金と交換を使い分け、世帯単位で自律的に生計を立てている。家畜を資本とする一家の生計は家長の双肩に担われており、家長は最新の市場相場を把握し、販売先と販売する時期を判断し、市場へのアクセス手段を確保し、取引費用¹⁸を最小限にするための情報収集を欠かさない。

本来、気候が安定していて牧草が豊かであれば、家畜は再生産されどんどん増えていく。家畜が 200 頭以上いれば多少は余裕のある経営が成り立つといわれており〔国際協力事業団 1997: 32〕、家畜を一定数維持できれば、遊牧民の生計は持続的なものとなる。市場への物理的な距離と移動を伴う生活様式（移動の妨げになるような種類・量のモノはあえて持たない）により、旺盛な消費という形でその経済力を発揮する機会は少ないが、遊牧民は衣食住に困窮することなく生活を維持している。

しかしながら、ままならないのが自然である。一度ゾドに見舞われると、どれほど多くの家畜がいようと一晩で失うこともある。サントの遊牧民が交換に用いる財というのは、豊かなハンガイに育まれた森林資源や家畜、およびその家畜を利用して加工したモノである。ゾドによって家畜が失われたり、サマルや森林資源が採れなくなれば物々交換は立ちゆかなくなり、現金への依存を高めざるを得ない。現金がなければ新たに家畜を買うこともできないため、ゾドによる甚大な被害が遊牧をやめて都市部へ移り住む契機となっているのも事実である¹⁹。都市部との接点を確保しておくことは市場へのアクセスのみならず、将来の移住先の選択肢になり得る点においても重要なのである。

本章で E 家の事例を基に遊牧民の経済状況について詳しく述べたが、ゾドの被害を受けつつも基本的には十分に生計を維持し、決してモノに困窮しているわけではない遊牧民の間で、モノのやり取りが行われているということを次章以降の前提として提示しておきたい。

¹⁸ コースによる市場における取引自体にかかるコストのことであり、辛嶋は、定価のない市場において損失を出さないために変動する相場を知ること、市場へ家畜を輸送すること、取引に際して自分が騙されていないか用心すること、商品の価格を見定めることをモンゴル遊牧民の取引費用としてあげている〔辛嶋 2010: 194〕。

¹⁹ 2009～2010 年のゾドのあと、サントに住んでいた E の知人が遊牧をやめて都市部に移り住む際、E も一緒に行かないかと誘われた。しかし、E は「家畜を買ってもう一、二年様子を見る」と答えた。「定住地で暮らすことも考えたが、都市部で暮らすには食物を手に入れるにも現金が必要になり、生活が大変だと知っている。ここにいれば、ヒツジやヤギが食べられるし、木を売って小麦粉を買うこともできる。草原での暮らしの方がその分楽だ」と筆者に語った（2010 年 6 月 7 日）。しかし、同時に「UB で暮らすことも考えている」〔1-1-2 参照〕といい、家族の将来を見据えつつ慎重に状況を見定めようとしていた。

第2章 モンゴル遊牧民の生活世界

はじめに、本論文で用いる遊牧 (nomadism) という言葉について触れておきたい。日本では、1940年代から今西錦司 [1974] や梅棹忠夫 [1976] によって、生態学や動物行動学の観点から家畜の起源や遊牧の成立についての議論が行われてきた。遊牧というのは、動物の移動性に人間の生活面を適応させ発達を遂げた牧畜であると考えられた。

一般に、人類の三大生業の一つに数えられる牧畜 (pastoralism) というのは、『文化人類学事典』 [日本文化人類学会 2009: 186-187] によれば、「人間が動物の群れの繁殖をさまざまな労働によって手助けし、その動物が生み出す乳、肉、皮、血などの畜産物を利用する」生業様式のことである。牧畜民 (pastoralists) と呼ばれる人々は、「集団によって共有された広大な放牧地を牧草と水を求めて家畜を移動させながら飼育する」。そのなかでも、「放牧地を移動する際に、自らの住居も移動させるなど、ひんばんに移動する人々を遊動的牧畜民 (nomadic pastoralists) と呼ぶことがある。牧畜民の類義語として「遊牧民」という言葉が用いられることがあるが、これはこうした牧畜の移動性に焦点をあてた言葉である」とされている。

しかし、松井は遊動的牧畜の遊動とは、定着、定住、半定住、漂泊など一年間の生活空間がどのような形態によって展開しているかということを示すものであり、牧畜という生業基盤を示す用語とは別次元の内容をもつ概念であると述べている。遊動する人々が必ずしも牧畜を行うわけではなく、また牧畜をしながらも遊動しない人々がいる。このことから、「遊牧という語は、かなり限定された生活の空間的な組み立てと、生業内容との重なりあう領域を意味する」とし、遊牧民を遊動民一般とも、牧畜民全般とも区別して考えなければならないと指摘している [松井 2001: 11-12]。

また、小長谷は、遊牧を指す nomadisam という語はあらゆる移動民の活動を含む一方で、家畜飼養の要素が含まれておらず、移動性のある牧畜という意味では nomadic pastoralism がよく用いられること、さらに移動の必要性を強調する場合には mobile pastoralism という表現がハンフリーら [1999] によって提唱されていることに言及しつつも、こうした表現に当事者の視点が不在であることを指摘している [小長谷 2003: 521]。

モンゴル語で、遊牧を概念および学術用語として使用する際には、主に「ヌーデル (nüüdel : 移動)」という言葉が採用され、ヌーデリーン・ソヨル・イルゲンシル (Nüüdliin Soyol Irgenshil : 遊牧文明) や、ヌーデルチディーン・ソヨル (Nüüdelchdiin Soyol : 遊牧民の文化) などと表現される。その一方で、遊牧民を指す表現には、ヌーデルに人を表すチン (-chin) という語尾をつけて「ヌーデルチン (nüüdelchdiin : 移動民)」とするものと、家畜を指すマル (mal) に人を表すチン (-chin) をつけて、「マルチン (malchin : 牧民)」とするものがある。やはり、前者は学術用語として好まれるが、一般書や日常語では後者が用いられている。筆者の調査地では、遊牧民が自らの生活や仕事を指している場合にも、

遊牧民や農耕民といった生業を概念化した語りをを行う際にも、彼らは自らを「マルチン」と表現していた。そもそも「ヌーデル」という表現を用いて、あえてその移動性に重点をおく観点は、定住を相対化する外部の研究者からもたらされたものであると考えられる。マルチンである彼らにとって、移動は生活に織り込まれたものであり自明の理であるから、自らを「ヌーデルチン」と定義する必要性はないのである。

そこで本論文では、遊牧民を単に移動性の高い牧畜民と捉えるのではなく、「一定の生活圏のなかを、一年の一定期間簡単な持ち運びのできるテントのような住居に住んで、家畜とともに移動し、家畜を中心とするその牧畜生産物によって、おもに生活をたてている人たち」〔松井 2001: 14〕という定義に則ったうえで、遊牧という言葉を用いる。

遊牧生活といえば、まず挙げられるのが家畜の放牧と季節移動であろう。彼らは良い牧草地を求めて日々の放牧を行い、自然環境や天候によって回数は変動するものの、年に二回から四回ほど放牧に適した草と水のある場所へ居住地を移す。しかし、遊牧民の生活における移動は家畜にかかわるものだけではない。本章では、E 家に密着して記録した日常生活の様子を記述する。共営世帯との関係や絶えることのない来訪者の存在を描き出すことで、人の往来がいかに関遊牧生活の基盤になっているかを提示するとともに、遊牧民が情報社会に生きていることを例証する。

第 1 節 遊牧民一家の暮らし

「遊牧生活における最少生産単位は、世帯である。世帯とは、一つのゲルに暮らし、寝食・所有をともにしている集団を指す。通常、一世帯は一組の夫婦とその婚出していない子で構成される核家族からなる」〔日野 2001: 98〕。遊牧民の日常生活について把握するために、30 代の夫婦に子どもが二人という E 家に密着して、家事や作業が行われる様子を観察した。経済活動や人の往来が一年で最も盛んになる夏季（6 月～8 月）と腰を落ち着けて越冬する冬季（11 月～3 月）における一日の過ごし方を、再構成した事例を通して紹介する。

2-1-1. 夏営地の日

遊牧民の一日は家畜の活動とともに始まる。夏は牧繁期といわれており〔風戸 2009: 24〕、一年で最も忙しい時季である。夜明けとともに家畜が起きだし、囲いの中でがさごそし始める。それに合わせ人も朝 5 時頃に起きだし、デール（дээл：長衣）を着ると外に出て天窓の覆いを開け、かまどに新しい薪をいれて火を起こす。E は囲いの中に入っていき自分の家のヤギとヒツジを一ヶ所に集める。横倒しにした一本の細木を中心に、二列で家畜が向かい合うように並べながら、動き回らないよう首にロープをかけて固定する。M は川で汲ん

できた水を鍋にいれ茶を沸かし、保温瓶に移し終えると頭巾をしてバケツと腰掛を提げてヒツジ・ヤギ群の搾乳に向かう。

ヒツジ・ヤギの搾乳が終わると一旦乳を持ち帰り、別の容器に移し換える。Mは空になったバケツと腰掛を持つと今度は仔ウシの囲いへと向かう。仔ウシ囲いの周りにはすでに母ウシ・ヤク・ハイナクたちが集まってきている。一頭ずつ囲いから仔ウシを放っては、ある程度乳を吸ったところで引き離し囲いの外に繋いでおき、母ウシの気をそちらに向けながら搾乳することを仔ウシの数だけ繰り返す。全力で抵抗する仔ウシを母ウシの乳房から引き離したり、乳房の硬いヤクを搾乳するのは時間と力を要する作業である。搾乳を終えると、女性たち（Mと共営世帯の女性）は徒歩で母ウシ群を西の方角に追い立てていき、時間差をつけて仔ウシ群を別の方角へと追う。夕方の搾乳時まで、仔ウシに乳を飲まれないようにするためである。

一方、放牧当番（放牧は共営する世帯の男性達が輪番制で行っている）のEは別の囲いに一晩入れられていた仔家畜（ヒツジ・ヤギ）を放ち、搾乳を終えたヒツジ・ヤギの成獣群と合流させ、その日の放牧地へと追い立てていく。ここで仔家畜を合流させたのは、E家とその共営世帯では、朝の一回しかヒツジ・ヤギの搾乳をおこなわないからである。放牧当番でない男性は、狩り（タルバガンやシカ）、薪木の切り出し、行方不明家畜の搜索、蒸留酒作り、鞍の修理などその日の状況に応じてさまざまに時間を使う。

また、囲いの清掃当番の男性は特に時間は決まっていないが日中のどこかで家畜囲いの掃除をする。面の四角いシャベルを用いて、囲いの中に溜まった糞泥を南方に設置された開口部に向けて掻き出す。掻き出した糞泥は桶（底に木製の櫓が取り付けられているものもある）に載せ、糞泥置場にしている場所へ運ぶ。夏の三ヶ月間でちょっとした糞泥の小山ができていく。この小山は、かまどの灰や掃き掃除ででた砂・木片、割れた茶碗類の投棄場所にもなっており、家庭ゴミの焼却もこの上で行われる。

ウシの搾乳を終えた女性たちは乳を持ってそれぞれのゲルに戻ると、再び空にしたバケツを持ち連れ立って仔ウマを繋いでいる場所へ向かう。騎乗した共営世帯の少年がウマの群を仔ウマの側まで導いてくると、一人が仔ウマを母ウマの乳から引き離し付かず離れずの位置を保ち、もう一人の女性が素早く屈んで乳を搾る。ウマの搾乳が終わると女性たちはそれぞれのゲルに帰って、乳製品作りを始める。

ヒツジ・ヤギの乳はガーゼで濾し不純物を取り除いたあと、一部は乳茶に用い、残りはヨーグルトにする。採れたてのウシとウマの乳はそれぞれ別の鍋に入れ、専用の棚で寝かせておく。すでに一晩寝かせて置いたウシの乳を火にかけ、沸騰させ柄杓で泡が立つようにかき混ぜウルムというクリームを作る。乳製品作りで使用した鍋を洗ったり、お茶を飲んで一息ついたりしている間には、近隣世帯や親戚世帯の人々の出入りがある。来客のたびに、作りたての乳茶やヨーグルトが振る舞われる。

そうこうしている間に昼になり、ウマの2回目の搾乳が行われる。次の搾乳までの間に、Mは掃除、洗濯などを済ませる。ゲルの掃き掃除と拭き掃除は毎日欠かさことなく、最低

でも一日2回は行われる。洗濯は週に1〜2度のペースで行う。かまどで温めた川の水を大きな桶に移し、まずそこで洗髪し、次に子どもの体を洗い、その次に洗濯物を洗い、最後にその水を床の拭き掃除に使うというのが一連の流れである。こうすることで湯を沸かす燃料にする薪と水を節約することができる。

14 時頃 3 回目となるウマの搾乳を行う。その後は、他家を訪問したり来客をもてなしたり、行商の車が来れば様子を見に出かけたりして過ごし、一日の締めとなる夕食の準備をする。夕食には小麦粉や米を使った料理と肉を食べることになっており、鍋で骨付き肉をゆで始める。その間に寝かせていたウマの乳をアイラグ（馬乳酒）の容器に継ぎ足し攪拌する。

18 時 30 分頃 4 回目のウマの搾乳をし、父親の帰宅を待って夕食となる。食事時に来客があれば夕食を振る舞う。20 時頃、囲いに集めておいた仔ウシに乳を与えるために母ウシが戻ってくるのを見計らって、女性たちが搾乳に出かける。人間が搾乳したあと、乳を飲み終えた仔ウシは翌朝まで再び囲いの中で過ごす。同じ頃放牧に出されていたヒツジ・ヤギの群れも連れ戻されてくる。共営世帯と協力しながら成獣と仔家畜の群を分けて囲いの中に入れたあと、成獣群にまだ紛れ込んでいる仔家畜がいないか確認し、捕まえては仔家畜の囲いに移すという作業を繰り返す。

夏は日が長いとはいえ、22 時頃になると暗くなり始める。仔家畜を分け終えたら、5 回目のウマの搾乳を行う。夫が仔ウマを引き、妻が乳を搾る。翌朝も搾乳する場合は仔ウマを繋いでおくが、そうでない場合は群と共に放つ。全ての作業を終えると、暗闇に紛れて用を足し、ゲルの扉に内側から鍵をかける。戸棚から枕を取り出し、寝床を整え、デールと靴と洋服を脱いで床に就くのは 23 時頃である。

表 2-1 は 2009 年 7 月における E 家の平均的な一日の過ごし方を表したものである。時間や出来事に毎日多少の変動はあるが、色をつけた家畜に関わる作業はほぼこの通りに行われていた。一日の搾乳回数が、ヒツジ・ヤギが朝 1 回、ウシが朝夕 2 回、ウマが 5〜6 回と多く、夏は搾乳を中心に生活が回っているといえる。加えて食料、保存食、贈答品としての乳製品の加工、狩猟、畜産物の取引といった生産活動も集中している。

また、水利の良い川沿いの平野部に世帯が集まっているため、共営地ごとの距離が近くなり、人の往来が頻繁になる。地元の人々ばかりでなく、アイラグなど季節ものの乳製品や草原暮らし、狩猟を楽しむために都市部や外国から友人・知人・観光客がやってくるのもこの季節である。

2-1-2. 冬営地の日

牧閑期といわれる冬の日を追ってみたい。草の豊かなハンガイ地域は季節移動の距離が 10km 程度と短いことで知られており [小長谷 1996: 11]、E 家の場合、夏営地から冬営地まではおよそ 5km の距離である。春営地と秋営地もほぼこの間の地点に設置される。た

だし、その年の水利や草生えの状況によっては、春営地・秋営地への移動を見合わせ、夏営地で秋を過ごし直接冬営地に移動したり、晩春でも冬営地に留まって様子を見ていたりすることがある。

冬営地は風雪を凌ぐために山裾の谷合に設けられており、谷の幅に合わせて一世帯から三世帯ほどが共営している。すぐ隣に別の宿営地があっても尾根によって視界が遮られてしまうため、他家の状況（在宅か否か、客人の有無など）や家畜の様子を把握するのが困難になる。また、マイナス 20 度を下回る寒さと積雪のため、外部から人がやって来ることはめったになく、共営世帯、親戚、最寄りの共営地の人々による往来がほとんどである。

表 2-2 は、2010 年 1 月の E 家の平均的な一日の過ごし方を示したものである。夜が明けても気温が低いいため家畜は活動できない。ゲルの中も朝は零下である。夜はかまどに火を残さず煙突を外して天窓の覆いをしめて眠るため、水を入れた容器には氷が張り、息が白く煙る。9 時頃夫婦のどちらか一人が意を決して起きだし、綿の入った厚手のデールを羽織って外に出る。天窓の覆いを外し、煙突をさしてかまどに火をおこす。15 分ほどで室内が暖くなり、30 分もすると床の布団に包まっていた子どもが起きてくる。前夜の食事の残りをかまどの上で温め、それぞれが少しずつ腹に収めると、家畜の飼料を作り始める。

ポリバケツにおが屑、発酵させた雑穀、水などを独自の配合で入れ、良くかき混ぜたものが飼料となる。飼料ができると共営世帯と作業がかち合わないよう調整しながら、自家の家畜に飼料をやる。家畜囲いの中にいる自家のヒツジ・ヤギを、家畜囲いの手前に設置された飼料を与えるための囲いに誘導し、タイヤを切り開いて作った特製桶に飼料を入れてやる。ヤギにはじき出されたヒツジがいれば飼料のところへ導き、食いつぶぐれないよう世話を焼く。全ての共営世帯の飼料やりが終わり、寒さが少し緩む 12 時頃、当番の男性がヒツジ・ヤギ群の放牧に出かける。

ヤギたちは前足の蹄で雪の下にある草を掘り起こして食べるので、放牧先にはできるだけ積雪の浅い場所が選ばれる。だが、人や家畜が一度歩いたあとは雪が硬くなり利用できなくなるため、常に新雪の柔らかい場所に目星をつけておかなければならない。山中で放牧するときは、積もった雪を人が足で掻きはらって草をむき出しにしてやることもある。雪を掘り続けて家畜に無駄な体力を使わせないようにするためである。当番だった男性がその日の放牧場所や積雪、草の状態を報告し他の共営男性達と次の放牧場所について意見交換を行うことも日課の一つである。

放牧当番でない男性は、越冬に必要な設備を作ったり、大量に消費する薪を調達するため山へ枯れ木を採りに出かける。夏場は複数世帯の男性が協力してトラックで山に入り、大量の枯木を斧や二人引きノコギリで伐採してくるが、雪の冬山ではトラックによる運搬が困難なため、雪が深くなると個々人が麓の手近な枯木を斧で切り倒して引きずって持ち帰っている。

比較的体力のある家畜群が放牧に出されたあとの家畜囲いには、季節外れに産まれた仔家畜や弱った家畜が残る。こうした家畜には配合した飼料の他に、秋に刈っておいた干し

草を与える。別の囲いにいる仔ウシにも飼料が与えられる。飼料だけでは本来牧草に含まれている水分を補えないので、雪を解かして与えている。一通り家畜の世話を終えると、ゲルの上や玄関先に積もった雪をかいたり、昼食を用意したりする。炊事に使う水も雪を解かして作る。雪がそこら中にあるため冬場は水には困らない。砂利や犬の糞が混入しないようにできるだけきれいな山肌の新雪をすくって 50ℓ サイズの袋につめて持ち帰る。必要な分だけ鍋で解かし、残りは 60ℓ 入りのポリ容器に溜めておかれる。雪集めは一日に 2、3 回で必要な時だけ集めにいく。

家畜が放牧から帰ってくる前に囲いの清掃が行われる。糞を外に掻き出す作業である。掻き出した糞は専用の櫛付き桶で糞置場に運ばれる。糞置場の下の空間は糞の断熱効果を利用した番犬母仔の棲み処となっている（人が作ったわけではなく犬が穴を掘って利用している）。冬の日暮れは 17 時頃と早い。戻ってきた家畜群は飼料をもらうと家畜囲いの中に納まり、くつつきあって暖をとる。

家畜の世話を終えると共営する世帯はそれぞれのゲルに帰り、夕食をとる。搾乳が行われないこの時季、冷凍保存しておいた乳製品は貴重でありめったに口にしない。食卓には秋に大量に屠殺して乾燥させておいた肉入りのお粥、肉うどんなどがのぼる。食後は、繕いものをしたり、器械をいじくったりしながら家族でゆっくり過ごす。日が落ちていても手もとが見えるのはソーラーパネルで充電した蓄電器と電灯のおかげである。たっぷり語らったあと、かまどの温もりが消えないうちにベッドに入る。やはり夏同様、デールも洋服も脱ぎ、下着だけになって寝る。

冬は搾乳をしないため、ヒツジ・ヤギ群を成獣と仔家畜群とに分ける必要もなく、管理にかかる手間は少なくなる。冬の暮らしについて遊牧民がどう捉えているのかが窺える次のような出来事があった。E 家が放牧当番の日、筆者が放牧について行ったことを聞いた共営世帯 B 家の夫婦が、筆者に「[ここの暮らしは] 夏と冬どちらが大変か」と尋ねた。夏の休む間もなく搾乳と乳製品作りに追われていた様子を思い浮かべ「夏!」と答えると夫婦はそろって身を乗り出し、「本来、今年みたいに雪が降ってゾドでなければ、飼料桶に飼料を入れてやることもないし、幸福な²⁰季節なんだ」といい、「ヒツジを草のあるところに放してやるだけでいいんだよ」と冬の家畜に関わる作業の少なさを利点として説明した。

彼らが、例年ならば牧草と干し草だけで越冬が可能であるといった通り、この年の冬は例外的であった。2009 年の暮れから 2010 年の春にかけて、30 年に一度といわれる記録的なゾドに見舞われ、モンゴル国の全家畜頭数の 20%にあたる 840 万頭の家畜が失われた[UN Mongolia Country Team 2010]。アルハンガイ県では、2009 年には五家畜をあわせて 361 万 9,100 頭を保有していたが、2010 年には 267 万 9,200 頭にまで減少した[NSOM 2010: 211]。

サントでも全ての世帯が被害を受け、家畜頭数が三分の一や五分之一にまで減少した世帯もあった。E 家では春までにウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギを合わせたおよそ 130 頭が死んだ。もともと所有していた家畜の六割強を失ったことになり、ウシにいたっては全滅であった。

²⁰ jargaltai

自然の脅威や家畜の脆弱さを織り込み済みの遊牧民であっても対処できないほどの深刻さであった。冬営地では作業が比較的少なくなるとはいえ、常に家畜を失う危険性と背中合わせの越冬となる。

第2節 共営世帯と人の往来

遊牧民は季節ごとに、複数世帯が一ヶ所に集まって宿営地を設ける。サント地域では二、三世帯による集住が一般的である。ともに宿営する世帯は、お互いの所有する馬群や、ヒツジ・ヤギの混成群をそれぞれ合わせて一つの群にし、生殖、哺乳、搾乳管理を行う〔島崎他 1999: 14-15〕。各世帯から日替わりで放牧当番と家畜囲いの清掃当番を出すことで労働の負担を軽減している。また、毛刈りや牧草刈りといった作業を共同で効率よく行うことができる。このような一ヶ所に宿営し協力関係にある世帯をホト・アイル〈khot ail〉という。しかし、サントではホト・アイルという表現は使われておらず、ハムト・ボーサン・アイル〈khamt buusan ail: 共営世帯〉と呼ばれていたもので、本論文ではこちらの表現を用いる。

共営世帯は季節による移動のたびに組み替えられる。春、夏、秋、冬と年に四回移動するたびに、共営する世帯の構成員が変わるのである。どの場所に移るかは、降雨や草生えの状態によって各世帯が判断しているという。ただし、冬営地は天候や牧地に異状がなければ毎年ほぼ決まって同じ場所に構えられる。その理由は、厳しい風雪を避けるために山かげに立地する冬営地には、生木を組んで造った天井付きの家畜囲いが常設されているからである。その他の季節には、どの世帯と共営するかは特に定まっておらず状況に応じて決定される。肉親や縁者が選ばれることが多いが、血縁関係の全くない世帯と共営することもある。

モンゴル国の中央県において、遊牧民家族 14 世帯の 8 年間にわたる宿営地と共営世帯の変遷を聞き取り調査した日野によると、彼らが季節移動を行う際には、「どんな（関係にある）世帯でもよい」と語る一方で、牧地や宿営地の状態を考慮して宿営地を選定する場合と、共営相手世帯の条件で選ぶ場合があるという。後者の場合は、共営世帯の労働力や家畜頭数が決め手になる〔日野 2001〕。高齢世帯や主な働き手を怪我、病気、出産など何らかの事情で欠く場合、あるいは馬群の管理や搾乳といった牧繁期の労働力が必要とされる場合は、共営世帯の労働力が重要性を増す。遊牧民の間では性別による作業分担（例えば馬群の管理は男性、搾乳・家事は女性）が固定しているため、共営世帯の家族構成も考慮される。

家畜頭数の制約も季節によって変動するが、一般に家畜を多く飼養する世帯は、共営相手としてはあまり好まれない。「飼養家畜頭数の多い世帯と宿営すると、夏・秋は家畜が太らない、冬は家畜の伏せる場所が不足する、春の出産期には作業がとても大変になるなどの不都合な点があるという」〔日野 2001: 116〕。共営世帯を組んで互いの家畜群を統合

すると、家畜頭数に差があっても、輪番制の放牧や家畜囲いの清掃などは同等に行われるため、飼養頭数の少ない世帯は特に、家畜の多い世帯との共営を避ける傾向にあるという。

各世帯の事情や宿営地・牧地の状態、水利など、刻々と変化するさまざまな条件を鑑みただうえで、宿営地を移し共営世帯が離合集散した結果として、日野は 14 世帯が 8 年間に取った共営世帯構成パターンが 112 通りであったと報告している。112 例中、単独での宿営が 16 例であった。残り 96 例の内、86 例において、共営世帯間に何らかの親戚・姻戚関係があったという。つまり、彼らがハマータン²¹（親戚）とよぶ親戚関係世帯との共営が 76% を占めていたということである [日野 2001: 107-108]。

2-2-1. 宿営地の選定

実際に、宿営地や共営相手をどのように決めているのかと E に尋ねたところ、「自由に決めている」という答えが返ってきた。誰かと話し合うのかときくと、「[共営するつもり] A (E の甥) と B (E の兄) と話し合っここ [冬営地] にしようと決めた」という。また、M によると、どの場所で宿営するかはその年の水と草で決めるという。誰と組むかよりもどこでその季節を越すかがより重要だというのである。

宿営地はそれぞれの家が決めるため、他の家がどこで宿営するつもりなのかということとは彼らの関心ごとである。移動をめぐる根回しは秘密裏に行われ、交渉過程は共営している世帯にさえ知らされないことが多いといわれる [風戸 1999: 40]。移動の時期が近づいてくると、G 家の宿営地を訪問して戻ってきた筆者に対しても、「G 家はどこで宿営するつもりって言ってた？」という質問が M から投げかけられたように、宿営地をめぐる情報収集が行われる。

宿営地の選定は単なる移動ではなく、家族と家畜の生存がかかっているため、どの家も慎重にさまざまな条件を考慮して場所を選ぶ。それゆえ、同じような環境下にあると、しばしば狙っていた場所が他家とがち合ってしまうことがある。基本的には各世帯の放牧地は慣習的にほぼ決まっているが、その年の牧草の良し悪しによっては変わることもある。事前に誰がどこを狙っているという情報を収集しておき、がち合いそうであれば交渉するということであるが、早い者勝ちというケースもある。実際、2011 年に調査をした時、いつも E 家が好んで夏営地として利用している場所に他家のゲルが建っていた。E に、どうしていつもの場所ではないのかと尋ねると、「先にあの家が来てしまっていたから、仕方がないのでここにした」と少し残念そうに答えた。E 家より先に来ていた家というのは、M の兄世帯 L 家であった。

かつてのモンゴルの慣習法では、先着者占有の原則が認められていた。1709 年に定められた法典『カルカ=ジロム』では、ゲルが設置された時点でその宿営地が占有されたとみな

²¹ khamaatan

し、他の者の占有をいっさい認めないとしていた〔後藤 1970: 199〕。もし、宿営地を下見するために二人が来合わせて口論になったら、先に到着した者にその使用権が認められ、同時に到着した場合には、「先に矢を射るか、宿営地を早く鞭で叩いた者」の土地になったという〔鯉渕 1995: 50; 後藤 1970: 199〕。

後藤は、こうした規定は万一紛糾した場合に裁定するための最後のよりどころであって、互いに親しい者同士の日常における行動基準は、早い者勝ちの原則だけで規定されているわけではないと述べている〔後藤 1970: 199-200〕。また、このような規定よりも慣行と道義が重視され、社会的な批難を浴びるような行動は差し控えるのが遊牧民の生活態度であるとする〔後藤 1970: 200〕。後藤が指摘した通り、一般的にブーツ (buuts) と呼ばれる冬営地は固定されており、互いの占有が認められているため、むやみにそれを侵すようなことはしない。しかし、それ以外の宿営地選びに関しては、互いの選好地について熟知はしていても、それがより良い放牧地をあきらめる理由にはならない。それに、自分の好む場所を他家に先取られたからといって、それを理由に関係が悪化することなどもない。移動の機会は今後何度もあり、自分が相手の望む場所を利用することもあり得るため、お互い様なのである。

2012 年の調査の時、E 家はいつもの夏営地に陣取っていた。夏は二世帯で共営することが多い E 家であるが、この夏は四つのゲルが並んでいた〔写真 2-1〕。そこで、四世帯で共営しているのかと E に質問すると、「いや、〔B 家と〕二世帯で共営している」、「四世帯は多すぎる。家畜がひしめき合って草もなくなるし、集まり過ぎはよくない。本来は二世帯でいいんだが、今年は色んな世帯が寄り合っている」という。自分たちの決めた場所に来てみたら、すぐ近くに先客がいたということであった。事前に交渉しなかったのかときくと、「話したけど、だめだった」という。四つの世帯が並んではいるが、E 家と共営関係にあるのは E 家のすぐ西側にゲルを構えた B 家だけであった。

このような事例から、宿営地の選定にあたっては、牧草地の下見や他家の意向を探るといった情報収集が不可欠であると同時に、交渉の成否にかかっているといえる。季節移動の際には毎度、水面下でこうした交渉が繰り広げられているのである。

2-2-2. 共営世帯の役割

よい場所さえ確保できれば共営相手に誰を選んでも問題ないというわけではない。共営する世帯はお互いの家畜群を統合し一つの群として共同管理することになる。つまり、所有する家畜の規模を考慮して相手を選ぶ必要がある。共営相手の家畜数が多い場合には、宿営地周辺の草原にかかる負荷が大きくなるだけでなく、日替わりで行う家畜囲いの清掃、毎日の搾乳の手伝いといった作業の負担が増してしまう可能性がある。

まず放牧であるが、ヒツジとヤギの混成群の放牧は雨でも雪でも毎日欠かさず行われる。この放牧は輪番制になっており、各共営世帯が日替わりで受けもつ。朝、搾乳後の家畜を

囲いから出し、その日の放牧先にあたりをつけながら追っていく作業にかかる労力は、群の規模の大小とはそれほど関係しない。ただし、群が他の共営地からきた群と混ざってしまった際には、選り分けに相当の労力が必要になり、最終的に双方の共営世帯総出の作業になってしまう。放牧当番でない世帯は、空になった家畜囲いの清掃を行う。これも輪番制である。夜の間に家畜が排出して囲いの中にためた糞泥を特製シャベルで掻き出し、専用の櫓で糞捨て場まで運ぶ重労働である。他の地域であれば、家畜の糞は貴重な燃料としてとっておかれるが、ここハンガイでは薪材となる木々が豊富にあるため、糞の使い道はない。

ヒツジやヤギといった小型家畜の搾乳は世帯ごとに行われるのに対し、ウシやウマなど大型家畜の搾乳は共同で行われる。搾乳は女性の仕事であり、仔ウシのそばに追い立ててきた母ウシの乳を朝と夕の2回、共営世帯の女性たちが総出で搾る。共同とはいっても、それぞれの所有するウシを同時に搾乳するだけであるが、頼まれれば共営相手の所有するウシの搾乳を手伝う。年長世帯ほど多くの家畜を保有する傾向にあるため、若年世帯が共営する年長世帯の搾乳を手伝う場面をよく見かける。ウマの搾乳には、仔ウマを乳から引き離しつつ母ウマの側に添わせておく役割の人間と搾乳する人間の二人が必ず必要である。夏は一日に5、6回搾乳するため、その都度乳ウマがいる世帯は、仔ウマの引き役を手近な共営世帯に求めることになる。

共営世帯にはこのような家畜の管理以外に、モノを融通し合うという役割が暗黙のうちに期待されている。それをよく示す事例をここにあげる。E家には首都に住む知人から譲り受けた双眼鏡があった。それをEが右と左のレンズに分割して望遠鏡にし、一つを親戚のR(Mの姉婿)にあげた。Rのもっていた望遠鏡が雨に濡れて見えなくなったからだという。

「Rに頼まれたわけじゃないけど、春営地ではR家が一世帯だけで宿営していたので、すぐに借りられる相手がなくて不便だと思ってあげた」のだという(2010年7月31日)。この発言からは、彼らにとって共営世帯は最も身近な貸借相手として認識されていることが窺える。共営世帯間におけるモノのやり取りの実態は第4章で詳しく述べるが、共営関係になるということは単なる家畜の共同管理にとどまらず、生活面でのつながりを積極的にもつということを意味する。

彼らの話によれば自分たちが共営する相手は特に決まっておらず、自由に組むことができるという。しかし、2009年から2012年までの7回にわたるそれぞれの調査時に、E家が共営していた世帯をみると、B家が突出して多いことがわかる〔表2-3〕。最も多いB家と6回、次いでA家と3回、C家とG家が2回となっている。さらに、E家とそれぞれの世帯との関係に着目すると、B家はEの兄世帯であり、A家はEの甥世帯である。また、C家はMの兄世帯にあたる。つまり、G家、X家、J家をのぞく三世帯は、すべてE家にとって血縁世帯であった〔図1-5参照〕。自然条件、家畜頭数、人間関係などを熟慮した結果として、特定の世帯との共営という傾向がみられる。血縁世帯以外の共営世帯(および準共営世帯)の家族構成は図2-1に示した。

2-2-3. 宿営地における人の往来

次に共営世帯と宿営地を構えたあとの日常についてみていきたい。特に注目したいのは人の往来の激しさである。四季のうちで最も人の動きが活発化する夏営地において、一日にどれくらい人の出入りがあるのかを調査した。2012年の7月29日から8月5日までの八日間に、E家を訪れた人物とその主な目的を記録した。

この夏E家が宿営地に選んだのは、北と東に流れる二本の川の合流地点に位置する日当たりのよい高台で、2009年の夏にも利用していた場所であった。北側の山に向かって東端にE家、5mほど距離をおいてB家のゲルが建っている。B家から西に5mほど行ったところにはX家の大小二つのゲルが並び、さらに西に15mほど離れた場所にはJ家の大小二つのゲルが並んでいる〔写真2-1参照〕。

E家はこの夏B家と二世帯で共営することになっていた。B家の夫はEの歳の近い兄であり、これまでも頻繁に共営していた。ところが、E家らよりも先にX家とJ家がそれぞれこの地に夏営地を構えていたため、結果的に四世帯が近接することになった。X家もJ家も、E家、B家より年長者の世帯ということもあり、後から移動してきたEらが彼らの土地の選定に口をはさむことは難しいという。共営関係にはないため、家畜の管理はそれぞれの年長者世帯とE家ら共営世帯とで完全に別個に行われていた。一方で、X家、J家ともE家とは旧知の間柄であるため、一部の大型家畜の搾乳補助や日常的な人の往来がみられた。

表2-4は、人の出入り調査をした八日間のE家訪問者のべ件数と人物属性およびE家との関係、その主な目的を示したものである。のべ人数ではなくのべ件数としたのは、同じ目的を共有する複数人が一塊になってやって来る場合を考慮したためであり、そのような場合は人数に関わりなく一件と数えた。表には人物あるいは集団がE家にやって来た順に、ほぼ時系列に並べてある。同じ人物が一日に何度も出入りすることがあるが、それも一件一件個別に数えている。結果をみると、八日間でE家にはのべ275件の訪問があった²²。275件のうち半数近くを占める129件は、夏営地を共用しているX家とJ家の成員によるものであった。表では便宜上、E家との関係を「準共営」としている。次に多かったのが「共営世帯」で68件、次いで「親戚」が29件、「知人」が25件、「友人」21件、そして「見知らぬ人」が3件（13人）であった。

この調査から、夏営地では毎日平均34件の来訪をE家が受けていることがわかる。例年に比べ少し訪問件数が多いとE家も筆者も感じていた。地理的に近い所に四世帯が宿営していたことがその一因であると考えられる。Eは近接する世帯が多くなると訪問者が増えると言っており、その理由は他家を訪問した客人がついでに周辺の世帯にも立ち寄るから、ということであった。確かに、X家の親戚がX家を訪ねてきた後、面識のないE家に立ち

²² ウムヌゴビ県（Ömnögovi Aimag）の遊牧民世帯に滞在して訪問者数と訪問理由を調査した東郷によると、48日間でのべ310件の訪問があったという〔東郷2011〕。一日平均6.5人が訪れた計算になる（調査期間は2009年7月～9月）。地域や調査環境が異なるため単純に比較はできないが、2009年におけるE家の夏営地の訪問者がいかに多かったかが伺える。

寄り、結婚を控えた息子のために E 家の新調したばかりのゲルについてあれこれ質問するということがあった。また、E 家を訪問している客人を目当てに X 家や J 家の人々が E 家にやって来るといふ事例も散見された。E 家に訪問者が来たことを察知した近隣世帯の人々が、訪問者との会話を求めて集まってくるのである。その他、E 家に居候している筆者の存在が、これまで交流のなかった準共営世帯の人々の関心を引いたこともその要因としてあげられる。

先述の表 2-4 には、訪問者が E 家の成員および E 家を訪れている客人と交わした会話の内容や行動から、主な訪問の目的をわかる範囲で示してある。実際には一度の訪問でさまざまなことをしているが、おおよそ何をしに E 家を訪問しているのか便宜的に集約してみると、①訪問の挨拶やモノ・家畜・市場・他家にまつわる情報を交わす、②モノの貸借や譲渡を求めて交渉する、③乳製品の贈答や飲み物・食事の提供を受ける、④搾乳・伝言・着物製作などを依頼する、⑤休憩・テレビ鑑賞・トランプ遊びを楽しむ、⑥狩りの誘いや酔いに任せて押しかける、の六つに分類できる。何れの目的にせよ、訪問者が E 家への訪問と対話を通じて自身の必要の充足を図っているという状況が窺える。

ここまで E 家を中心にして人の往来について述べてきたが、これは E 家に限られた現象ではない。遊牧社会において人の往来は双方向性をもつものであり、筆者を含めた E 家の成員も上述したようなさまざまな目的をもって、時には訪問すること自体を目的として共営世帯や親戚、友人・知人世帯を訪問している。共営世帯の数や近接する世帯の数によって来訪者数に多少の増減はあるものの、人の往来が遊牧民の社会生活を形づくっていることに間違いはない。

第 3 節 人の往来がはたす役割

このような旺盛な他家への訪問活動は現代に始まったことではない。1870 年代に内陸アジアを踏査したプルジェワルスキーは、「男性は極端になまけ者であるが、この怠惰は遊牧民の日常生活のすべてに現われている。彼らはそのユルト〔ゲル: 筆者注〕の中で徹底的に何もしない、ただまれに付近で放牧中の家畜を見に行くだけである。一日の大部分は、彼らモンゴル人にとって神聖な仕事と言うべきお茶飲みで費やされる。また冬はお茶を飲むために、夏はクミーズ〔牛乳酒: 筆者注〕またはアレカ（発酵させた酸乳）を腹いっぱいになるまで飲むために近くのユルトを訪問する」〔プルジェワルスキー 1978: 22-23〕、「モンゴル人は怠惰ではあってもたいへん好奇心に富み、話好きであるが、明朗な性格とはいえない」〔同上 1978: 23〕と述べている。このロシアの探検家には無為に過ごしているようにみえた、他家への訪問とおしゃべりこそが、実は遊牧民の生活を支えるもっとも重要な活動であると筆者は考えている。

そこで本節では、遊牧民が他家を訪問することにどのような意義があるのかを、参与観察した内容と事例を通して考察する。

2-3-1. 他家への訪問

誰かのゲルを訪れ語り合うことは、遊牧民にとって大きな楽しみになっており、他家を訪問することを「アイル・ヘセヘ〈ail khesekh: 家々を訪ねて出歩く、客に行く〉」という〔島村 2009: 455; 東郷 2011: 32〕。共営世帯はもちろんのこと、放牧や所用で遠出をする機会の多い男性達は出先の親戚や知人宅を訪ねて回り、家畜の世話や家事の合間をみて女性達は近隣の宿営地を訪問する。何らかの目的をもって訪問する場合もあれば、これといった理由はなく訪問自体を目的としている場合もある〔写真 2-2〕。

例えば、モノのやり取りや情報交換、食事の提供を受けるなどが前者であり、特に相伴を目的として食事時を狙って訪問することは「ホール・ボーダハ〈khool buudakh: 食事を撃つ〉」と慣用されている。解体済みの肉を切らしている時や、食事の準備に手間が割けない時などは、「アイル・ヘセホー〈Ail khesekh üü: 他家に行こうか〉?」とって家族で他家を訪問し食事を済ませることもある。その際には、訪問先の煙突から煙が出ているか否かといった調理の兆しを事前に確認することも忘れない。食事時に訪問を受けた家の人々も、「良いウマを持っているね」とって食事をすすめてくれる〔小長谷 2005: 222〕。「良いウマを持っている」とは「タイミングが良い」という意味であり、好機を逃さない人に対する賞讃である。首都でもタイミング良く物事に邂逅すると「モリトエ・バエン〈Mor'toi baina: ウマをもっている〉」、あるいは「モリトエ・ヤウン〈Mor'toi yavna: ウマで行く〉」と慣用される。

一方、後者の場合はおしゃべりが中心となる。手隙の時間をみつけては皆他家へと出かけていく。お茶などのもてなしを受けながらさまざまな会話をすることによって、結果的に何かしらの情報を交換することになる。そして、それぞれの訪問先から入手した情報が宿営地に持ち帰られると、その日の出来事として家族内で共有され、出入りする共営世帯の人々や親戚、友人、客人にも話題として提供される。

E 家では次のような事例があった。2012 年の夏、夜の 10 時頃に帰ってきた E に M が出先のことを尋ねた。E が北側の宿営地に行ってきたと答えると、「G 家はどうだった?」と他家の様子を詳しく聞いたがった。また、2010 年の冬、共営世帯 B 家の夫人が E 家を訪れていた時、バイクで父親と出かけていた B 家の長男が戻ってきた。E 家に入ってきた息子に向かって B 家夫人は開口一番、「ヤウサン・ガズラーラー・ソニン・サイハン〈Yavsan gazraaraa sonin saikhan: 出先で何か変わったことは〉?」と問いかけた。このように、家事や家畜の世話があるため遠出をすることの少ない女性達も、夫や子どもなどの見聞きしてきた情報を収集し、共営世帯や親戚、来客などと共有する。

他家への訪問が欠くことのできない日課であるのと同様に、来訪者を迎えることも重要な務めである。ある日、別の共営地に暮らす M の姉兄世帯を訪ねるつもりで M が家を出ると、騎乗の男性 (E の友人) がこちらに向かって来るのが見えた。M はゲルの中に引き返して客人を迎えお茶を出した。「E は?」、「トランプある?」などとしばらく M と会話

していた客人が出て行くと、今度こそ M は親戚の家に向かった。また、筆者が招きを受けて別の共営地にある M の姉世帯 R 家に向かっていたところ、R 家と共営している C 家の夫婦が屋外で丸太を切り分ける作業をしていた。筆者の姿をみとめた C 家の夫人は二人引きノコギリをひく手を休めて立ち上がった。しかし、筆者が C 家のゲル前を通り過ぎたのを見ると、再び作業に戻った。

このように作業中であったりゲルを空けようとしている場合でも、自分の宿営地に向かってくる人影が見えればしばし留まり、自分の家を訪問する気配があるかどうかを見定める。他家への訪問者であることがわかればとりあえず作業を続け（後ほど自分の家にも訪問することが期待できる場合）、自家の客であれば作業を中断してゲルに戻り、客人を招き入れる。もてなしは礼儀であり、訪問者がどのような目的でやって来たにせよ、まずはお茶やアイラグ、乳製品などでもてなす。しかし単なる形式として行われているわけではない。客の訪れは情報を得る機会の到来であり、どの世帯においても来訪者は歓迎される。

モンゴル遊牧民についての一般書や旅行記には、遊牧民が見知らぬ人であろうが外国人であろうが旅人を喜んで受け入れ大いにもてなすといった内容が記されている²³。確かにその内容は実態を捉えているが、彼らのこうした対応を心の豊かさやホスピタリティーのゆえであると結論することによって、牧歌的なイメージの中に押しこめてしまっている嫌いがある。実際のところはホスピタリティーだけでもてなしているわけではない。遊牧民が遠方からの来訪者を喜んでもてなす理由は、客人のもたらす情報にある。客人の来訪自体が話題性のある出来事であり、客人の装いや携帯品および会話を通して自分では足を運ぶことのない場所の未知の情報を得ることができるからである。もてなしに対しては情報という暗黙の見返りが期待されていることを看過してはならない。

2012 年の夏、E 家の宿営地を流れる川の側に黄色い花を摘む男女の集団がいた。身なりや行動からして地元の遊牧民ではないことは明らかだった。共営世帯 B 家の夫が E 家にやって来たので、M が「あの人たちはどういう人たちなの？」と尋ねた。すると、首都から公務で来ている人々で、薬にするために黄色い花を摘んでいるのだと教えてくれた。今朝現れたばかりのその集団について、なぜそんなことを知っているのか不思議に思い筆者が B 家の夫に尋ねると、集団の中の一人が B 家に来てアイラグを飲んでおり、その人物から話を聞いたという。彼らは何者かということだけでなく、首都の様子やここに来るまでの道中の降雨や草生えの状況などを聞くことができるため、遠来客は遊牧民にとって貴重な情報源である。

来訪者はある世帯を訪問した際に、特別な事情がない限りその他の共営世帯にも立ち寄るのが普通である。2009 年の夏、共営していた G 家の牧草刈りが行われた。E も含め手伝いに行っていた知人男性達が宿営地に戻ってくると、全員が G 家に入り食事のもてなしを受けた。その後、男性陣は E 家にやってきて酒を飲んだ。G 家の夫も一緒に来ていた。ま

²³ 例えば、「遊牧民は旅人の無礼をいちいちとがめたりはしない。モンゴル人は大らかで、もてなし好きな国民だ」〔鮫島 2011: 15〕。

た、2010 年の春、E の友人が E 家を訪れゾドでヒツジが大量にやられたという話をしていた。そのあと、友人が E 家と共営している他の世帯へ訪ねて行くのに E も同行した。

来訪者が訪れた宿営地において全ての世帯に立ち寄るのは、より多くの情報を交換するためであるが、表敬のためでもある。来訪者は自身が情報を収集する立場であると同時に、情報の伝達者でもある。もし来訪者が立ち寄らなければ、その世帯は情報から取り残されることになる。都合悪く共営する他家への訪問を逸することがあると、「どうしてうちに来なかったのか」とのちに不満を訴えられることもある。来訪者が全ての世帯に足を運ぶことには、世帯間の情報の偏向による不公平感や不満を解消する効果もあるのである。

2-3-2. 情報の収集

他家を訪れている客人が自家に来るのを待ち構えていてもなかなか来ない場合や、どうしても早く情報が欲しい時には自らも積極的に出かけていく。2012 年の夏、姪をツェツェルレグ市まで送るためにバイクで出かけたはずの M の兄 C が、引き返して E 家に戻ってきた。C が戻ってきたと同時に、E 家の共営世帯 B 家の夫がやって来て、C に道中の様子を尋ねた。E 家を出たあと C は準共営世帯にも立ち寄った。また同じ夏営地において、M の兄 L が雨の中をバイクで E 家にやって来た。すると、すぐに準共営世帯 X 家の夫が E 家にやって来て、L に対し「タナエハース・ソニン・サイハン〈Tanaikhaas sonin saikhan: お宅で何か変わったことは〉？」と話を聞きだした。

家事などで家の中にいることが多い女性たちも、情報の収集に余念がない。常時ゲルの扉が開け放たれているのは、放牧中の家畜の様子を見たり、遠くに行く馬上の人影や車の動きから誰がどの方角に向かったのかなどを把握するためであり、さらには近くのゲルや屋外にいる人々の話し声を捉えるためである。かすかにでも人の声がすると耳をそばだてて発話している人物や内容を特定しようとする。馴染みであれば、近づいてくるバイクや車のエンジン音などから、誰が来たのかを言い当てることもできる。

2010 年の春営地で、E 家の外（防寒のため扉は閉まっていた）でバイクのエンジン音がした。M は E 家に来ていた共営世帯 B 家の長男を遣って誰が来たのかを確認しに行かせつつ、耳に神経を集中させた様子で「R 兄〔M の義兄〕でしょう」と言った。E 家の扉を開けて入って来たのは、M の予想通り R 兄であった。

共営世帯や近隣世帯に来客があることはすぐに察知できても、誰だかわからなかったり見知らぬ人である場合もある。そのような時は、無理に押しかけることはせず様子をみたり、客人が帰ってから家の人に誰が来ていたのかを確認することもある。2012 年の夏営地でのこと、共営世帯 B 家に人が集まり酒盛りをしている様子であった。家畜の放牧から戻った E は気にしつつも家に留まっていた。すると、別の宿営地からやって来た知人の若者が B 家に立ち寄ったあとで E 家にも立ち寄ったので、ここぞとばかりに「誰と誰が来てるんだ？」と E が尋ねた。すると酔っ払いの若者は「知らない人たちだ」と答えた。

また、母親たちは共営世帯や近隣世帯に來客があると子どもを遣って情報を集める。誰が來ているのかということはもちろんのこと、どんなお土産（リンゴや菓子類など）を持ってきたのかということにも関心を寄せる。2009年の夏、共営世帯G家に複数名の來客（G家の夫の母親と姉と姪ら）があった。客人を目当てにG家に行っていたE家の子ども達が帰ってくると、さっそくMは客人が子どもらに何をくれたのかを訊いた。

このように今起きている物事を察知し刻々と變化する身の回りの状況を把握するために、遊牧民の意識は常に人の動きに向けられている。情報が人とともに動くことを知っているからである。自分の宿營地で見聞きできる事柄は限られているため、更なる情報を得るためには自らの足で稼ぐしかない。毎日他家を訪問し合うのも新しい情報を求めてのことである。だからこそ、向こうから情報をもたらしてくれる來訪者は歓迎されるのである。

2-3-3. 情報の内容と取り扱い

遊牧民が情報を求めて互いを訪問し合うと述べたが、具体的にはどのような情報がやり取りされているのかを見ておきたい。そこでまずは本論で扱う「情報」を定義する。情報というタームは、自然科学、情報科学、人文社会科学などさまざまな學問領域で使用されており、そこに含有される意味や事象の範囲も多様である。情報行動學の観点から「情報」を議論する橋元[1990]によれば、人文社会科学領域一つをとってみても、情報という概念がカバーする対象領域の差、および情報を単に（なにもものかを運ぶ）器の連鎖と捉えるか、器の中身まで含めて考えるかという立場の違いによって、四つのレベルに整理可能であるという。例えば、情報を「人間と人間とのあいだで伝達されるいっさいの記号の系列」[梅棹 1990 :39-40]とした梅棹は、情報を「記号系列とそれによって指示されたメッセージの合体」として把握するレベル 3c²⁴に位置づけられる[橋元 1990: 93, 105]。レベル 2は、情報を「環境内の要素で、かつ人間が特定の働きかけを行ったり、あるいは働きかけを受けたりする対象」として把握するレベルであり、ウィーナーによる定義²⁵が当てはまる。

情報人類學²⁶を提唱する奥田は、「五感で感受できる信号からそれに対応する意味が読みとられたとき、それが「情報」となる」[奥野 2009: 86]と述べており、要するに記号（あ

²⁴ レベルの数字が大きくなるにつれ「狭義」となる。最も狭義のレベル 4 では、情報を「行動選択のための評価をになったり、司令機能を果たす記号列」として把握する。つまり、人間の行動に対して判断の材料を提供したり、行動自体に積極的に制約を加えるものとして情報を捉える立場である[橋元 1990: 93]。

²⁵ 「われわれが外界に対して自己を調節し、かつその調節行動によって外界に影響を及ぼしていくさいに、外界との間で交換されるものの内容を指す言葉」[Wiener 1950: 11]

²⁶ 現代情報社会を対象とし、文化人類學の調査・研究手法を用いて、人間と情報メディアの關係を通文化的に比較分析する研究[奥野 2009]。ここでいう情報社会とは、インターネットやデジタル衛星放送、モバイルメディアといった情報インフラ、非対面接触的コミュニケーションを有する社会を想定しており、筆者がモンゴル遊牧社会に対して用いようとしている「情報社会」とは異なる概念である。

るいは信号) からどれだけ意味を読み取るかが、ここに挙げた「情報」というタームの定義の差であるといえる。一方、国内外の 14 人の研究者による「情報」の定義を比較分類した久保は、各定義は「メッセージ発信者・受信者の間でコミュニケーション状況を前提とする立場と、受信者による情報消費にのみ焦点をあてる受信者本位の立場に大別できる」と述べている [久保 1992: 565]。

このように、何をどの場面で情報とみなすかは、研究者によって異なっている。「データ」と「情報」と「知識」を区別し、それぞれを「価値が未評価のメッセージ」、「特定の状況下で価値が評価されたデータ」、「将来の一般的使用時に評価されるデータ」と細かく定義する立場もあるが、本論文においては情報を、特定の状況下における何らかの評価を伴うデータではなく、さまざまな状況下において扱い得る対象として捉える。メッセージ発信者・受信者間のコミュニケーション状況であれ、受信者による一方的な情報消費であれ、知覚された記号（データや知識など）が読み取られたものを情報と呼ぶ。

橋元の定義を借用すれば、情報は三つの方法によって獲得・生産される。1) 記号²⁷の意味を解読することによって、2) 直接、環境内の対象・状況・事態を知覚することによって、3) すでに蓄積されたものを組み替えることによって、である。情報は行為の対象であり、情報を獲得・生産・授受・蓄積・加工することを情報行動ということもできる。[橋元 1990: 102] 他方、パーソナル・コミュニケーションにおいても何らかの情報が交わされているようにみえる。そのような場合の情報には交換財的な性格が付与されており、「情報の消費が目的ではなく、噂話などを交換することによって、個人同士の良好な関係を維持することを目的」としているという [久保 1992: 566]。

しかしながら、情報行動かコミュニケーションかは明確に分節することはできない。両者は意図されることなく会話としてをつむがれる。コミュニケーションを目的とした他愛ない会話でも、受け手が自己にとって有益な「知覚された記号」（＝情報）を読み取る可能性が無限に開かれているからである。

実際に交される会話の内容はあまりに膨大ですべてを記録することはできないので、ここには見聞きしたやり取りのなかから一部を事例としてとりあげる。まず他家を訪れると、客人は所定の位置に腰を下ろしてもてなしを受ける。必ずしも慣習通りに男性の座や女性の座というわけではなく、気心の知れた相手であれば、家人の位置や作業の様子から判断して、夫婦のベッドや床、戸口付近に置かれた腰掛など、適当な場所を見つけて座る。一息ついたところで会話が始まる。

事例 2-1

準共営世帯 J 家の夫が E 家にやって来た。筆者が勧めたコーヒーを飲みながら自分の腹をさすり、「E より一つ年上の誰その腹の肉がすごい」などといって笑わせる。

J「B [E の兄で共営世帯] はどこへ行ったんだ？」

²⁷ 例えば、言語や映像など [橋元 1990: 95]。

M「タルワカ²⁸〔狩り〕よ」

J「誰と行ったんだ？」

E「二人のBで²⁹」

J「もう一人のBって？」

E「ほら、友人の…」

J「ああ」

E「どこへ〔狩りに〕行ったんだ？」

M「さあてねえ」

J「お前は行かなかったのか？」

E「いなかったからね」

J「ああ、ホトントに行ってたんだな。ホトントでソニン・サイハン・ヨー・バエン〈Sonin saikhan yuu baina: 何か変わったことはあるか〉？」

E「いや、特になかったよ」

(2012年7月31日)

事例 2-2

準共営世帯X家の夫がE家にやって来た。迎えたEが「Gは？」と別の宿営地で夏営している友人の所在を尋ねると、X家の夫は「バイクがないから戻ってない。OLもバイクがないな」と答えた。(2012年8月5日)

事例 2-3

E家の正月用の揚げ菓子作りをするために、親戚のB家、A家がE家に集まっていた。そこへMの兄Cがやって来た。つい最近ホトントの中心地へ行って来たということで、ホトントでは飼料が一袋8,000₮だと伝える。C家と共営しているR家(Mの姉世帯)の夫もサントの中心地から戻ってきたらしく、R家の夫から聞いたサントの話も伝えてくれる。R家の夫と一緒に出掛けたF(Eの義兄)はサントの中心地に残ったということ、ゾドに対する援助物資がサントに届いたという話などである。B家の夫が「ヤギの毛皮はいくらだ？」と訊くと、「それは聞いてない」というC。「雪の具合はどうか？」という問いには、「サントからここまでは大雪だ」と答える。(2010年1月28日)

事例 2-4

²⁸ tarvaga: マーモット (タルバガン)

²⁹ 補足: Bという同名の男性が二人おり、一人はEの兄で、もう一人はUBに住むEの友人BBである。夏季になると家族で草原にやって来る友人BBをE家がもてなすかわりに、EがUBを訪れる際にはBB家の世話になるという。

朝一番に共営世帯 B 家の夫が、夜中にホトントから戻った E に中心地の様子を聞きに来る。18 日、19 日は雪が降るといっていたが、18 日にはほとんど降らなかった。したがって 19 日と 20 日とさらにもう一日、三日間は降るだろうと話している。（2010 年 1 月 19 日）

事例 2-5

昨晚サントから戻ってきたという E の義兄 F が E 家にやって来た。カシミヤの価格が 1kg 4 万円に達しているというのをテレビで観たという。それを聞いて「ヤギの毛皮はいくら？」と M が尋ねた。（2010 年 1 月 29 日）

事例 2-6

夕方 6 時半を過ぎてその日の家畜の放牧当番を終えた共営世帯 B 家の夫が戻ってきた。E 家にやって来ると、風邪のせいで体が痛み、休みながら移動したために帰りが遅くなったと説明した。それから少し興奮気味に「〔放牧先の〕山頂付近にオオカミが食い散らかしたヒツジ〔とヤギ〕がたくさんいた」といい、「食われたのは V〔E の友人〕のヤギだった」という。10 頭ほどがやられたという。そんな話をしているところへ、共営世帯 A 家（E の甥世帯）夫婦がやって来た。すると E が今しがた聞いたばかりの、V の家畜がオオカミに襲われたことを二人に伝えた。次いで A 家の夫の父親 F も E 家にやって来た。またしても E が V の家畜がやられた話をした。（2010 年 1 月 25 日）

事例 2-7

E が電話をかけるためにサントの中心地へ行くことになった。バイクでの遠出となるため同行する筆者には厚着の正装をするように言い残し E は最寄りの宿营地へと出かけた。そして「サントの電話は止まっている」と言いながら戻ってくると、「この辺りでネグジを探して電話するしかないな」という。（2012 年 8 月 4 日）

事例 2-8

M が床の拭き掃除をしているところへ、E の友人 V がバイクでやって来た。「今日はどこに行っても人がいない」とぼやいている。「E は？」という質問に対し、M が共営世帯 G 家の牧草刈りに行っていると答えると、ふーんという顔をする。そして「帽子を見なかったか？」と M に尋ねる。「見なかったわよ、どんなの？」と聞かれ、こんなので...と特徴を説明する V。「見てない、見てない。うちからは出てこないわよ」と言われると、E が独りの時（M や筆者が子どもらとツェツェルレグ市に行っていた時）に被ってきて置き忘れたと思うという。しかし、見当たらないので、「じゃあ、行くわ」といって立ち去った。（2009 年 9 月 6 日）

事例 2-9

バイクに乗った男性（E の友人 W）が E 家にやって来た。目に入った異物が昨日から取れない E はサングラスをかけたままで眠っていたが、W と話し始める。M は一心不乱に家具の拭き掃除をしている。しばらくするとジープがやって来て、B と E の姪の夫、友人二人が連れ立って入ってきた。あとからやって来た男性客の一人が知人 V（事例 2-8 の人物）の話をはじめたのを聞いて M が、「昨日うちに来て帽子を探してたわよ」というと、男性客は「それ、うちにある！それだけじゃない。文字のついたやつとか色々ある」と応じた。それからも客人たちは「〇〇の息子は 17 歳でそろそろ軍隊に行く」、「△△じいさんは金持ちだから、□□にゲルを建ててやってる」などと知人の話をしたり、「A [E の甥] はいいるのか？」、「誰それはいるか？」などと知人の動向や他家の様子を E に尋ねたりしていた。（2009 年 9 月 8 日）

事例 2-10

知人の男性が E 家を訪れた。蒸留酒でもてなす E。客人は酒を一杯で辞すと、ヒツジを探していることを告げる。そこへやって来た準共営世帯 X 家の夫は、先客に対して「ヨー・バエン 〈Yuu baina: 何か〔変わったことは〕あるか〉？」と挨拶した。（2012 年 8 月 1 日）

事例 2-1 や事例 2-10、および前項の情報の収集の場面でも登場した（下線部参照）「ソニン・サイハン・ヨー・バエン 〈Sonin saikhan yuu baina〉？」というのは、「何か変わった〔面白い〕知らせはあるか？」という意味であり、相手の近況を問う常套句として挨拶がわりにも用いられる表現である。ソニン 〈sonin〉というのは、形容詞として「面白い、珍しい」の意を表すほか、「ニュース、情報、新聞」を指す名詞としても使われる。尋ねられた方は、「台湾・サイハン・バエン 〈Taivan saikhan baina: 平穏無事です〉」や「オンツ・ヨムグイ 〈Onts yumgüi: 特に何も〉」などと形式的に返答したあと、ぼつぼつと最近仕入れた話題を提供するのが一般的である。問われてすぐに話題に入らないのは、情報を出し渋ることによって、相手の出方を窺うとともに自らの情報に付加価値を与えていると考えられる。

人との出会いは最新のニュースを得る機会であるため、一頻り会話を終えたあとにも「ウール・ソニン・サイハン？ 〈Öör sonin saikhan: ほかに何か面白いことは〉」などといって相手の見聞きした出来事をさらに聞き出そうとする。そうして、天候、草生え、都市や中心地の様子（A 銀行が倒産したこと、ハラホリンに日本の援助で博物館が建設されていること、中心地で日雇い労働者、通訳を募集していることなど）、家畜の放牧先、畜産物の価格、共営世帯の様子、人物の往来（誰それがいつ UB へ行った、誰それがサントの中心地から戻ったなど）、さまざまな情報が話題として交換される。これらの事例をまとめると、どのような情報が収集され、いかにして伝達、拡散されているのかわかる。

1) 収集

彼らがまず話題にするのは人物の所在と誰とどこで何をしているかという動向の確認である。事例 2-1 では姿の见えない共営世帯 B 家の夫がどこで何をしているのかということが、事例 2-2 では別の宿営地にいる G が在宅か否か、事例 2-8 では E の所在が問われている。事例 2-2 で E が自宅を訪ねてきた X 家の夫に対して G の事を尋ねているのは、X 家と G 家は別々に宿営地を構えているものの、地理形状的に互いのゲルが目視できる位置にあることを踏まえてのことである。車やバイクの有無、あるいは乗用馬を連れ戻していたかなどさまざまな状況から他家の動向が読み取れる。

在宅か否かを把握することは、訪ねた際に空振りしバイクの燃料や労力を無駄にしないために必要なことであり、どこかに出かけたという情報も戻り次第出先の話が聞けるということを意味しているため、やはり重要である。つまりは、人の動きそのものが情報なのである。

2) 伝達

事例 2-3 から事例 2-5 は出先で仕入れた情報を求めたり伝達したりしている事例である。E 家の宿営地からサントの中心地までは約 12km、ホトント郡の中心地までは 30km ほど離れており、自家用車・バイクでの往復には燃料費がかかり知人の車に同乗させてもらうにも、往復で 1,000~3,000¥支払わなければならない。道の状態によっては一日仕事になるため、家畜の世話などを共営世帯に頼んでおく必要が生じる。

頻繁に遠出することが難しい人々にとって、出かけた人が中心地などから持ち帰る情報は貴重である。戻ったという知らせが入ると必ず最新の情報を聞くためにやって来る。そこで話題になるのは積雪（夏季ならば降雨）や草生えなど道中の様子と、市場における物価および家畜や畜産品の価格である。事例 2-3、事例 2-4 にあるように、天候は家畜の生育ときには生命をも左右する重大な要素であるため、天気予報や経験則による情報が盛んに交わされる。また、現金収入源である乳製品の価格や変動の大きい家畜毛皮の価格も逐一確認される〔事例 2-3、事例 2-5〕。ヒツジやヤギの毛皮価格が暴落し、一枚あたり 300~500¥と値が付かないに等しくなると、死んだ家畜の皮を剥ぐ手間を惜しんでそのまま廃棄することもある。

遠出をする際には、前述の理由から目的地や道中の情報を集めることも欠かせない。冬ならば積雪、夏ならば洪水などが心配され安全なルートを検討しなければならなくなる。事例 2-7 は首都にいる知人への電話と買い出しを目的にサントへ向かう予定であったが、サントの電話が何らかの事情で不通であるという情報を得て取りやめた事例である。近場で確実な情報が入手でき、無駄足を運ばずに済んだ E は嬉しそうでさえあった。

3) 拡散

伝達され拡散されることに意味のある情報もある。事例 2-8 は遺失物の搜索、事例 2-10 は行方のわからない家畜の搜索の事例である。探しているモノや家畜の特徴を伝えて目撃情報を収集するとともに、探しているということを周知させることも来訪者の大切な目的である。事例2-9は、帽子を失くして探しているというE家に預けた情報が伝達された結果、所在が明らかになった例である。事例 2-6 は、オオカミに家畜が襲われるという由々しき事態の発生が情報として拡散されていく様子である。どこでオオカミが出没しどれほどの被害がでたのかという情報は、地域で放牧を行う全ての遊牧民にとって有益であり、日々の放牧先の選定や対策に直接影響を与えるものである。この種の情報は共有した人々によってすぐさま拡散される。

このように、何気ない日常会話の中にさまざまな情報が含まれており、人々は自分に必要な情報を取捨選択しつつ、個々人の状況や地域社会全体の動向を把握している。情報の精度を高めるためには、多方面からの情報の突き合わせが必要となる。それゆえ、自ら出かけて行く情報収集だけでなく、多くの来訪者に立ち寄ってもらえる広い社会関係を構築し、情報の結節点となることも重要である。各人が収集した情報は、人の往来によって運ばれ、その内容に応じて家族、共営世帯、来訪者などに伝達され、拡散していく。

このように日常生活において情報を志向する遊牧民は、「情報社会」を生きているといえよう。情報社会という言葉は、一般に情報処理と伝達技術の飛躍的に発達した社会のことをさす。しかし、筆者がここで用いる「情報社会」とは、トフラー [1980] の提示した『第三の波』のような、第 1 の波（農業社会）、第 2 の波（産業社会）に次いで登場するという文明論的な情報社会のことではない。また、情報関連技術の発展に牽引され、教育、宗教、ギャンブルの予想屋などあらゆるものが情報として産業化されうるとする、梅棹 [1963] の情報産業論の舞台となる社会でもない。

本論文では、情報が生存戦略において重要な比重をもち、特に対面形態による情報の獲得が生活の中心に据えられている、情報への志向性が強い社会を「情報社会」と定義している。家畜の飼養に必要となる、季節や家畜の種類に応じた植生の良い牧地を求め、水利条件を検討し、獣害を警戒するために、遊牧民は日々出会う人々と情報を交換している。情報を入手することで不確実性を減らし、多角的な情報を手掛かりに行動を決定していることから、遊牧は情報志向性が強い生業であるといえる。つまり、情報社会と遊牧との親和性は高いと筆者は考える。

生きた動産（家畜）を維持するために発揮されてきた情報志向性が、草原生活にあつては限られた資源であるモノという動産にも適用可能であることを、次章以降で議論する。

小結

モンゴル遊牧民の生活時間は、放牧や搾乳といった家畜に関わる作業を中心に流れているが、それ以外の時間の多くは他家への訪問や、訪問客との対話にあてられていることを本章で指摘した。

特筆すべきは、親戚や共営世帯員を含め、一日に何十人もの客人が訪れるという事実である。人の往来が比較的少ない冬季であっても、来訪者のない日はない。天候や自然環境の変化、地域社会や市場の動向、地域住民の人間関係など、生活のあらゆる面にかかわる情報を運んでくるのは「人」である。他家を訪問することによって各世帯がさまざまな情報を収集したり伝達したりしているため、人の往来が滞れば刻一刻と変化する周囲の状況から取り残されてしまうことになる。これまであまり着目されてこなかったが、こうした人の往来が情報社会である遊牧の生活を根底で支えているのである。

第3章 生活世界にあるモノ

本章では、現代の遊牧民をとりまくモノの世界に視点を移す。生活世界におけるモノの在りようとそれらのモノについての語りから、彼らにとってモノがどのような存在であるのかを明らかにしていく。

まずは、モノのありようを把握するために、生活の場である住居内や宿営地の一般的な空間構成について先行研究を参照しつつ、E家の空間構成とその利用について述べる。つづいて、2009年から2010年にかけてE家で行ったモノの悉皆調査の結果を提示する。調査では、モノの種類や所在を記録して目録化するだけでなく、それぞれのモノについての聞き取りを行った。

モノの配置と空間利用の関係性について考察を加えるとともに、モノの語りにみられる特徴から、彼らがモノをどのように捉えているのかを分析する。

第1節 E家の生活空間

モンゴル遊牧民の空間利用についてはさまざまな書籍がモンゴル国で出版されている。モンゴルの建築史を扱った書物には、ゲル内部の空間構成とともに宿営地のような複数のゲルが集合した場合の空間構成が図示されている。また、モンゴルの伝統や文化に関する解説辞典などには、ゲルの空間構成図とともに家具配置についても説明が付されている。こうした記述からは、遊牧民の生活と空間構成との密接な関わりや、ある程度共通した利用法が確立されていることが窺える。

3-1-1. 居住空間の構成

そこで、E家を事例として夏営地、冬営地それぞれにおけるゲル内部の空間構成をまずはみておきたい。季節によりゲルの中に置かれる家財道具の数や配置は多少変化するが、空間構成は基本的に変化しない。一般的にゲルは南（または南東）に戸口を向けて建てられる。戸口を入った正面奥（北）がホイモル（khoimor）と呼ばれる特別な空間である。ホイモルには仏壇、お経、祖先の霊などを安置するため、その置台となる長持や戸棚がホイモルを囲むように配置される〔Avarzed 2008: 181〕。そこは家長の座とされており、普段家族以外は立ち入ることがなく、大切な来客や年長者にその座を譲ることで敬意を表す。また、少し開けた空間でもあるため大人たちがトランプに興じたり、子ども達がヤギ・ヒツジのくるぶしの骨で遊んだりするのもこの空間である。ホイモルの中でも正面奥の少し西側（北西）が聖なる空間として敬われている〔Daajav 2006: 52〕。チベット仏教を信仰するE家では、ホイモルもしくはこの正面奥の少し西側を仏壇の安置場所に行っている。

ホイモルを背にして戸口を見た場合、東側が女性の座、ゲル中央に設置されたかまどを挟んで西側が男性の座であり、それぞれの持ち物もその場にならうとされている〔蓮見 2002〕。女性の空間であるゲルの東側には、夫婦が使う木製のベッド、食器棚や調理用具、鏡台などが壁に沿って並んでいる。男性および一般客（女性客も含む）の空間である西側には金属製のベッドがあり、大工道具や馬具が置かれている。訪れた男性客は西側奥に通されると、腰掛に座るか直接床に片膝を立てて座る。女性客は西側に通されると、ベッドか腰掛に腰を下ろす。E 家に近い親戚や共営世帯員が訪れた時はこの限りではなく、思い思いの場所に座る。

以上のようにゲルの中は、奥の間として敬畏をもって扱われるホイモル（北）、客間にあたる上座（西側）、居間である下座（東側）という空間構成になっている〔図 3-1〕。

3-1-2. 宿営地の空間利用

ゲルの中だけでなくゲルの周辺もまた遊牧民の生活空間である。ゲルの外周は、バイクや自動車、パラボラアンテナ、ソーラーパネル、乳製品の貯蔵容器などの置場として利用されている。遊牧民のなかには母屋用のゲルの側に木造の小屋や小型のゲルを併設している世帯もある。この小型のゲルはバガ・ゲル〈baga ger: 小ゲル〉、イルー・ゲル〈ilüü ger: 余分のゲル〉などと呼ばれ、乳製品の加工場や物置として利用されている。

ゲルからもう少し離れたところには薪にするための丸太置場、ウマ留め、家畜囲い（ヒツジ・ヤギ用）、仔ウシ囲い、仔ウマ繋ぎ（夏・秋営地のみ）、糞泥置場兼ゴミ焼却場、トイレ（冬営地のみ）などが配置される。それぞれの配置の方角は宿営地の形状や地域差、世帯の都合により異なるが、ウマ留めの位置はゲルの南か南西側であることが多く、かまどの灰を捨てる場所はゲルの南東もしくは東側、トイレは離れた東か南東側にあることが多いという〔蓮見 2000: 17〕。

2009 年の夏営地を例にとってみると、南面して並ぶ E 家と共営世帯 G 家のゲルから南に 10 m ほどの場所に家畜（ヒツジ・ヤギ用）囲いが設けられ、囲いの西側にウマ留めが配置されている〔図 3-2〕。家畜囲いからさらに南に 10 m ほど離れた所に糞泥置場が設けられており、かまどの灰や家庭ゴミもここで処分されている。薪にするための丸太は、周囲の山々から伐りだしてきたものであり E 家のゲルの南東、家畜囲いの手前に置かれている。薪は共用ではなく世帯ごとに調達するため、G 家の薪置場は G 家のゲルの西側に配置されている。

E 家のゲルから川を渡って東に 20 m ほど行った平坦な丘には、仔ウマを繋ぎとめるためのロープが地面に張られている。これも世帯ごとに設置されるものである。共営世帯と共用の仔ウシ囲いは、E 家から西南西に 60 m ほど離れた場所に設置されている。

夏営地にはトイレは設置されておらず、ゲルからある程度離れた丘陵の陰や窪み、草陰まで行くか、開けた場所であれば宿営地のゲルの戸口に背を向ける格好で用を足す。作業

着として遊牧民が羽織っている裾の長いデールはこうした場面でも非常に役に立つ。冬営地にはほとんどの場合トイレが設置されている。零下 20～30℃の外気にさらされながら用を足すのは過酷である。風雪を凌ぐために天井と三方あるいは四方を板で囲んだトイレが常設されている〔目録写真 889〕。地面に畳一つ分の広さの穴を 2～4 m ほど掘り、二本の丈夫な板を渡して作られたものである。トイレはゲルから 100 m 以上南西に下った位置に設置されていたが、視界の効かない夜間や昼間でも雪道を歩くのが億劫な時は、共営地の南東に設けられた家畜の糞泥置場の陰が利用されていた。

このように、ゲルの外に配置されるモノや空間の利用法は、それぞれの宿営地の形状や共営する世帯との位置関係に大きく左右されるため、季節移動ごとに変化する。その一方で、いずれの宿営地においても遵守されているのが、ゲル内の空間構成に準じた世帯配置である。「室内の座とおなじく、南面して、西が上位、東が下位である」〔小長谷 1991: 17〕といわれている通り、複数世帯が寄って立つ宿営地において、親戚であれ知人であれ年長者のゲルが西側（もしくは北）に配置される。

例えば、2009 年の夏営地で E 家が友人の G 家と二世帯でゲルを並べて共営していた時、年長世帯である G 家が西側に配置されていた。2010 年の冬営地では、E 家の兄世帯 B 家と甥世帯 A 家の三世帯で共営していた。年長世帯である B 家を中央の北側に据え、西側に E 家、最も若い A 家が東側にゲルを構えた。また、2010 年の春営地において M の兄世帯 C 家を加えた四世帯で共営した折り、最年長である C 家を西端に据え、B 家、E 家、A 家の順にゲルを並べた。

北を上位あるいは西を上座とするこのような宿営地におけるゲルの配置は、ゲル内の空間構成と一致していることがわかる。つまり、彼らはこの一つの様式でもって空間を認識、利用していると考えられる。見ず知らずの宿営地に立ち寄った場合でも、ゲルの配置を見れば、まずどのゲルに挨拶に入ればよいかが彼らには自明なのである。遊牧民が宿営地全体を一つのゲルに見立てているとすれば、来訪者が全ての世帯に立ち寄って挨拶していくのも自然なことであると思われる。

第 2 節 E 家における悉皆調査

3-2-1. 調査の目的と方法

悉皆調査は、市場経済化およびポスト社会主義期を経た現代の遊牧民世帯に取り込まれているモノを詳らかにし、遊牧民がそれらのモノとどのように関わっているのかを明らかにすることを目的として行った。生活世界にあるモノを写真かスケッチによって網羅的に記録するとともに、来歴を聞き取った。聞き取りにあたっては、家事や作業の合間に家族が手にしているモノについて、「それはいつどうしたのか」という質問を投げかけ自由にしゃべってもらう会話形式をとった。彼らの日常生活に入り込んでの悉皆調査となるため、

実施にあたってはできるだけ E 家の生活の妨げとならないよう、家族の動きに合わせて調査を行うよう心掛けた。

ゲルに入るとまず、鮮やかな彩色の長持や戸棚などの家具類が目を引く。モノの多くは普段はそうした長持、戸棚、トランク、段ボール箱の中に収納されており、家族以外の間が勝手に中を開けて見たり取り出したりすることができない。そのため、2009 年 7 月当初は家族が収納から取り出した時を狙って記録をとり、周囲に客人などがおらず時間に余裕があれば話を聞き、タイミングが悪ければ後で聞くという形で進めた。しかし、牧繁期ということもあり家畜の世話や乳製品作りに忙しく、客足も絶えなかったため、データの収集はなかなか進まなかった。

やがて筆者の意図を酌んだ E が筆者との信頼関係に言及したうえで「自分たちがいない時に、勝手に好きなように見ていい」という許可を出してくれた。そのおかげで家族が家畜の世話などで出払っている間に、片っ端から家具の収納物を取り出して、一点一点デジタルカメラに収めるという作業を行うことができた。時には、「銀のベルトをみせてやろうか」などといって、自ら長持の中のモノを取り出して説明をしてくれることもあった。「冬営地にはもっと色んなモノがある。冬になれば時間ができるからその時にゆっくり聞けばいい」といって冬営地での調査も承諾してくれた。

2010 年 1 月に行った冬営地の調査では、夏に聞けなかったモノについて聞き取りをするとともに、冬季の模様替えによって登場した夏にはなかったモノのデータを集めた。夏同様ゲルの外に置かれているモノも記録した。2010 年 6 月の春営地における調査では、固定式物置小屋の中にあるモノを確認した。また、E 家においてこれまでの夏、冬調査で見られなかったモノ、あるいはこれまではあったのにもうなくなってしまったモノなどを調べた。2009 年 7 月から 2010 年 6 月にかけて断続的に実施した本調査の結果、E 家の生活世界には 1494 点のモノが存在していた。

3-2-2. モノの所在と収納場所

E 家のゲルは結婚した二人の新居として 2000 年に建てられたものである。76 本の天井梁と 5 枚組の床板は E と兄 B が製材するところから手作りしたもので、5 枚の組壁は兄 B と二人で作った二台の牛車と交換で手に入れた。天窓と扉は職人に依頼して作ってもらったという。E の要望で天窓の直径が 1m50cm と少し大きめに作られている以外、E 家のゲル構えはごく一般的なものである。

季節にあわせて家具の配置やモノの置場に多少の変化がみられるものの、E 家の家財道具も基本的には、ホイモル（北）、上座（西側）、下座（東側）という空間構成を基準として配置されていた。図 3-3 は夏季における家財道具の配置図である。

夏季と冬季のゲル内の様子を比べると、明らかに冬の方が家財道具の数が多い〔図 3-4〕。壁にそって隙間なく家具が並べられており、ホイモル側の内壁と家具と家具の間に生じた

隙間には丸めた絨毯が立てかけられている。防寒対策が家具の多い理由の一つであると考えられるが、オレンジを主とする彩色鮮やかな家具で室内をにぎやかにすることで、灰銀一色の冬でも目を楽しませる効果があるように思われる。一方、気温が 30℃を超える日もある夏には、熱を逃すための工夫が必要になる。ゲルの組壁の外側にはフェルトに替えて厚手の布を巻き、内壁を覆う綿布は取り外して組壁を露わにし、ホイモルと東西の三ヶ所にだけ絨毯を掛けている。気温があがれば絨毯や外幕の裾をめくりあげて風を通す。

また、夏のゲルにしかない家財道具も存在する。加工前の乳を寝かせておくための大鍋と大鍋専用の棚〔目録写真 787, 788, 790〕、アイラグを発酵させる容器と攪拌棒〔目録写真 675, 676〕、蒸留酒を作るための器具〔目録写真 23-25〕、乳製品を保存しておくための瓶や容器〔目録写真 272〕などである。夏のゲルは住居でありながらも、乳製品加工を中心とした作業を行うための空間という意味合いが強い。E が何度も冬のゲルを見に来るよう筆者にすすめたように、家族の生活を中心に据えた本来の居住空間とみなされているのは冬のゲルである。

1) ホイモルに置かれたモノ

四季のなかで家財道具が最も充実する冬季の家具配置を参考に、まずはゲル内の空間ごとにあるモノを見ていきたい〔図 3-4〕。冬の夜間は零下 30℃以下にまで冷え込むので、ゲルにも断熱対策が施される。ゲルの天井梁と組壁の外側は二重のフェルトで覆った上に外幕が掛けられ、室内の壁には綿布がぐるりと張りめぐらされる。

南に面する戸口を入った正面奥には彩色の施された木製ベッドが置かれ、ベッドの背面の壁には絨毯が掛けられている。このベッドは子ども達が使用しており、日中は防水性のベッドカバーが掛けられ、物置台として利用されている。毎朝布団はきれいに折りたたまれ、それぞれ刺繍の施された布団袋にいれられてベッドの端に積み上げられる。ベッドの手前に置かれた机にはテーブルクロスが貼られている。

ベッドの両脇には戸棚が一つずつ配置され、西側の戸棚には夫婦の上衣や袋一杯の端布、ハサミ、ナイフなど、東側には枕や子どものジャンパー、デールなどが仕舞われている。戸棚の上は写真立てや時計や鏡を置く飾り棚として利用されている。写真立てなどの裏側にはシャンプー、ハンドクリーム、陶器の白鳥の置物、トイレットペーパー、懐中電灯、双眼鏡、空き缶に入ったドライバーなどが置かれている〔目録写真 38-43〕。

それぞれの戸棚の隣には長持が一つずつ並んでおり、ホイモル空間の中でも北西の方角に置かれた長持の上には仏壇が安置されている。ガラス張りの仏壇の中にはお経、仏画、陶器のウマの置物、お香、供物の入った巾着袋、カエルの置物、クジャクの羽根、巻貝などが収められている〔目録写真 174-182〕。仏壇の上には香炉とコーヒー缶に入った粉末香が置かれている。仏壇は E 手製の台座の上に据えつけられており、台座の引き出しの中には、燭台と燭台の芯にするための綿、マッチ、長持などの鍵束が入っている。仏壇の手前には鏡と燭台と卓上マニ車が置かれている。仏壇の左右には写真を並べた額が飾られてい

る。写真額に納められているのはどれも E 家に何らかの縁のある人々の写真で、E が写真を選んで配置したものである〔目録写真 170-172〕。

仏壇が置かれている長持の中には、銀杯や銀細工のベルト、晴れ着デール、新品の帽子や衣類、現金など貴重品が仕舞われ常に鍵が掛けられている。北東側の長持には普段着用の綿入りデールや子どものジャンパーが仕舞われており、底の方には使用頻度の低いモノ（正月に使う木椀、箱に入った茶器セット、銃に注す油など）が収納されている。鍵はついているが施錠されていない。

この長持の上には、モンゴルの職人によって作られた三面鏡、写真額、手作りの燭台、クッキーの空き缶四つが並べられており、写真額の裏側には蓄電器と化粧ポーチが収納されている。三面鏡の前には乳液とフェイスクリームと薬の小瓶、陶器の白鳥の置物が二つ中央の黄金色の水差しを挟むように配置されている。二つずつ積み重ねられたクッキー缶の中には、人間用の飲み薬や塗り薬、やすり、釘、ネジ、カミソリの刃、ボタン、クリップ、デールの装飾片などが入っている。

以上が、家族以外は立ち入ることがほとんどない空間であるホイモルに配置されているモノである。北西位置に安置された仏壇の下にある長持は、ゲルの中で唯一鍵が掛かっている収納であり、ここに銀細工の品や現金など E 家の貴重品がすべて収められている。木製の長持や戸棚は蓋を閉めると中が見えない密閉型の収納であるため、来訪者がその中身を目にする機会はない。

2) 上座（西側）にあるモノ

客間となる西側をみると、金属製ベッドが置かれており、ベッドの背面の壁には絨毯が掛けられている。普段は子ども達が使っているが、調査の間は筆者が使うことになり、筆者の持ちこんだモノも家人の指示によってこのベッドの上と下と仏壇のある長持の足元にまとめて置かれるようになった。ベッドの板とスプリングの隙間には、靴墨や、洗濯する予定の子どもの靴下などが挟み込まれている。ベッドの下には木製のトランクがあり、中には子どもの衣類全般（帽子・上衣・ズボン・下着・靴下）が収納されている。また、女性用のブーツ、パンプス、スニーカー、サンダル、子どもの靴が入ったブリキの桶と段ボール箱も置かれている。

金属ベッドの左側には、もう一つ長持が置かれており、その上には家畜用飼料の入ったポリバケツが三つと、铸铁製大鍋が置かれている。長持の中身は、フェルト、革ひも、革ブーツ、デールなどである。長持の左横には小麦粉貯蔵容器と 60ℓ 入りのポリタンクが並ぶ。小麦粉貯蔵容器は M が両親から受け継いだもので、季節に関わらず一年中活用されている。蓋とスコップがついており、購入した小麦粉を袋から移して貯蔵しておく。ポリタンクは水瓶として使用される。外で集めた雪をこれに溜めておき、必要な時に鍋で解かして利用するのである。

以上客間の空間利用として、カバーの掛けられた金属製ベッドは客の腰掛として利用されるが、ベッドの下は E 家の私的な収納空間である。つまり、見えていても見えていないものとして扱われるモノである。夏季はポリタンクの横にアイラグを攪拌・発酵させるための容器や鞍などが置かれており、作業用空間でもある。

3) 下座（東側）にあるモノ

居間にあたる東側には夫婦のベッドが置かれている。ホイモルの北東に置かれている長持と夫婦のベッドの隙間には、小麦粉を捏ねたりのぼしたりするための大判な板が布袋に入れて収納されている。木製で少し幅を広くしたベッドの背面の壁にも絨毯が掛けられている。ベッドは毎朝整え、使用した枕は戸棚へ仕舞う。布団は寝袋のように折りたたんで布団袋に入れ、ベッドの隅へ積み重ねる。日中ベッドの上には防水性のカバーが掛けられ、腰掛や作業台として利用される。ベッドの下は、じゃがいもや玉ねぎなどの貯蔵空間になっている。

夫婦のベッドの右隣には鏡台と食器棚が並んでいる。ベッドと鏡台の間の天井には麺棒を差し挟んでおり、2本の梁を利用して布製の歯ブラシ立てが吊り下げられている。鏡台は小ぶりの長持の上に大きな三面鏡をのせたものであり、この長持の上にもビニールクロスが敷かれている。小ぶりの長持の中には、夫婦のズボン、靴下、下着など下半身に着用するモノと洗濯用洗剤などが収納されている。鏡の前にはやかんが置かれ、鏡台と食器棚の隙間は大鍋の蓋の収納スペースとして使われている。

食器棚の背面の壁にはビニールシートが張られている。ガラス張りになった食器棚の上段には、保温瓶、ソースや塩などの調味料、木製および陶器の茶碗、フォークとスプーン、空瓶などが収められている。中段の引き出しには、包丁、ナイフ、皮むき器、砥石、プラスチックの人形などが入っており、下段には、砂糖、米、大小容器、小鍋、植物油、ダン茶、金槌、のみ、家畜用浣腸器などが収納されている。食器棚の戸口側の側面には金たわしや茶漉しが吊り下げられている。

ゲルの中央に据えられたかまどの焚き付け口も東に向けられており、ベッドの上で食材を切り、かまどで調理し、客人が来れば食器棚からお茶をだして振る舞うという家事の様子から、居間兼台所でもあるといえる。薪の使用頻度が高まる冬季には薪入れがかまどのすぐ南に配置される。夏場はかまどの側ではなく戸口脇に置かれていることが多い。2010年がゾドの冬だったということもあり、家畜に飼料として与える雑穀を発酵させるため、蓋つきのアルミ容器がかまどの側に置かれていた。

4) ゲルの周囲にあるモノ

続いて冬営地のゲルの周囲にあるモノもみておきたい。ゲルの土台の周囲にめぐらされた板とゲルの外壁との間にできた隙間には、ソーラーパネルや汚水を入れるためのバケツが置かれている。2010年の冬時点では、ソーラーパネルを固定しておく手頃な木がなかつ

たため、日中はゲルの外に、南西の方角に向けて立てかけてあった。夜はゲルの中に取り込み、仏壇の前の空間に長辺を下にして立てかけていた。汚物用バケツというのは、外に出るのを控える夜間に、歯磨きに使用した水や子どもの小便などを溜めておくバケツのことである。ゲルから二、三步離れた所には犬のエサ入れが転がっている。共営世帯 B 家から E 家がもらい受けた仔犬のためのものである。エサ入れが見当たらない時には汚物用バケツで代用していた。

E 家のゲルから 1 m ほどの間隔でバガ・ゲルが建てられている〔目録写真 891〕。ゲルの東側に建つそれは E が知人から借りたもので、家畜の飼料と人間の食料の貯蔵室として利用されていた。バガ・ゲルは木製の骨組みに白い外幕を被せただけの状態にしてあるため、外気との差がほとんどなく天然の冷凍庫であった。中には、前輪のないバイク、120ℓ サイズのポリタンク、おが屑やもみ殻の入った大量の袋、切り開いた廃タイヤ、屠殺したヤギの頭などが床の張られていない地面に直接置かれており、解体された肉が梁に渡した棒からところせましと吊り下げられている〔目録写真 892〕。120ℓ のポリタンクには凍った肉の塊が入っている。バガ・ゲルの奥（北側）に設置されている木製の台の上には袋入りの小麦粉、段ボール箱、凍った肉の塊が置かれ、肉の上には古くなった作業用デールや大判の布が埃よけとして被せられている。その他、売る時期を待つヤギの毛皮や、段ボール片、短い角材、洗剤の入っていたポリ容器、丸めたビニールシートなどが地面に置かれていた。

母屋とバガ・ゲルの北側には丸太置場があり、二人引きノコギリが置かれている。ストックしている丸太をノコギリで分割した後、斧で割って薪にする。共営世帯の大人は男女問わず互いに手を借り合ってノコギリをひく。バガ・ゲルから東に 2 m ほど離れた場所には、共用のヒツジ・ヤギの屋根付き囲いがある。風雪から家畜を守るために、大量の生木で作られた頑丈で隙間のない壁と屋根を北側にもつ囲いが常設されている。囲いの側には、糞泥掻き出し用シャベル、糞泥運搬用櫓、ヒツジ・ヤギ用飼料桶、ウシ用飼料桶、飼料用バケツなどが置かれている。ヒツジ・ヤギの囲いから南に 10 m ほど下ると、共用の屋根付き仔ウシ囲いが設置されている。仔ウシをはじめ、寒さに弱い個体には、綿入りの腹巻を着せている〔目録写真 879, 880〕。

また、E 家の冬営地と夏営地の移動経路上の中間地点には、固定式物置小屋が設置されている〔目録写真 904〕。その中には、季節によって使用しないゲルの外幕やフェルト、小ゲルの梁や長持など余分な家財道具、建材、E の姉が生前使用していた遺品などが保管されている。物置小屋を持っているのは E 家だけでなく、E 家の物置小屋の左右には、サントで遊牧している親戚や知人の保有する物置小屋が 6 棟並んで建っている〔写真 3-1〕。このような物置小屋は最近になって建てられたものではなく、E の両親の時代からすでに存在していたという。

ここまでモノの所在と収納場所について述べたが、このような伝統的な空間構成に基づいた家財道具の配置は E 家だけに限られたものではなく、他の世帯においても実践されている。どのゲルに入っても、ホイモル、上座、下座の区別がなされており、それがモノの

配置によって可視化されている。したがって、空間ごとの家具配置をみればどこに何があるかというモノの所在もある程度予測が可能となる。遊牧民はお互いの家具の中身を見ることがなくても、ホイモルの北西側に置かれた家具の中には貴重品が収納されているという事実を知っている。また、共営世帯にまな板や髭剃りなどを借りに行った際、家人が不在であっても目当てのモノを容易に見つけ出すことができるのは、まな板は下座の食器棚周辺、髭剃りはホイモルの戸棚の上あたりといった空間利用の様式が共有されているからである。

3-2-3. モノの目録

1) 目録作り

ある日突然やってきた外国人を受け入れ、住み込みで調査することを許してくれた E 家の人々に対し、いきなり生活世界にあるモノすべてを記録させてほしいとお願いすることは憚られた。居候をはじめてから一週間ほどは、彼らの暮らしを学ぶために毎日の作業について回り、気になったモノだけスケッチをとるようにしていた。彼らが筆者の存在に慣れ、筆者が彼らの生活に馴染んだ頃から、許可を得てカメラによるモノの撮影をはじめた。

それでも、長持や戸棚の中身を引っぱりだすには時期尚早だと判断し、まずはゲルの外や周辺にある家畜関連用具、ゲルの上座下座に露出しているモノだけを撮り、話を聞いた。そのうち、家族がいない時でも家具の中を自由に見てよいといわれ、ホイモルに置かれた二つの戸棚の中身や、長持の上のクッキー缶の内容物を確認することができた。しかし、ホイモルに置かれた二つの長持には手をつけなかった。北西側の長持にはモンゴル錠がかかっており、南東側の長持には南京錠がぶら下がっていた。錠の在りかは教えられていたが、勝手に開けることはせずに家族と見る機会を待った。最終的には、彼らが長持を開いて説明しながら見せてくれた。

このような一年間にわたる断続的な悉皆調査によって、E 家の生活世界には 1494 点のモノが存在していることが明らかになった。それらを整理した目録を巻末に掲げた。目録には、写真または図の整理番号、各資料番号、資料名、特徴、来歴、所在・収納場所、所有者、2011 年 5 月時点という項目を設けた。所在・収納場所については、状況によって使用後に別の場所に仕舞われることもあるが、最も頻繁に見かけた場所を記した。

所有者というのは、E 家のモノか他家のモノかを識別するために設けた項目である。E 家の生活世界に存在するからといってすべてが E 家のモノとは限らない。他家のモノが借用や置き忘れなどによって紛れ込んでいる可能性があるからである。何かしら他家のモノが混在しているのが常態であるため、それらも含めて E 家の生活世界にあったモノとする。E 家の所有物でかつ使用者が固定されている場合には、使用者を示す記号を付した。

目録には、ゲルの内装、ホイモル、上座、下座、それぞれの空間に配置されているモノ、ゲルの外にあるモノという順序でモノのデータを並べた。モノの総数に関しては、次のよ

うな方針に従って数えた。まず、梁や組壁といったゲルの構造に関わるモノは、それぞれ一つのまとまりとして捉えた。実際には 76 本ある梁も、5 枚の組壁もそれぞれ一つとして数えている。また、大量の釘、洋ボタン、端布、金属部品などもひとまとまりとして数えた。ただし、収納されている場所が異なれば、その都度数に加えた。目録では、ひとまとまりとして数えた場合には、特徴の欄にあげた数字を括弧に入れて示している。数字が括弧に入っていない場合には、別個のモノとして数に加えているということである。

また、滞在する間に筆者から E 家に渡ったモノも多くある。そのうち、土産として筆者が自発的に E 家に贈与したモノは数に含めていない。しかし、E 家からの交渉や何らかの働きかけを受けて譲与することになったモノに関しては数に含めている。

2) モノの数量と種類

本調査の目的は遊牧民とモノとの関係性を明らかにすることであり、量的側面だけに着目することは筆者の本意ではない。そもそも、生業や居住環境が異なればモノの数による単純な比較など意味をもたない。佐藤らが 2002 年に韓国ソウルで実施した 5 人家族の暮らすアパート(車内も含む)における悉皆調査の結果は、およそ 10,000 点³⁰であった[佐藤 2006: 38]。また、1967 年に調査されたアフリカの狩猟採集民ブッシュマンは 79 品目で生活を営んでいた[Tanaka 1980: 39-44]。したがって、現代の遊牧民のモノをめぐる文化を知る手掛かりとして導き出した 1494 点³¹という数字に、相対的な一つの指標以上の意味をもたせるつもりはない。ただし、モンゴル遊牧民の生活様式や物質文化に関する先行研究との対照によって、いくつか従来の記述の内容と異なる点があったため、指摘しておく。

これまでモンゴル遊牧民のモノの世界については、「常に移動生活をするために、彼らの生活用具は最小必要なものに限られて」おり、「牧畜と狩猟とによって生計を立ててきたモンゴル族の生活道具は、すなわち牧畜と狩猟の道具であったといえる」[蓮見 1993: 100]とされてきた。

典型的な遊牧民の住居として描かれるのは、十畳ほどの空間に、家族の写真が飾られた写真額、かまど、家族の数にあわせたベッド数台、長持、食器棚、水桶、家畜乳容器、腰掛数脚があるという情景である。「とりたてて高価なものはないし、ましてや豪華で重厚な家具など備えてはいない。ひとつのゲルに入る物の量はこれで目一杯、長持ちの大きさにも限界があり、衣類の数をむやみに増やすわけにもいかない。すべては移動に適したように作られている」[鯉淵 1995: 43-44]。

しかし、E 家を見ると、狩猟および牧畜関連用具の占める割合は意外に小さく、ほとんどが人間の生活に関わるモノであることがわかる。具体的には、猟銃、銃のスタンド、銃弾、差し油、目出し帽、鞍、鞭、おもがい、はみ、端綱、仔ウマつなぎ用ロープ、ウマ留め、ウマとり竿、家畜囲い、糞泥運搬用桶、糞泥掻きシャベル、飼料桶、バケツ、馬乳酒発酵

³⁰ 種類(品目)ではなく点数。

³¹ 品目ではなく総(点)数。

容器、注射器、浣腸器、薬液などであり、これらの総数が生活世界にあるモノ全体に対して占めるのは約 9%に過ぎない。

一方、E 家には戸棚が二つ、長持は大小あわせて四つあり、その中には衣類、雑貨、道具類がつまっている。しかも、ゲルに入りきらない余分な長持は物置小屋に仕舞われている。衣類だけをみても生活世界にあるモノ全体の約 16%を占めている。季節変化に対応するためには、中綿入りのデールも薄手のデールも必要であり、保温効果を高めるために中に着用するズボンや上衣も家族の人数分必要である。さらに、結婚式や街へ出かける際に装う晴れ着・おしゃれ着も欠かせない。晴れ着デールは毎年正月に新調され、古くなったデールは日常使いに回される。長持の中には、これまでに作った晴れ着デールが大量に収納されている。また、都市部に出かける際にはデールではなく洋装が好まれるため、おしゃれ着もデールとは別に戸棚に収納されている。

このように、遊牧民の生活世界には、牧畜・狩猟関連用具以外に、多くの衣類や雑貨が取り込まれており、中には一年に一度も使われていないモノも収納されているのが実情である。

雑貨には、梁飾りや置物といった装飾に特化したモノも含まれている。装飾品には、1) 訪問者に見せることを前提として飾られているモノと、2) 内部を覆い隠すために使われているモノとがある。写真額、飾り鏡、陶器の置物、水差し、梁に吊るして飾る刺繍入りの布などが前者であり、ベッドカバー、布団袋、目隠し布などが後者である。

後者は主に、寝具や雑貨を汚れから守ることが第一の目的であると思われるが、ベッドカバーには、チェックや果物柄などカラフルなシートが選ばれる傾向があり、また小さく折りたたんだ布団を入れておくための袋には幾何学模様や動植物の鮮やかな刺繍が施されており、装飾としての側面もある。しかも、刺繍があるのは片面のみで布団を詰めた後は刺繍面がゲルの戸口に向く（人目につく）ように配置される。目隠し布は雑貨を収納した段ボール箱の上に被せたり、突然の来客の際にたたみかけの衣類に被せたりして利用する。

床や家具の上をビニールシートで覆い、汚れを防ぐと同時に室内を見栄えよく飾ることも彼らの関心事であるということが装飾品の存在から窺える。そうした装飾品を含む大量の雑貨や衣類を保有しているのが現在の遊牧民の実態である。基本的に移動の妨げにならない程度という制約は存在するモノの、大型トラックの普及による運搬規模の拡大と固定式物置小屋の増設によってその制約は徐々に緩んできている。

3) モノの定点調査とその限界

目録にある 2011 年 5 月時点という項目は、2009 年 7 月～2010 年 6 月にかけて記録したモノがその後どうなったのかということを観察、聞き取りした結果である。作製しておいたモノ写真カタログを持参し、家族に見てもらいながら一緒に有無を確認した。その結果、生活世界に取り込まれていたモノ 1494 点の内、およそ 18%にあたる 262 点に何らかの変動が見られた〔巻末資料:E 家の生活世界にあるモノ目録「2011 年 5 月時点」を参照〕。その

主な変動の原因は E 家の人々による処分、つまり廃棄、譲与（贈与）、貸与（返却）のいずれかか、遺失、盗難であった。

しかしながら、この追跡調査によって明らかにできたのは、悉皆調査を行ったある時点と追跡調査を実施した時点、それぞれの定点において捉えた静止状態のモノの変動である。実際には、モノが E 家の生活世界にずっと留まっていたわけではない。4 章の 1 節で詳しく述べるが、毎日 2 件～13 件ほどの貸借によってモノが世帯間を移動し、出入りを繰り返していた。従って、次節以降ではストックとしてのモノではなく、フローとしてモノが動いているということを前提として彼らのモノの語りに耳を傾ける。

第 3 節 モノについての語り

本節では、生活世界に取り込まれているモノについて彼らが語った内容に着目する。そもそもそれが E 家の所有物かどうかをはじめ、手元にきた由来やモノに対する評価は対象物を観察しただけではわからない。そのため、作業の合間などに彼らが手にしているモノを指して、いつどのように手に入れたのかを質問し、E 家の人々に自由に語ってもらった。

聞き取った内容は目録に反映している。来歴が空欄になっているところは、現物ではなく夏・秋・冬に記録した写真カタログを見ながらの聞き取りをした結果である。調査時に現物が手元にあったときは、来歴や性能などが揚揚と語られていたが、カタログによる聞き取りの際には、「ある」といってうなずいているか「それは誰それが取っていった」、「これは焼いた〔焼却による廃棄処分にしたこと〕」というような回答が中心で、モノの行方や現在の有無が語られる傾向にあった。これらの結果を踏まえて、語りの分析に用いたのは来歴や行方が語られた 645 の事例である。

採集した事例から、彼らがモノを説明する際に言及する事柄には共通性があることがわかってきた。そのような語りの特徴を提示しつつ、彼らにとってモノがどのような存在であるのかを読み解いていきたい。

3-3-1. モノの来歴

聞き取りをはじめた当初筆者が困惑したのは、それはどうしたのかという質問に対して彼らがしばしば「アウサン〈avsan: 取った〉」と答えたことである。モンゴル語で広義に「手に入れる」という意を表す場合にはアワハ〈avakh〉という動詞が用いられる。アワハをモンゴル語辞典で引くと「取る」とある。したがって過去形のアウサンを直訳すると「取った」となる。しかし、よくよく話を聞いてみると購入したモノであったり、人からもらったモノであったりと、文脈によって多様な入手状況を表していることがわかった。筆者が確認したところでは、「購入する、もらう、拾う、奪う、盗む」といった意味でアワハ

が使われていた。モノをどういう形態で手に入れたのか（売買、拾得など）より、誰から入手したかという、モノのやり取りを通じた人間関係に関する情報を重要視していることがここから窺える。

そこで、聞き取りをする際には、どこで、誰から、いくらでといった補足情報を収集することで「ホダルダジ・アウサン〈khudardaj avsan: 購入した〉」のか、「ズゲール・アウサン〈zügeer avsan〉／ウヌグイ・アウサン〈ünegüi avsan〉：ただでもらった」のかなどという入手方法の確認を行った。

遊牧民がモノを入手する方法は、1) 作製、2) 購入・交換、3) 贈与・譲与、4) 拾得・収獲のいずれかである。山から切り出した木材、建物・機械・既製品などの廃材・部品、家畜の毛皮や革、骨、腱などの身近な材料で作れるモノやパーツは何でも自作し、作れないモノは購入・交換する。

贈与・譲与による入手というのは、人からもらったということであるが、本論文ではやり取りが行われた場面、および受けとったモノによって贈与と譲与を分けて考える。特別な機会に新品やウムチ〈ömch: 財産〉とされるモノを贈られた場合、例えば、親から銀杯や銀のベルトを譲り受けたり、結婚や進学などの折りに親戚・友人・知人などから受ける品々は贈与³²であるとみなす。一方、近い親戚や親しい世帯からの古着のお下がり、不用品などの融通は譲与³³とみなす。

拾得というのは地面に落ちていたモノを見つけて自分のものにすることである。路地や草原に落ちているモノ、廃棄されたモノは基本的に見つけて拾った人の所有物となる。ナイフや帽子のように慣習的に拾ってはならないとされているモノもあるが、現金や携帯電話などの拾得物は実際に見つけた人の所有物として扱われている。収獲したモノとしては、松脂（ガムのように噛む嗜好品）、薬草、シカの角、野生動物の毛皮などがある。狩猟によって野生のシカやカモシカなどを仕留め、食料としたり毛皮を換金したりした後、とっておいた一部の角を馬具を吊り下げるフックや、固く締まった結び目を解く道具などとして用いている。以下にそれぞれの入手事例をあげる。

1) 作製

事例 3-1 鞍〔目録写真 844〕

鞍橋はジャルガラント郡の職人に作ってもらったが、鞍橋用の木はEが買って渡した。

鞍につける銀飾りと鐙を購入し、残りのパーツは E が自分で取りつけたという。鞍褥

³² 本論では扱わないが、慣習に則った贈与は儀礼的な要素を帯びる。例えば、男性側の代理人が女性側の父親に婚約を申し込む際には蒸留酒の贈与を行うが、必ずハダグ〈khadag〉と呼ばれる絹布を両手に広げ持つ。ハダグと共に差し出された蒸留酒を受け取れば、婚約の承認とみなされる。経済活動とは無関係に個人に対して家畜を贈与する際にも、実際の家畜を手渡す代わりにハダグを広げて贈与し、ハダグを受け取ることで家畜の所有権が移転する。ハダグを介して行われる贈与は完全な所有権の移転であり、日常的なモノのやり取りにおける所有権と利用権間の曖昧さとは対称をなす。

³³ 譲与の場合はハダグは使用しない。

(写真の緑のフェルト部分) は 5、6 年前に、フェルトでできた鞍褥は 3 年前に E が作った。鞍の上の小座布団(赤色の座布団の部分)、鐙の革を押さえる鞍布団、鞍の尻をのせる部分に敷く防水用のビニールシートは自分で取り付け、ジルム〈jirem: 腹帯のバックルに通される鞍の左側にある二本の革紐の一つ〉は牛皮を編んで作り、オロム〈olom: ウマの腹帯〉は馬の尻毛をよって自作した。(2009 年 7 月 22 日、E)

事例 3-2 攪拌棒〔目録写真 676〕

「2009 年の春に E が作った。それまでは木製のものを使っていた」という M。E に聞くと、「抵抗をつける部分は水をいれる容器で、120ℓ 入りのポリ容器の破片を利用して作った。穴はナイフであけた。120ℓ 容器は今使っているやつが外に置いてある。アールツをいれている」と答えた。(2009 年 8 月 23 日、M、E)

事例 3-3 デール〔目録写真 819〕

E が夏に作業着として着ていたデールについてきくと、「このデールは U〔次男〕と同じ年だ」という。「5 年目になる。長い袖付きで赤いボタンのついた晴れ着として M が作った。お腹の中に U がいる時に M が作った。随分傷んだからこの冬に捨てる」という。(2010 年 1 月 22 日、E)

2) 購入・交換

事例 3-4 電灯〔目録写真 7〕

「ウヴルハンガイ県の市場で電球の部分を 5,000₮で、配線を 3,000₮で買った。中国製の配線はすぐに焼き切れてしまったので、家にあった配線に付け替えた。2009 年 9 月 20 日ごろ、冬営地に移動してくるときに初めて電灯をつけた」(2010 年 1 月 21 日、E)

事例 3-5 ブリキの桶〔目録写真 527〕

「2005 年に UB のナラントール市場で買った」。M の親戚 DE 家の息子の結婚式のために首都へ行った際に E が購入した。二人の子どもの髪や体を洗うため。M は赤ん坊〔次男〕を抱えていたので、首都には一緒に行かなかったという。購入価格を訊くと M が覚えており、5,000₮くらいだったと答える。(2009 年 9 月 5 日、2010 年 1 月 22 日、E、M)

事例 3-6 おもちゃの携帯〔目録写真 503〕

次男の持っていたおもちゃの携帯電話をいつ入手したのか尋ねると、M は「カシミヤ...〔梳きとった時だから〕...春よ」と話し始めた。すると次男(6 歳)が「それを売った金で、ナラーおじさんから買った」と続けた。「ナラーおじさんて?」ときくと、「ナイマーのおじさんだよ」と 9 歳の長男も話に加わってきた。長男は、通学のため

地元を離れてツェツェルレグ市の親戚宅に寄宿しており、カシミヤの頃には居なかったのだが、母親が弟に携帯を買ってやった事を知っていた。(2010年6月4日、M、Z、U)

事例 3-7 家具〔目録写真 259, 35, 348, 279, 266〕

「結婚する時に大きな去勢ウシと交換で、木製ベッド、戸棚二つ、長持二つ、机を作ってもらった」。デザインは E が指定し、「〔当時は〕牛車で移動させることを考えて、家具の背は低めにしてある」という。戸棚の鏡をはめた部分は何もない状態に作ってもらい、後から E が自分で取りつけた。アイماغ (aimag: 県〔ここではツェツェルレグ市を指す〕) の職人に発注した。(2010年1月22日、E)

事例 3-8 ゲルの組壁〔目録写真 10〕

2 台の牛車を E が作り、5 枚の組壁と取引した。牛車 1 台につき、市場では 5 万～6 万 ₮ の値が付くという。(2009年8月28日、2010年6月7日、E)

3) 贈与・譲与

事例 3-9 食器棚〔目録写真 722〕

「〔E の〕3 番目の兄が結婚する時に作ってくれた。左側に置かれた戸棚の裏に丸めて収納してある絨毯もその兄が結婚祝いとして贈ってくれた」。(2010年1月22日、E)

事例 3-10 ミシン〔目録写真 264〕

「結婚する時お母さんがくれた。新しいのを買ってくれた」(2009年7月30日、M)

事例 3-11 サンダル〔目録写真 716〕

夫婦のベッドの下に置かれた男性用サンダルについて尋ねると、「4 年になる。亡くなった姉がくれた。2002 年³⁴に亡くなった」、「姉がくれたモノだから傷んでも手放さない」と E が答えた。(2009年8月1日、E)

事例 3-12 トランク〔目録写真 557〕

金属製ベッドの下のトランクは「次男 U が生まれた年〔2004 年〕に DE 姉〔M の親戚〕がくれた」という M。もらった時から少し壊れていたという。(2009年8月27日、M)

事例 3-13 靴下〔目録写真 638〕

³⁴ 2009 年に聞き取りをしているので 4 年前であれば 2005 年に他界したことになるが、ここは E の語りのままにしてある。

「DE 家夫人〔M の親戚〕がくれた」という U。それを聞いていた M が「違うわよ、BS 姉〔E の親戚〕でしょ」と訂正する。3 年前にもらったモノだという。（2010 年 6 月 6 日、U、M）

事例 3-14 アルミ容器〔目録写真 699〕

乳製品や家畜の飼料を入れている大型のアルミ容器は E の両親が使っていたモノで、「自分達よりずっと年上だ」という。「2004 年に SM 兄〔E の親戚〕がくれた。2 人の子どもを大学に入れるため遊牧をやめて UB へ移住する際にくれた」。もともとは木製の蓋がついていたらしい。（2009 年 9 月 6 日、2010 年 1 月 26 日、E）

4) 拾得・収獲

事例 3-15 おもちゃの銃〔目録写真 502〕

他の宿営地へ遊びに行っていた次男がおもちゃの銃を手にして帰ってきた。どこで手に入れたのかと尋ねると、「拾った」という。「L 兄〔M の 3 番目の兄〕のバガ・ゲルで拾った。捨ててあった」という。（2010 年 1 月 23 日、U）

しかし数日経ってから、例の銃は「BA 兄〔L 家の共営世帯〕のゴミ捨て場で拾ったんだった」と筆者に伝えにきた。（2010 年 1 月 26 日、U）

事例 3-16 現金

通学のために親元を離れ、ツェツェルレグ市の親戚の家の下宿している長男 B が、市内で 500₮紙幣が落ちているのを見つけたという。それをどうしたのかと尋ねると、「250₮のラーメンを買って食べて、残りの 250₮はお母さんにあげた」と答えた。（2010 年 6 月 4 日、Z）

事例 3-17 携帯電話

モビコム社の携帯電話を手に入れたという E。ホトント中心地の道端に落ちていたのを拾ったという。草原ではいつも携帯電話を使うわけではないので、「都市部に住む M の兄にあげた。だから今、自分の手元にはない」という。（2010 年 6 月 4 日、E）

事例 3-18 角〔目録写真 46〕

「2008 年の 10 月、バガノールの草原でオーノ〈oono: カモシカの雄〉を 40 頭仕留めた。その角は兄姉や親戚にあげて、これだけ手元に残した」と語る E。角はショル〈shor: 串類、細くて尖ったもの〉と呼ばれ、先端の尖った部分を固く締まったロープの結び目を解くなどいろいろな用途に用いている。夫婦のベッド脇にある戸棚の上段の取り出しやすい場所に仕舞われている。（2009 年 8 月 4 日、E）

モノについて語ってもらうきっかけとして筆者が行った問いかけに対して、E 家の人々は入手に至った経緯や方法、入手時期、価格、関係する人物などをあげて答えてくれた。入手時期について述べる際には、結婚、入院、子どもの誕生など、家族や身近な人物に起きた出来事、あるいは季節移動や家畜に関する作業への言及がみられた。また、645 点のモノの語りにおいて、一度でも名があげられた個人は、33 世帯 80 人にのぼる（E 家を除く）。ナイマー、職人、金鉱山に働きに来た人など、個人が特定できない人物を含めると、116 人が登場した。

このような結果から、モノの語りには E 家の家族史やこれまでに築いてきた社会関係が反映されているといえる。しかし、筆者が注目したいのは、モノの入手に直接関わっていない人物が登場している点であり、E 家の人々が人物名を通して言及したモノの移動に関する語りである。

3-3-2. 移動への言及

先ほど事例 3-17 で紹介した携帯電話の話は、筆者が土産に持ってきた携帯ストラップを E が目にしたことをきっかけとして始まった。その場に現物がないにも関わらず、拾得したのち M の兄にやったという出来事が述べられている。このような「誰々にやった」、「今誰それのところにある」といった語りは、E 家から他家へ、あるいは他家から他家へとモノが移動した状況を説明する際に用いられる。以下にあげたのはそのような事例の一部である。

事例 3-19

「首都に暮らすホーラエ・アハ³⁵J が双眼鏡をくれた。彼は狩猟好きなんだ。それで、都市に住んでる自分が持っても仕方がないといってくれた」、「それを半分に〔分解〕して〔片方のレンズを〕 R 兄〔M の義兄〕にあげた」と語った。（2012 年 7 月 30 日、E）

事例 3-20

黄色の 20ℓ サイズのポリ容器は、「去年の冬に来た金鉱山で働く人と知り合いになり、乳製品を入れてプレゼントした」。（2011 年 5 月 25 日、E）

事例 3-21

M が日常使いしているベルトは、「O〔ツェツェルレグ市に住む M の姪〕が Z にくれた」ものであるという。Z には長すぎたため、M が使っている。それ以前に M が使ってい

³⁵ khuurai akh: 血縁関係のない義兄弟、先輩

た白いベルトは、「B 家の長女にあげた」という。B 家の長女が「ベルトがなくてズボンがずり下がるので、ちょうだい」といつてきた時、丁度 O からもらったベルトがあったので自分のベルトを譲ったという。(2010 年 6 月 5 日、M)

事例 3-22

長持に仕舞われていた、「E の両親の時代、もしかするとそれ以前から使われていたらしい」木皿を、「上の兄が『すこしの間もっておこう』というのであげた」という E。(2011 年 5 月 25 日、E)

事例 3-23

「2006 年にツェツェルレグ市の市場で買った。3 年になる」。義兄 F にあげたが、サイズが大きかったので E に戻ってきたというモンゴル製の帽子については、「甥の S が被って出かけて失くしてきた」という。(2010 年 6 月 9 日、E)

事例 3-24

2009 年の春にトヨタの白いジープを売ったという E。現金ではなく 6 頭のヤギ（仔ヤギもち）と交換した。その際記念に取っておいたという運転席の足マット。車の鍵に付けていたキーホルダー二つも筆者に見せ、「この 3 つを車の思い出に残している」と語っていた。ところが、その足マットを「ML [E の友人] が金鉱山に行くのに持って行った」という。E がいない時にやってきて、持ち出された後で知ったのだと残念そうに話した。(2011 年 5 月 25 日、E)

事例 3-25

Z の履いている靴について尋ねると、「JA 兄が子どものお下がりをくれた。元々は B 家の長男にくれたものだけど、[B 家の長男が] 入らなくなったので今年の正月にぼくにくれた」という。JA 兄は誰かと尋ねると、「H 兄 [E の四番目の兄] が勤める会社の上司」だと説明した。(2009 年 8 月 27 日、Z)

事例 3-26

Z が緑色のハンドル・グリップをもっていたのでどうしたのか訊くと、「CA 家の夫人がくれた」という。昨日 CA 家夫人がボストンバッグをもって E 家を訪れた。そしてそのボストンバッグを G 家の夫人 [CA 家夫人の妹で E 家の共営世帯] にあげ、バッグについていたハンドル・グリップを自分にくれたと説明した。そのボストンバッグ [と内容物] を CA 家夫人に託したのは P 家夫人 [M の親戚] だという。バッグの中には蓋付きのプラスチック容器 3 つ、ミシン糸 3 つ、麻紐、白い紐、女性用上衣 2 枚、布製の袋、アメ数個が入っており、それらは R 家夫人への届け物だった。R 家夫人は

M の姉なので、CA 家夫人は届け物を E 家に置いていったということだった。なぜ P 家夫人が CA 家夫人にバッグを届けさせたのかと尋ねると、「〔両家が〕親戚だから」という M。CA 家夫人は P 家の次男の嫁だということであった。E 家に預けられた不透明なプラスチック袋の中身をみせようとして Z が袋を破りかけ M に怒られる。M が袋を開け、中に入っていたアメをその場にいた人々に分けて食べた。(2009 年 8 月 29 日、Z、M)

事例 3-27

E が愛用している折り畳み式ナイフについて尋ねると、「十年以上もっている。M と結婚する前、牧草を刈ってあげたら友人がお礼にくれた。N [E の甥] にもくれたけど、あいつはすぐに失くした」と語ると、「これ、どこ製？」と筆者に尋ねた。ナイフの刻印を確認し中国製であることを告げると、「昔、中国製品が入ってきて間もない頃は質が良かった。このナイフは中国製だけど質がいい」と語った。ナイフの鞘は、手元にあった模様付の革で自作したという。「ナイフをもらってすぐに入れ物を作った。そうしないと失くすから」といい、普段は帯にくくりつけて持ち歩いているといいながら、梁と天井のあいだに差し込んだ。(2009 年 8 月 26 日、E)

事例 3-28

筆者が着替えようとして取り出した T シャツを見て M が、「前にあゆみ〔筆者〕が置いていった青い T シャツあったでしょ？あれ、O [ツェツェルレグ市に住む M の姪] が持って行っちゃったのよ。『M はフドゥー (khödöö: 草原、田舎) にいるんだし、見せる人なんていないでしょ』って言って持って行っちゃったの」という (2012 年 8 月 2 日)。

事例 3-19 と事例 3-20 は、自発的に E 家からの贈与という形でモノを移動させたことが語られている事例である。事例 3-21 と事例 3-22 は乞われて譲与、貸与に応じた事例である。一方、事例 3-23 と事例 3-24 は他者による遺失、持ち去りという形でモノが手元からなくなったことが示されている。

事例 3-25 から事例 3-27 は、他家と他家の間のモノのやり取りに言及している事例である。事例 3-25 と事例 3-26 は自分の手元にきたモノがどのような経緯をたどってきたのかということが、誰から誰へという人物間の動きによって説明されている。事例 3-27 では、牧草を刈ってあげた友人から N (E の甥) にナイフが渡ったこと、しかし失くしたので N の手元にはないことが語られている。E 家のモノとは関係しない他家と他家の間のやり取り、および他家のモノの遺失が言及されている。

このように、彼らがモノの語りのなかに登場させる人物は、入手に関わった人物のみならず、何らかの形でモノの移動に関わった人物であるということがわかる。誰と誰の間にどのようなやり取りがあり、どこへ行ったかというモノの移動が語られるのである。自分

の関与しない他家・他者間のモノのやり取りについても語られている点から、彼らの関心がモノの移動に向けられていることが窺える。

事例 3-28 は携帯の事例と同様に、現物はすでになく状況で他のモノをきっかけとしてモノの移動が語られた事例である。家族以外の人物の介入によってモノに変動（手元に来る、あるいはなくなるなど）が生じたことが話題として提供される。モノが周囲の人物から何らかの働きかけを受けることで、家族の出来事として記憶され共有されるのである。これとは対照的に、家族以外の介入を受けずに廃棄に至ったモノの場合には、「焼いた」、「燃えた」、「捨てた」など一言で済まされ、それ以上言及されることは稀である。焼却処分するということは、モノがそこで移動を終えるということであり、移動に向けられていた家族の関心はそこで途絶えてしまうからである。

このようなモノの語りから言えることは、遊牧民にとってモノは人から人へと行きつ戻りつ渡っていくのが常態であり、世帯を超えて移動していく存在として捉えられているということである。

小結

本章では E 家を通して、遊牧民の生活世界における空間秩序とそれに準じたモノの在りようを提示した。北をホイモル、西を上座、東を下座とする空間認識は、宿営地の世帯配置およびゲル内の空間利用に共通している。どの家においても、同様の空間構成になっているため、家財道具の配置をみればモノの所在が予測可能である。しかしながら、家族以外が許可なく収納のなかを物色することはできないため、その家にどのようなモノがどれくらいあるのかを正確に把握することは遊牧民同士であっても難しい。

E 家の協力を得て行った悉皆調査によってはじめて、約 1,500 点が遊牧民の生活世界に存在することがわかった。ただし、すべてが E 家の所有物というわけではなく、他家のモノが混在しているのが常態であるということも、モノの在りようとして特記しておく。先行研究で強調されてきたような狩猟や牧畜関連用具の占める割合は意外に小さく、衣料や装飾品などの雑貨が多数を占めていたほか、大切な人からもらった思い出の品や使用頻度の低いモノも取り込まれていた。また、サントの遊牧民は固定式の物置を保有しており、季節に応じて使用頻度の低いモノを収納している。

先行研究ではほとんど関心が払われてこなかった、遊牧民がモノをどのように捉えているのかということについては、聞き取った 645 点のモノの来歴の分析を試みた。モノの語りでは、入手の時期や経緯が身の回りの出来事と結び付けられて記憶されていることが確認されたほか、E 家の織りなす社会関係が 116 人の登場人物に投影されていることがわかった。しかし、そのような語りは遊牧民に特有のものであるとはいえない。むしろ、自家のモノであるか否かを問わず、人から人へとモノが移動していく状況に着眼し、モノの移動

を追跡するかのように人物名を織り交ぜた語りにこそ、遊牧民のモノに対する認識が現れていると筆者は分析する。

彼らにとってモノは、常にそこにある存在ではなく、他家や他者からの働きかけを受けて変動するものである。新たな入手や他家からの借用によってモノが流入してくる一方で、譲与・贈与、貸与、廃棄、遺失によって次々とモノが生活世界から出ていく。こうしたモノの動態性、移動性の高さがモンゴル遊牧民のモノの世界の特徴である。それゆえ、限られた生活空間の中にあるモノだけに着目していても、彼らのモノをめぐる文化の実態を解明することはできない。そこで次章ではモノの移動に焦点をあて、どのような状況のもとでモノが実際に移動しているのかを明らかにしたい。

第4章 モノの移動をめぐる交渉

第3章では語りを通じてモノの移動性を提示した。それを受けて本章では、モノの移動の実態を明らかにする。ここでは、モノの移動を人と人の間のモノのやり取りとして捉えているため廃棄は考察から除外する。

第1節では、遊牧民の間で行われているモノのやり取りの事例をあげ、慣習上の原則や借用期間、返却方法などに関する多様な実践について述べる。

第2節では、モノのやり取りに先立って行われる要求者および所有者双方の交渉実践に着目する。具体的な交渉の内容を例示しつつ、共営世帯、親戚、知人といった社会関係が交渉に及ぼす影響について検討する。

第3節では、筆者に対する交渉事例からモノの情報分布には偏りが見られるということを提示し、モノのやり取りをめぐる交渉に先だって、分配されるモノの情報の内容や量が情報を握る人物によって操作されている実態を明らかにする。

第1節 モノのやり取り

本章で扱うモノのやり取りには、所有者が利用権のみを移譲する貸借と所有権を移譲する贈与・譲与が含まれる。以下の議論においては便宜上、前者を貸借、後者を譲渡という用語を用いて説明する。

本節ではまずE家を一方の当事者とする貸借の事例を通して、どのような状況下において誰とどんなモノをやり取りしているのかについて述べる。そして、貸借の原則と実態の齟齬にも触れながら、貸借と譲渡との境界が曖昧にされているという事実を指摘する。

4-1-1. 貸借

悉皆調査と目録作りの過程で、E家の生活世界に他家のモノが混入していたということはすでに述べたが、その一方でE家から他家に渡っていたモノもあることがわかっている。そこで、貸借状況の実態を解明するために、2012年の7月29日から8月6日までの九日間に、E家が他家・他者との間で行った貸借を記録した。その結果を示したものが表4-1である。九日間で計63件の貸借（失敗含む）があり、そのうちE家（筆者含む）の貸与が39件、借用が24件であった。

対象となったモノをみると、ハサミ、懐中電灯、斧、ミシン、火バサミ、タライなどの道具類、保温瓶、蒸留器、茶碗などの台所用具、糸、石鹸、髭剃り、耳かき、セロハンテープなどの雑貨、机、長椅子などの家具のほか、衣類、履物、家畜関連用具であることが

わかる。貸借の相手は、E の兄世帯でありこの夏の共営世帯である B 家を中心であった。E 家からの貸与 39 件中、23 件は B 家に対するものであり、E 家が借用した 24 件中、12 件は B 家からの借用であった。その他の貸借は、宿営地の距離の近い（便宜上、準共営世帯としている）X 家、J 家や、友人、知人との間で行われており、筆者も例外ではなかった。

では具体的に、どういった時にどのような貸借が行われたのかを九日間の事例からみてみたい。

事例 4-1 電話

E と M と筆者は電話を借りるために 2km 離れた場所に宿営する友人 G 家を訪ねた。夜の 10 時頃であったが、G 家には一宿一飯のフランス人旅行者が一人と同行するモンゴル人三人がいた。E はしばらく彼らと挨拶や会話をしていたが、「じゃ、行くか」といって何も持たずに G 家を出た。客人らと会話をしながら G 家の夫にさり気なく「ネグジ（通話可能度数）あるか？」と聞いたが「ない」といわれたという。乗って来たバイクにまたがりながら E は、「ほらな。『ない』っていうって、おれのいった通りだろ？」といて M に向かってニヤッと笑った。一旦 E 家に戻って M を降ろしたあと、E と筆者は今度はさらに数 km 離れた所に宿営地を構える友人 OL 家に出向いた。OL 家の人々はすでに床に着いていたが、われわれに馬乳酒を振る舞ったうえ快く固定電話を使わせてくれた。その帰り道で E が、「今度 OL にネグジを買ってあげるつもりだ」と筆者にいった。（2012 年 8 月 4 日）

事例 4-2 机

大阪の国立民族学博物館にゲルと家財道具を引き渡した後、ゲルを新築し主だった家具を新調した E 家であったが、机はまだ調達していなかった。そのため、友人 GD（サントの遊牧民）から机を、「ちょっとの間だけ借りている」という。E は、「GD には別の机がある。余っている分を借りたんだ。冬に返す」と話した。（2012 年 8 月 1 日）

事例 4-3 セロハンテープ

長雨により床板を敷いていなかった E 家の床は浸水し、台所用具を一時的に収納していた段ボール箱の底面が傷んでしまった。段ボール箱の底を切っていた M は、次男に命じて準共営世帯 X 家へセロハンテープを借りに行かせた。テープは借りてきたものの結局使われなかった。「もう使わなくなっちゃった」と M がいうと、「じゃあ、おれが持って行ってこよう」といって E がテープを持って出ていった。（2012 年 8 月 6 日）

事例 4-4 デール

友人の G 家夫婦がバイクで E 家にやって来ていたが、帰る頃には外は雨になっていた。G 家夫人が M に「デールある？」と声をかけると、M は普段着用のデールを取り出し

て手渡した。G 家夫人は受け取ったデールを合羽代わりに被って帰った。（2012 年 7 月 30 日）

事例 4-5 蒸留器

E 家で蒸留酒を作ることになり、M と器具を借りるために準共営世帯 J 家へ出かけた。お茶を振る舞われたあと器具の一部であるブルフル 〈bürkhüül: 鍋を覆う器具〉を借りて J 家をあとにし、今度は蒸留器の内部に吊り下げる容器を借りるために準共営世帯 X 家へ向かった。丁度家畜の所へ行こうとしていた X 家の夫人に声をかけると、夫人がゲルに引き返してきた。ゲルから出てきた X 家の息子は、J 家から借りてきたばかりのブルフルを見て、「なんて小さいブルフルだ」という。夫人も「いつ蒸留するの？明日？なら、明日の朝うちのを借りて行ったらいいじゃないの」といいながら吊り容器を貸してくれる。（2012 年 7 月 31 日）

第 2 章の第 2 節において、人の往来が遊牧社会の日常であり訪問者のない日はないということを示したが、それと同様にモノの貸借が行われない日もない。ここにあげた事例はほんの一部であり、自然状況、家庭の事情、個人の都合など、多様な理由で生じた必要から、毎日何某かのモノが世帯間を移動している。貸借の対象となるモノは実にさまざまで、慣習上のタブーはあれど基本的には何でも求めることができる。

事例 4-1 の電話、事例 4-2 の机、事例 4-3 のセロハンテープのように、自分が所有していないモノを他家から借用するというのが一般的な動機である。デールの事例 4-4 は、雨や気温の低下という自然状況の変化に対処するための貸借である。事例 4-5 は、蒸留酒作りをするために必要な器具を、それぞれ別の世帯から同時に借用している事例である。

こうした必要に迫られての借用がある一方で、自分のモノがあるにも関わらず他家のモノを借用している事例もある。採集した時期は異なるが、以下にそのような事例をあげる。

事例 4-6 デール

サント地域で催される祭りの前日、M の甥の T 少年が E 家を訪れ、M に「汚い〔汚れてもいい〕デールある？」と尋ねた。T 少年は自分の着ていた晴れ着デールと帯を E 家に預け、M の作業用デールに着替えた。しかし、デールの上から巻く適当な帯がなかったで、その場に居合わせた共営世帯 G 家の息子が帯代わりに巻いていた紐を借りて家畜の世話に出かけて行った。E 家に来ていた G 家の親戚がその様子を見て笑いながら、「女物のデール着て、紐巻いてってそのノート〔筆者のフィールド手帳〕に書いといて」と筆者にいった。（2009 年 7 月 30 日）

事例 4-7 帽子

E家の長持の上に共営世帯B家の夫(Eの兄)のモノだという灰色のテンガロンハットが置かれていた。B家の夫がやって来たので帽子について尋ねると、「それはハレ用の帽子だ」と答え、自分の被っているつばの浅いハット帽を指さし、「これは雨用」という。前日Eがハラホリンに出かける際にB家の夫からハレ用の帽子を借りていったのだという。道中雪に降られた帽子は一晩たった今も濡れており、B家の夫は帽子を手にとり濡れているのを確認すると、再び長持の上に戻した。(2010年6月7日)

事例 4-8 手袋

薪を切り出しに行こうとしたMが、筆者の手袋を貸してほしいというので手渡す。いつも使っている緑色の手袋はどうしたのかと尋ねると、共営世帯B家の夫人(Eの兄嫁)が持って行ってしまったという。(2010年1月20日)

事例 4-9 ハサミ

E家がヒツジの毛刈りを予定していた日の前日、3km程離れた所に宿営するB家の夫(Eの兄)がやってきてE家のハサミを借りていった。翌日Eは、1km程先に宿営しているMの遠縁にあたるCA家からハサミを借りてきて毛刈りを行った。(2009年9月9日)

事例 4-10 髭剃り

E家にやってきたEの友人GM(サントの遊牧民)が無言のまま、北東側の戸棚の上に置かれたEの髭剃りで髭をそり始める。掃き掃除をしていたMは特に何の反応も示さず床を掃いている。(2010年6月6日)

デールの事例 4-6 は晴れ着を汚したくないという理由から、事例 4-7 の帽子に関しては、デザインが異なるからという理由によって他家のモノを借用した事例である。実のところE家には、Eが結婚式や都市部に行く際に愛用しているラクダ色のテンガロンハットがある。そのため、なぜわざわざB家のテンガロンハットを借りたのかと筆者が問いかけると、「違う帽子が被りたかった」と答えたEに対し、Mはニヤッとしながら、「けちったのよ³⁶」と答えた。自分のハレ用帽子が傷まないように温存するために人のモノを借りたのだという。

事例 4-8 の手袋、事例 4-9 のハサミはともに、自家のモノを他家に貸与している状況下にあるため、第三者から同じモノを借用することになった事例である。その他、事例 4-10 のように、消耗品であるカミソリ刃を切らしているという理由で借用しにくる場合もあるが、訪れた先でたまたま目に付く場所に置かれていたため、ついでに剃っていくという場合もあった。

³⁶ ガムナサン〈gamnasan: 俟約した、貯えた〉

このように貸借が行われる背景には個々人の多様な動機があり、貸借関係は一方向にではなく多方面に同時並行的に成り立っているということがわかる。他家のモノを借用する感覚について E は次のように語った。「冬営地では各世帯が離れて宿営するから簡単にモノを借りに行けなくなる。〔この夏営地のように〕世帯が多いとモノの貸し借りが増える。たとえば、〔誰かの家の〕柄杓の中に何か入っていると、『E 家の柄杓はきれいだったな、それを借りよう』ということになる」（2012 年 8 月 4 日）。つまり、自家の柄杓を使用中さらに柄杓が入用になった時、中に入っていたものを移し替えて柄杓を洗って使うよりも、他家の柄杓を借りてきた方が「手っ取り早い³⁷」と考えるという。今取り掛かっている作業を効率的に完遂することが彼らにとっての優先事項であり、その際誰のモノかということは問題にされない。

貸借は、物理的な近さを反映して共営世帯間で行われることが最も多い。親戚でかつ共営世帯というケースが多いことも確かであるが、例え親戚でも離れた場所に宿営している場合には往来の頻度が下がるという実態を考慮すれば、物理的距離が貸借関係に影響を与えるといえよう。しかしながら、事例からわかるように共営世帯や親戚だけに限定されているわけではなく、自然状況や個人のさまざまな事情で必要が生じた場合には、誰に対しても借用を求めることができる。

4-1-2. 貸借に関する原則と実態

1) 慣習上の原則

先に基本的には何でも借用を求めることができると述べたが、慣習上原則として貸借してはならないとされているモノもある。それは、帽子とベルトである。モンゴル人にとって信仰の対象である天へと繋がる人の頭は神聖な部位であり、他人が触れることは許されない。その頭上に被る帽子には持ち主の気が満ちていると考えられており、持ち主の頭と同じように扱われる。それゆえ、帽子が地面や床に放置されるようなことはありえず、必ず家具の上にふせた状態で置かれる。E 家に置かれていた C (M の兄) のハットを、子どもたちが逆さにして顎紐を持ちぐるぐる回転させて遊んでいた時には、「C 兄の頭が回ったらどうするんだ!」とあって E に叱られていた。腹に巻くベルトも持ち主の魂がこもっているとされ、他人がこれを巻くと運命が狂うといわれる。

また、E によれば二人引きノコギリと斧〈gol sükh〉も人に貸してはならないという。「ノコギリも斧も木を切るもの。山の主であるロス〈Lus〉はノコギリについてやって来る。人に貸したノコギリが戻ってきた時にはロスがついてきて、家族が病気になったり家畜が死んだりする。だから人に貸してはいけないんだ。でも、そのことを知らない人もいる。二

³⁷ アマル 〈amar: 簡単〉

人の息子には教えてやるし、兄にもいつもそう言ってる」（2012年8月4日）。ただし、薪割り用の斧（*tal sükh*）は人に貸しても良いという。

ところが、こうした原則的な慣習上のタブーがあるモノに関しても、実際には貸借が行われている。帽子に関してはEが兄の帽子を拝借していた事例4-7以外に次のような例がある。

事例 4-11

筆者のハットに関心をもっていたEは、長持の上に置いていた筆者の帽子を手にとると内側に唾をかけてから被った。理由を聞くと「自分のモノじゃないということを〔天に〕示すためだ」、「他人の帽子を被る時は皆そうする」と答えた。（2009年9月7日、E）

事例 4-12

晴れ着デールを着たB家夫婦（Eの兄夫婦）がサントの中心地に出かける際にE家に立ち寄った。B家夫人が鏡台の前で化粧を整えながら、「人前に出ても恥ずかしくないベルトない？」と尋ねたところ、E家に集まっていた親戚の女性たちが顔を見合わせた。MはB家夫人を見ていたが何もいわなかった。すると、D婦人（Eの姉）が「あゆみ〔筆者〕のベルトがいいんじゃない？」といい出したため、B家夫人は筆者の方を振り向きながら、「ベルト貸して」といった。特に断る理由もなかったのでその場で外して手渡した。翌日の昼前にB家の娘がE家にやって来たので両親が戻ったかどうかを確認すると、朝方戻ってきて今は眠っているという。ベルトがないと不便なのでB家の娘にベルトを取ってくるよう頼んだ。（2010年6月4日）

モンゴルでは一般的に、開口部が下を向いているモノの中には悪いものが溜まりやすく、贈答には不適であると考えられている。帽子は被る時も置いておく時も開口部が下を向くことになるため悪い気がこもるという。そのため、「たとえ草原に新品の帽子が落ちていたとしても絶対に拾って被らないし、もし自分が落とした帽子を見つけた場合でも小便をひっかけて持って帰って洗って被るか、もしくはそのまま燃やしてしまう」とEは語る。このように特殊な扱いを受け貸借を禁じられている帽子でも、唾くという行為によって貸借が可能になる。唾をかけるといっても、汚すほどの量ではなく「プッ」と強めに息を吹きかける程度である。この行為は首都のウランバートルでも見かけることがあり、地域に関係なく行われている。

ベルトの貸借の際には帽子に唾をかけたような儀礼行為は行われず、普通にやり取りがなされた。集まっていた女性達がベルトを貸したがいなかったのは、タブーを犯したくないからではなく、その時身に付けていたのがハレ用のベルトではないという建前と、貸してしまうと自分が困るという本音からであったと筆者は感じた。筆者のベルトは決してハ

レ用でも新しいモノでもなく、周りの女性達と同じく普段着用デールの腰を締めるために着用していただけたモノである。筆者ならば応じるだろうという期待を込めて話をふったようであった。筆者が応じれば、女性達はベルトを求める人にベルトを融通するという行為を達成したことになる。

E家の二人引きノコギリについても、2009年の夏に別の宿営地からやってきたMの遠い親戚にあたるCAが、E家の二人引きノコギリをもっていくの確認している。このように、タブーがあっても借り手に必要があれば要求する事ができ、所有者も何らかの形でその要求に応えるのが望ましいと考えられているのが実情である。

2) 貸借の失敗

とはいえ、常に希望したものが借用できるとは限らない。以下では借用に失敗した事例を取り上げ、どのような場合に借り損じるのかをみてみたい。

事例 4-13

Eが親戚3人、友人2人と連れ立って牧草を刈りに出かけた。青い韓国産のトラックに男性5人が乗り込んで出発し、途中で親戚の男性をもう一人拾って山に向かった。道中、知人世帯に立ち寄り刈った牧草をすくう大型の熊手を借りようとしたが、その世帯にはなかった。すると、「じゃ、手で [やるか]」といって再び出発した。(2009年8月21日)

事例 4-14

E家を訪れた友人の男性Wが「トランプはあるか?」とMに尋ねた。「ないわよ。どうするの?」とMが聞くと、「占うんだよ」という。Mは筆者がトランプを持っていることを知っていたが、そのことはいわず筆者に話をふることもしなかった。(2010年1月22日)

事例 4-15

E家の長男Zと筆者が家畜囲いの清掃をしようとしたが、糞泥掻き出し用のシャベルが一本しか見当たらなかった。Zによれば、以前にあったもう一本は共営するB(Eの兄)が壊して捨てたという。E家の次男Uが準共営世帯のX家からシャベルを借りようと歩いて向かっていたところ、X家の夫が丁度家畜囲いの清掃を始めた。それを見たUはすぐに引き返してきた。一時間ほどしてからZが再びX家へ行きシャベルを借りてきた。(2012年8月4日)

事例 4-16

Mが親戚に頼まれたデールを作っており、ミシンを使う段階になったのでミシンをの

せる机を借りるために共営世帯 B 家を訪ねた。B 家の夫人は夕食の準備をしているところで、しばらくの間二人は雑談をしていた。そこへ準共営世帯 X 家の夫がやってきて、B 家の棚の上にあったハサミを手にとると出て行こうとした。そのハサミを見た M が、「そうそう、そのハサミ、私に貸して」と声をかけると、「うちも今、縫い物してるとこなんだ」と X 家の夫が振り向いて答えた。それを聞いて「それ、実際のところ誰のハサミなの？」と尋ねる M に、「うちの」と答えると、X 家の夫はハサミを持って出ていった。そのうち M は「出よう」と筆者を促すと、机の事は何もいわずに B 家を出た。(2012 年 8 月 3 日)

観察の結果、借用に失敗するケースを集約すると次の三つのいずれかに該当する。一つは相手がモノを恒常的・瞬間的に持っていない場合、二つ目は持っているけれど貸す気がない場合、三つ目はタイミングである。事例 4-13 は一つ目のケースであり、期待していた相手から熊手を借りることはできなかったが、なくても何とかできると判断し他の世帯に当たることはしなかった。牧草を刈る時期(天候・日時)と集まった人手を考慮し、熊手を探すより草刈り作業を優先させたためである。

事例 4-14 は二つ目のケースで、占いに使うトランプと聞いて必要性が低いと判断した M が「ない」ことにしたまま貸さなかった事例である。通常ならば求められたモノが E 家になかったとしても、居候の筆者が持っていることを M が知っていれば、そのことを相手に告げモノを融通しようとする。例えば、2012 年の夏に準共営世帯 X 家の長男の婚約者が、「耳かきある？」といって E 家を訪れた時、デールを縫っていた M は「あゆみに聞きなさい」と筆者にふったり、また同じく X 家の夫人が「絆創膏とガーゼはある？」と M に尋ねた時には、作業をしながら顎で筆者を示したりという具合で、そのような場合には筆者がモノを融通していた。ベルトの事例 4-12 のところでも述べた通り、借用を求めて E 家にやってくる人に対してモノを融通するのが E 家の成員である必要性はなく、結果的に要求を満たしてやればそれでよいのである。したがって、筆者がトランプを持っていることを伝えなかった事例 4-14 の場合は、M に貸す気がなかったということになる。

先ほど、モノを融通することが望ましいとされていると述べたが、他家・他者の要求にすべて応えなければならないわけではない。E に、人がモノを借りに来た場合は、必ず貸してあげなければならないのか、断ることはできるのかと尋ねたところ、「必ずしも〔モノを〕渡さなくてもいい。相手による」と答えた。もし、渡したくなければ、「明日、遠出するので入用だ」などと理由をつけて断ることができるという(2010 年 6 月 5 日)。ただし、その理由とは自然の影響によるものであったり、肉親の形見や友人からの贈り物など特別なモノであったり、どうしても入用であるといった、やむに已まれぬ事情でなければならない。要求には応えたいが、自分にはどうすることもできないという状況を提示することによって、相手の理解を得るのである。

事例 4-15 と事例 4-16 はどちらも三つ目のケースにあたる。借りたいモノが相手側にあるということがわかっているのに、タイミングが合わないという場合である。糞泥用シャベルやハサミのように、所有者と使用するタイミングが重なってしまったような場合には、所有者が使用を終えるのを待つか、別の人のところへ借りに行くか、その日はあきらめるかのいずれかとなる。また、机のように使用中でなくても、相手の様子を窺い、作業状況や機嫌の良し悪しから借りることが難しいと判断することもある。事例 4-16 の場合、B 家夫人は夕食作りをしており、食事が始まれば机が使用されることが予測できる。今のタイミングで借用を申し入れてもすぐに返却せねばなくなると M が判断したため、話を切り出さなかったものと思われる。

3) 貸借の期間と返却方法

次に貸借の期間と返却方法についてみていきたい。まず、期間については、対象となるモノや所有者、借用者双方の置かれた状況に依拠するため特に定まっていないといえる。髭剃りのようにその場で使用して元の位置に戻したり、懐中電灯のように夜間の見回り時に借用したりという瞬間的な場合もあれば、バガ・ゲルや机のように一冬だけ、夏までというような季節的な借用もある。あるいは、鞍や現金のように所有者が返却を求めるか、借用者が返却できるようになった時までという場合もある。結局のところ個々人の都合を当事者間で調整することによって貸借期間は自在に変化する。

事例 4-17

2009 年の調査終了時に、筆者が使用していた望遠鏡を次来る時に使うからといって、E に譲り渡した。非常に喜んだ E は、「大事なものだからここに隠しておこう」といって戸棚の上の写真立ての裏に仕舞っていた。2010 年の調査時にその望遠鏡が見当たらないのでどうしたのかと尋ねると、友人宅の長持の中にあるという。友人に貸したあと、返してもらいに行ったが、「まだ、置いといてよ」と言われたのでそのままにしてあるという。「〔筆者からの〕プレゼントなので人にあげるつもりは全くない」、「相手は信用できる人なので、返してもらえらるだろう」という。(2010 年 6 月 7 日)

事例 4-18

知人（サントの遊牧民）に貸した現金を返してもらうために出かけた E が酩酊状態で帰ってきた。その知人は、弟が大学を卒業するので金が要るといって E に相談し、同情した E から 100 万¥を借りているという。三年経っても返してもらえず、今日も酒を出されて酔わされてしまったらしい。「酒を出すということは、もうしばらく金は待ってくれという意味だ」と E は説明した。(2009 年 8 月 3 日)

事例 4-19

新学期になり通学する長男を親戚に預けるために M とツェツェルレグ市に出かけた。新学期用の学用品や食糧品を市場で買う際、購入費の一部を筆者が立て替えることになった。手持ちの現地通貨がなくなってしまうという時に不便だと感じた筆者は、サントに戻ってから三日ほどして E と M に貸した金を返してくれと試みてみた。すると、E は「いいや、返さん」とふざけて答えた。そして、今年は馬乳酒の値がいいので隣のウヴルハンガイ県の中心地まで売りに行くという話をし始め、サントで馬乳酒 10 を 200F で買い集め、それをウヴルハンガイで 400F で売ると言う。そのため、今は現金が必要なので、筆者に金を返さなかったのだと説明した。「今おまえには、さしあたって現金の入用ないだろ？」と聞かれ、「確かに」と答え、ウヴルハンガイに行って商売をしてきたら金を返すといわれたので納得した。(2009 年 9 月 3 日)

これらの事例のように、所有者が返却を求めても、借用者に何らかの言い分があり、所有者がそれを聞き入れた場合は貸借期間が延長される。事例 4-18 のように意思に反して借用期間を延長されることもあるが、その場合は催促し続ける以外に方法はない。E はその後も再三にわたって借金の返済を迫っていたが、その度に酔わされて帰ってきていた。

事例 4-17 で E が口にしてるように、貸借関係を続けるかどうかは相手の言い分のみならず信頼関係によるところが大きい。現金の場合、銀行から借りると利息が付いて大変だが、自分たちの間で金を融通し合えばその心配はないと語る E は次のような例え話をした。「ある人が車を買おうと 250 万F 持っていて、500 万F の車があったとしたら、自分の手持ちの 250 万F を貸して車を買わせてやる。そして次の年に自分が車を買う時には、その相手に 250 万F を出してもらう」。ただし、この方法は本当に信頼できる、裏切らない相手を見つけた時にのみ成立するのだと続けた。それゆえ、事例 4-18 の人物に対しては「嘘つき³⁸」と評するようになり、「嘘つきは嫌いだ。騙された」と周囲にもらしていた。

事例 4-19 も同じく現金の貸借に関するものである。これらを事例にあげているのは、必要性のあるところにモノを融通するという原理が現金にも適用されるということを示すためである。筆者の現金という所有観念よりも、今そこにある必要性の方が優先される好例である。

次に、返却方法をみていきたい。借りたモノは本来、借用者が返しに来るのが原則だとされている。しかし、「借りた人が忙しいなどの理由で返せない時は、こちらから出かけて行って回収する」と E は語る。以下に返却の事例をあげる。

事例 4-20

馬乳から蒸留酒を作るために共営世帯 G 家から蒸留器一式を E 家が借用した。作業を終えたあと、こびり付いた汚れを金タワシできれいに落とし布巾で拭きあげてから G 家に返した。(2009 年 9 月 10 日)

³⁸ khudalch

事例 4-21

M が加工したウルムと呼ばれるクリームをやぎの胃袋に詰める作業をするため、共営世帯 B 家から机を借りた。作業を終えて返す前に、M が机に付いたクリームなどを拭き取り、長男が机を運んでいった。（2012 年 8 月 6 日）

事例 4-22

E が準共営世帯 X 家の長男と深夜の狩りに出かけた。出かけ際に筆者の懐中電灯を借りていった。翌朝、X 家の長男の婚約者が E 家を訪れ、筆者に懐中電灯を返した。（2012 年 8 月 6 日）

事例 4-23

E 家に準共営世帯 X 家の長男の婚約者がやってきた。手には B 家から X 家が借りたモップを持っている。それを見た M が、モップは B 家の夫が作ったこと、E がこれよりいいモノを作ってくれるといったのにそれっきりになったことなど、思い出話を始めて盛り上がった。その後、X 家から来た婚約者は、E 家の子どもにそのモップを B 家に返すように頼んで帰っていった。（2012 年 8 月 3 日）

事例 4-20 や事例 4-21 にあるように、一般的に借りたモノが使用によって汚れた場合はきれいにしてから返すということが行われている。使用時季の重なりやすい乳製品の加工器具や毎日のように使用される台所用具類は、利用したあとは速やかに返すのが原則である。しかし、返却が遅れたり、所有者に必要なが生じた場合には、所有者が取り返しに出向く。例えば E 家では、二本ある柄杓のうち一本が共営世帯 G 家に貸し出されていたが、必要になると長男を遣って柄杓を取ってこさせていた。また、離れた場所に宿営している遠い親戚にあたる青年に貸していたバイクのタイヤは、E が自ら出向いて返してもらってきた。その青年には返しに来る時間がないからだと筆者に説明した。

借りたモノは借用者が返しに来るのが原則であるが、そうならない場合もある。むしろほとんどの場合、借りたモノは一々返しに行かず、所有者に返却を求められるか誰かが取りに来るまで留め置かれる。

事例 4-22、事例 4-23 は、借りた本人と異なる人物がモノを返却に来ている事例である。筆者が E に貸した懐中電灯が何らかの理由で X 家の長男に渡り、長男の婚約者がそれを返却にきた。モップの事例では X 家の借りたモノを E 家から B 家に返す形になっている。共営している E 家と B 家は歩いて数歩の距離にあり、物理的に頼まねばならない道理はないが、X 家の使いで来た婚約者にとっては馴染みでない B 家に行くことに抵抗があったようで、E 家の子どもの手を借りたと思われる。結局のところ、所有者は元通りの状態でモノが手元に返って来さえすればよいと考えているので、借りた本人が返却にくる必要はない。それゆえ、返却の代行は広く行われている。

最後に貸与に対する返礼についてみておきたい。台所用具や調度や雑貨など日常的なモノの借用で返礼をすることはほとんどない。しかし、世帯空間を超えて食物の提供を受けた場合は、食物の入っていた容器を返却する際に空で返すことはせず、中に菓子や乳製品など何らかの食物をいれて返礼するという習慣がある。例えば、共営世帯 G 家から茹でたヒツジの内臓のおすそ分けを E 家がもらった時は、中身を別の容器に移し替え、きれいにした空の容器に米を入れて返却した。世帯空間を超えてというのは、G 家の戸口を出て E 家に運ばれる場合のことを指す。E 家の人々が G 家に来ていて G 家の食物を振る舞われる場合は、これに当たらない。したがって返礼の必要もない。

それ以外では、固定電話を借りたあとネグジを買ってあげようとしたり〔事例 4-1〕、準共営世帯 X 家の息子にガーゼと消毒液を提供した筆者に対して、家族が菓子を持ってきてくれたり、バガ・ゲルの返却時などに返礼が見られた。2010 年の冬営地には、E 家が友人（親しみを込めて血の繋がらない兄³⁹と表現）から借りたバガ・ゲルが建てられていた。これを返却する際に、50kg の人工飼料一袋と蒸留酒一本をお礼に渡したという。蒸留酒は相手への敬意を表す贈答品として重宝されている。このような返礼は義務ではなく、借り主の気持ち次第だという。だが、薬のような貴重品であったり、借用者にとって必要性の高いモノであった場合、あるいは長期に渡って借用した場合には返礼の気持ちが強く働くようである。

4-1-3. 貸借か譲渡か

モンゴル語の動詞「アワハ〈avakh〉」が「取る」という意味であること、およびモノの入手はたいいアワハの過去形「アウサン〈avsan: 取った〉」で語られることはすでに述べた通りである。ところが、モノのやり取りの場面においても再びこの「アワハ」が登場した。

事例 4-24

共営世帯 B 家の息子が E 家に火バサミを借りにやって来た。「アワー・ヤウ〈Avaav yav: 取っていきなさい〉」と応じる M。そのあと、今度は B 家の娘が腰掛を借りに来た。

「腰掛、アウィー！〈av-ya: 腰掛を取ろう〉」といわれ、「何に使うの？」と M が尋ねると、「お母さんが…」と答える。「M は今、縫い物するのに使っているからって〔お母さんに〕いいなさい」といって M が手ぶらで帰そうとしたところ、E が搾乳作業に使っている腰掛を指さして、「あの腰掛持って行ったらどうだ？ いいだろ？ M？」と声をかけた。「そうしなさい」というのを聞いて B 家の娘は腰掛を持って行った。

(2012 年 8 月 4 日)

³⁹ ホーラエ・アハ〈khuurai akh: 先輩、義兄弟〉

事例 4-25

筆者から E 家に渡った栄養ドリンクの空き瓶を、共営世帯 B 家の娘が欲しそうに手にして「これいらない？」と訊いた時、E は一旦空き瓶をとって眺めたあと、「チー・アウ！〈Chi av: おまえが取れ〉」といいながら B 家の娘に差し出した。（2010 年 1 月 21 日）

事例 4-24 は E 家と B 家の間で火バサミと腰掛を貸借している事例である。「〇〇を貸して」という際には「〇〇アウィー！」という表現が使われる。「アウィー〈av-ya〉」とは動詞アワハが「～しよう、するつもりだ」という意志形をとったものであり、直訳すると「〇〇を取ろう！」となる。

一方、事例 4-25 は譲渡の事例である。「アウ〈av〉」というのは動詞アワハの命令形であり、「取れ」という意味になる。「アウ！」といわれて B 家の娘は嬉しそうに瓶をもって帰った。この時、瓶は譲渡されたのであり、「アウ」という一言で所有権が B 家の娘に移譲されたのである。

このように、「アワハ」を用いた表現は貸借の際にも譲渡の際にも登場する。そのため、所有権の移譲をとまなう譲渡の場合は、「完全に」という意味の言葉「ブル〈bür〉」を添えて「ブル・アウ〈bür av〉」とし、一時的な貸借の場合は「一瞬、仮に、臨時の」などの意味をもつ「トゥル〈tür〉」をつけることで、区別を図ることができるという。「トゥル・アウ〈tür av〉」といってモノを渡されたら、いつか返却しなければならないということである。

しかしながら、筆者が観察していたところ、実際には何もいわずに手渡すか、「アウ」とだけいうことがほとんどであった。貸借なのか譲渡なのかその場で確認するような会話もなされない。側で見えていてもどちらかわからない時があった。E はブルとトゥルで譲渡と貸借の違いについて筆者に説明した際に、人がモノを求めてきた場合、「あげたいと思えばあげてしまうこともある」と語った。基本的にモノが要求された時点で所有者が完全には手放す気がない時は貸借とされ、手放してもよいと考えた時は譲渡となるというのである。つまり、所有者の状況や気持ち次第でどちらでもあり得、また途中で変わることもあるということになる。

借用する側にとっても、その場でどちらなのかをはっきりさせる必要はない。しばらく手もとに留め置いてみて返却を求められたら返せばよいという発想である。このようにモノのやり取りにおいては、貸借か譲渡かという概念上の区別を明瞭にすることよりも、その時点でモノが融通されるかどうかの方が重要なのである。トゥルかブルかといった期間の長短も双方の状況に応じていくらかでも変動する。

本節の前半において貸借の実態として、対象物も借用期間も合意によって自在であること、必要としている人にモノが融通されることなどを述べてきたが、このような原理は貸借のみならず譲渡も含めたモノのやり取り全般に適用されるということである。

第2節 モノの移動をめぐる交渉

ここまでモノのやり取りによってモノが世帯間を移動する様子を見てきたが、このような移動は交渉の成功によってはじめて成立する。交渉を経ずに他家のモノを勝手に持ち出せば盗みになり、社会的な非難を免れない。E家では泥棒行為か否かをめぐって次のような出来事があった。次男が仏壇の引き出しから銀色の鉛筆削りを取り出し、「兄ちゃんは泥棒⁴⁰だ」といって筆者に見せた。すると疑惑をかけられた長男は、「盗んだんじゃない！ P家が移動する時に落ちてたから、拾って奥さんに聞いてもらったんだ」といい、「取ってもいい？」、「そうしなさい」という交渉があったと主張した。

泥棒行為か否かを判断する基準は、交渉の有無もしくはモノの移動が所有者あるいは周囲の人の面前で行われたかどうかによる。泥棒行為が明るみに出ると、人伝にすぐさま知れ渡り当人のいない所で「あいつは泥棒だ」と噂されるだけでなく、以後訪問する先々で警戒され、発話の内容がすべて嘘だと疑ってかかれるようになる。例えば、次のような事例があった。

事例 4-26

E家に共営世帯G家の夫と遊牧民の青年TBが訪ねてきた。G家の夫はTBを親戚ではなく友人だと筆者に紹介した。それから四日後のこと、G家の夫がE家でタイヤを修理しているとTBの話題になり、Eが「彼は泥棒なんだ」という。ウマなどを盗んでは誰かに売っているというので、どうやってそれを知ったのかと筆者が尋ねると、「何度も刑務所を出たり入ったりしてるからだ」と答えた。（2009年7月30日）

事例 4-27

ある時遊牧民の青年NGがE家にやってきた。NGがいる時は何も言わなかったが、彼が帰ったあとEとMが「彼は泥棒だよ」といい、筆者が電話番号を尋ねられても教えなかったことをほめた。そのうえ、「〔電話するっていったけど〕彼は電話なんかもってないよ」と付け加えた。（2009年9月7日）

モノのやり取りが信用に基づいて行われる以上、信用の失墜は当人に面子を失う以上の不利益を与えることになる。従って、どんなモノに対しても、移動を加える際には交渉を経ることが求められる。

4-2-1. 交渉の条件

⁴⁰ khyrgaich

交渉をもちかけることは誰にでも可能であるが、成功するかどうかは当事者間の関係性、対象となるモノ、タイミングなど複合的な要素に左右される。交渉が成立するためには少なくとも次の二つの条件を満たす必要がある。まず一つ目は、対象者にアクセスできることである。物理的にアクセスできるだけでなく、信用できる人間かどうかという点が重視されるので、初対面の人間がもちかける交渉に対象者が応じる可能性は低くなる。それゆえ、共営世帯、親戚⁴¹、友人、知人が主な交渉相手とみなされる。

二つ目は、対象のモノが特定されていることである。たいていの場合は、必要性が生じてからモノを求めて交渉相手を探す。その際要求者は、過去の経験や日頃の他家訪問から対象のモノをもっている人物、あるいはもっていそうな人物にあたりをつけている。それゆえ、対象者を訪問した時点で室内にモノが見あたらなくても、「〇〇はあるか」と交渉することができる。その一方で、たまたま他家を訪問した折にいいモノを見つけた、あるいは人から話を聞いて訪ねたその場で交渉をもちかけるということがある。しかし、たまたま見た、あると聞いたというだけで交渉相手がとりあってくれるかどうかは疑わしい。必要性をうまく訴えて交渉相手を説得することが求められる。

以上の二点を踏まえたうえで、交渉に臨む際には、交渉する相手の状況や機嫌、タイミングなどさまざまな要素も考慮しなければならない。

4-2-2. 社会関係が交渉に及ぼす影響

では、実際にどのような交渉が行われているのかを事例を通してみたい。以下にあげたモノの移動をめぐる交渉には、利用権の移譲（貸借）を求めるものと所有権の移譲（贈与・譲与、売却、交換）を求めるものの両方が含まれている。社会関係を軸に、親戚世帯間、共営世帯間、友人・知人間で、何をめぐってどのような交渉が展開したのかを概観し、それぞれの特徴を検討する。

1) 親戚世帯間

まず、E家を一方の当事者とする親戚間の交渉の事例を紹介する。ここで取りあげるのは、親戚の中でも特に往来が盛んであった、Eの兄であり共営世帯でもあるB家、Eの甥にあたるA家、Mの四番目の兄であるC家との交渉である。

⁴¹ モンゴルにオボグ〈ovog〉と呼ばれる父系の親族集団がかつては存在した。本来、オボグは「氏族」を意味したが、現在では氏族の忘却とともに、名字を指す言葉となっている。モンゴル人は一般的に名字を持たないため、便宜上父親の名を自分の名の前において、名字のごとく扱っている〔東郷 2011: 2〕。クランとしてのオボグは日常生活に置いても、慣習上も何の役割ももたなくなっている〔Humphrey and Sneath 1999: 28〕。オボクに代わって、遊牧民の日常生活において重要な役割を果たすのが親戚である。ハマータン〈khamaatan: 親族、身内〉やトゥルル・サダン〈töröl sadan: 親類、一族〉と呼ばれ、日常的にはアハ・ドゥー〈akh düü: 兄、弟〉と血縁関係にある兄弟姉妹を指す呼称が使用されている。

事例 4-28

B 家の夫が「ノミあるか？」と E に訊きにやって来た。E は「ないな」という顔をしつつ、どこかにあったかなと思案していた。（2012 年 8 月 2 日）

事例 4-29

B 家の夫人が E 家に「ハサミをアウィー〈av-ya: 取ろう〉」とやって来た。E は長男に向かって、テレビの下の長持（ゲルの西側）からハサミを取り出し、鞘から出して渡すように指示した。B 家の夫人が去ったあとで、「[B 家では] デールを作ってるんだ」と E が筆者にいう。（2012 年 7 月 29 日）

事例 4-30

E が弾丸携帯用の革製腕輪を作るために、長男に命じて B 家から青い糸とハサミを取ってこさせた。M に訊くと糸もハサミも E 家のモノだという。（2012 年 7 月 29 日）

事例 4-31

E 家の木製の茶碗が B 家に渡っていたので、M が B 家の娘に持って来るように命じた。B 家の娘は木碗を渡ししながら、「あとでお湯を入れて返してね」と B 家夫人からの伝言をつたえた。（2012 年 8 月 5 日）

事例 4-32

E 家のミシンが B 家に貸し出されていた。親戚の結婚準備としてデール作りを依頼された M は、E 家を訪れていた A 家の夫人を遣って B 家からミシンを取ってこさせた。しばらくすると、B 家夫人が黒いズボンをもって E 家にやって来て、ミシンを使い始めた。（2012 年 8 月 2 日）

事例 4-33

B 家夫人が「例のボタンをアウィー〈取ろう〉！」とやって来た。ズボンに付けるのだという。M が北西側の戸棚を開け、下段から収納用袋を取り出すと、中から洋ボタンの入った袋を出して、「取って」と言って渡した。すると、ズボン用ボタンを探していた B 家夫人は、「全部シャツのボタンだわ」と言ってボタンの入った袋を収納用の袋に戻した。その際、収納用袋に入っていた新品のカバンを取り出すと、チャックを開けて中までじっくりと見た。M も黙ってその様子を見ていた。見終わると再び収納用袋に戻し M に渡した。M はそれを元の場所に仕舞った。（2010 年 6 月 6 日）

事例 4-34

A 家の夫が E 家にやって来て、いつものように E の髭剃りで髭を剃ろうとして戸棚の上を探すが見あたらない。「B (E の兄) が取って行ったのか？」と M に尋ねるが、M は「知らない」という。(2011 年 5 月 28 日)

事例 4-35

親戚 C 家の夫人が E 家を訪れ、C 家の子どもの行方を尋ねた。M は長持に入っているズボンを探しながら「隣よ」と答えた。E 家の食器棚に目をやった C 家夫人は、ガラス扉を開けて調味料類の入った器を取り出し、「これはどういうやつ？」といいながらパッケージごとにおいを嗅いでいる。いくつかある調味料の中から、馴染みの韓国製インスタントラーメンの付属調味料を見つけると、「余ってたらかわしにちょうだいよ。わかった？！」と M に向かっていい、調味料を元あった場所に戻した。M は何もいわなかった。(2010 年 6 月 6 日)

事例 4-36

M の三番目の兄の息子で C 家で暮らしている甥の T が来て、「乞いたいモノがあるんだけど」といいながら E 家に入ってきた。「ハヤー〈khayaa: ゲルの外壁の下端部〉にある鉄〔の塊〕をくれ」という。M が「あげないわよ、ダメよ」といって断るが、かわいがっている甥に何度も頼まれ、そのうち「ちょっと来てみてよ、ほらほら」といって外に誘い出された。ゲルの重しにしている鉄の塊(何かの部品の一部)を T が指さして、「これ一つちょうだいよ。町にもって行って売るから」といって頼みこんだ。M はしぶしぶ承諾し、「代わりのモノをよこしなさいよ！」といって一つだけもって行かせた。(2011 年 5 月 27 日)

事例 4-28 から 4-33 は、E 家と B 家のやり取りである。E 家と共営する機会が他の世帯に比べて多い B 家の夫(38 歳)は、E のすぐ上の兄である〔図 1-5 参照〕。妻(35 歳)と 3 人の子どもがいる。歳の近い兄弟ということもあって E と仲が良い。B 家との間でやり取りされたモノは、ハサミ、懐中電灯、斧、ミシン、火バサミ、タライ、ほうきなどの調度、保温瓶、麺棒、茶碗、板盆、たわしなどの台所用具、糸、ボタン、石鹸、髭剃り、手袋、敷布団などの雑貨、机、長椅子などの家具のほか、防水長靴、帽子やベルトなどの装身具、衣類、脂や砂糖などの消耗品と多岐にわたっている。

交渉の様子をみると、必要なモノを単刀直入に伝えており、それを聞いた方もすぐに応じている。共営しているので互いの家の動向に詳しく、かつ親戚でもあるので、事例 4-29 で E が述べているように、結婚を控えた親戚のために B 家の夫人がデールを作っているという細かな状況も把握されている。

要求されたモノが手元にあれば融通するが、反対に自家で必要になった時はすぐに取り戻す。事例 4-30 から事例 4-32 のように、使用するタイミングが重なると、一日に何度も両

家の間をモノが往来する。その際、自分で取りに行くこともあるが、作業をしていたり、何度も訪ねるのが面倒であったり、作業途中の相手から自分の手で取り上げることに躊躇がある場合には、子どもを使いにする。事例 4-32 では、デールの製作を手伝いに来ていた A 家夫人がミシンの回収に使われている。

事例 4-33 は、ボタンの譲渡を求めた交渉である。「例の」と述べているように、B 家夫人は E 家にボタンがあることを承知で来ている。M も当然のように差し出している。「例のボタン」というのは、繕いものをする M のために筆者が日本から土産としてもってきた大量のボタンのことである。この前日、B 家や C 家の夫人がやって来た折に、M が戸棚から出して見せていた経緯がある。

事例 4-34 は、A 家の夫が髭剃りを使いに来た事例である。A 家の夫（31 歳）は、E の亡くなった姉の長男であり、亡姉を慕っていた E はこの甥をかわいがっていた。妻（29 歳）と息子（2 歳）と父親 F（50 代、E の義兄）の 4 人で暮らしている。A 家の夫はふらりと入って来ると、まっすぐホイモルの北東側の戸棚の上から髭剃りを取ろうとした。E の髭剃りはいつもこの場所に置かれており、B 家の夫や E の友人も勝手に使って戻していく。M もまったくそれを気にする様子はない。ところが、この日はなぜか髭剃りがなかったため、A はここにあることを知っている誰かが持って行ったと思ったのである。

事例 4-35 と 4-36 は、C 家との交渉の様子である。C 家の夫（39 歳）は M のすぐ上の兄であり、妻（38 歳）と 3 人の子どもがいる。2010 年の春営地では B 家、A 家と共に E 家と共営していた。C 家夫人はガラス戸越しに、E 家の食器棚の上段に置かれた調味料を目敏く発見し、かなり強い口調で要求した。C 家夫人の高圧的な物言いに気分を害していた M は、聞き流すことにしたようで返事はしなかった。だがその二日後、誰かに使いを頼まれた E 家の長男が M に調味料を要求すると、一袋を手にして出ていった。誰が要求してきたのかと筆者が尋ねると、M は「C 家夫人よ」と答え、ため息交じりに「ヤダルガータエ...〈Yadargaatai: 疲れる、面倒くさい〉」とこぼした。それでもやはり、調味料が見つかったしまった以上、年長者でもある C 家夫人の要求を拒否することはできなかった。

事例 4-36 で M の甥 T が求めたのは、ゲルの外側の覆いを押さえている縄の下部に結わえられた重しであり、ゲルの構造を支える重要なパーツである。甥かわいさに M が許可したため重しはもっていかれたが、その後 E の知るところとなり、結局元の場所に戻された。

「ヤダルガータエ」と M が思わず本音をもらしていたように、モノを他人に融通するのは、作業が中断したりして面倒なことであると E も述べている。それでも、往来の頻繁な親戚間においては、交渉がもちかけられた時点で、対象のモノが手元にあれば乗り気であろうとなかろうと融通することが前提となっている。また、交渉をもちかける以前に互いが何をもっているか、どこに配置しているかという情報が共有されているといえる。

2) 共営世帯間

次に、共営世帯間の交渉をみてみたい。調査期間に E 家が共営した相手は G 家、A 家、B 家、C 家であったが、G 家以外は親戚でもあるので、ここでは G 家との交渉事例をあげる。

事例 4-37

M がゲルの掃き掃除をしていると、共営世帯 G 家の夫がやって来て「桶はあるか？」と尋ねた。M は「ない」と即答したが、立ち去らずにいる G 家の夫を振り返って「何に使うの？」と聞き返した。彼が「頭を洗おうと思って」というのを聞くと、ベッドの下に仕舞っていたブリキ桶を取り出して渡した。（2009 年 9 月 8 日）

事例 4-38

M がトランクから子ども達の衣類や端布を取り出していたので、どうするか尋ねると、傷んだので焼き捨てるという。ダルハン市に住む親戚から送られてきたボストンバッグの中からも、要るモノだけを取り、残りの古着や端布は焼却処分しようとして選別していた。そこへやって来た G 家夫人が、床に置かれた布の山を M が捨てようとしているのを知ると、「こんな新品の布、捨ててどうするの?!」と使って使えそうなきれいな布を数点抜き取った。それらを、M が端布をいれて燃やそうとしていた透明のプラスチック袋に入れた。「こんないい布捨てるなんて!」、若い人はモノの価値がわからないのかしらねなどと G 家夫人がぶつぶついいながら布を取っているのを、M は微妙な表情で見ながら、「別に、使わないし…」と小さな声で返事をした。（2009 年 8 月 30 日）

事例 4-39

M がウマの搾乳に出ている時に G 家夫人がやって来て、「肉用のまな板をアウィー〈取ろう〉!」という。肉用まな板は夫婦のベッドの上にあったが、まな板の上にはみじん切りにされた玉ねぎと、じゃがいもの入った小鍋が置かれていた。G 家夫人は、それらを小麦粉をのばすためのまな板に移すと、肉用の方をもって行った。（2009 年 9 月 4 日）

事例 4-40

共営世帯 G 家の夫人がマッチをもらいに E 家にやって来た。買い溜めしていたマッチ箱の残量を気にして、「もう人にマッチをあげるのはやめよう」と前日に独り言のように宣言していた M であったが、やむなく一箱差し出した。マッチを受け取った G 家夫人が、帰り際に E 家の戸口脇に置かれていた薪箱から薪を数本無断で持ち出した。戸口に背を向けていた M は音で気づいたようで、戸口から顔を出すと立ち去る G 家夫人の背中に向かって、「薪取って行ったのー?!」と叫んだ。（2009 年 9 月 9 日）

事例 4-41

Mと筆者が長男を送り届けてツェツェルレグ市から戻ってくると、鏡台の上に置いてE家と一緒に使っていた筆者の目覚まし時計がなくなっていた。留守番していたEによれば共営世帯G家の末っ子が持って行ったという。EとMに「あゆみ、取り返しておいで」といわれたが、筆者はそのまま忘れていた。翌日にまた、「取り返しておいで」といわれる。(2009年9月2日)

事例 4-42

共営世帯G家の夫がE家にやって来て、筆者に向かって「トイレの紙あるか？」と訊いた。(2009年8月26日)

2009年の夏から冬にかけて共営関係にあったG家は、Eいわくホーラエ・アハ(血縁関係はないが兄のような存在)世帯であり、過去にも何度か共営していた間柄である。G家夫婦は40代で3人の子どもがおりE家より年長であるため、EもMもG家夫婦を兄、姉と敬称をつけて呼んでいる。2009年は二世帯だけで共営していたこともあり、両世帯間では、たわし、雑巾、櫛、大鍋、蒸留器、まな板、柄杓、ハサミ、マッチ、薪などの生活用具の頻繁なやり取りがあり、実質的にモノを融通し合うパートナーとなっていた。

事例の4-37、4-42で使われている、「○○ある？」という質問は、貸借の際にも譲渡の要求の際にも用いられる。対象のモノの有無に関係なく、「取ろう〈av-ya〉」や「くれ〈ög〉」といった直接的な表現を使わずにモノを要求する一般的な話法である。また、モノがあることを知っていても見えていない場合や、見えていても勝手に取れない場所にある場合にもよく使用される。ただし、回答が「ある」か「ない」かの二者択一になるので、「ない」といわれてしまうとそれ以上詮索できない。

事例4-37は、Mが掃除中で手が離せなかったので、「ない」ことにして断った事例である。それでもG家の夫が立ち去らなかったのは、ベッドの下に収納空間にブリキの桶があることを知っていたからである。遊牧民のゲルはどれも同じような空間構成になっているため、だいたいのモノの置き場所には見当がつけられる。しかも、往来の頻繁な共営世帯同士は、モノの有無や配置に詳しい。そのため、「ない」と一言で済ませることができない場合もある。この時は、ベッドの下に桶が丸見えだったため、G家の夫もたたずむという方法で交渉を続けた。それに気づいたMは仕方なく手を止めて要求に応じた。

事例4-38では、年長者であるG家夫人が高圧的な物言いでMに交渉を行っている。この事例では、対象が端布でありE家が処分しようとしているモノである。いわばゴミを取っていくことになってしまうため、価値のあるモノを捨てようとしたMをたしなめるという態で交渉に臨み、体面を保とうとしたと思われる。

事例4-39は、E家の家族が不在の時の交渉である。ゲルには筆者しかおらず、当時は両家間を行き来しているまな板が、E家のモノかG家のモノか知らなかった。G家夫人が筆

者に、「肉用のまな板を取ろう!」といった時、「そこにあるけど、使ってるよ」とベッドの方を指した。すると、G 家夫人が勝手に野菜を移して持ち去った。搾乳から戻った M にまな板のことを伝え、どちらの家のモノなのかと尋ねると、「うちのモノよ〈manaikh〉⁴²」というものの気にする様子はない。無断の持ち出しは泥棒行為とみなされる危険があるが、筆者の面前で堂々で行われたのでそれには該当しない。

しかし、まな板が G 家に行くことによって E 家の夕食作りが中断したり、アイラグの蒸留用に大鍋が貸し出したされたまま、夕食作りができないということが何度かあった。このような時に E のいう、モノを融通することによる不便さ、面倒くささが実感される。

事例 4-40 から事例 4-42 は、年長世帯 G 家との交渉に E 家が抵抗している事例である。事例 4-40 は、マッチをもらいに来た G 家夫人が黙って薪をもって行こうとした事例である。共営する G 家夫人は M がナイマーからマッチをまとめ買いしていたことを知っており、M はマッチを「ない」といって断ることをしなかった。薪を手にしち去った G 家夫人に対し M が声をあげたのは、薪の返還を求めるためではなく、無断の持ち出し行為に抗議するためである。黙って持ち去ったことにこちらは気づいており、今後は一声かけるべきだと警告したのである。

事例 4-41 の目覚まし時計は、E と M がかわいい時計だといって愛用し、夫婦のベッドの側にある鏡台の上に置いていたモノであった。子どもの仕業とはいえ、取っていくという行為自体が交渉になるので、G 家の無断借用を放置しておく、相手が黙認されたと誤解する可能性がある。また、損壊や遺失によって回収不可能になる危険もある。それを心配した E 家夫婦が、所有者である筆者に奪還するよう促した事例である。返還を口頭で要求するか、モノを取るという行動によって移動には応じないという態度を示すこと（＝交渉）が必要なのである。

事例 4-42 で、G 家の夫は E 家の人々ではなく筆者にだけ尋ねている。これは少し前に同じ要求をした際に、E が「ない」と答えたことを反映している。実際にはホイモルに置かれた戸棚の上の写真立ての裏に紙はあったが、戸口からは見えない位置であった。仮に見えたとしても E がきっぱり「ない」と答えた以上、交渉に応じる気がないことは明らかである。E は G 家の夫が情性的に求めて来たことを見抜いていた。そこで、G 家の夫は紙を持っていることが自明であり、断らないであろう筆者に狙いを定めたのである。

このような交渉実践から、共営世帯はモノの調達に際してお互いを当てにできるものの、交渉のタイミングが悪かったり、強引過ぎたり、本当は自家にあるにも関わらずわざと他家のモノを要求していることがばれている時などには、「ない」といって突っぱねられることもあるとわかる。その一方、共営世帯は互いの動向（中心部へ買い出しに行った、ナイマーからいつ何を購入したなど）やモノの移動（誰と何をやり取したか）をある程度把

⁴² 所有の単位は核家族である。居候や親戚などを含め、マナエハン〈manaikan〉という言葉で、「我々の者」という広い範囲に家族関係を拡大する概念もあるが〔東郷 2011: 1〕、所有の単位はあくまで、核家族である。

握し合っているため、モノの存在が明らかなのに、「ない」といって要求をかわした場合には、陰で「嘘つき」と嘲笑されることもある。

3) 友人・知人間

最後に友人・知人間で行われた交渉の事例をあげる。E の兄である B 家と共営した 2012 年の夏営地において、事前の交渉がうまくいかず近くに宿営することになった準共営世帯の X 家と J 家もここに含まれる。X 家の夫は 60 代で妻と 4 人の子どもがいる。J 家の夫も 60 代で 50 代の妻と 3 人の子どもがいる。サントで遊牧をしてきた彼らと E 家は旧知の間柄であるが、特に親しいわけではないという。

筆者は調査の度に菓子類を土産として E 家の共営世帯や親戚に配っていたので、今回はどの世帯に配ればよいかと E 家に相談したところ、「いつも配っている親戚にあげればいいよ」、「〔この夏営地では〕よく知らない世帯と一緒にいるから、関係ない世帯にはあげなくていい」という答えが返ってきた。特別親しくないとはいえ、共営世帯の次にアクセスに便利な場所に宿営していることから、この二世帯とも往来があり、モノをめぐる交渉が行われた。

事例 4-43

準共営世帯 X 家の末娘が E 家にやって来て、「砂糖の袋〔厚手のプラスチック袋〕を取ろう」という。母親の使いで来たことを聞いて M が、夫婦のベッドの敷布団の下からプラスチック袋を取り出し、「砂糖のじゃないけど、米の袋だけど」といって手渡した。(2012 年 8 月 2 日)

事例 4-44

準共営世帯 J 家の夫人が、「カニスタル〈kanistor: 注水口にキャップの付いたボトル容器〉ある?」といって E 家にやって来た。M は「ない」といって断ったが、「お茶を入れてあげて」と筆者にいうので、J 家の夫人が好きな砂糖入り紅茶を用意する。(2012 年 8 月 2 日)

事例 4-45

共営世帯 B 家の夫人が E 家にやって来た。そのあとすぐに準共営世帯 X 家の夫人が E 家にやって来てベッドに腰を下ろすと、「カミソリ刃ある?」と M に声をかけた。アイロン掛けしていた M は、「B 家夫人のところにあるよ」と答えた。それでも B 家夫人も X 家夫人も動こうとしないので、M は作業の手を止め、仏壇の引き出しに入れてあったカミソリ刃を取り出して X 家夫人に渡した。(2012 年 8 月 4 日)

事例 4-46

準共営世帯 X 家の長男の婚約者 XQ が E 家を訪れていた。XQ は仏壇の横に置かれていた M の化粧ポーチに興味を示し、「見ていい？」と M に確認した。中身を次々と取り出し、気になったアイシャドーを自分につけてみて、「わたしの肌に合う」と告げた。M が「それはあんまり使わないのよ」と言ったため、XQ がもらい受けることになった。「代わりのモノを今度都市〔UB〕から来る時もってくるね」という XQ に対し、「どんなモノを使ってるのかまだ見せてもらってないわ」という M。XQ は X 家に戻ってフランス製のシャネルのアイシャドーを持ってきた。M はそれを自分に塗ったあと、自分の化粧ポーチの置場所へと持って行って置いた。それを見た XQ は、そのアイシャドーが高価なモノであるということをさり気なく強調しつつポーチの方へ歩み寄り、「今度、都市から来る時に持ってくるからね」と念押しして、アイシャドーを取り返すとポケットに仕舞った。（2012 年 8 月 2 日）

事例 4-47

E 家に準共営世帯の人々が集まってトランプをしているところへ、この夏は一世帯で宿営している G 家夫婦がやって来た。G 家夫人がその場にいる X 家、J 家の人々に向かって「ネグジ〈通話カードもしくは通話可能度数〉ある？」と尋ねたが、誰も何も答えなかった。すると夫人は「全然なくて、どうしようかと思ってるのよ」と重ねて全員に聞こえるようにいった。（2012 年 8 月 5 日）

事例 4-48

地元の青年 JN がバイクで E 家を訪れ、E に猟銃のスタンドはないかと尋ねた。その時 E は「ない」と答えた。そのあともしばらく二人は会話を続けていたが、そのうち JN は帰って行った。翌日再び訪れた JN は、E と交渉しスタンドを持って出ていった。（2012 年 8 月 4 日）

事例 4-49

顔面から水を滴らせて E の友人 BR 家の夫が E 家にやって来た。M に「タオルある？」と BR 家の夫が聞くと、居合わせた B 家夫人が「あるに決まってるでしょ！」という。ゲルを見回したがタオルが見当たらなかったのも、M が段ボール箱に収納していた新品のタオルを出してくる。新品なのを見た BR 家の夫は、「お～、汚くなってしまうよ、もったいないよ」と一旦躊躇したもの、「でも、M が〔貸して〕くれたんだもんね。茶色くなってしまうぞ、ほ～らね。でもここまですんなら一緒か」といいながら顔と頭を一気に拭いた。（2012 年 8 月 4 日）

事例 4-50

M が市場で買ってきた粒状の殺蠅剤をゲルの中で使用していたところ、友人の BR 家夫婦が訪ねてきた。殺蠅剤の周辺に大量の蠅が死んでいるのを見て BR 家夫人が、「多めに買ってないの？ 余ってるのあるんでしょ？」と尋ねたところ、M は「なくなった」と返答した。（2009 年 9 月 3 日）

事例 4-43 から事例 4-46 は、準共営世帯との交渉の事例である。事例 4-43 では、準共営世帯 X 家の末娘が母親から言われた通りに伝えたであろう「砂糖の袋」という要求を聞いて、M は「何に使うの？」と質問し、厚手のプラスチック袋が必要だということを確認して、厚手の米の袋を渡している。この事例のように、対象のモノが余分に手元にあり交渉のタイミングがよければ、何らかの形で要求に応えようとする。

事例 4-44 では、J 家夫人の求めるモノが E 家にはなかった。しかし、わざわざ紅茶（通常の来訪者には乳茶）を出してもてなしており、年長者の J 家夫人を客人として扱っている。

事例 4-45 は、アイロンがけの作業中にカミソリ刃を求められたので、手が離せないという状況を見せたうえで、他家に融通させようとしてできなかった事例である。共営世帯 B 家へもらいにいくようにと X 家夫人に示唆することによって、居合わせた B 家夫人にも交渉に応じるように水を向けた。しかし、X 家の夫人はベッドに腰を落ち着けたままで動かず、B 家夫人も何の反応も示さないの、あきらめて M が対応した。

当初は代替案を提示して断ろうとしている様子が窺えるが、これは M が物惜しみをしているからではなく、タイミングが影響している。朝から晩まで家畜の世話と家事を行いながら、合間に来客の応対もしなければならない。一日に数十件にのぼる人の往来があると、家事を行う時間が制限されてしまうため、時間を確保するために交渉を避けようとしたのである。

事例 4-46 は、準共営世帯 X 家の長男の嫁 XQ が交渉によって化粧品を手に入れた一方で、M から無言の交渉をもちかけられていた事例である。XQ のアイシャドーを自分の管理下に移すという行為によって、M が貸借あるは譲渡を要求したのである。直前に M が自分のアイシャドーを XQ に譲与していたため、XQ のアイシャドーを反対給付とみなしていた可能性がある。XQ を狼狽させた M の行為は結果的に、XQ に新しいモノを M に渡すという約束をさせることに成功した。

日常生活において使用頻度の高いモノであれば、行き来しやすい共営世帯や近くに宿営する親戚に交渉をもちかけるのが普通である。それが、わざわざ友人、知人のところを選んで来るということは、共営世帯で調達できなかったモノか、特定の人しか持っていないモノ、近くまで来て急に必要になったモノということが想定される。

簡単に入手できない特別なモノであるなら、なおさら所有者は手放したくないであろうし、要求者が遠方からやって来ている場合は、渡したあとで急な必要が生じたり、返却が遅れたりした場合に、取り戻しに行く手間がかかる。したがって、特別なモノをめぐる交渉には時間をかけて相手を説得することが必要となる。

事例 4-47 のネグジ〈通話カード〉は、中心地の商店などに行かなければ売っていないので、簡単には手に入らないモノであるといえる。商店でネグジを購入する以外には、同じ携帯会社の携帯電話からネグジ〈通話可能な度数〉を指定の電話番号へ送ってもらうという方法がある。G 家夫婦は E 家が携帯電話をもっていないと知っているので、対象者は E 家ではなくそこに集まっている近隣世帯の若者たちである。しかし、ネグジがなくなると簡単に入手できないのは他の人々も同じである。あるかと問われて、もし「ある」といってしまえば、融通しないわけにいかなくなり、「ない」と答えてしまうとすぐに嘘がばれてしまう。そのため、聞き流すという態度によって交渉に応じる気がないことを示したのである。

事例 4-48 の猟銃スタンドは、E が自分用にカスタマイズした一点モノである。狩りに欠かせない重要な道具であるため、一度目の交渉には応じなかった。「ない」と答えているように、大事な猟銃とスタンドは普段からホイモル北西側の家具と組壁の隙間に見えないように収納されている。だが、要求者の JN もそんなことは百も承知である。E がもっているとわかっているので、わざわざ交渉に出向いてきたのである。粘り強く交渉することで、相手の信用を得られれば入手できることもある。

事例 4-49 は、首から上がずぶ濡れの人を何とかしてやらねばならないという状況的要請と、タオルがあって当たり前といい放った B 家夫人の手前、「ない」とはいえない場面である。いつもは金属製ベッドの端にタオルがかかっているのだが、誰かが持って行ったのか、見当たらなかった。そのせいで M は新品をおろさなければならなくなった。新品のままなら贈答用にもできたが、やむを得ず日常使いにおろした。

事例 4-50 は、たまたま訪れた先で欲しいモノを見つけて交渉している様子である。乳製品を加工している夏から秋の間は、ゲルの中を大量の蠅がぶんぶんとうるさく飛び回り、そこらじゅうに糞をつける。M がツェツェルレグ市の市場で購入してきたこの殺蠅剤は非常によく効き、菓の周りには何百匹もの死骸の座布団ができていた。それを見た BR 家夫人がものすごい勢いで交渉を始めた。実際には殺蠅剤は使い切っておらず残されていたが、E 家にもまだ必要であった。しかも、ツェツェルレグまで行っての再入手は難しいため、存在を否定して守りに徹した。

このような事例から、友人・知人間の交渉においては、交渉が成立するための二つ目の条件である、対象のモノが特定されていることが親戚や共営世帯に比べより重要になるといえる。突発的に始めた交渉のように、あるかないか曖昧な状況で要求しても、「ない」とかわされてしまう可能性が高くなる。なぜなら、事前にモノの存在を把握していないということは、モノの有無や所在に疎いと判断されてしまうからである。

本節では、親戚、共営世帯、友人・知人という社会関係を軸にそれぞれの交渉の展開をみてきた。その結果、親戚間には多少の不便は顧みずモノを融通しようとする傾向があり、特に年長者からの要求には逆らえないということがわかった。他方、共営世帯との間では、年功序列に縛られはするものの、状況によって要求を退けることもできる。ただし、共営

世帯の場合はお互いがもっているモノをある程度把握しているので不用意に「ない」とはいえない。この点が、友人・知人間と異なっている。友人・知人間であれば、共営世帯に比べ対象世帯に出入りする機会が少ないので、共営世帯ほどモノの動向に詳しくない。それゆえ、ないといって退けることも容易である。

そもそも共営世帯というのは、季節ごとに組み替えられるものなので、共営期間が過ぎれば友人・知人間に戻る。したがって、共営世帯と友人・知人との差は、物理的な近さと頻繁な往来によって互いの生活世界にあるモノの動向をより正確に把握しているか否かにある。つまり、友人・知人間では社会関係が交渉の成否を決定づけているのではなく、対象者のもつモノの情報を多くもつ者が交渉を有利に進めることができるのである。

第3節 交渉にみる情報量の偏在

交渉を始めるための二つ目の条件として、モノが特定されていることをあげた。モノを特定するためには、対象者がどのようなモノをもっているのかを知る必要があり、モノの情報を得るためには、対象者にアクセスしなければならない。友人・知人間において交渉の成否を決定づけているのは社会関係ではないと第2節のまとめで述べたが、対象者にアクセスするためには、両者間に何らかの社会関係が築かれる必要が出てくる。

そこで本節では、サントの遊牧民が筆者に対して行った交渉を事例にあげて、筆者との社会関係が交渉の内容にどのような形で影響したのかを紹介し、交渉に先だってモノの情報を入手することがいかに重要かということを提示する。

4-3-1. 情報の傾斜分布

彼らの世界に身をおく筆者も当然のごとく交渉の対象となった。日本という遠い異国から来て住み込んでいるというだけで興味をもたれ、E家を訪れた人々の中には、「スパイ⁴³か？」と冗談交じりに小声で家族に訊いている人もいた。面白そうなモノをもっているだろうと思われていたため、E家に家族以外の人々がいる時に筆者がカバンに手を伸ばすと、一斉に注目が集まった。

調査中筆者には、E家をはじめ、E家の親戚、共営世帯、準共営世帯、面識のある人、面識のない人など、さまざまな人物から100件以上におよぶ交渉がもちかけられた。その中から筆者との関係性、距離感が異なる人々との交渉の事例を抽出したものが以下である。

1) E家

⁴³ tagnuulch

事例 4-51

筆者が使っているナイフを日頃から「かわいいナイフだ」とほめていた E が、「そのナイフ、日本では何に使ってるんだ？」と尋ねてきた。「特に何にも使ってない」と答えると、「じゃあ、置いていけ」という。「次に来る時までおれがタルバガンをさばくのに使うから」と説明した。（2010 年 6 月 8 日）

事例 4-52

筆者が新調したハット帽に E が興味を示す。手に取った帽子をじっくり調べていた E が、「こんな帽子を探していたんだ」という。「〔おれみたいな〕体の大きな人間には鍔の広い帽子が似合うんだ」と笑いかけ、「いくらで売ってくれる？」と売却をもちかけてきた。筆者が「いくらで買う？」と聞くと「いくらで売る？」と聞き返してくるので、「5,000 でどう？」と提案すると、「うん」といってその場で現金をくれた。調査を終えてここを去る時に帽子を渡すと約束した。（2011 年 5 月 26 日）

事例 4-53

E が筆者のブーツを手に取り丹念に調べながら、「本当にいいブーツだなあ。これ〔日本の〕コミース〈komiss: 中古品取扱い店〉で買ったっていったな？ おれみたいな男物のサイズもあるのか？」という。「〔このブーツは〕革が厚くて丈夫そうだ。ナイマー〈naimaa: 取り引き〉しないか？ 売ってくれないか？」と訊かれたので、誰が履くのかと尋ねた。すると、「2、3 年もすれば Z〔長男〕にぴったりになる、な？」といって E が M を振り返る。M も同意する。（2012 年 8 月 5 日）

事例 4-54

筆者が着替えようとして取り出した T シャツを一目見た M が、「これ、〔ここに〕置いてく？！」と飛んでくる。6 月 10 日に開催される地域の祭りに着て行くのだという。「でも、脇の所に小さな穴が開いてるよ」と筆者がいうと、「気づかない、気づかない」といって戸棚に仕舞った。共営世帯 B 家の夫人がやって来ると、「あゆみの T シャツもらったの」と報告するので、「いやいや、強奪されたんよ」とふざけていうと二人は笑い、「それをわたしがさらに奪うわ」と B 家夫人が笑いながらいった。（2010 年 6 月 6 日）

事例 4-55

9 月の新学期を控えた E 家の長男 Z が、「学校に行くから金をくれ」と筆者にいう。「なんでやねん」と答えて取りあわなかったが、しばらくするとまた「金をくれ」といわれる。「UB で新学期用の筆箱とボールペンを買ってきてあげたやろ」という筆者と Z のやり取りを、M が黙って見ている。すると今度は、「うちの学校の先生に何か

あげるの？」と Z が訊く。「なんで？」と訊き返すと「別に」というので、「モンゴルでは先生に何かあげるん？」と尋ねてみた。はじめ「ううん」といったが、「あ。あげる。乳製品とか」と答えた。（2009 年 8 月 30 日）

事例 4-56

筆者が記録をつけている隣で E 家の次男が絵を描いていた。まったく色が出ていない中国製の色鉛筆の代わりに、持参したクーピーを貸してやると楽しそうに描きはじめた。すると、「これをアウィー〈取ろう〉！」と言い出した。「やらん」と答えると、「今度来る時をもって来て。二つをもって来て」という。「なんで二つなん？」と訊いてみたが本人もよくわからないらしく理由は答えなかったが、「約束したぞ！」と一方向的に交渉をたたもうとした。筆者が断ると、「どうして？」と尋ねるので、「じゃあ、クーピーの代わりに、前に頼んでたキャラメルと赤いリンゴはあきらめるな？」と訊くと「あきらめる」という。そして、「クーピーよりいいモノ、二つをもって来て」といった。この一連のやり取りを M が耳をそばだてて聞いていた。（2009 年 9 月 10 日）

事例 4-51 から事例 4-56 までは、E 家と筆者の交渉である。対象とされたモノは、筆者が携行していたナイフ、帽子、ブーツ、カバンに入れて持参した T シャツ、現金、クーピーである。帽子とブーツ以外は、E 家の外に持ち出したことがなく、ナイフの他は E 家の家族しかその存在を知らなかった。ナイフに関しては、E の主張に一理あると思ったものの置いてくることはしなかった。ナイフは需要が高く盗難に遭いやすい。また、ヤギの頭蓋骨を叩き割るなど使い方によっては大きな負荷がかかる。あとで回収できたとしても原状が損なわれている可能性が高いと判断した。筆者が乗り気でないのを見てとると、それ以上求めることはしなかった。

事例 4-52 の帽子の売買は、E が一年越しで交渉してきた粘りの成果である。2010 年から繰り返し筆者に帽子を売却するよう求めていた。E は筆者のハット帽を被って、「軽いので売ってくれ」といったり、「あゆみのは柔らかくて折りたためて持ち運びに便利なんだよ」とジェスチャーを交えて必要性を訴えたりしていた。10 年以上も経っている古い帽子なので売るわけにはいかないとその時は断ったが、代わりに UB で新しい帽子を購入した。E の交渉に応じる用意で被って行ったのがこの事例の帽子である。事例 4-53 も、売却をめぐる交渉である。彼らが「ナイマー〈取り引き〉」という場合は、貸借ではなく、現金、乳製品、家畜などを対価として所有権の移譲を求める時である。

事例 4-54 の T シャツは、この時の調査で初めてもってきたモノであった。それに気づいた M が気に入る、置いていくように促すという交渉によって譲渡を求めたのである。手に入れたという報告を受けた B 家の夫人が、「奪う」と冗談めかしていつていたが、2012 年

の調査時にはツェツェルレグに住む M の姪 O に本当に奪われていた〔事例 3-28 参照〕。M が T シャツを入手したことを知る人物であれば、交渉をもちかけることは当然可能である。

事例 4-55 と事例 4-56 は E 家の兄弟による交渉である。兄弟が筆者に現金やモノを要求している様子を、M は注意深く窺いつつも決して口を挟まなかった。普段は子どもらの自主性にまかせているが、親戚にもらう新学期の準備金に関しては、しっかり指示を出していた。就学中の児童が新学期を迎える際には、親戚を中心に周囲の大人が現金を渡すことになっている。E 家でも、E の甥 N に対して M が、「子どもが学校に行くからお金ちょうだい！」と要求していた。甥はごによごによ言い訳しながらバイクで走り去った（2009 年 8 月 23 日）。また、親戚 C 家を訪問して帰って来た長男 Z に、「学校に行くって行って、お金もらったの？」と M が尋ねると、「くれなかった」という。すると M は、「出発前に〔また〕行って、いうのよ？」と Z に指示した（2009 年 8 月 27 日）。

年長者など直接的に要求しにくい相手、モノ、タイミングに際しては、子どもや第三者を交渉の代理に立てることも行われている。おそらく、筆者に対する現金の無心も M の指示があったものと思われる。

他方、弟 U によるクーピー、もしくは「クーピーよりいいモノ」の交渉は自発的になされたものである。E 家の子どもに限らず、彼らは幼い頃から自分の欲しいモノは交渉によって手に入れることを学んでいる。以前、E 家にやって来た共営世帯 G 家の末っ子（4 歳）がアメをもっているのを見た U（当時 5 歳）は、「見ろこれ、ほらいいだろ？」とキャラメルが入っていたサイコロ型の空箱を見せつけ、「これをあげるから、アメを二つくれるか？」と交渉をもちかけていた（2009 年 7 月 29 日）。交渉は失敗に終わったが、彼らはこのような交換によるモノのやり取りを、大人に倣いナイマーと呼んでいる。

2) 親戚世帯

事例 4-57

筆者が持参していた色鉛筆の缶ケースを見た共営世帯 A 家の夫（E の甥）が、「おれにくれ！」という。ケースだけ何に使うのかと尋ねると、「巻煙草を入れるのにぴったりなんだ」と答え、「この大きさ、この薄さがまさに煙草入れに丁度いいんだ。な、だからくれ」という。それならば、換わりの容器をよこせと筆者が要求すると、「袋ならある」といって塩の入っていた厚手のプラスチック袋を持ってきて、開口部をきれいにハサミで切ってくれる。筆者に「ありがとう」というと缶ケースを持って出ていった。（2010 年 1 月 20 日）

事例 4-58

E 家にやって来た E の甥 A が筆者の使っていたナイフを見せてくれという。手に取ってじっくり眺めているので、「いいナイフやろ？」と筆者が茶化していうと、「うん。

かわいいナイフだ。いくらで買った？」と訊かれた。「15 年ほど前に買ったから忘れた。でも、気に入ってるんで、この前買った店に同じ商品があるか訊きに行ったら、もうなかった」と答えると、「もう一つあったらどうするつもりだったんだ？」と訊かれる。「買うつもりやった」というと、「おお、なら、もし見つけたら売るか？ おれに売ってくれるか？」という A。（2012 年 8 月 4 日）

事例 4-59

共営世帯 B 家の夫人が末娘（1 歳）を抱いて E 家にやって来た。「この子にあの薬を塗って」と筆者にいう。昨日ハエに咬まれたところに薬を塗るように頼まれ、「ここにも、そこにも、こけて擦りむいたところにも」といわれるままに塗ってあげていた。傷を見ると瘡蓋ができていたので、「もう大丈夫」と伝えて薬を引っ込めようとする、子どもが手を伸ばしてきた。それを見て B 家夫人は、「あら、この子それを〔薬を容器ごと〕よこせていってるわ」と筆者に注解した。（2012 年 8 月 2 日）

事例 4-60

E の義兄 F が E 家にやって来た。筆者の防寒帽を手に取ると、「こんな感じで、てっぺんが革の帽子が欲しい」、「なあ、見つけてきてくれよ」と筆者にいう。「耳が隠れるやつだぞ。耳が出てると寒くてかなわん。凍てしまう」と話し続ける。それを聞いていた M が、「その〔あゆみの〕帽子はどうなの？」と訊くと、「うん。これもいい。これでもいい」と F が答えた。（2010 年 1 月 22 日）

事例 4-61

親戚 C 家の夫人が E 家を訪れ、筆者に「歯が痛いのよ。いい薬ない？」と尋ねた。（2012 年 7 月 31 日）

事例 4-57 から事例 4-61 は、E 家の親戚との交渉である。対象となったのは、色鉛筆の容器、ナイフ、塗り薬、防寒帽、痛み止めである。防寒帽以外は、E 家の外に持ち出したことがないため、E 家にやって来て直接目にするか、E 家から聞くかしない限り、その存在を知することは不可能であった。

事例 4-57 の色鉛筆の容器は、はじめ手放す気などなかったが、普段寡黙な人が熱心に容器を語る様子が面白いので思わず交換を提案した。2010 年 6 月の調査時に容器がどうなったのか確認すると、子どもの色鉛筆の容器として E 家で使われていた。M にそれをどうしたのかと尋ねると、「A から取り返した」という。何と交換したのかと訊くと、「何にもあげてない。ただ取っただけ」と答えた。親戚で年長者で面倒見のよい E 家は、甥 A にとって絶対的な存在であるため、交渉の余地はなく要求には逆らえなかったのである。

事例 4-58 から事例 4-60 で対象となっている、ナイフ、塗り薬、帽子は、彼らがこの交渉をもちかけるより以前に、E 家において存在を確認していたモノである。事例 4-61 の C 家夫人の場合は、筆者が持参した薬類の具体的な内容は把握していないが、薬をもって来ているということは事前に知っていた。

3) 共営世帯

事例 4-62

共営世帯 G 家の夫が E 家にやってきて、筆者に対し「コーヒー、頂戴な⁴⁴！」といった。もう一つしかないからあげられないと答えると、「頼むよ⁴⁵」といいながら揉み手を作って下から見上げる仕草をした。(2009 年 9 月 12 日)

事例 4-63

E 家を訪れていた共営世帯 G 家の夫人が筆者の履いていたブーツ(事例 4-48 とは別物)を見て、「いい靴履いてるわね」といって褒め始める。UB の市場で買った中古品だと説明すると、デザインや品質が非常に気に入ったので売って欲しいという。サイズが合うかどうか試したりはしないのかと訊くと、「履かなくても合うってわかるわ」といい、調査を終えて首都に戻る際に「ナイマーしましょう」といわれる。(2009 年 8 月 30 日)

後日 G 家夫人が E 家を訪れ筆者のブーツを試着し、「ぴったりよ」という。そして側にいた M に「いい靴よね？」と話しかけると、M も「本当にいいわね」と相槌をうつ。「秋にちょうどいいじゃない？」という G 家夫人に「夏でも大丈夫よ」と応じる M。(2009 年 9 月 2 日)

事例 4-64

就寝の支度をしていると、共営世帯 G 家の息子が E 家にやって来た。M に「お母さんが薬欲しいって言ってるって、あゆみ姉さんに伝えて」と頼んでいる。M に「自分で言いなさいよ」といわれ、筆者のもとへおずおずやって来ると「お母さんが横になれないって」という。(2009 年 9 月 2 日)

事例 4-65

招かれて G 家を訪れた筆者に対し、G 家夫人が夫の症状について話し始める。肛門から出血して体力が急激に落ちているので、「何かいい薬はないか？」と聞かれたが、自分は医者ではないので全く分からないと答えた。その四日後、G 家夫人が E 家にや

⁴⁴ ögööch

⁴⁵ Guij baina.

って来た。草原から戻った筆者を G 家夫人と E が戸口で待ち受け、再び G 家の夫の症状を説明し、今度は E と二人がかりで「いい薬はないか？」と筆者に要求した。（2010 年 1 月 31 日）

事例 4-62 から事例 4-65 は、E 家の共営世帯 G 家との交渉である。対象は袋入りのコーヒー、ブーツ、薬である。G 家の夫は頻繁に E 家を出入りしており、お茶の代わりに M が（筆者の）コーヒーを勧めたこともあり、筆者がコーヒーを持参していることを知っていた。

「頂戴な」、「頼むよ」というのは非常に率直な懇願の言いまわしであり、コーヒー一杯に対して大仰な表現を意図的に使っている。周囲の笑いを誘いながらのおねだりであった。

事例 4-63 のブーツはいつも身に付けていたので、誰もが見て知っていた。G 家夫人から最初の交渉をもちかけられたあとで、手放す気がないことを筆者は M に伝えていた。ところが、G 家夫人が試着に訪れた際には M も積極的にブーツを勧める側に回っていた。交渉は成功するとわかっているからもちかけるのではなく、ダメ元でも交渉することに意味がある。そのブーツが入手できなかったとしても、筆者に対して G 家夫人はデザインの好みを伝えているため、今度見つけて来るようにと次の交渉をもちかけることができるからである。事例のブーツはかなり本気で狙われていたが、UB で暮らす G 家の娘から送られてきた荷物の中に女性用のブーツが入っていたため、G 家夫人からの交渉はぴたりと止んだ。

事例 4-64 と 4-65 は、どちらも薬を対象としている。直接見せたことはなかったが、筆者が薬をもっていることは共営世帯も知っていた。筆者と直接交渉し薬を得ることが難しいと判断したため、筆者に対して影響力をもつ E 家の成員を仲介に立てるという方法で交渉をもちかけている。

4) その他の世帯

事例 4-66

E 家に準共営世帯 X 家の夫がやって来て、M と話をしながら、筆者に目を合わせることなく聞えよがしに、「あゆみから頭痛薬でももらおうか。頭が痛くて仕事ができないよ」という。（2012 年 8 月 2 日）

事例 4-67

近くの宿営地から E 家にやって来た M の遠縁にあたる CA 家の夫人が、ベッドに腰掛け M と話をしながら辛そうに肩に手をやり、「肩こりがひどいのよ」とつぶやいた。（2009 年 8 月 29 日）

事例 4-68

E が、「今日はおまえに会うために人が来る」というので、一体何の用かと尋ねると本人に聞けと言いついて残して出かけた。実際に E の知り合いだという男性が筆者に会いにやって来た。以前、観光客用宿泊施設の近くのゲルを E と訪れた際に一度話したことがある人だった。「頼みがある⁴⁶」というので、「頼みって何?」と単刀直入に訊いてみたところ、「まず知り合いになろうよ。おれは首都に住んでる。あなたにモンゴルで必要なことがあればおれが何とかしてあげる」といって丁寧に自己紹介を始めた。「子どもが五年生になる。だからコンピュータを買いたいんだ。日本では安く手に入ると聞いた。いくらくらいだ?」と尋ねられた。筆者がラップトップかデスクトップか、どのメーカーかなどと質問すると、「詳しい話は UB でしょう。電話番号を教えてください」という。(2009 年 9 月 2 日)

事例 4-66 と事例 4-67 は、第三者との会話を通して間接的に交渉をもちかけている事例である。事例 4-66 では、準共営世帯 X 家の夫が、面と向かっての要求を避け、筆者が聞き流すか応えるか反応を探っているようであった。事例 4-67 では、M の遠い親戚でありかつて共営したこともある CA 家の夫人により、肩こりがひどいという状況だけが提示され、一見何が要求されているのかわからない。CA 家夫人のこの発言を聞いた M が、無言で筆者の方に顔を向けてきたことで初めて、筆者の持っている鎮痛剤を要求しに来たということがわかった。筆者と知り合って間がない場合や交流が少ない場合に、このような間接的な交渉スタイルが用いられた。

薬については、E 家以外の人に直接見せてはいなかったが、初回の調査以降、筆者が応急手当の用具と薬をもっているということが、親戚、共営世帯、準共営世帯、かつての共営世帯にも知れ渡っていた。その結果、「膝が痛い」、「腫物ができた」、「傷が膿んだ」など症状を伝えにやって来る人が増えた。

事例 4-68 は、挨拶しか交わしたことがない人物との交渉である。対象は、筆者が持参したモノでさえない。つまり、彼は筆者が何をもっているかということは知らず、E 家に日本人がいるということを知ってやって来たのである。交渉をもちかけモノを融通してもらうためには、当事者間に社会関係が結ばれている必要がある。この男性はまず知人であるという社会関係を活用して E に伺いを立て、筆者の庇護者と目されている E から筆者との交渉権を獲得している。それによって、交渉の条件の一つ目である対象者へのアクセスを確保したのである。だが、単に知り合ったというだけでは不十分である。本人もいきなり日本製のコンピュータを融通してもらうつもりではなく、しきりに自分と筆者はもう「友人だ」ということを強調していたことから、交渉に先立つ関係作りが目的であったと思われる。

以上にあげた事例を総括すると、E 家、親戚世帯、共営世帯、その他の世帯それぞれの間には、筆者のモノに関する情報量に差があることがわかる。交渉の対象となったモノを見

⁴⁶ Guikh yum baina

ればその差は歴然である。E家は筆者のカバンの中にあるモノや薬の種類に至るまで把握している。直接目でみて確認したモノであるため、交渉も直接的、具体的である。次に、E家の親戚世帯、共営世帯になると、E家を訪問した際に目撃したか、あるいはE家の家族から聞いた情報に絞られる。親戚同士は共営世帯にくらべ多面的な繋がりをもっているのも、その分E家から提供される情報も多くなる。

他方、準共営世帯や面識のある人になると、直接見る機会は稀で、E家やE家の親戚、共営世帯などから聞いた「カメラがある」、「薬がある」という一部の情報に限られる。そのため、筆者に求めることができるのも、写真撮影が薬ぐらいということになる。こうした状況から、筆者の持っているモノに関する情報量と交流の深さ（社会関係）は比例するといえる。

それゆえ、知り合って日の浅い準共営世帯や面識があるという程度の人々からは、社会関係を創出するような働きかけを受けた。準共営世帯J家の夫は筆者をゲルに招きいれ、ゾドの被害や蒸留酒の作り方などを質問する筆者に快く答え、モンゴルの教育政策や若者の未来について語りあった後、「おれたちは友人になったぞ。おまえはおれの妹分だぞ」といった（2012年7月29日）。また、準共営世帯X家の夫は、X家の長男の婚約者が筆者のところへ通っていることを知ったうえで、E家を訪れた際に筆者に対し、「うちの〔長男の〕嫁と仲良くなってくれ」といった（2012年8月2日）。

もちろん、交流を深める目的がモノのやり取りだけということはないが、単純に仲良しになるという話でもない。社会関係を築き上げるために情報を交換し、築いた関係を活用してさらにその先へと交渉を進めるということが試みられる。実際に往来を重ねるうち、X家の長男の婚約者は筆者の持参したカバンの中身や日本の携帯電話などを見たがるようになり、代わりに自分の携帯電話や時計を見せに来るようになった。帰国前になると自分と夫用にペアの腕時計を日本から見つけてきてほしいと交渉してきた。

4-3-2. 情報の分配

各世帯がもつ筆者および筆者の持参したモノに関する情報量には、偏りがあることを交渉の内容から提示したが、このような偏向は既存の条件やなりゆきによってできるものと、意図的につくりだされるものがある。

E家が筆者を受け入れたことにより、E家は最も多くの情報をもつ立場となった。B家やC家は親戚であるという不変的な既存条件により、E家からの情報の分配が期待できる。また、頻繁な往来がありモノを融通し合う関係にある共営世帯も、必然的にある程度情報分配の恩恵を受ける。それによって、E家を取り巻くそれ以外の世帯との間に情報の較差が生まれることになる。

このような情報の偏りは、E家にとっては独占的に交渉を行える絶好の好機であると同時に、周囲の世帯からの分配への圧力が高まることを意味する。例えば、E家には筆者との接

触を求めて、地元の青年たちがしばしば訪れた。しかし、E 家の人々は親戚でもない若者が筆者に近づくことをよしとせず、必要以上に近づかないよう気を配っていた。そのような態度に対し不満をもった若者が、「日本人をハラムラード・バエノー〈kharamlaad baina uu: もの惜しみしているのか〉？」と M に嫌味をいった（2012 年 7 月 30 日）。ハラムラハ〈kharamlakh〉というのは、「けちけちする、もの惜しみする」という意味であり、遊牧民にとって非常に侮辱的な言葉である。ハラムラハという批判が用いられる状況について、少し事例をあげて説明する。

事例 4-69

筆者が共営世帯 G 家の息子が用意してくれたウマで出かけようとしたところ、G 家夫人が、「そんな年寄りのウマを…」といて止め、数 km 離れた B 家に子どもらをウマで使いにやり、B 家にウマを調達させ筆者にあてがった。一部始終を見ていた M が声を潜めて、「〔自家の〕ウマをハラムラード〈kharamlaad: もの惜しみして〉別の家のウマを取りにいかせたのよ」と筆者にいった。ウマをハラムラハ〈けちる〉とはどういうことかと尋ねると、他人をウマに乗らせるのが嫌でウマを人に貸さないことだという答えが返ってきた。（2009 年 8 月 24 日）

事例 4-70

ある夜、親戚の若者が酩酊状態で E 家を訪れ、酒を要求した。しかし、M がそれを拒否すると、ごねてくだを巻いた揚句、「あんたは、ハラムチ〈kharamch: どけち〉だ。あゆみはちゃんにご飯も食べさせてもらえてないんじゃないのか？」と M を中傷して出て行った。それに憤慨した M は、ゲルの中で愚痴ったあと、翌朝の搾乳時にも共営世帯の夫人に、「ハラムチといわれた」という怒りの報告をしていた。（2009 年 8 月 23 日）

事例 4-69 はウマを、事例 4-70 は酒の提供を拒否した事例である。どちらも相手を批判する際に、「ハラムラード」、「ハラムチ」という表現が使われている。ハラムチ〈kharamch〉とは「はなはだけちな」という意味である。所有の垣根を低くして限りある資源を融通し合おうとする遊牧社会において、モノの移動を妨げるハラムラハは倫理に悖る行為となる。それゆえ、ハラムチは悪徳とされ批判の対象となる。

遊牧民の子ども達はお互いに新しくモノを入手すると自慢するために、見せ合いを行う。相手に見せてといわれたのに見せない場合には、「ハラムラード〈もの惜しみして〉見せてくれない」と批難される。E 家では、シャガエ〈ヤギ・ヒツジのくるぶしの骨〉で遊ぼうとしていた近隣の子ども達から、全てのシャガエを取り上げ独り占めしようとした次男 U

を、「そんな意地汚い性格⁴⁷を出して！」と叱っており、長男 Z は人にモノをあげない人間のことをハラムチ・フン (khamch khün) というと説明していた。

このように、モノを与えないこと、見せないことによって独り占めすることは悪徳とみなされており、遊牧民にとってハラムチと中傷されることは大変不名誉なことである。したがって、周囲は「日本人をもの惜しみしているのか？」と当てこすることによって、情報の分配を促しているのである。これも交渉であり、E 家や特定の世帯だけが外国から来た珍客の情報を独占し続けることがないように働きかけている。

1) 筆者を分配

このような社会的な圧力をかわすには、二つの対策がある。その一つは特定の友人・知人に筆者を紹介することである。先に、交渉を成立させるためには、対象者へのアクセスが必要であることを述べた。筆者と交流のない人物を E 家や親戚世帯の人々が引き合わせてやることによって、筆者へのアクセス権を分配したことになるのである。事例 4-68 のコンピュータの男性がそうであり、E は仲介を承諾することによって、知人の要求に応えたのである。また、共営世帯や親戚の人々も、自分の親戚・友人・知人を伴って筆者を訪れ、「写真を撮ってあげて」といって機会を分配していた。

しかし、誰に対しても等しく分配するわけではない。例えば、映像記録用に持ち込んだビデオカメラや、デジタルカメラ、ポラロイドカメラについて、E は普段、人目につかないところに仕舞っておくようにと筆者に忠告していた。日常的に出入りする不特定多数の人々によって弄って壊されたり、盗難にあったりすることを警戒していたのと、際限なく撮影を求められないようにするためであった。ところが、遠方に住む親戚世帯を訪ねる際や、地元で祭りが開催された折には、出かける間際に「カメラはもった？ ビデオはもった？」と M に確認された。祭りの会場では、M や親戚世帯の B 家夫人や C 家夫人が、晴れ着の人々の中にそれぞれの親戚や友人を見つけると、「写真を撮ってもらおうといいわ」といって次々と筆者のもとへ連れてきた。さらに、「私たちは映像も撮ってもらったわ。あなたたちも撮ってもらったら？」と告げた (2010 年 6 月 10 日)。

地域の祭りでは、相撲のトーナメントや子どもによる競馬が行われ、主催者によって馬乳酒や菓子が振る舞われる。この日を待ちわびていた地元の大勢の遊牧民が正装して集まっていた。そのような場所で、カメラがあるのよといつて次々知り合いを連れてきては筆者に写真を撮るよう促した上、E 家や親戚・共営世帯しかその存在を知らなかったビデオカメラの話を持ち出しあっさり教えてしまった。さらに、M は遠縁にあたるという祭りの主催者のところへ筆者を連れて行き、主催者一家の写真を撮るよう指示をした。

E 家の宿営地を調査拠点にしていた筆者にとって、祭りで出会う人々の多くが初対面であった。それに関わらず、「例の日本人か？」、「おまえさんが E のところにいるという日本人か？」、「わたしは AO [地元の青年] の母親だよ。AO が家であなたのことを話し

⁴⁷ muukhai zan

ていたよ」といった声かけられた。それは、日ごろの情報収集・伝達活動によって筆者の存在が地域の人々に知られていたからである。したがって、彼女たちがとった行為は、地域における特定の友人・知人に対する、筆者およびカメラとビデオの情報分配だったのである。

このように、相手との関係によって情報の分配量や内容が異なっている。E家を出入りする不特定多数の知人に対しては、アクセスが制限されている筆者およびカメラとビデオの情報が、地元の有力者や友人といった特定の人物に対して分配された。情報をもつ人物は、相手との関係性に応じて、情報の内容や分配のタイミングを操作しているのである。

2) 筆者のモノの情報を分配

情報の偏向に対する社会的圧力を緩和するもう一つの方法に、筆者の持参したモノの情報の一部を分配するというのがある。例えば事例4-66や4-67で見たような薬の事例である。筆者と交流のあまりない世帯から、薬の交渉がもちかけられていたが、これは、E家、親戚世帯、共営世帯が薬があるという情報を分配したからに他ならない。筆者のもとへ症状を説明にしにやって来る人々が増えたのは、世帯から世帯へ情報伝達によって拡散された結果である。

ただし、ここでも、全ての情報が分配されるわけではないという点に注目すべきである。筆者は薬以外にもさまざまなモノをE家に持ち込んでいる。乾電池、ガス缶、カセットコンロ、望遠鏡、大量のトイレットペーパー（柔らかいと評判のいい韓国製）、パソコンなど交渉の対象になりそうなものはいくらかもある。しかし、それらの存在を知っているのはE家だけである。E家が他家に情報を分配する際には、他家から交渉をもちかけられたくないモノの情報を伝えない。情報が伏せられているモノは、E家と筆者だけで利用することができる。

つまり、分配される情報量とその内容はE家によって予め操作されているのである。E家の親戚世帯には少し調整した情報が配分され、不特定多数の知人には限られた情報のみ伝達される。筆者および筆者のモノの情報を独占していると非難されないように、タイミングを調整しながらボラロイドカメラ、薬、ビデオカメラの情報を開示していったのである。カメラで写真を撮ることも、多種多様な薬も、草原地域では非常に重宝され喜ばれるため、E家は地域社会に貢献すると同時に分配する情報を最小限にとどめることができる。

小結

本章では、貸借・譲渡というモノのやり取りによって、遊牧民の世帯間をモノが移動している実態を事例を通して詳らかにしてきた。モノのやり取りは当事者間の合意に基づいて行われており、その際に貸借か譲渡かということは問題にされず、必要とするモノをいかに融通するかという点に重点が置かれている。

このようなモノのやり取りが成立する過程においては交渉が不可欠となる。交渉に臨む最低限の条件として、対象者にアクセスできること、対象のモノが特定されていることが必要である。親戚、共営世帯、友人・知人などの社会関係を活用するだけでなく、対象者の生活世界にあるモノの情報をより多くもつことが交渉を有利に進める鍵となる。

しかし、筆者に対する交渉の事例から明らかになったように、E家との社会関係によって、それぞれの世帯・個人が把握している筆者の持ちモノに関する情報量には多寡がある。そのような情報の傾斜分布は、偶然によって生じたわけではなく意図的に創りだされている。情報の発信源となるE家によって、分配する内容、情報量、発信のタイミングが操作された結果なのである。

このような情報の操作は、筆者のモノに対してのみ行われているわけではなく、彼ら自身の生活世界にあるモノに対しても、同様に行われると解釈すべきである。つづく第5章において、遊牧民が自家や他家のモノの情報をめぐってどのようなやり取りを行っているのか、その実態について検証する。

第5章 モノの情報をめぐる交渉

遊牧社会においては、他家への訪問が重要な日課であり、会話を通してさまざまな情報をやり取りしている。人物の所在や動向、天候、家畜、中心地の様子など、ありとあらゆるレベルの情報が収集、伝達、拡散されていることは第2章で述べたが、そこで取り扱われる情報には他家の生活世界にあるモノの情報も含まれている。

そこで本章では、モノが情報として扱われていることを実証するために、第1節において、遊牧民が他家のモノに対して行うソニルホホ〈sonirkhokh〉、オハハ〈ukhakh〉と呼ばれる行為に焦点をあてる。ソニルホホ、オハハがどのような性質をもつ行為なのか、それぞれの行為の相違点はどこにあるのかを事例から検討する。

第2節では、第4章で提示した情報を握る人物によって情報の操作が行われている実態を例証する。ソニルホホやオハハといった情報収集行為に対し、情報を発信する側がいかなる手段を講じているのかを、E家における攻守の実践から明らかにする。

第3節では、情報がどのように利用されるのか、また、情報戦の舞台となったゲルという生活空間が、遊牧民の交渉をいかに規定し展開させているのかを検討する。そして最後に、モノの情報をめぐって行われる交渉という相互行為にどのような意義があるのかを議論する。

第1節 モノの情報収集

筆者が住込みをはじめて驚かされたのは、一日の来訪者が多いということのみならず、E家を訪れた人々が、初見のモノの存在に必ず気づいてそれに言及することであった。来訪者がゲルに足を踏み入れた瞬間に、はたと視線をあるモノに向け、「これはどうした？」とE家の家族に尋ねる場面に何度も遭遇した。来訪者の視線を集めるのは、彼らにとって見慣れないモノ、珍しいモノであり、モノ自体の新旧にはかわりがなかった。

見慣れないモノに気づくと、来訪者はそれぞれの関心にしがたって質問をしたり、手に取って材質や細工を調べたりする。このような行為はソニルホホ〈sonirkhokh: 興味・関心をもつ、驚く〉と呼ばれる。ソニルホホのもつ意味は広く、単に興味をもつといった内的な変化だけではなく、手に取って詳細に調べ、対象について知るという能動性も含んだ言葉である。したがって、遊牧民がソニルホホを意志形にして、「ソニルホイー〈Sonirkhoyo〉！」という時は、「面白がろう、驚こう、よく知ろう」というほどの意味になる。

第2章の第3節で、遊牧民が挨拶や他家の様子を尋ねる際に、「ソニン・サイハン・ヨー・バエン〈Sonin saikhan yuu baina: 何か変わった〔面白い〕知らせはあるか〉？」という表現を使うと述べたが、この「面白い、珍しい」の意を表す、ソニン〈sonin〉という形容詞と、本節で扱う動詞ソニルホホ〈sonirkhokh: 興味・関心をもつ、驚く〉は同義に属する

語である。例えば、ソニルホグ〈sonirkhog: 興味ある、物好きな〉、ソニルホル〈sonirkhol: 興味、注意、異聞〉、ソニルホルグイ〈sonirkholgüi: 面白くない、興味のない〉、ソニョーチ〈soniyч: もの好きな、珍しいものがりやの〉、ソニョーチハン〈soniuchkhan: 知識欲・好奇心がつよい、新しいものがりやの〉といったように、語頭にソニ〈soni-〉がつく単語は「興味、関心、好奇心」などに関連する意味をもった言葉であるということがわかる。

お互いの生活世界にあるモノの小さな変化も見逃さない彼らにとって、筆者が持ちこんだモノはまさにソニルホホの対象であった。客人がいない時にボストンバッグをあけると、M が側に来て「ソニルホイー！」と喋り中身をみたり、E が筆者のスーツケースをじっと見つめて、「いろいろ良いモノが入ってそうだなあ」とつぶやいたり、準共営世帯のXQ (X 家の長男の婚約者) が筆者の背後に忍び寄ってスーツケースの中身を覗き込んだりしていたことから、見慣れぬ珍しいモノへの関心の高さが窺える。

このようなソニルホホ行為は、現代にのみ見られるものではない。1253 年から 1255 年にかけてモンゴル帝国を旅したフランス人修道士のルブルクが、モンゴル人のモノに対する振る舞いについて以下のように記述している。「わずかの影を求めて車の下にすわるとそのたびに、この連中〔モンゴル人の案内人 3 人: 筆者注〕は、わたしどもの持ちものを残らず見ようとして、押しつぶさんばかりに無作法に割りこんでくるのでした」〔ルブルク 1989: 166〕。「コヤクはわたしどもを呼び、つぎのように言いました。〔一省略〕お前たちが昨日持参した祭服と書物類とを積んだ車二台は、御主人様がなかのものをなお一層よく調べたいといわれるから、儼に引き渡してくれ。途端にわたしは、コヤクが貪欲から悪だくみをいだいているのではないか、と思いました」〔ルブルク 1989: 174-175〕。

このような記録から、ルブルクの偏見を差し引いても、モンゴル人のモノに対する関心の高さが窺える。当時のモンゴル人も見慣れぬ珍しいモノを「見よう」とし、「なお一層よく調べたい」といっている。これは正にソニルホホのことを指していると断言できよう。そこで、以下では現代のソニルホホの事例をあげ、彼らがモノについてのどのような情報を収集しているのかを探っていきたい。

5-1-1. ソニルホホ 〈sonirkhokh〉

事例 5-1

E と M が A 家 (E の甥世帯) を訪ねた。ゲルに入ると M が A 家夫人に、「鏡、新しくしたの？」と訊いた。「変えてないよ」と A 家夫人が答えると、「そう？ 違って見えたけど」という M。(2012 年 8 月 1 日)

事例 5-2

E の姪 I が E 家にやって来て、M と話をしていた時のこと、ホイモルの長持の上に置かれていた箱を示して、「あれは何の箱？」と M に尋ねた。「子どものおもちゃ箱よ」と答える M。（2010 年 6 月 9 日）

事例 5-3

筆者が E 家に持ち込んだ置き時計 2 号が壊れたので、E の発案により分解し文字盤の代わりに次男の写真を切り抜いてはめ込み、写真立てとして戸棚の上に飾った。翌朝 E 家を訪れた共営世帯 B 家の兄妹は、すぐに気づくと近づいて、「これ、時計だったでしょ。作ったの？」といいながら手に取って見ていた。そのあとにやって来た M の甥 T も、ゲルに入ってくるなり写真立てを手に取り、じっくり眺めたあと元の場所に戻した。夕方になって G 家（友人世帯）と C 家（M の兄世帯）の人々がやって来ると、すぐに戸棚の上に目をやり、「写真立てなのか？」などと尋ねつつ手に取り、文字盤を照らすライトが点灯するのを何度も確認したりしていた。（2010 年 1 月 23 日）

事例 5-4

夜の 8 時頃、E 家には準共営世帯 X 家の夫人、X 家の息子と別の宿営地から遊びに来ていた OL 家〔E の友人〕の娘がいた。E 家の長男がズボンに巻いていたベルトに X 家夫人が興味を示す。「どれ、見せて」といってベルトを外させる。手に取ってじっくり調べながら「〔まるで〕銀製のベルトみたいね」という。すると向かいに座っていた X 家の息子と OL 家の娘も「見せて！」といって手に取って調べたり、試しに自分の腰に巻いてみたりして、「おお！ぴったりだから取ろう！」といってふざける。（2012 年 8 月 4 日）

事例 5-5

E 家を訪れた C 家の夫人が、筆者の履いていたトレッキング靴に目をやり、手を伸ばしてちゃんと爪先に触りながら、「湿ってないわ。私のは濡れてるのよ」という。（2010 年 6 月 8 日）

事例 5-6

筆者が調査用に E 家に持参した電灯があった。昼間はカバンの中に仕舞っているため人目に付かないが、夜の来客には存在が明らかになる。見つけた人は吸い寄せられるように手に取り、あちらこちらいじり始める。夕方に訪れた C 家夫婦（M の兄夫婦）は、「かわいい灯りだ」といって手に取ると、「どうやって点けるの？」、「何で光ってるの〔電池か充電式か〕？」、「どれくらいもつの？」、「なんで赤色の光も点くの？赤いのはどうして？」と筆者に尋ねた。（2010 年 6 月 5 日）

事例 5-7

M に頼まれ、筆者が持参した携帯用小型音楽再生機でモンゴルの音楽を流していると、準共営世帯 X 家の息子がやって来て興味を示した。「ホジャー⁴⁸〈khujaa: 中国〉のじゃないのか？」といいながら機器を手にとると、「いくら？」と尋ねる。そこへ共営世帯 B 家の夫人がやって来てベッドに腰掛けると、「もってきなさい、見たいから」という。M が手渡すと、あちこちボタンを押したりステレオから本体を引き抜いたりして調べ始める。(2012 年 8 月 4 日)

事例 5-8

筆者がつけていた防寒用耳あてを見て、E が「モンゴルで買ったのか？」と尋ねる。「日本で買った」と答えると、耳あてを手に取り構造を分析はじめ、M にどうすれば作れるかを説明した。(2010 年 1 月 20 日)

事例 5-9

共営世帯 B 家の長女が E 家にやって来た。前回の調査時とは異なるヘアバンドをしていたので、前のはどうしたのかと筆者が尋ねると、割れてしまったという。今つけているのは、冬に両親と一緒にホントの中心地に行った時に買ってもらったモノで、値段は忘れたという。すると話を途中から聞いていた M が、「誰が〔買って〕くれたの？」と尋ねた。B 家の長女は「お父さん」と答えた。(2010 年 6 月 9 日)

事例 5-10

E 家の金属製ベッドの横に置かれていた黒い大きなボストンバッグについて、筆者が M に前からあったかどうかを尋ねていた。M が「冬にもらった」と答えたのを聞いて、その場に居合わせた共営世帯 C 家の夫人 (M の兄嫁) がすかさず、「誰から？」と尋ねた。「P 老人からもらった」と答える M に、「新しいの？」と C 家夫人が再び尋ね、「お古よ、お古」と M が答えた。(2010 年 6 月 9 日)

事例 5-11

親戚世帯 C 家の夫人が E 家を訪れた。戸口を入れて左側の長持の上に置かれていたタライに目をやると、手に取ってじっとながめ、「いいね。かわいいわ」という。「私が街から買ってくると、大荷物でしょ。〔乗り合いバスの中で〕人に座られたりして着く頃には割れてしまうのよ」と身振りを交えて夫人が話すのを見て、M は嬉しそうに、「あゆみが持ってきてくれたのよ」と応じる。(2010 年 6 月 4 日)

事例 5-12

⁴⁸ 中国や中国人に対する蔑称。

新調したE家のゲルにC家(Mの兄世帯)と、友人G家の夫婦がやって来ていた。ゲルの梁を見上げてG家の夫が、「ニス塗ったのか?」と尋ねる。「ペンキにニスを混ぜて塗った」と説明するE。今度は、「小さい長持はいくらで買ったの?」とG家夫人に訊かれ、「3万〔₮〕」と答える。G家夫人は、「GT〔首都で暮らす長女〕に買ってやりたいのよ」といい、「トランクより鍵のかかる長持の方がいいわよね?」と周囲に同意を求める。さらに、「ベッドはいくら?」と尋ね、Mが「10万〔₮〕」と答えた。(2012年7月30日)

事例5-1から5-3は気づきの事例である。往来の頻繁な世帯の人々は、ゲルに入った時点で些細なモノの変化にも敏感に反応し、その変動について確認を行う。

遊牧民が逐一モノを手取るのは、材質や品質を確かめるためである。事例5-4は材質を、事例5-5は品質を目と触感で調べている事例である。履物の品質を評価する上で遊牧民が重視するのは、中に湿気がこもらないという点である。従来の革や布製の中敷でできたモンゴル靴に比べ、既製品のスニーカーなどは底がゴム製ということもあり、中に湿気がこもりやすいといわれている。靴の中が湿ったままの状態にしておくと健康に害を及ぼすと考えられており、寝るとき以外靴を脱がない遊牧民にとっては、蒸れない靴を履くことが重要となる。それゆえ、筆者の靴の爪先に触れることで、湿気のこもりにくい靴であるということを確認したのである。

このほかにも材質や品質を調べる手段としては、次のようなものがあった。Eが新しいナイフを手に入れた際に、柄の部分に歯を押しあて、表面を削るように齧った。そうすることで、柄に使われているのが本物の角であるか人工物であるかを判断することができるという。Eだけでなく、そのナイフをソニルホホしていた共営世帯や親戚の男性も同じように歯を当てて、「本物の角だ」ということを確認し合い、「いいナイフだ」とほめていた(2011年5月25日)。また、60ℓ入りのポリ容器の品質を確かめる際には、底や内側を目で調べるだけでなく、指であちらこちらを軽くたたき音を聴いて良し悪しを判断していた。ちなみに、かつて13世紀にモンゴル帝国を訪問したフランスの修道士ルブルクも、「わたしどもの召使たちがイペルペラ貨幣を一枚見せますと、かれらは、それを指でこすって見て、それが銅であるか、においで知ろうと、鼻さきへもってゆきました」〔ルブルク1989:162〕と述べており、においを嗅ぐことも材質を知る手段の一つであったことがわかる。においを意味する「ウネル〈üner〉」と価値を意味する「ウネ〈üne〉」は同一の語源をもっていることも注目値する。このように、彼らは自らの五感を活用してモノの材質や品質に関する情報を集めているのである。

五感だけではわからない情報を得る場合には持ち主への聞き取りが行われる。事例5-6では機能が、事例5-7では生産国が問われている。日本製か中国製かなど生産国の情報はモノの品質を保証する要素として捉えられている。でたらめの日本語が印字された製品を、日

本製だから質がいいはずだといって筆者に見せてくれることがあったが、中国製だと告げるとがっかりした様子で、「市場で日本製だというから買ったのに」という人もいた。

どこで手に入れたのか、誰から手に入れたのか、いくらだったのかという情報も交わされる。事例 5-8 はどこから、事例 5-9 から事例 5-11 は誰からという入手経路を確認した事例であり、事例 5-7 と事例 5-12 は、価格の情報を求めた事例である。モノを購入によらず他者から得た場合、すなわち贈与あるいは譲与された場合には、必ず誰からもらったのかということが話題にされる。事例 5-11 では、尋ねられる前に M 自ら筆者経由で得たモノだと伝えている。事例 5-10 では、誰から手に入れたのかを尋ねたあと、新品であったのか否かを確認している。これは、新品であれば贈与ということであり、特別な贈り物をされるような出来事が E 家と P 家との間にあったということが推測される。新品ではないという情報により、中古品の融通という通常のやり取りであったことが示されている。

これらの事例を総合すると、ソニルホホの対象は珍しいモノや新品に限られていないということがいえる。確かに草原地域では、テレビ、ラジオ、音楽再生機、携帯電話などの電気器具・電子機器への関心が高いため、事例 5-7 にあげた日本製の小型電子機器には興味が集中した。しかし、そのような希少品だけがソニルホホされるわけではなく、鏡、紙箱、写真立て、ベルト、タイヤ、カバン、靴など日用雑貨も中古品もすべてが対象となる。見る側にとって目新しいモノか否かが基準なのである。

そして、彼らがソニルホホによってモノから得ようとしている情報は、モノを構成する素材、備わった機能、品質、市場価格であるとともに、どのように入手したのかという入手経緯であるということがわかる。特に関心をもつのが、誰からもらったのかという情報である。どういうモノが誰と誰の間でやり取りされたのかがわかれば、当事者間の関係性を推測する手がかりとなる。また、自分が交渉をもちかける際にも、誰のところに行けば融通してもらえるかという見当をつけやすくなる。したがって、モノのやり取りがあったという出来事自体が情報となるのである。

5-1-2. オハハ〈ukhakh〉

モノの情報を収集する行為のもう一つに、オハハ〈ukhakh〉と呼ばれるものがある。オハハという動詞には、「掘る、ほじくる、ひっくり返して探す」という意味があり、一般的には「穴を掘る、地面を掘り返す」などの文脈で使用される。このオハハがモノに関して使われる際には、隠された未知なるモノを探求し把握するという意味合いになる。具体的には、戸棚、長持、箱、カバンなど口が閉じられていて中を見ることができない収納の内容物を暴くことを指す。以下にオハハの事例をあげる。

事例 5-13

ツェツェルレグ市から M の一番上の兄 K 一家がサントにやって来た。E 家に滞在することになった姪 O (K 家の次女) はプラスチック袋に自分の持ち物を入れていた。M はベッドに腰掛ける O の隣に座ると、O のプラスチック袋を手に取り中に何が入っているのかを全て確認した。中には着替えと勉強道具とボールペンが 2 本入っていた。(2009 年 7 月 31 日)

事例 5-14

E 家の金属製ベッドの下に置かれていた段ボール箱に気づいた XQ (準共営世帯 X 家の長男の婚約者) が、箱を指して M に、「見てもいいかな?」と尋ねた。M の許可が出ると、箱の中身を一つずつ取り出してはどういうモノかを確認していた。(2012 年 8 月 4 日)

事例 5-15

E 家には筆者が持ち込んだ荷物(スーツケース、ボストンバッグ、段ボール箱)が数個あり、それぞれの荷物の口を筆者が開けるたび、M が素早く側にやってきて、「ソニルホイー〈Sonirkhoyo: 面白がろう、驚こう〉!」という。開口部から覗きこんだり、手を入れて中を探ったりしていたが、子どもが同じようにしようすると、「ついて来なさんな!」、「わたしの真似をするんじゃないよ!」ときつくいい聞かせていた。(2010 年 6 月 4 日)

事例 5-16

筆者がプラスチック袋を取り出そうとスーツケースを開いていると、M がずっと側に来て、「手伝ってあげるわ」という。そして、次から次へとスーツケースの中のモノを手にとってはどういうモノかを筆者に尋ねた。ソーイングセットを見つけると蓋を開け、中身をすべて確認したあと元の場所に戻した。いつの間にか側に来ていた 9 歳の長男は、スーツケースの中に色鉛筆があるのを見つけ喜色を浮かべた。M は楽しそうに筆者の持ち物を調べながら、「こんな所で静かにしてたのねー」と初見のモノに向かって話しかけていた。(2010 年 6 月 7 日)

事例 5-17

第七回目の調査で E 家に着いて二日目の昼下がり、荷物の側に立っていた筆者に M が寄り添い、「あゆみのボストンバッグを掘りたいな⁴⁹」という。それじゃあといって筆者がボストンバッグを開くと、手を入れて何が入っているのかを一つ一つ調べはじめた。化粧水の容器を手にとると、「これは何?」といって液体の正体を尋ねた。小物入れなど口の開く入れ物はすべて開けて中身を確認したあと、「ファンデーションは

⁴⁹ Ukhmaar sanagdaad baina.

ないの？」と尋ねる。持ってきていないと答えると、ふーんという顔をし、「どんな薬持ってきてるの？」と訊く。「見よう⁵⁰！」というので常備薬を入れた袋の口を開いて見せる。すると、「胃の調子が悪いんだけど何を飲んだらいい？」というので胃薬を手渡すと、「風邪気味で体も痛い」というので漢方薬を手渡す。（2012年7月29日）

事例 5-18

G 家の子ども（5 歳）と親戚 C 家の末っ子（3 歳）が E 家にやって来て遊んでいた。E 家の次男（6 歳）は自分がやると怒られるとわかっているのに、親戚の子どもをけしかけ、「その中をあされ。掘れ！掘れ！⁵¹」といって筆者の荷物を指さした。（2010 年 1 月 28 日）

他人の持ち物に興味を示し詳しく知ろうとする点においては、オハハもソニルホホも共通している。どちらもモノの情報を収集するための行為であり、手に取って材質や品質を確かめたり機能や用途を聞き取ったりという方法も同じである。では、これらの行為は何をもって区別されているのだろうか。

各事例でオハハのきっかけとなった対象物をみると、プラスチック袋〔事例 5-13〕、段ボール箱〔事例 5-14〕、荷物〔事例 5-15、事例 5-18〕、スーツケース〔事例 5-16〕、ポストンバッグ〔事例 5-17〕である。すべてモノを収納する容器である。しかも容器自体をソニルホホしているのではなく、容器に包み隠され外側からは見えない内容物が何であるかというところに関心が向けられている。どの事例においても、オハハが開始される時点においては、中に何があるのかをオハハする側はまだ把握していない。オハハにより内容物が認識された段階において、個別のソニルホホへと移行していく。つまり、ソニルホホというのは、見えているモノを手に取って調べる手段であり、はじめから存在の明らかなモノに対して行われる行為である。これに対し、オハハというのは、覆い隠されている状態からモノを探り出して明らかにするという行為である〔写真 5-1〕。

どちらもモノの情報収集行為であるにも関わらず、事例 5-15 や事例 5-18 をみると、大人が子どものオハハを制していることが窺える。筆者が調査地に到着しまだ荷ほどきしていない時に、E 家や親戚の子ども達が荷物の周りに集まり、「これは〔前回の調査時に〕〇〇が入ってた袋だな」といって袋をつつきながら、今回は何が入っているのかを探ろうとして、大人たちに「やめなさい！」と怒られるということがあった（2010 年 6 月 3 日）。ソニルホホには寛容な彼らがオハハに厳しいのは、オハハの対象となる収納の内容物というのが、本来は他人に見せないモノ、他人が見てはいけないモノと認識されているからである。

⁵⁰ Üz'ye!

⁵¹ Ukh! Ukh!

遊牧民のゲルにある家具は主に木製で、扉や蓋がついておりこれらを閉じると密閉することができる。季節移動の際に内容物がこぼれ落ちないようにするための工夫だと思われるが、日常においては目隠しの役割を果たしている。家具以外にもトランクや段ボール箱、大型のボストンバックなどが収納として活用されており、ベッドの下や家具の間などに置かれている。これらの収納も普段は口が閉じられており、家族以外の人間が中を見たり勝手に触ったりすることはできない。

オハハは、このような私的領域に踏み込み秘匿されているモノを暴くという性質の行為であるがゆえに、厳しく制約されているのである。ただし、所有者の同意、許可がある場合には可能となる。その時に重要なのが当事者間の人間関係である。事例 5-13 の二人の関係は親戚で、叔母である M が姪に対してオハハを求めた。姪 O は袋を手渡すという行為で応じた。事例 5-14 は、たまたま近くに共営することになった準共営世帯員同士であるが、XQ は E 家を頻繁に訪れており、自分が M と E 双方の遠縁にあたるという話を何度かしていた。そのうえ、「見てもいいですか〈Uzej bolokh uu〉？」と丁寧にオハハを要求したことで、M の許可を獲得した。事例 5-15 から事例 5-17 は E 家の筆者に対するオハハである。求めに応じて黙認する、あるいはカバンを開くことによって、筆者は同意を示している。

オハハが許されるというのは、要求した者に特別待遇が与えられたことを意味する。私的な領域に踏み込み、本来ならば所有者が見せないさまざまなモノの情報を一挙に入手できるからである。初対面の人物や親しくない人間にオハハさせることはまずありえない。先ほど、E 家の家族が筆者のモノをオハハする事例をいくつか取り上げたが、意図的に抽出したわけではなく、実際に筆者の荷物をオハハできたのは E 家だけであった。なぜなら、E 家と筆者の間には、オハハに応えるという互酬性が働いていたというのが一つの理由である。E 家の生活世界にあるモノの悉皆調査、つまり長持や戸棚の中身を調べ上げるという筆者の調査そのものが、彼らがいうところのオハハ行為に該当していた。E 家の家族は信頼関係に基づいてこれを許容したことを筆者に伝えている。相手との社会関係を活用して行うオハハが一方的になされるということは考えがたい。両者はオハハを通しお互いの関係性を確認することになる。結果的に情報を共有することで、E 家と筆者の距離は縮まって行った。

もう一つの理由は、E 家の人々が他家によるオハハを敬遠していたことによる。オハハによって筆者のモノの情報は E 家に吸収され、E 家の管理・統制下におかれるようになった。来客があるとわかっている時には、荷物の口をしっかりと閉めておくようにと、常に筆者に注意が促された。

以上に述べてきた二種類の情報収集行為についてまとめると、ソニルホホというのは公開されている情報へのアクセス手段であり、オハハは非公開情報へのアクセス手段であるといえる。

5-1-3. 交渉への転換

では、ソニルホホやオハハによって収集された情報がいかに活用されているのかをみていきたい。

得られた情報は、個人に記憶され家族の間で共有、集積される。誰が何を持っているかという基本情報から、そのモノの機能や状態、使い心地にいたるまで記憶しているので、モノに変化が生じるとすぐに気づく。以下にあげたのは、蓄積された情報に基づいて目の前にあるモノの現状を把握しようとしている事例である。

事例 5-19

準共営世帯 X 家の長男 XT が E と狩りに行くために、バイクで E 家にやって来た。XT の提げていた猟銃をみた E 家の次男 U が、「C おじさんの銃でしょ？」と訊くと、XT は「そうだ」と頷いた。筆者がどうして C の銃だとわかったのかと U に尋ねると、「前に C 家で見たことがあった。だから知っていた」という。(2012 年 7 月 29 日)

事例 5-20

二度目の調査にやって来た筆者の指輪が、前回していたものと違っていることに M も次男 U もすぐに気づいた。U は筆者の手をつかむと、「前の指輪はどうしたの？どこにあるの？この指輪と交換したの？」と尋ねた。(2010 年 1 月 17 日)

事例 5-21

M に縫いものをするのでハサミを貸してほしいと頼まれた。M は筆者が渡したハサミを使いながら、「前のよく切れるハサミじゃないのね」という。(2010 年 6 月 3 日)

事例 5-22

筆者がデールの上に巻いていたベルトを見て E が、「物持ちがいいな⁵²」という。(2012 年 7 月 30 日)

事例 5-23

母親と E 家にやって来ていた共営世帯 B 家の長女が、筆者の持ち物を見ながら、「いつも同じ置き時計にカバンだ」という。それを聞いて B 家夫人が、「物持ちがいいのよ」と娘にいう。(2012 年 7 月 31 日)

事例 5-24

⁵² Gamtai yum aa.

かつて E 家の所有していた車をヤギ六頭で人に譲ったという話から、トラックの製造年によって価格が異なるという話題になった。「2008 年から 2009 年ものは 500 万[₪]、1997 年以前のは 300 万で GD [E の友人] が乗ってるやつだ。1980 年代のものは 180 万で C 家 [M の兄] の車がそれだ」と E が説明した。(2009 年 9 月 5 日)

事例 5-25

E 家の子どもと共営世帯 B 家の子どもが、近所に宿営する G 家の長男 GB の自転車で遊んでいた。それはどうしたのかと尋ねたところ、E 家の長男 (9 歳) が「JN [E の知人、少し離れた宿営地に住む青年] の乗っていた自転車が壊れたんで川に捨てたんだ。それを GB が見つけて直して、共営世帯 B 家の長男にくれたんだ。それに A [共営世帯 A 家の夫で E の甥] がサドルと荷台を取り付けてくれたんだよ」と答えた。(2010 年 6 月 4 日)

事例 5-26

共営世帯 B 家の娘 (6 歳) が持っていたクマのぬいぐるみについて筆者が尋ねると、側にいた E 家の次男 U (6 歳) が「それは G 家の末っ子がくれたんだ。牛をさばいて肉にした時だよ！ S 兄さん [M と E の甥] がこの子 [B 家の娘] にくれた小さいクマのぬいぐるみとそれを交換したんだ」と代わりに答えた。(2010 年 1 月 18 日)

事例 5-19 から事例 5-23 は、彼らが収集した情報をもとに他家のモノを同定する様子を示したものである。事例 5-19 は E 家の次男が、自分の伯父 (M の兄) の猟銃を準共営世帯の青年が持っているのに気づいて確認している状況である。猟銃を所持していない場合や、所持していても不調であったり、獲物に合わせてより使いやすい銃があれば他家のモノを借用することがよくある。子どもが猟銃を使うことはないが、大人が持っているのを目にする機会は多く、肩に提げるためのベルトの色や加工の跡などから所有者を特定しているようである。

事例 5-20 から事例 5-23 は筆者のモノが対象である。事例 5-21 は、針仕事をするにあたり、切れ味の良さを期待して筆者のハサミを借りた M ががっかりしたという場面である。E 家にもヒツジの毛刈りを行うのに用いるハサミがあるが、鉄製で重く、両刃の間には若干の隙間がある。以前の調査時に筆者のハサミを使ったことがあった M は、その切れ味を思い出してわざわざ筆者のモノを借りたが、今回は筆者が別のハサミを持ってきたために望み通りの切れ味を再現できなかったのである。性能によってモノの同異を判断している事例である。

事例 5-22、事例 5-23 に登場する、「物持ちがいい〈gamtai : ガムタエ〉」というのは、前出のガムナサン〈gamnasan: 儉約した、貯えた〉と同義の形容詞であり〔4-1-1.参照〕、「儉約的な、ものを大切にする、節約する」などの意味を持つ。つまり、今目にしている

モノがこれまでの調査において筆者が持参してきたモノと同一であるという認識があつてのこの発言である。筆者の持ち物は、初めて調査に訪れた時からすでに彼らのソニルホホの対象であつたのである。その証拠に、これまでに一度も披露したことのないモノを身に付けると、すぐに人がよって来てソニルホホが始まる。

筆者が靴下を履き替えていると、「新しいの？」と M がやってきてソニルホホし、市場のコミース（中古品取扱店）にいくとこれくらいの中古の靴下が商品として売られていると教えてくれた。また、T シャツを着替えた筆者を見つけると、すぐに E 家や共営世帯の子どもたちが寄ってきて、「なんていいシャツだー。どこで買ったの？」と訊きながらシャツを眺めたり、共営世帯の夫人がやってきて、「服を着替えたから誰かわからなかったわ」と大げさに驚いてみせたりすることがあつた。

こうした事例から、集めた情報は他人のモノを同定する際に用いられていることがわかる。持ち主が自明の場合は、それが旧知のモノかどうかを見定め、見知らぬモノであればソニルホホし、入手経緯、品質、価格などの情報を集める。その際には、前のモノがどうなったのかという情報も重要である〔事例 5-20〕。消耗による廃棄や逸失以外の理由であれば、モノはまだ「生き」の状態であり、交渉の可能性が残されていると考えられるからである。

本人の所有でないモノを所持している場合には、誰のモノかを同定することが必要になる。モノが貸借・譲渡によって頻繁に移動する遊牧社会では、他家において別の家の所有物を見かけることがある。他家の人々はわざわざ自分から借り物であるというような情報を与えることはないため、訪問者は事前の情報収集能力に頼って識別するか、あえてソニルホホするかしかない。別の家の所有物であると同定できれば、自分がそのモノを求めて交渉を行う際の相手として候補に加えることができる。また、貸借もしくは譲渡があつたということは、人の往来があつたという両家の関係性を推測する手がかりにもなる。

さらに、盗難の防止という役割もある。他人のモノを所持する人と所有者（あるいは元所有者）の共営経験や人間関係から推測して、合点がゆかない場合には窃盗の疑惑がかけられる。例えば、筆者が騎乗調査で世話になった共営世帯 G 家の長男 GB と E 家の親戚 S に、首都で購入したライト付きボールペンを土産に渡したことがあつた。三日ほどして GB に、「〇〇にもライト付きボールペンあげた？」と訊かれたので、手伝ってくれたお礼として二人にしか贈っていないと答えた。すると、実は G 家の長持の上に置いておいたペンがなくなり、〇〇が腰にぶら提げているのを見たという。しかし、〇〇本人は、「あゆみ姉さんにもらった」と周囲にいつていたという。GB は筆者とほとんど面識のない〇〇が自分と同じ土産をもらったというのを訝しんでおり、「確認しにきた」といった。結果として GB のモノだということが同定された。

事例 5-24 は、各世帯の持つトラックを引合いにだし価格を比較している事例である。一つの対象物に関する情報を複数世帯から収集することにより、製造年と価格の相関性やトラックの相場が了解される。ソーラーパネルであれば、サイズと価格と発電能力が話題に

されていた。遊牧という生活様式を共有する彼らの生活世界にあるモノの種類には、世帯ごとにそれほど大きな差はみられない。したがって、バイクやテレビ、かまど、長持など、互いの世帯にあるモノの価格情報は交換済みであり相場はある程度把握されている。しかし、他家が新しくモノを購入した際には、最新の価格と品質のチェックを怠らない。価格が一定でも、品質が悪くなっていることがあるからである。Eは結婚により家財道具を新調した甥世帯を訪れた際に、木製の写真額をソニルホホし、「昔に比べ最近のモノは厚みがなくなった」と感想を述べていた。

事例 5-25 と事例 5-26 は、他家のモノについて、誰から誰にどう渡ったかという移動の経緯を語っている事例である。事例 5-25 の自転車の場合、所有者に代わって説明しているのはE家の長男 Z である。自転車の最初の所有者とされるのが知り合いの青年 JN であり、JN の投棄した自転車を見つけて直し二番目の所有者となったのが、2009 年夏に共営していた G 家の長男 GB である。その後 GB が自転車を譲ったので 2010 年 6 月現在の所有者は、Z の従兄にあたる共営世帯 B 家の長男である。

こうした事例から、彼らがモノの動きにも関心を抱いていることがわかる。誰から誰にモノが移動し、今現在は誰の下にあるのかということも含めてモノの情報であり、人手に渡るたびにその情報が更新される。モノが頻繁に移動するため、一度ソニルホホしたモノの現在地を追跡するためには、自分自身の目で見世帯間を移動したモノを同定するか、移動したという情報を誰かから得る必要がある。彼らが常に最新の情報を集めてモノの追跡可能性 (traceability) を確保しようとする目的は、対象物を交渉可能な状態に「生かして」おくためであり、必要が生じた時に交渉する相手を特定するためである。

以上の事例から明らかになったように、ソニルホホやオハハに応じてモノを見せるということは、モノの情報を相手に与えるということである。相手は蓄えた情報によって対象者のモノを特定することが可能になり、モノの移動をめぐる交渉へと展開していく。以下はそのような事例の一つである。

2010 年の夏、筆者が調査地に入った翌日、共営世帯 B 家の兄妹が E 家にやって来た。筆者が E 家への土産として持ってきた段ボール箱の横に座ると、Z (E 家の長男) と話しながらもさり気なく箱を撫で、「この中には何と何が入ってるんだ？」と尋ねた。Z は少し自慢げに、「お母さんの靴とおれの服」と答え、「そうでしょ？」と言いながら筆者に顔を向けた。そして、「あゆみ姉さんがおれにくれた服だよ。嘘じゃないぞ」といいながら箱の蓋だけ開けて見せた。中身を視認した B 家の長男が、「下の箱には何が入ってるの？」と尋ねると、「揚げ菓子とかバナナとか。ねえ！あゆみ姉さん」と Z は正直に告げた。

実は、B 家兄妹がくる直前、M は上の箱から大好物のピーナツバターを取り出し、「これは下の箱に隠しておかないと…」といって移したあと、箱の口もしっかり締めて搾乳に出かけていた。しかし、得意になった長男が大人が隠そうとしていた箱の内容物の一部をしゃべってしまった。

B 家兄妹が帰ったあと、B 家夫人が E 家にやって来た。搾乳から戻った M に、「箱ごと

持ってきて。見よう！」という。M が箱を取ろうとして、蓋が開けっ放しになっているのに気づき、「誰が掘ったの！？」と声を荒げた。長男が開けて見せたのだという、「勝手なことしなさんな！」と叱りつけた。

B 家夫人はベッドに腰掛け、上段の箱の中身を一つ一つ調べていく。気になったモノには二言三言感想なども述べる。順番に見たモノを箱に戻していったが、一枚だけ T シャツを箱に戻さずにベッドの上に置いたままにした。会話を終えて B 家夫人が帰ったあと、M が箱の中身を整え、元々置いてあった場所に戻した。しかし、先ほどの T シャツをベッドに置きっぱなしにしたままだったので、「これ M が今着るの？」と筆者が尋ねると、「B 家夫人が着るみたいよ。自分で取り出してたから」という。そして、M はその T シャツを持って B 家へ出向いた。（2012 年 7 月 29 日）

この事例では、ソニルホホとオハハの両方が行われている。B 家の兄妹は見慣れない段ボール箱に対しソニルホホを行った。その結果、箱の中身は筆者が E 家に贈ったモノであるという情報を収集し、B 家夫人に伝達した。兄妹からの報告を受けて B 家夫人はオハハすべく E 家にやって来たのである。さらに、オハハによって贈り物の全体像がつかめたことで、交渉も可能となった。気に入ったシャツを取り出しておくという行為によって、これだけある内の一枚なら良いでしょうという意思表示を行ったのである。

相手にいわれるがままにソニルホホさせる、モノを見せるということは、交渉を受け入れる用意があると見なされる。E 家に M の姪 O が遊びに来た時、しきりに O が M の銀製のアクセサリーを見せてほしいとせがんでいたことがあった。M が「見せない」というと、「取らないから！見るだけよ！」といって O は説得を試みていたが、結局 M は見せなかった。見せないことによって交渉の余地がないことを示したのである。

一度ソニルホホやオハハによって収集された情報（追跡可能性含む）は、収集した本人によって交渉に用いられるほか、伝達され拡散される。情報を得た人物が家族や共営世帯、および訪問した先々において話題として提供するからである。その結果、誰の所に何があるかという情報を頼りに、自分の目でソニルホホするため、あるいはモノの貸借・譲渡を求めて交渉するために人々がやって来るようになる。

第 4 章の第 3 節で述べたように、E 家によって分配された情報をもとに、共営世帯をはじめ面識のない人々が筆者のもとへ交渉に訪れたのもこのためである。E 家が筆者からオハハによって得た情報を、親戚や共営世帯に伝達したことにより、彼らが症状を訴えて筆者のもとを訪れるようになった。筆者から薬を得たことが拡散すると、今度は噂を聞いた準共営世帯 X 家の人々が E 家を訪れ、筆者に「薬箱を持ってきたのか？」と確認した。以後、E 家の親戚や共営世帯はもちろんのこと、別の準共営世帯 J 家の人々も薬をもらうために筆者のところへやって来るようになった。

また、筆者とは直接面識のない人々が E 家を訪れ、「ボラロイドカメラがあると聞いたので、写真を撮ってもらおうと思って来た」、「私たちの写真を撮って」などと頼んでくることがあった。そのうち、それぞれの人物が共営世帯 G 家の親戚であったり、M の兄嫁

の親戚であったりすることがわかった。これらは、E 家を発信源とし、伝達、拡散された情報が交渉に活用されている事例である。

第 2 節 モノの情報管理

来訪者によって、遊牧民の生活世界にあるモノは常に情報収集の目に晒されている。一度情報が収集されれば、必要に応じて他家の人々に伝達されることにより、所有者は交渉をもちかけられる機会が増えることになる。本節では、そのような情報収集に対して、モノ（情報）の所有者が、求められるがままに情報を流しているわけではなく、さまざまな対策を講じて自家のモノの情報を管理していることを明らかにする。

モノが生活世界に取り込まれた時点で、所有者が取り得る選択肢には二つある。一つはモノの隠蔽による情報の秘匿である。もう一つは、意図的に情報を発信することである。本節では、事例を通してそれぞれの情報管理の実態を提示する。

5-2-1. ダルド・ヒーヒ 〈dald khiikh〉

モノを人の目から完全に遮断されたところにしまうことを、ダルド・ヒーヒ 〈dald khiikh〉という。ダルド 〈dald〉には、「秘密に、隠れて」という副詞的意味があり、ダルド・ヒーヒで「秘密にする、隠す」と訳される。以下に、その事例を挙げる。

事例 5-27

夫婦のベッドの側に置かれた小型の長持には、50 入りのペットボトルの空容器が収納されている。そこへ筆者が土産として渡したインスタントラーメン 5 袋も収納されることになった。「ラーメンを見たら人が欲しがらるから、ダルド・ヒーイ！ 〈dald khiiyel: 隠しておこう〉」といいながら M が入れている。（2012 年 7 月 29 日）

事例 5-28

筆者が調査地を離れる日に懐中電灯を E 家の長男 Z に譲った。Z が喜んで手にした瞬間、すかさず M が、「ダルド・ヒー 〈Dald khii: 隠しておきなさい〉！」と声をかけた。（2012 年 8 月 6 日）

事例 5-29

E が家にあった革と糸で弾丸携帯用の腕輪を作って筆者にくれた〔写真 5-2〕。以前、E や準共営世帯 X 家の長男が狩りに行く際に腕に巻いていたそれを、筆者が調査（ソニルホホ）し羨ましがったからである。さっそく腕に巻いてはしゃいでいた筆者に向

かって E が、「ダルド・ヒー！」という。「人が見たら、自分にも作ってくれと頼んでくるけど、もう材料がないから」と説明した。（2012 年 8 月 1 日）

事例 5-30

三回目の調査で E 家を訪れた日の夜、昨年の夏営地で撮影した E 家や共営世帯の映像を上映することになり、春営地の共営世帯 3 世帯（B 家、A 家、C 家）が E 家に集まった。上映が終わり人々が帰り出した時、ふと見ると、筆者の持ってきたペットボトルの水を共営世帯 B 家の夫人が飲んでいて、筆者は調査地に来る時、いつも 50 入りのもの一つと 1.20 入りのものを 10 本ほど持ってくるようにしていた。夏には川が、冬には雪があるため飲料水に困ることはないが、体調管理のためと空いたペットボトルを E 家に譲与するためであった。ペットボトルは家畜の乳やヨーグルト、馬乳酒を販売する際に非常に重宝されるからである。それらの水は筆者にあてがわれたベッドの下に保管されることになっており、筆者以外誰も勝手に触れたり飲んだりすることはなかった。B 家の夫人が無断でベッドの下に置かれていた開封済みボトルの水を飲んでいてのを目撃した E は、客人全員が帰ったあと、「あゆみの荷物をダルド・ヒーホグイ・ボル〈dald khiikhgüi bol: 隠さない〉勝手に飲まれる」と家族に告げた。（2010 年 6 月 3 日）

事例 5-31

共営する親戚 F（E の亡姉の夫）が E 家にやって来ると、戸棚の上に置かれていたナイフ（筆者が土産として E に贈った）を再び手に取り、鞘から出して眺め、「いいナイフだ。次来る時にはこれと同じモノを持ってくる。わかったか！」と筆者に向かって言った。「同じモノはないよ。それ父からもらったモノやから」と答えると、「また頼め。秋に持ってくる。わかったな！」というので、聞き流していた。そのやり取りを見ていた M が「〔ナイフを〕ダルド・ヒーホグイ・ボル…〈隠しておかなきゃ…〉」と小声でいった。（2011 年 5 月 27 日）

事例 5-32

七回目の調査で E 家を訪れた際、前回の調査時にお土産として渡したナイフ〔事例 5-31 と同一〕が見当たらないので E に尋ねた。すると、「大切に長持に仕舞ってある」という。「人々が見たら欲しがって、取られてしまうといけないのでダルド・ヒースン〈dald khiisen: 隠した〉。正月なんかに肉を切り分けるのに使ってるぞ」という。（2012 年 7 月 29 日）

事例 5-33

夜の 10 時頃、子ども二人をゲルに残して E 家夫婦と筆者の三人で親戚 A 家（E の甥世帯）を訪ねることになった。出かける際に、ベッドの側に置いていた筆者のパソコンキャリーバッグを指して、「コンピュータを長持の中にダルド・ヒー」と E が言った。

「現金もその〔パソコンバッグ〕中に入っているのか？」と訊ねる。そうだと答えると、よしという感じで E が頷き、M がパソコンバッグを鍵のかかる長持に仕舞った。

「ほかに何か、ダルド・ヒーヒ・ヨム・バエノー（*dald khiikh yum baina uu*: 隠すモノはあるか）？」と筆者に確認したあと、長持にしっかりと鍵がかかったのを確認して出発した。（2012 年 8 月 2 日）

1) 情報の秘匿

このように、モノを人目につかない場所もしくは他家の人々が直接手に取ることのできない場所に隠すのがダルド・ヒーヒと呼ばれる行為である。ダルド・ヒーヒを行う目的は、モノを持っているという情報そのものを秘匿することと、モノの移動を物理的に制限することである。まずは、情報の秘匿に重きをおいた実践について説明する。

事例 5-27 のインスタントラーメンは、草原で大人にも子どもにも非常に人気がある。小麦粉をこねて麺を一から作るのに比べ時間も手間もかからないこと、付属の調味料が単調になりがちな味付けに変化をつけてくれることなどが人気の理由である。付属の調味料は 1 回で使い切らずに味を調整する振りかけとしてさまざまな料理に利用し、何日間もかけて消費する。社会主義時代にはなかったため、ラーメンが市場に流通し始めた時から大好きだという彼らであるが、日常的にラーメンを購入することはあまりない。常食にするには価格も割高であり、贅沢なおやつのような感覚を持っている。筆者は当初、非常食として E 家に持ち込んでいたが、大変好まれたので、以降土産として段ボールに一箱分持つて行くようになった。

段ボール一箱には 5 袋ずつ小分けされたものが四つ、合計 20 個が入っており、それを E 家と親戚（共営世帯）で分ける。大抵 10 個を E 家と筆者用に残しておき、残りの 10 個を親戚世帯とその時の共営世帯とに分配した。どの家にいくつ配るかは E と M が相談して決めていた。事例 5-27 は、E 家用に取り分けたモノを仕舞っている場面である。この前日、二人がラーメンの分配先を相談していた時、共営世帯 B 家の子どもが E 家に来て来た。その時 E は、「三つ取っていきなさい」といって子ども達にラーメンを手渡し B 家に届けさせた。そのあと E 家と筆者のを合わせ四つのラーメンを投入して 5 人分の食事を作って食べていたところ、共営世帯 B 家の夫人がやって来た。食事時の来客には食事を提供するのが草原のマナーであり、M がラーメン創作料理をよそって B 家夫人に差し出した。器を受け取った B 家夫人は、「〔ラーメンが〕人数分あっていいわね。うちは三つだから」とつぶやいた。E 家の人々はその発言を聞き流した（2012 年 7 月 28 日）。そのような出来事があった翌日にラーメンが段ボール箱から長持へと移されたのである。

分配を受けた世帯は E 家が所有する全体数を把握していないため、まだまだ隠し持っているのではないかと探りを入れてくる。ラーメンが見つければ要求圧が高まるのは明白なので、存在が知られないよう長持の中に仕舞ったのである。ラーメンの入っていた段ボール箱は潰してしまうか、じゃがいもや玉ねぎの保管用として堂々とベッドの下に配置される。ラーメンが残存している痕跡を消すことによって、仮に要求されても、「もうなくなってしまった」と正当な理由をつけて断ることが可能となる。

事例 5-28 にあげた懐中電灯は需要が極めて高く、貸してほしいと頼まれることも多ければ、そのまま持っていかれるケースも多いモノである。周囲の人々はこの懐中電灯を筆者の所有物だと認識しており、この時所有権が E 家に移ったという事実を知っているのは、E 家の家族だけであった。所有権が移るや否や隠しておくようにと M が指示したのは、懐中電灯を E 家の子どもが見せびらかして人に取られたり、紛失するのを警戒したからである。

事例 5-29 は E が筆者にくれた腕輪をカバンに隠しておくように促している事例である。筆者が腕輪をつけたままウロウロしていれば、すぐに周囲の人々が気づいてソニルホホを始める。誰が作ったかという情報が広まれば、E のところへ頼みにやって来る人が現れる。そのような交渉を避けるために、モノを見せないことで作ってあげたという情報も含め秘匿しようとしたのである。

これらの事例に共通しているのは、新たに生活世界にモノが取り込まれた時や所有権に変更が加えられた時に、「隠せ」や「隠そう」という会話が交わされたり、実際にモノが仕舞われたりしているということと、その現場には家族しかいないということである。モノを入手した段階において、家族以外に見せるモノと見せないモノの選別が行われていることがわかる。

一つしかなく貴重なモノ（例：ナイフ）、ラーメンやアメやチョコなどの菓子類、残りわずかの消耗品（例：マッチ、トイレ紙）など、何れにせよモノの要求交渉に応じることができないと所有者が判断したモノがダルド・ヒーヒされている。モノを隠蔽することで、モノが存在するという情報自体を秘匿してしまうのである。

また、煩わしさを回避するための手段としてもダルド・ヒーヒが用いられていた。筆者が調査を終え首都に出発する日、E 家では M と E が筆者に手土産として持たせるための乳製品を準備していた。ヨーグルトをペットボトルに詰めたり、ウルム（クリーム）やエーズギー（乾燥凝乳）を袋詰めにしたりと忙しく作業していた。そこへ、親戚や共営世帯、準共営世帯の人々が、それぞれ筆者に持たせる乳製品をもって入れ替わり立ち代わりやって来た。来訪者が白い液体を満たしたペットボトルを目にすると、「何が入ってるの？」、「ミルク？」、「これは誰からの？」と同じような質問を M に繰り返すので、客足が途絶えた時に M が、「ダルド・ヒーホグイ・ボル...〈隠しておかなきゃ...〉」とつぶやいて、ペットボトルを不透明な袋にいれ、家具の陰に置いた（2012 年 8 月 6 日）。このように、対象物を視界から遮断することが、来訪者からのソニルホホ攻撃を避け得る唯一の方法である。

2) 移動の制限

ダルド・ヒーヒの果たす二つ目の役割は、物理的な働きかけを阻止しモノの移動を制限することである。勝手に弄られたり持ち出されたりといった、破損・紛失・盗難の危険からモノを守ることが目的である。事例 5-30 でとりあげたペットボトルの水は、この日以降配置が変更された。元々は金属製ベッドのすぐ下にあり、ベッドに腰掛けた状態でも手を伸ばせば届く位置にあったが、さらに奥の方に押し込まれ、床に膝をつかなければ取れない位置に収められた。

事例 5-31 と 5-32 のナイフは、入手時に親戚や共営世帯の人々に見せており、正月など客人が多く訪れる際にも披露していることから、すでに存在は周知されている。それを鍵のかかる長持に仕舞い込み普段使いにしていないのは、E のいう通り見た人が欲しがるからである。不用意に貸して欲しいと交渉を持ちかけられることや持ち逃げされる危険性から遠ざけようとしての対策である。

事例 5-33 は盗難防止を目的とした事例である。これまでの調査で DVD の上映会を数回行ってきたため、すでに E 家にパソコンが持ち込まれていることは周囲に知れ渡っている。家に大人がいなくなるため泥棒を警戒して、E 家の貴重品を仕舞っている長持に筆者の貴重品（パソコンと現金）を隠したのである。子どもだけになるので、ゲルの扉にも外から南京錠がかけられた。

日本からやって来た筆者の持ち物には周囲の関心が集まりやすいということを考慮して、E 家では事あるごとに、「大事なモノはカバンにダルド・ヒー。カバンのチャックを忘れるな」という忠告がなされていた。ある時、E の真似をして天井梁の間にナイフを挟んでいると、それを見つけた E がナイフを手にとって、「〔近所の〕子ども達が学校から戻って来たら、モノをダルド・ヒー」という。外に出しておくのと取っていかれてしまうというのである。「指輪も見えるところに置くなよ。ナイフも梁に差しておかずにカバンに隠しておけよ」という。このような発言には、モノが所有者の意思とは関係なく移動するという彼らの日常が反映されている。

2009 年の秋営地でのこと、M の搾乳作業について回り、真暗になった頃ゲルに戻って来た。E 家には灯りが燈っており、E が酔っ払いの客人と話をしていた。蓄電池に溜めた電力では 2〜3 時間しかもたないので貴重な灯りの下、さっそく見聞きしたことを記録しようと懷からノートを取り出し書きはじめた。すると、酔った客人が筆者に絡みだし、モンゴル人と結婚しろというようなことを繰り返していたが、急に、「おい！こっちを向け、おれの話の聞け！」といって調査ノートを掴んだ。破られそうになったノートを死守して共営世帯へ待避し、酔っ払いが帰ったことを確認してから E 家に戻った。すると E が、「酔っ払いが怖くて避けてたのか？」と訊いてきたので、「いいや。作業の邪魔をした上に、ノートを奪おうとしたんで腹を立ててるんや」と答えたところ、「だからノートをダルド・ヒーで言ったんだ。酔っ払いが破ってしまうかもしれないんだぞ」といった（2009 年 8 月 24 日）。

酔った客人がノートを奪おうとしたのは、ノートに興味があったわけではなく筆者の注意を自分に向けるためであったが、何であれ大切なモノを守るためには目に触れさせたり、手の届くところに置いておいてはいけないということを実感した。突然の来訪者が素面とは限らないので、常に身の回りのモノは整頓し、その時必要なモノ以外はきちんと仕舞っておく必要がある。これは外国人である筆者だけでなく E 家の家族も同様で、使ったモノを出しっ放しにすることはなく、家具からモノを出し入れしたあとには必ず蓋を閉めていた〔写真 5-3〕。

E のいう通り、仮にモノが奪われたり壊されたりしたとしても自己責任であり、事前にあるいは状況に応じて隠しておかなかった者が悪いとされる。ここでは、モノは所有者の意のままに留まり続ける静的な存在ではない。他者の働きかけによって、いつ何時移ろうかわからないということが前提になっている。モノを留め置くには、そのための対策を所有者が講じなければならない。ダルド・ヒーヒはその有効な手段なのである。

遊牧民の家に置かれている家具は、どれも蓋や扉を閉めれば手を入れる隙間のない完全密封型である。カバンのチャックや箱の蓋なども口がきっちり閉まっていれば、他家の人が勝手に開けて中のモノを調べたり取り出したりすることはできない。勝手に開けようとすれば泥棒行為と疑われる。第 5 章の第 1 節で、見える所に置かれていないモノをソニルホホすることや、許可なしにオハハすることはできないと述べた通りである。

5-2-2. お披露目

生活世界に新しくモノが取り込まれると、家族によってそれらはホイモルに置かれた戸棚や長持に一旦収納される。例えば、年中行事や遠来客の訪問などは贈答の機会となり、贈られたモノは貴重品を収納する鍵付の長持に仕舞われる。また、市場、商店、ナイマーなどから購入した雑貨・衣料品なども戸棚や長持に入れておかれる。ここまでの行為はダルド・ヒーヒであり、新たに入手したモノの情報を家族以外に漏らさないための事前工作である。

ところが、せっかくダルド・ヒーヒしたにも関わらず、隠蔽した本人がゲルを訪れた人物に対して、モノを取り出して見せるということが行われる。わざわざ長持の鍵をあけ、対象となるモノを来訪者の面前に差し出すのである。差し出された方も、一つ一つにじっくりと目を通し、感想を述べたり質問をしたりしたあと家人に返す。家人は再びそれを長持の中に仕舞い鍵をかける。このような一連の行為が、来訪者が来るたびに繰り返される。そして特定の人々に対する一通りのお披露目が終わると、上衣は戸棚、ズボンは鏡台下の長持といった具合に、その家の分類に従って所定の家具に収納される。

ダルド・ヒーヒしたモノを一々出して見せる行為について不思議に思った筆者が、「人が来た時になんでモノを見せるの？」と M に尋ねたことがあった。しばらく考えてから、「何をもらったのか、どんなモノかを見せる」のだといい、「別に見せなくてもいいけど

…」という答えが返ってきた。彼らにとっては当たり前の行為を改めて尋ねられたので戸惑った様子であった。しかし、「見た人が、こんなモノがここにあるのかーといって、今度それを取に来るでしょ？」と筆者が訊くと、「そうよ」という。

モノの存在を知られるということは、今後そのモノを他家の人に求められる可能性が高くなるということである。なぜそうとわかっていながら、情報を提供するのだろうか。以下にあげたのは、そのような新たに生活世界に加わったモノを来訪者に披露している場面である。事例を通して、この行為が何のために行われているのかを分析したい。

事例 5-34

M が共営世帯 C 家（兄世帯）を訪問しお茶を飲んでいて、すると、C 家夫人が長持の上に置かれていた小型トランクから、新しく買ったという自分のズボンを取り出して M に見せた。（2010 年 6 月 8 日）

事例 5-35

前日にナイマーからノート 10 冊と黒いズボンを 5,000 円の現金で購入した M。ノートは長男 Z のために、ズボンは首都から E 家に夏休みの間だけ泊まりに来ている M の甥 S のために手に入れた。昼頃戸棚に仕舞っていたズボンを取り出すと、M が自分で穿いてみてサイズを確認したあとすぐに脱いだ。昼過ぎ E の甥 N がやって来ると、S のために買ったといってズボンを出して見せた。「女性物だけどサイズは大丈夫でしょ？」と N に尋ね、N が「大丈夫だろう。いいズボンだ」と答えるのを聞いて嬉しそうな顔をする。（2009 年 8 月 23 日）

事例 5-36

サントで開催される祭りに参加するため、M の叔父にあたる TJ 家夫婦が E 家を訪れた。TJ 家夫人がベッドで昼寝をしている間に、M が先ほど夫人からもらった土産を袋から出して、居合わせた親戚に見せ始める。新品のジーンズと水色の T シャツ、箱入りのチョコレートと揚げ菓子であった。E 家を訪れていた C 家夫人（M の兄嫁）、D 婦人（E の姉）、A 家夫婦（E の甥夫婦）がどれどれという感じで手に取って調べていた。（2010 年 6 月 9 日）〔写真 5-4〕

事例 5-37

M が共営世帯 G 家に行くと、G 家夫人が UB にいる長女からプレゼントが送られてきたといって見せてくれる。G 家夫人には、ナラントール市場の古着屋で見つけた黒色の厚底ブーツと新品の黒色ズボンをくれ、上の弟には新品の腕時計、下の弟には描いて消せるお絵かきボードをくれたという。一つ一つ説明しながら見せたあと、高いヒールのついた女性物の黒いエナメル靴（中古品）を、M に履いてみるように G 家夫人

が促した。M には少し大きいとわかったと、B 家夫人ならはいるだろうと二人で話していた。（2009 年 9 月 4 日）

事例 5-38

E 家に G 家一家（E の友人世帯）と B 家一家（E の兄世帯）がやって来た。しばらく話をしていた E が、「あゆみがこれでグルース〈göröös: シカなどの大型草食動物〉をさばけてさ」といってさり気なく話題をふり、筆者が土産に渡したドイツ製のナイフを見せた。G 家の夫と B 家の夫はナイフを手にとると、柄を歯にあてて齧るなどして代わる代わる調べ、B 家の夫は、「かわいいナイフだ。いいナイフだ」といって親指を立てた。「モンゴルのシカがドイツまで行って、ナイフになって帰って来たんだな」などとナイフについて語り合っていた。（2011 年 5 月 25 日）

事例 5-39

C 家の夫婦が E 家を訪れた。M は鍵をかけた長持の中からアメとチョコを取り出して客人に手渡した。未開封だった袋からチョコを二つ取り出すと仏壇に供え、E 家の人々も 1、2 個つまむ。いつの間にか、M が筆者からの土産の入った段ボール箱を C 家夫人の横に置いた。夫人はすぐには手を伸ばさず、さり気なく「服とか？」と M に尋ねる。「うん」と答える M。かまどの火を調整して夫人の横に座り直すと、箱の蓋を開ける。一つ、また一つと M が中身を取り出してみせると、夫人も手を伸ばしじつくりと確認し始める。M が見せたお気に入りのサンダルを受け取り、片方だけ履いてみた C 家夫人は、「ぴったりよ」という。一応箱の中身を全て確認した C 家夫人であったが、タオルには興味がなかったのか、手に取った勢いのままベッドの上に落としていた。（2012 年 7 月 30 日）

事例 5-40

五回目の調査で E 家を訪れた際、M に以前から頼まれていたファンデーションなどの化粧品を土産として渡した。しばらくすると、C 家夫人が子どもを連れてやって来たので、M がお菓子を配る。C 家夫人は、「〔さっき来た時に M が〕アメ 1 個しかくれなかったって言ってるのよ、この子」といってさらに要求したが、「わたし、アメをあげ尽くしちゃったわー」と M は答え、皆に分配したことを強調した。アメをめぐる交渉が一段落すると、M が長持の鍵をあけ、化粧品の入ったポーチを取り出して C 家夫人に渡した。C 家夫人はポーチを開けて中身をすべて調べた。夕方になり、B 家夫人と G 家夫人が E 家にやって来た。またしても M が長持から化粧ポーチを取り出して二人に見せた。中身をすべて確認し終わると、「わたしには、青色のアイシャドーが似合うの」と G 家夫人が言い、「わたしには茶色ね」と B 家夫人が言う。さらに、「こんなにいっぱいあるなら、一つくれないかしら」と B 家夫人がさり気なく 2 回繰り返した。

た。「うちの娘が、〔M があゆみから〕いいモノを二つももらっていたって言ったのよ」とも言う。すると、今度は G 家夫人が筆者の方を見て、「わたしには青色が合うのよ。でも、青色がないのよ」と言うので、M に倣って聞き流した。B 家夫人はまだ、「あゆみにいいモノ持って来てもらって、いいなー」というようなことを言っていたが、見終えたポーチを M の方に差し出すと、M がそれを受け取り、北西側の長持に戻して鍵をかけた。（2011 年 5 月 25 日）

事例 5-41

筆者の持ってきた土産の入った箱を、M が E 家にやってきた姪 O に見せた。O は中からボーダーのシャツを選んでいて。ピンク色のズボンに対しては、「ピンクなんてねえ」と文句を言っていたが、M が「アウワル・アウ〈Avbal av: 取るなら取りなさい〉」というと、「アウィー〈取ろう〉」とだけ行って何も取らずに出て行った。（2012 年 7 月 29 日）

事例 5-42

再び E 家にやって来た O に、M が自分の履いていた黄色いサンダルを見せながら、「アウホー〈Avakh uu: 取るか〉？」と尋ねる。「わたしにはいいサンダルが手に入ったから」と M がいうのを聞いた O は、「だったら、わたしがそのいいのを取るわ」と冗談めかしていい、汚いので黄色いサンダルは取らないと答えた。室内の掃除と顔の手入れを終えた M が、ベッドの下に置かれていた土産の入った箱を取り出し、O のところへ持っていく。O は件の新しいサンダルを履いてみて、「ちょっと大きい」という。それを見ていた M が、C 家夫人がこれを履いてぴったりだといった話をするので〔事例 5-39〕、O は目配せで応じた。O は箱の中からピンクのズボンと紺色の T シャツを選び出した。袋類を吟味し、「取っ手のない袋は教科書が入れられないから」といいながら取っ手付きの袋を選び、ズボンと T シャツを入れた。（2012 年 8 月 1 日）

これらの事例にあげたような、新たに入手したモノ、あるいはダルド・ヒーヒしているモノを来訪者に見せる行為を、現地では何と呼ぶのかを探したが、特別な用語は存在しなかった。そこで、本論文では、この行為を「お披露目」と呼ぶことにする。

事例 5-34 は C 家夫人が、事例 5-35 は M が、それぞれ購入したモノを親戚に見せている場面である。見る方は、手で触って生地を調べ、価格を聞き、良いモノを購入したという評価を伝えることになる。単に見せるだけでなく、手に取って詳しく調べることを相手に許容しているということから、この行為は見る側にとってはソニルホホにあたるということがわかる。しかも、トランクや戸棚といった収納からわざわざ取り出して見せており、来訪者がはじめて存在を知っていたかどうかまではわからないが、少なくとも初め

て目にしたモノであるといえる。つまり、本来はオハハしなれば手に入らなかった情報ということである。

事例 5-36 は、祭りのために遠方より訪れた親戚からの土産を、M が他の親戚に見せている様子である。見る人々は、ズボンや T シャツを広げて生地やデザインを確認しながら、「祭りに着るのにちょうどいいね」などと好ましい評価を口にする。M も頷いて嬉しそうにそれらの話を聞いている。

事例 5-37 では、専門学校に入るために UB で暮らし始めた娘から送られて来たモノを、G 家夫人が共営世帯である M と居候の筆者に見せている。荷物の中に入っていたエナメル靴は、ヒールが高いうえ若者向けのデザインであったため、G 家夫人は足のサイズの合う若い女性に譲ろうと考えたようであった。

事例 5-38 から事例 5-42 は、筆者が調査時に持ってきた土産を、E 家が親戚や共営世帯の人々に見せている状況である。事例 5-38 のナイフは、事例 5-31 と事例 5-32 でダルド・ヒーヒされていたモノと同一である。ダルド・ヒーヒの対象となるモノでも、入手当初には E 自ら話をふって親戚 B 家と友人 G 家の前で見せている。

事例 5-39 では、サンダルを目にした C 家夫人が試着しているが、これは M の勧めによるものではない。しかし、お披露目の間は M は見ているだけで、相手のすることに口を挟んだりもしない。そして、見る側も「ぴったりよ」などといって、交渉を匂わせ相手の様子を窺うものの、本格的な交渉はお披露目の場では行われない。少なくとも日を改めることになる。事例 5-40 では、お披露目の場であるにもかかわらず、M に対して積極的に交渉が行われている。それでも、M はその場で一切の交渉に応じず、モノがやり取りされることはなかった。

事例 5-41 は、初回のお披露目で交渉が成立しているが、モノの移動が行われたのは三日後の事例 5-42 においてであった。すでにお披露目によって内容物の情報を得ているため、二度目以降はソニルホホとなる。一度お披露目を行った相手が再度モノを見に来る時には、所有権あるいは利用権の移譲を求める交渉をもちかける場合が多い。ピンク色のズボンは、当初から M は誰かに譲る気であった。というのも、O と同様に M からお披露目を受けて、ピンク色のズボンをみつけた B 家夫人が、「どうして黒色のを持ってこないの?」、「こんな派手な色は穿けない」と筆者を諭したことがあった。M も同感だったようで、「黒や茶色なら大丈夫」と言っていた。E 家への土産であるにもかかわらず、親戚の B 家夫人が土産の内容について意見しているところに、お披露目という行為の本質が現れている。

事例 5-42 で O が実際にモノを取っていったように、お披露目を通して、見る側はモノを細部にわたってチェックし目星をつけ、日を改めて交渉しモノを獲得するという流れが想定されている。M から土産のお披露目を受けていた B 家夫人が、筆者に注文をつけたのも、いずれ所有者となり得る可能性があることを B 家夫人が認識していたからである。

このように、お披露目は、モノ（情報）の所有者の側から働きかけて、相手にオハハやソニルホホを行わせる情報分配行為であるといえる。しかも、対象者が親戚や共営世帯な

ど特定の人々に限定されており、その他の人物が居合わせるような場ではお披露目は敬遠される。この対象者の範囲も、オハハ行為が許されている人々の属性と重複している。つまり、お披露目を受けた人々は、家族しか知り得ないモノの情報を直接分配されたことにより、優先的に交渉権を付与されたことになる。

では、なぜモノの移動にもつながりかねないリスクを押してまで、お披露目するのであるのか。その理由は、お披露目の対象となるモノが、新たに生活世界に取り込まれたモノであるという点に関係している。所有者が入手時点からそれぞれの収納場所へモノを仕舞うまでには若干の時間的猶予が設けられている。E家の例でいえば、上半身にまとうモノは戸棚へ、ズボン、靴下、下着などは鏡台用の長持へなどと分類して仕舞うまで、新たに入手した衣類や雑貨は一まとめにした状態で、長持や戸棚の中に仮置きされている。この間にお披露目が行われ、親交のある親戚、共営世帯の人物がE家を訪れる度に、入手したモノを出しては見せるを繰り返し、一巡した頃に分類して収納するか日常使いにする。

ここから読み取れるのは、お披露目行為はモノの社会化であり、モノが新たに生活世界に取り込まれたことを周囲に知らせ、その家の所有物として認知されるためのプロセスだということである。実際のところ、お披露目を経なければ、自分がそのモノを所有しているという事実関係を周知させることはできない。所有者の不明なモノは発見され次第、拾得の対象となってしまう。お披露目によりモノの存在が認知され、特徴が周囲の人々に記憶されることで、仮に紛失や盗難によりモノが手元を離れたような場合にも、発見時に誰そのモノに間違いのないということを同定し所有権を保証してもらうことが期待できる。通常モノには、家畜のように所有者が特定されるような印はつけられていない。そのため、意図せず手元から離れてしまうと所有権の立証が難しくなる。そうした不測の事態への備えとして、ある程度の情報の共有が必要となる。

自家のモノになったことを周知してもらうためのお披露目であっても、見る方は交渉権の分配であると受け止める。結果的に、秘匿された情報の分配という特別待遇を与えたことにより、所有者は資源を独占するようなハラムチではないということを証明すると同時に、周囲からの情報への欲求圧力も緩和されることになる。また、親交のある家々とは往来が頻繁であるため、秘匿しようとしてもモノの存在に気づかれるのは時間の問題である。実際に、あとから気づいた親戚に、「あれ、それ知らないわ。前からあったの？〔どうして見せなかったの？〕」と追及される場面を目にした。そうなるよりは、先んじて情報を開示しておいた方が得策である。自発的な情報の分配に対しては、近い将来に見返りとしての情報分配を期待することができるからである。

5-2-3. ガエホーラハ〈gaikhuulakh〉

秘匿されたモノの情報を分配する行為には、お披露目の他にもう一つ、ガエホーラハと呼ばれる行為がある。このガエホーラハは、上述した他の二つの行為に比べ、非日常的な要素が強い。以下にその事例をあげ、ガエホーラハの特徴とその目的について述べる。

事例 5-43

夜の 9:30 を回って E 家には準共営世帯 X 家の人々が集まっていた。これから X 家の長男と狩りに出かけるために、E は友人 SH から借りた猟銃にレーザーポインターを取り付けていた。レーザーポインターはセロハンテープで銃に固定されており、そのセロハンテープは X 家のモノで、事前に X 家に出向いて巻いてきたものであった。E はゲルの扉を開け放つと、銃を構え外の暗闇に向かってレーザーを照射して見せ、その距離の長さや照射点の精確さを人々に熱く語った。レーザーポインターは、狩り好きの首都の友人からもらったモノで、その時までにはベッドの下など人目に付かない所に仕舞われていたモノである。（2012 年 8 月 5 日）

事例 5-44

準共営世帯 X 家の長男の婚約者 XQ が E 家にやって来て、筆者に自分の腕時計を見せた。職場でいつもつけていると説明するとともに、今欲しいと思っている腕時計の色や形などの詳細を語る。そのあと、携帯電話を取り出して筆者に見せ、最近の流行であると説明する。韓国製の小型のタッチパネル式の携帯であった。その様子を見ていた M が家事の手を休め、「見よう」といって XQ の横に座り携帯電話を手にとるとあちこち触って調べはじめた。（2012 年 8 月 4 日）

事例 5-45

共営世帯 G 家の夫が手帳を持って E 家にやって来る。手帳を E 家の人々に見せているので、筆者も見せてもらう。SS という友人がくれたモノで三年になるという。ロシア文字表記のカバー付手帳である。電話番号を書きつけ電話帳として使っている。（2009 年 8 月 3 日）

事例 5-46

E 家の親戚が長男 Z の新学期用にと送ってきたリュックサックとノートと筆箱を、Z は同世代の子どもが訪れる度に取り出して見せている。（2009 年 8 月 23 日）

事例 5-47

夏営地で遊んでいた共営世帯 B 家の長女と準共営世帯 X 家の長女が、それぞれの手に電化製品を持ち E 家にやってきた。音楽再生機を持っていた X 家の長女に、誰のモノかと筆者が尋ねると、自分のモノだと答え携帯電話用の電池で動いているといっている

せにきた。B 家の長女は録音機を持ってきており、自分や人の声を録音・再生して遊んでいるので、誰のかと訊くと、兄のモノだという。（2012 年 7 月 29 日）

事例 5-48

筆者が持参した綿のロープを E 家の次男 U に譲った。しばらくすると共営世帯 G 家の息子が筆者のところにやって来て、「ロープを譲って欲しい」という。U にあげたのでもないかと答えたが、「馬具に使いたい」となおも訴える。それならば U に話してみてはどうかと促した。しかし U は、「自分がもらったモノだ」と主張し交渉に応じなかった。M も E もそのやり取りを傍観していた。翌朝、仏棚の引き出しに仕舞われていた件のロープを、E が馬具に取り付けた。（2009 年 7 月 26 日）

事例 5-49

友人とポラロイド写真を撮ってもらおうと準共営世帯 X 家の長男の婚約者 XQ が OL 家の娘を伴って E 家を訪れた。筆者が写真を撮ってあげていると、M が二人に向かって筆者が日本から携帯電話を持ってきているという話をする。それを聞いた二人は興味を示し、「あゆみ姉さん、日本の携帯電話見てもいい？」と訊く。荷物から出して手渡すと、あちこちボタンを押して調べていた。すると、今度は M が筆者の小型音楽再生機を話題にし、「モンゴルの音楽入ってる？」と尋ね、「聞きたい」といって流すよう促した。（2012 年 8 月 3 日）

これらの事例は、所有者もしくは所有者に近い人物が、入手したてのモノやダルド・ヒーヒされていたモノの情報を自ら進んで他家の人々に開示している事例であり、彼らの間でガエホーラハ〈gaikhuulakh〉と呼ばれる行為である。ガエホーラハとは、「人の耳目を集める、自慢する」という意味である。相手の知らない情報を見せて驚かせることに重点が置かれており、自分がその対象物を所有している、あるいは利用できる立場にあるということが誇示される。対象者は親戚や共営世帯に限られていない。多くの人が集う機会に行われ、友人、知人のみならず、その場に居合わせた人も含まれる。

事例 5-43 から事例 5-47 までは、所有者がモノを来訪者に見せたり、わざわざ他家を訪問して見せている事例である。相手が見たことのないモノや存在を知らないモノを見せたうえで、ソニルホホさせているのである。ガエホーラハの対象となったモノをみると、レーザーポインター〔事例 5-43〕、腕時計、携帯電話〔事例 5-44〕、手帳〔事例 5-45〕、リュックサックと文房具〔事例 5-46〕、音楽再生機、録音機〔事例 5-47〕である。希少・貴重品であったり、新年や新学期など特別な機会に祝いとして贈られたモノであったり、いつでも簡単に入手できるモノではないということがわかる。

事例 5-43 の高性能レーザーポインターは、この辺りでもっている人がいなかったため、集まっていた人々は高い関心をもって E の実演を見ており、あれこれ質問を投げかけてい

た。事例 5-44 で準共営世帯 X 家の長男の婚約者が腕時計と携帯電話を見せに来た際には、M も作業を中断してソニルホホを始めた。中国製のプッシュフォンはよく見かけるが、韓国製のタッチパネル式携帯電話は珍しかったのである。

事例 5-45 のロシア製手帳は入手して三年ほど経っており、共営世帯 G 家にとっては新しさや面白みが薄れてはいるが、日本からやって来て E 家のモノをソニルホホしまくっている筆者の存在を受け、ガエホーラハするのに相応しいと考えた G 家の夫が E 家に持ってきたモノであった。古い手帳ということで E 家の人々はあまり関心を示さなかったが、一応 G 家の夫に話を聞いていた。一方、筆者がいつ、誰にもらったのかなどソニルホホすると、G 家の夫は質問に答えながら、次々と手帳のページを繰って見せた。

事例 5-46 は、E 家の長男 Z が共営世帯や親戚の子ども達に、自分がもらったモノを自慢している様子である。同年代の子どもが E 家を訪れる度に、「DE おばあさんがおれに送って来た！」といいながら、仕舞ってあったリュックサックを持ってきて中を開け、筆箱やノートを一つずつ取り出しては相手に見せた。リュックのポケットの位置や筆箱の機能を説明したあと、相手が手に取ろうとするのを制してリュックに戻し、「新学期にはこれで学校に行く」といってリュックをもとの位置に戻した。相手の子ども達も、一つ一つに頷きながらソニルホホしていた。

事例 5-47 と事例 5-48 も、子ども達によるガエホーラハの事例である。遊牧民の間で関心の高い電化製品は子ども達の間でも人気があり、壊れた固定電話やラジオなどはままと遊びの重要なアイテムである。一人が家にあった音楽再生機を持ち出し他の子どもにガエホーラハすると、それに対抗するように録音機が持ち出され、さらに他の家々をガエホーラハして回るという流れになったようであった。モノに人々の関心が集まることを子どもの頃から知っているのである。事例 5-48 は、モノの入手からガエホーラハまでが一瞬であった事例である。E 家の次男 U は筆者からロープを手に入れたあと、すぐにロープを持って出かけ、行く先々でみせびらかしていた。それをソニルホホした G 家の息子が入手経路を訊いて、交渉すべく筆者のところへやって来たのである。

子どもはモノを入手するとまず母親に報告する。例えば E 家では、長男が留め金が両側についたカバンのベルトを、親戚 S にもらったといって M と筆者に見せに来た。（2009 年 8 月 25 日）。また、共営世帯 B 家では、E 家から戻ってきた長女が誇らしげに、「お母さん、ほら」といって掌の中のアメやチョコを見せた。B 家夫人が「誰がくれたの？」と尋ねると、「BB おじさん [E の友人] の奥さん」と答えた（2012 年 7 月 31 日）。というように、家族間では誰から何をもらったという報告が行われる。

他方で、他家の成員に対しては単なる報告ではなくガエホーラハとなる。共営世帯 B 家の長女が E 家にやって来て、床の拭き掃除をしていた M に顔を寄せて、「ハァーッ」と息を吐きかけ、「においがするでしょう？」という。M が「何の？」と尋ねると、「キャラメルー！」と答え、「ミルクの味がするキャラメルなの。あゆみ姉さんがくれたのー」と食べたことを匂いで自慢した（2010 年 1 月 27 日）。また、E 家に G 家の夫と B 家の長男

がやって来た際、初見のニット帽を見つけて、「これどうしたの？」と E 家の人々に尋ねた。すると、E 家の次男 U が大げさに首をかしげ、「誰にもらったんだっけ～」とものついでをつけて自問したあと、「あゆみ姉さん！」と自答する。さらに、自ら B 家の長男に手袋を見せ、「これもあゆみ姉さんにもらった」と言い残してゲルを出て行った（2010 年 1 月 24 日）。

子ども達は、入手したモノの情報を留めておくことをしない。自分だけが持っているということを周囲に知らせるために、モノを入手すると身に付けられるのものは身に付け、それ以外のモノは携帯して他家を回る。例えば、筆者が子ども達への土産として、色つき眼鏡、キーホルダー、ポシェット、ネックレスなどを渡すと、その瞬間からそれぞれを身につけ、互いに自分のもらったモノの方がよいモノだといってガエホーラハし始めた。

彼らの間では、何を持っているかということも然ることながら、自分だけが持っている、利用できる立場にいるということが重要な意味をもつ。ある時、E 家の次男 U と共営世帯 B 家の長男が筆者のところへやって来て、「魚のにおいのする食べ物を L 家（M の兄世帯）の子どもに嗅がせてやったのか？」と真剣な顔で尋ねてきた。その子が E 家を訪ねてきた覚えがないし、魚のにおいのする食べ物って何だと筆者が答えると、「ほら、あいつ嘘つきだ。やっぱり」という。「おれ達が嗅いだっていったから自分も嗅いだっていった」といって納得していた（2010 年 1 月 27 日）。魚のにおいのする食べ物がなんのことかよくわからなかったが、彼らにとって筆者のモノにアクセスでき、周りが知らないことを知れる立場にあるという事実が、他の子ども達に対する優位性を確保するうえで重要だったようである。

事例 5-49 は、自分の知り得た情報により、他人のモノでガエホーラハしている事例である。当初は E 家と親戚世帯、共営世帯しかアクセスできなかった筆者のカメラに、足しげく通ってくる準共営世帯の XQ（X 家の長男の婚約者）が、別の宿営地の友人を連れてアクセスするようになっていた。そんな折に M が、E 家の家族しか知らない筆者の携帯電話の存在を XQ 達に告げた。それを聞いた XQ は見たがり、筆者から携帯を受け取ると友人と興味津々で調べていた。その様子を満足そうに見ていた M だったが、今度はこれまで特に言及したことなかった筆者の小型音楽再生機のことを話題にし、XQ らの関心をそちらへ向けた。

このようにガエホーラハは自家のモノだけでなく、自分だけが知っておりアクセス可能だと考えられているモノに対しても行われる。携帯電話の所有者は筆者であるが、ガエホーラハの立役者は M である。M が筆者が「日本の携帯電話を持ってきている」という情報を開示しなければ、他家の人々にとって携帯電話は存在しないも同然であった。モノを所有しているという事実よりも、モノの存在を外部に向かって明らかにすることの方がより大きな意味をもつのである。

またこの事例から、M のガエホーラハを受けて筆者の携帯電話をソニルホホした XQ らの行動が、M を満足させていることが窺える。その理由は、ソニン〈面白い、珍しい〉な

情報を与えたことによって M の XQ に対する優位性が、この場においては確保されたからである。さらに、子ども達が相手のガエホーラハに対抗意識を持ったように、ソニンなモノ情報の一方的な供与は、相手に敗北感あるいはある種の負債のような感覚を生じさせる。そのため、負債の感覚を払拭しようとガエホーラハの応酬が行われる。実際に M が筆者の携帯電話をガエホーラハした翌日に、XQ は自分の携帯電話や腕時計をガエホーラハするために E 家を訪れている〔事例 5-44〕。M は自分のもつ筆者のモノ情報を活用して新たな情報の入手に成功したのである。

第 4 章の第 3 節において、地域の祭りで筆者やカメラの情報が分配されたことを述べたが、それもガエホーラハに当てはまる。外国人を連れて歩き、写真を撮らせることができる立場にあるということを示す行為は、ガエホーラハ（優位性の誇示）であると同時に周囲の要請に応えることでもある。ガエホーラハが可能な状況にあると周囲から認知されている家は、ある程度その期待に応える必要があり、これが十分に行われない時にはハラムチと批難を受けることもある。そのように考えると、ガエホーラハは単なる自慢行為ではなく、特別な機会を利用して行う情報分配の一種であるとみなすことができる。特定の世帯が資源を囲い込み独占することがないように、ガエホーラハ（自慢する）という手段で、再分配が図られているのである。

5-2-4. 陳列

以上に述べたお披露目とガエホーラハは、ダルド・ヒーヒの状態から取り出してモノを見せるという情報発信行為である。これらとは別に、はじめから見える状態でモノを置いておくという情報の発信手段がある。E 家を例にあげてみると、生活世界にあるモノで収納に仕舞われているモノが全体の 65%、残りの 35%がこの見える状態で置かれているモノに該当する。家具、台所用具、馬具、装飾品などが中心であり、往来の頻度の高い来訪者にとっては見慣れた（ソニルホホ済みの）モノとなり、ソニルホホの対象外とされる。

しかし、新たに入手したモノの一部、例えば、置き時計、カレンダー、子どもの玩具、アルバム、調味料などが、長持や戸棚の上、食器棚の見える場所に置かれる時がある〔写真 5-5〕。また、置き忘れによって、ナイフや双眼鏡が家具の上に放置されたままになっている場合もある。そのような時には、第 5 章の第 1 節であげた気づきの事例のように、「これはどうした？」といってすぐに来訪者のソニルホホが始まる。

情報収集者のソニルホホの対象が見えているモノであるということを考慮すれば、所有者がモノを見えるところに置くのは、単なる置き忘れの場合を除くと、見られることを承知で配置しているということになる。これは不特定多数の人々に対する情報の発信であり、来訪者すべてに交渉の可能性が開かれている。

第3節 情報の操作と交渉

第1節と第2節を通して、来訪者がモノの情報を収集し交渉への足掛かりとする一方、所有者がモノを隠蔽、あるいはあえて見せることによってモノの情報を管理しようとする様子を見てきた。このように述べると、来訪者が攻勢に出ており、所有者が守勢に徹しているような印象を与えてしまうかもしれない。しかし、実は一見守勢にみえる所有者が情報を操作して相手に誤認させたり、極秘裏に情報を処理したりしており、攻守は常時入れ替わっている。

そこで、本節ではまず、第1節と第2節で述べてきた来訪者と所有者双方の実践を整理し、情報収集者と管理者それぞれの立場から見た行為の対応関係を検討する。そして、モノの情報を利用したそれらの行為によって繰り広げられる攻防の様子を提示する。

続いて、本論で取り扱ったさまざまな相互行為の舞台であり、彼らの生活の場であるゲルが、交渉のルールや展開にいかに関与しているのかについて考察する。最後に、このような情報をめぐるやり取りを広い意味での交渉行為と捉えた場合に、遊牧民として生きる彼らにとってどのような意義があるのかを議論する。

5-3-1. 情報の戦略的利用

まずは、情報収集と情報管理それぞれの行為が、情報収集者と管理者の間でどのような位置づけになっているのかを整理しておく。モノの情報収集活動は、目に付く場所に置かれたモノを誰でも調べることができるソニルホホと、隠されているモノを限られた人間のみが知ることのできるオハハという二段構成になっていることは先に述べた。一方、モノの情報を管理する手段には、情報を秘匿する方法と自発的に発信する方法がある。ダルド・ヒーヒが前者であり、情報管理の基本手段となる。ダルド・ヒーヒの対象となるのは、交渉の余地はないと所有者が判断したモノである。つまり、モノが存在するという情報自体を秘匿し、独占的に利用することが目的である。

自発的な情報発信には、非日常的な文脈で行われるガエホーラハと、対象者限定のお披露目のほかに、陳列という三つの方法がある。それぞれの対応関係を情報管理者の立場から整理したものが概念図 5-1 である。円は生活世界にあるモノを表し、中心にいるのは所有者である情報管理者である。基本戦略として、モノを隠蔽（ダルド・ヒーヒ）し家族で独占的に利用しようとするものの、来訪者からは絶え間ない情報開示への圧力が掛かる。そこで、ダルド・ヒーヒの領域を守るために、ある程度のモノを陳列という形で公開し、不特定多数のソニルホホに応える。

しかし、親しい関係にある親戚世帯や、互いの動向に詳しい共営世帯からは、非公開情報へのアクセスが要求される。そこで、情報管理者はオハハ要求に応じるか、あるいはそれに先んじて自発的にお披露目を行うことになる。誰に何をお披露目するかは管理者の裁

量によって変化するが、この情報分配行為によって、親しい世帯との親和関係の維持という戦術目的を達成すると同時に、それ以外のダルド・ヒーヒ領域を侵させないという戦略目標も達成できる。しかしながら、情報開示が不十分だと周囲が判断した場合には、「モノ惜しみしている」、「ケチだ」と悪評を立てられるため、独占しすぎないバランスも重要となる。

ガエホーラハは、親和的關係性の確認を目的とするお披露目とは文脈の異なる、社会的な威信の獲得を目的とした情報発信である。密かに入手、隠蔽していた希少品を、人が集う社交の場で誇示する行為を指す。とはいえ、結果的にはモノの情報の独占を回避し、再分配を図る機能も果たしている。情報管理者側からの一方的な働きかけによって始められるガエホーラハに対して、収集者側はソニルホホで応えることになる。モンゴル語の用法に注目すると、もともとガエホーラハは「驚かせる」という意味であり、「驚く」を意味するガエハハ〈gaikhakh〉の使役形である。したがって、ガエホーラハには本来、ガエハハ〈驚く〉が言語上対応すると思われるが、現実の遊牧民はそのような反応をしない。驚かそう、自慢しようとする行為に対し、「驚いた」とは言わずにこれは良い機会とばかりにソニルホホで応じるのである。

ダルド・ヒーヒするか、お披露目するか、ガエホーラハするか、陳列するかは、所有者の家族がモノをどう利用したいかによって判断している。モノを入手してから何の情報をどこまで開示するかが決定されるまでの過程は、親戚世帯にも知らされない。モノの入手時には、入手経緯や価格や数量などそのモノに関するあらゆる情報が存在している。このような生の情報に接することができるのは家族だけであり、家族間で共有、選別、秘匿したあと、いずれかの方法で情報を発信することになる。例えば E 家では次のようなことがあった。

事例 5-50

七回目の調査にやってきた筆者が E 家に土産を手渡した。日本から苦労して運んできたモノや頼まれていた品々もあったため、はやく彼らに見てもらいたいと思い、昼時に訪問者がいない時を見計らって土産を広げようとした。ところが、E が「夜に見よう」といってそれを制した。夕方になり客足も途絶えたのでそろそろかと思い、家畜の世話から戻ったところで土産を出し始めた。しかし、まだゲルの外に漂う人の気配が気になるようで、E は外の様子を覗いて「まあ、待て。あとでゆっくりな」といい、ベッドの上に筆者が出した土産のジャケットを衣類置場にさり気なく積んだ。

日が落ちると親戚で共営世帯の B 家の人々や、今夏から加わった準共営世帯の人々が E 家に集まって来た。遠方からの来客を迎えた興奮と日本人への興味も手伝ってか、なかなか帰ろうとしなかった。すると、E が「今日は早く寝るか」と独り言のようにいい、M と寝床を整え始めた。客人の前で自分たちの寝床を整えるという行為は、そろそろ帰ってくれという合図である。それを見て少し物足りなそうな様子ではあったが、客

人たちは帰って行った。完全に日が落ち真っ暗なので、ゲルの扉を閉めて電灯をつけた。子ども達を布団に追い立てて E と M が土産を見始める。

E は先程のジャケットを羽織ると、鏡台の前に立ち着心地や見栄えを確認している。「牧草を刈りに行くのにいいな」、「軽くて、草刈りに丁度いい」と M に話しかける。何度か羽織りなおして脱いだ後、タグやポケットを調べて、「質のいいものだろう」といって頷いていた。M は、段ボール箱に詰めてきた土産を一つ一つ時間をかけて確認していた。新品のサンダルは靴下を履くとぴったりだといって喜んだ。起き出してきた長男に筆者が昔着ていたものだといって T シャツをあげると、自分の体に当ててみて「大きくなったら着る！」とはしゃぐ。それを見ていた M が「わたしのサイズよ」といって、「じゃあ、お母さんが着てよ。おれは大きくなった時に着るから」といって、T シャツを差し出した。(2012 年 7 月 28 日)。

この土産の事例のように、E 家の人々も含めまだ誰も筆者の持ってきたモノの内容を知らない状況においては、情報の囲い込みが行われる。生の情報が漏れないように人払いがなされるのである。また、遊牧民の間で交わされる贈答品は、蒸留酒、チョコレートなどの菓子類、新品の肌着、衣類などある程度予想がつくモノである。しかし、筆者が良かれと選んで持ってくるモノの中には彼らの想定しないモノも含まれていることがあり、開けてみるまで分からないという福袋のような扱いであったこともこの対応に影響していると思われる。

準共営世帯や親戚が全員帰るのを待つてようやく土産を取り出し、羽織ったり履いてみたりしながら、機能性を確認しどんな機会に着ようかなどおしゃべりをする。一通り調べたあと再び元の箱に戻し、翌日からのお披露目に備える。ただし、すべてをお披露目するのではなく、この段階で見せるモノと見せないモノが選別される。ナイフやジャケット、写真用の額縁など貴重な品はその場で長持や戸棚に収納され、特別な機会に披露されるまで存在しないかの如く扱われる。反対に古着のズボンなど貴重ではなくても明日からすぐ使うつもりモノや、小麦、じゃがいも、米などの食糧もお披露目の対象から除外され、それぞれ所定の収納に仕舞われる。果物や菓子類はダルド・ヒーヒされ、お披露目はせず、客人が来た時に一掴みずつ長持から取り出して振る舞うために取り置かれる。一方、置き時計、カレンダー、子どもの玩具、アルバム、調味料など見せるモノは戸棚や長持の上に出して置かれる。

こうして、貴重品や食料品およびその時点で E 家の家族が見せないと判断したモノを除いたモノがお披露目、あるいは陳列されることになる。情報内容も情報量も操作されている。こうした事実からいえるのは、お披露目もモノの配置も戦略的な情報管理の一環として行われているということである。また、その後の E 家の都合や周りの人々の反応によって、ダルド・ヒーヒするか否かの判断も変化する。ナイフの事例〔事例 5-31、5-38 参照〕のように、一旦はダルド・ヒーヒし、兄や親しい友人にはお披露目され、要求圧が高いと

見るやすぐにまたダルド・ヒーヒされるモノもあれば、一部をダルド・ヒーヒしたまま一部だけ見せるということも行われる。例えば次のような事例である。

事例 5-51

E 家のホイモル東側にある戸棚の上段には家族全員分の枕が、下段にはデールが収納されていた。M がデールを取り出した拍子に、調味料が四袋ほど包装に入った状態で転がり出てきた。M は、「みんなが頂戴、頂戴っていうから、ダルド・ヒーチ・バエサン〈dald khijj baisan: 隠してたの〉」という。拾い上げると、今度は西側の戸棚に仕舞い直した。(2010 年 6 月 9 日)

事例の調味料は筆者が土産に日本から持ってきたもので、その一部は当初から食器棚に置かれて食事に使われていた。食器棚の上段はガラス張りの扉になっているため、来訪者の目に留まりやすい。すぐに気づいた親戚や共営世帯の夫人が M に要求すると、M は素直に交渉に応じ分け与えていた。十袋以上あったはずが、三日ほどで半分以下になっており、筆者も随分減るのが早いと感じていた。要求しに来ていた夫人達も、食器棚の調味料が残り少なくなっているのを見ると、それ以上求めようとはしなかった。他家にあげてしまったのだらうと思っていたら、実は M が取り置いていたのである。

調味料の一部だけを食器棚の中に置いておき、それ以外を隠したことで、来訪者に事実とは異なる情報を発信したのである。M には来訪者が食器棚の中を見ることは織り込み済みである。調味料の袋が一つ、二つと減っていく様子を見せることによって、来訪者は E 家で使用したにせよ他家にあげたにせよ、残り少ないという情報を読み取る。一部分の隠蔽によってモノの数情報を操作し、来訪者をミスリードすることに成功した。E 家の分がなくなるとわかれば、さらにもらおうという要求圧は抑えられる。しかも、M ははじめに気前よく調味料の交渉に応じていた実績があるため、妬まれたり、ハラムチと悪評をたてられる心配もない。

ただし、常にうまく行くとはいえず、来客の前で収納を開けた拍子にインスタントラーメンがぼろりと転がり出て、親戚 C 家の夫人に凝視されるということもあった。さり気なさを装って収納に戻したものの、気まずい空気が流れた。C 家夫人はその場では何も言わなかったが、宿営地に戻って共営世帯の人々などに報告したであろうことは間違いない。しかし、このような隠蔽工作は、どの世帯でも行われているため、社会的に厳しく非難されるということにはならない。それは、隠蔽した分とは別に、入手した時点で親戚には何らかの形で分配されているはずだからである。

このような来訪者がモノを見ていることを逆手に取った戦略が活用できるのも、ソニルホホされることを前提としているからである。また、情報収集を行う側は、所有者からお披露目という形でオハハの機会が提供されると、それ以上の詮索ができなくなる。実際家族しか知りえない情報が提供されるうえ、お披露目を受けたことによって親和的な関係性

にあることが顕示されているからである。しかし、事例 5-50 で明らかにしたように、実はこのお披露目（あるいはオハハに應える）という行為自体が、所有者によって用意されたものであり、提供した情報以外には突っ込ませないという戦略なのである。

当然、そのような戦略にはどの世帯も気づいており、実践している。E の友人で共営世帯でもあり、他家に比べお披露目を受ける機会の多かった G 家の夫でさえ、筆者の調査した E 家のモノ目録を偶然目にした際、「これで、全てじゃないはずだ。おまえに見せてないモノがまだあるはずだ」と勘繰ってみせたように、家人からお披露目を受けたとしても、それが全てではないと了解している。しかし、だからといってそれ以上を見せるように当人に直接要求することはない。家族が生活していくために必要と考えるモノがそれぞれにあることを承知しているからである。それでも、お互いにどんなモノを隠し持っているかには関心があるため、筆者を使って他家のモノの情報を探らせようと試みたりする。

ここまで述べたことを所有者である情報管理者の立場からまとめると、以下のようなになる。所有者は自発的にあるいは求めに応じてモノの情報を提供することで、将来の交渉権を分配したという自家の社会的な立場を維持することができる。また、所有者はダルド・ヒーヒ、お披露目、ガエホーラハ、陳列という手段を組み合わせ、相手に応じて使い分けながら、所有者にとって都合よく操作された情報の発信を行っている。

5-3-2. 交渉の場としてのゲル

全ての遊牧民が情報管理者であると同時に情報収集者である。従って、攻守が入れ替わりながら訪問した先々でモノの情報をめぐる攻防が展開されている。このような攻防の舞台装置として、遊牧民の住居であるゲルはいかなる役割を担っているのだろうか。

ゲルというのは間仕切りのない一間構造であり、同居する家族の私生活がここで繰り広げられている。しかし、そこに来客（同居人・家族以外の人間）が存在すれば途端に、「社会的な公共空間」となる〔島村 2009: 455〕。来訪者の多い夏季には、ゲルはほぼ一日中応接間として機能する。

その一方で、ゲルが家族の私的空間として用いられている時も、客を迎えた応接間として機能している時にも、ホイモル、上座、下座に対応した空間構成は変化しない。空間構成にならって配置される家具やモノの位置もほぼ構造化されており、どのゲルに入っても大差はみられない。このことが意味するのは、全ての遊牧民の脳裏には、空間構成と家財配置が組み合わされた見取り図が備わっているということである。このような見取り図が共有されているからこそ、他家の生活世界に取り込まれた新奇なモノにもすぐに気が付くのである。

家具およびモノの配置が空間構成によって規定されているというのが、遊牧民全員を縛るおそらく唯一のルールである。このルールによって、内容物を実際に目にしたことはなくても、貴重品がホイモルに置かれた長持の中にあるということは、公然の秘密となって

いる。その家の生活の根幹にかかわるモノが存在していることが自明な長持を、あえてオハハしようと要求する者はいない。お互いに踏み込んでではない領域があることを了解した上で、ルールに則った情報収集と交渉による駆け引きを行っているのである。

交渉の舞台に乗せられないモノは、ダルド・ヒーヒによって所定の家具に収納し情報を秘匿する一方、交渉に利用できるものはゲルの見えるところに置いておく。E家の生活世界にあったモノ全体の、およそ 35%に相当した見えているモノというのも、実は意図的に見せているモノという事になる。美しい模様の描かれた家具や写真額、置物などの装飾品で室内を装うと同時に、操作した情報を発信しているのである。

来訪者が目敏く見つけてソニルホホすることになるが、それも織り込み済みのモノの配置である。情報の管理者は、モノが興味を引くことを利用して会話を展開したり、相手のもつモノの情報を引き出したりと、思惑に合わせて働きかける。このような、情報管理者と収集者双方の相互行為によって交渉された結果、モノが世帯を超えて移動するという現象が引き起こされる。口頭の交渉による駆け引きだけでなく、ゲル内のモノの配置を含めての情報操作、情報発信であり、空間を利用した交渉であるといえる。

5-3-3. 交渉が作る人間関係

ここまで、モノの情報をめぐるやり取りに注目してきたが、モノの情報を収集する際にも、情報が分配される際にも、当事者間の社会関係や交流の多寡が重視されていることがわかる。お披露目を受ける、あるいはオハハが受け入れられるということは、家族しか知らない情報を共有できる関係性にあるということの証明でもある。情報の提供を受けた方も、それに応じて自家がモノを入手した際にはお披露目を行う。このようにして、情報を分配し合うという実績を相手との間に築くことにより、当事者間の関係性を維持しようとする。

しかしながら、遊牧社会における人間関係は固定的なものではない。一ヶ所に定住することがないため、共営関係や隣近所といった地縁は季節限りのもので、次の宿営地に移動すれば消えてしまう。血縁による繋がりでもない限り、広範な地域に分散して暮らしている彼らの間に、いつでも何でも見せ合う互助関係は期待できない。そこで必要になるのは、季節移動した先々において、共営世帯や近隣世帯と新たな関係を築くことであり、旧知の親交を絶やさないために、たまに遠出をして友人を訪問することである。

地理的に離れた場所に各世帯が孤立した状態（物理的な条件であり社会的孤立ではない）で生活するのが基本である遊牧民の日常において、生じた必要の一切は各自の力で何とかしなければならない。ただし、各自の力というのは独力を意味しない。「モンゴル人はもともと狩猟遊牧民なので、良い牧草や豊富な水を自ら取りに出掛けるという発想をする。自分で行動して、望むものを獲得するのであって、誰かが自分のために何かしてくれるの

を待つということはない」〔木村 2010: 82〕。したがって、各自の力で何とかするというのは、自分から積極的に取りに行くという意味である。

必要なモノ、欲しいモノは自力で取りに行くものであり、どこから取るかということ、あるところから取るということになる。「遊牧民の社会ではかつて、わざわざ移動というコストをかけて出向いて、他者から奪うことによって自分たちのものを豊富にする、という経済が成り立っていた」〔小長谷 2002: 93〕のであり、そのためには、どこにあるのか、交渉相手は誰かという情報が収集される。

手に入れたいモノと交渉相手と自分との関係性を考えた場合に、より近い関係性が必要だとわかればすぐに新たな関係を築こうと働きかける。本来は社会関係を前提とした上で行われるお披露目を、率先してしかけることで、交渉相手と自分の関係性や距離感を動かそうとする。先んじて秘匿性の高い情報を提供することを通して、相手にも情報を出すか交渉に応じるかしなければならないという状況を創出するのである。

彼らの社会関係に着目すると、親戚間ではモノの分配も行われるが、それ以外の人々に関しては、必ずしも直接モノを与えることが人間関係を繋いでいるわけではない。極論すれば、モノを分配することはさほど重要でない。なぜなら、モノは他人から分配されるものではなく、交渉によって自ら取るものだからである。モノを得るための交渉は各自が社会関係や収集した情報を活用して独自に行えばよいのであって、この交渉を可能にするための条件である情報を与えることに価値がある。したがって、人間関係を結ぶ鍵となるのは情報のやり取りがどの程度行われるかという点である。

本来情報も各自で取るもの、収集するものであるが、そのような情報がモノを見せることによって分配されることで、当事者間の関係性に変化をもたらすことができるのである。情報とモノの違いは、他人に与えても手元に残るか否かにある〔矢野 2010: 15〕。つまり、モノの情報の分配における最大の利点は、与えても減らず、対象が何人であろうと分配可能なことである。しかも、自分のモノの情報でなくても構わない。交渉は情報の受信者が独自で行うことであるから、情報の提供者が所有者である必要はないのである。

その反面、モノの情報はモノよりも簡単に盗まれやすい。モノが手元にあったとしても、少なくともそのモノがそこに存在したという情報が、いつ、誰に奪われてしまったかは所有者にもわからない。したがって、モノの情報を秘匿するのは至難の業であり、管理者の能力に大きく左右される。

このように、モノ自体ではなく情報を分配することによって、親戚や共営世帯にとどまらないより広範囲の人々にも分配が可能となり、ゆるやかなネットワークが形成されることになる。同じ一つのモノでも、分配する情報の内容や量、相手（親戚、有力者、知人など）、タイミングを操作することにより、さまざまな人間関係をその時々が必要に応じて創出することができるのである。

小結

本章の目的は、遊牧民がモノをめぐる交渉に至るまでに、モノの情報をめぐる交渉（情報収集と情報管理による駆け引き）と人間関係を動かすための交渉（情報の分配、交換）を積み重ねていることを明らかにすることであった。

モノの情報をめぐる交渉では、ソニルホホやオハハという情報収集行為が社会関係を活用して行われており、収集された情報を基にモノの要求交渉へ転換していく様子を提示した。また、情報の所有者は、家族の必要に応じてモノを秘匿し情報を制御すると同時に、社会関係や社会的立場を維持するために特定のモノの情報を、お披露目、ガエホーラハ、陳列などの方法によって発信していることも例示した。

情報の提供が将来の交渉権の分配とみなされることによって、当事者間の社会関係は形成、維持、強化されることになる。このような情報分配のもつ働きを活用することで、遊牧民は季節ごとに新たな人間関係を構築することができる。モノを直接やり取りすることには物理的な制約があるが、モノの情報はいくらでも分配可能である。モノの情報のやり取りを通して、ゆるやかでより広範なネットワークが形成されていくことになる。その結果、拡散された情報を頼りに交渉が行われ、モノが世帯を超えて頻繁に移動するという状況が生まれるのである。

終章 結論

本稿では、現代におけるモンゴル遊牧民のモノの世界に焦点をあて、モノの存在を契機に引き起こされる相互行為を描き出すことを通して、遊牧社会が情報社会であること、交渉によって社会関係が操作されていることを論じてきた。本章では、序章で提示した研究課題に引き付けながら議論の要点をまとめ、本研究で明らかにしたこととその意義を述べる。

文化人類学におけるモノ研究としての課題は、モノが所有者の意思とは無関係に移動してしまう社会であり、譲渡か貸借かといった概念上の区別を重視せず、モノの交換を前提としない交換を行う人々の間において、モノが果たす役割を解明することであった。モノを媒介とした贈与や交換が社会関係を創出するということは、マリノフスキー〔泉靖一編 1980〕、モース〔1962〕、レヴィストロース〔泉靖一編 1980〕、サーリンズ〔1984〕などによって枚挙に暇がないほど議論されてきた。そこでは腕輪、楯、女性、食物〔岸上 2005〕など、目に見える形と質量をもった存在、つまり物質性を持ったモノが贈与および交換の媒体として対象化されてきた。これに対して、本論文では物質性を持ったモノ（メディア）から読み取られる情報が贈与、交換の対象となり得ることを明らかにし、さらに情報の分配・交換による社会関係の創出が可能であることも明示した。

モノを動態として捉えるという立場から、序章で Appadurai ら〔1986〕の物質性を持ったモノの動きを時間軸で捉えるという方法論を採用することを述べたが、本論を通して得られた知見からこれに修正を加えたい。Appadurai らの議論ではあくまでモノは「商品」、つまり交換財として捉えられているため、モンゴル遊牧民のモノの世界にそのまま当てはめることができない。なぜなら、社会の中をモノが「商品」という形で移動する（＝交換可能性）と設定した時点で、移動の結果としての交換（＝所有権の移転）を自明視しているからである。

一方、筆者が扱っているのは未交換、非交換（モノの交換を必然としない）の状態である。そして遊牧民にとっては、結果としての交換より、交渉によって人間関係を維持・開拓する未交換の過程における相互行為がより重要である。したがって、遊牧社会におけるモノを Appadurai らの議論に当てはめようとすれば、完了行為である交換ではなく、未然の行為である交渉を俎上に載せるのが妥当であろう。その場合、モノの交換可能性ではなく、交渉可能性が問われることになる。前提とされるのは財やサービスが等価交換されることを自明とする交換社会ではなく、財やサービスの価値以外の要素（天候、気分、情、好き嫌いなど）が複雑に絡む交渉社会である。モノは自動的に交換可能性へ開かれるのではなく、交渉によって人とモノが動かされてはじめて交換可能性へと向かう（ただし成功するかどうかは時と場合による）。ダルド・ヒーヒは情報が遮断された交渉不可能状態であり、対象者やモノに応じてお披露目、ガエホーラハ、陳列へと交渉可能性が開かれていく。

つまりモンゴル遊牧社会においてモノは交換財ではなく、情報性をもった「交渉財」なのである。

モンゴル遊牧社会の研究としては、現代の生活世界にあるモノをフローとして捉えるアプローチによって、遊牧民の能動的で交渉上手な一面を提示することができたと考える。遊牧社会では、放牧先を左右する宿営地の選定にしても、日々の生活の必要を満たすにしても、異邦人との交流においても、すべてが交渉によって動かされていく。状況が自分に好転するのを待つのではなく、自分の要求に合わせて周囲に働きかけていく。そういう意味においてモンゴル遊牧社会は、交渉社会でもある。

地理的・空間的に分散して生活し、季節ごとに共営世帯を組み替える遊牧民の間には、固定された地縁や共同体といった感覚が存在しない。それに代わってモノや情報をめぐる他者への働きかけ、つまりは交渉が人と人を繋ぐ役割を果たしていると考えられる。モノが人間関係を作るということはすでに明かされてきたことであるが〔中川 1992; 伊藤 1995; 内堀他 1997; 小馬 2000〕、モンゴル遊牧民の場合にはモノを動かすことによって社会関係が築かれるということである。モノを動かすというのは、それが、贈与か貸与か交換かといった理念上の動きではなく、文字通り実際に世帯から世帯へとモノが移動するということを指す。本論でも述べたが、譲渡か貸借かの概念的な区別は日常生活に置いて意味をもたない。必要とする人が必要とするモノを手にしたかどうかの問題なのであり、モノの融通に何らかの形で、例えば、モノを直接提供するあるいはモノの情報（もっている人物の所在など）を提供することに関わることによって人間関係が紡がれるのである。

他方で、注意しなければならないのは、あるからといって求められるがままに与える者、聞かれるがままに真実のみを語る者は彼らにとって尊敬の対象にはならないという事実である。求められるがままに与える者は、あるところから取るという発想をもつ遊牧民にとって、徳のある分配者とはみなされない。そこにあるという情報を取り、出向いて交渉し獲得した自らの功勞であると彼らは考える。聞かれるがままに真実を語るというのは、情報の重要性が分別できない愚か者のすることであるとみなされる。交渉してくる情報収集者に対し、情報管理者はモノや情報の重要度を見極め、出し惜しみ、知ったかぶり、「お前だけに教えてやる」などという演出を加え、自らのモノや情報に価値を付与して交渉することが求められる。交渉によって互いの立場を高めあうことに重きが置かれているところが、筆者が交渉社会であると主張するゆえんである。

1253年から55年にかけてモンゴルを旅したフランスの修道士ルブルクは、当時出会ったモンゴル人について次のように述べている。「子供たちにやるからパンを幾らかくれとたのみ、小刀・手袋・財布・帯など、わたしどもの従者がつけているもので目についたものは何でも珍しがって、みんなほしがりました」〔ルブルク 1989:157〕。「暴力で取りあげることはいたしません、目についたものは何であろうと大変ぶしつけにずうずうしくねだります」、「そのほしがるものを与えないで、あとになってかれらの援助を乞わねばならなくなったときには、よく助けてはくれぬのです」〔ルブルク 1989:158〕。

ルブルクの残したこのような記述は、当時から遊牧社会で交渉によるモノのやり取りが行われていたことを物語っている。ルブルクはまるで追いはぎにでもあったかのように、遊牧民にモノを求められたことを恨みがましく記述しているが、遊牧民の立場から見ればこれは交渉である。遠方から、見慣れぬ人間がやって来たので興味をもち、携帯していた珍しいモノを自分の手元に置きたいと欲したのであろう。これが交渉であるという証拠は、ルブルク自身が「暴力で取りあげることはいたしません」と述べている通りである。武力を背景に遊牧民が修道士から力づくで奪うことは容易だったはずである。それをせずに口頭で要求しているという事実が、交渉であったことを示している。

日常生活において、モンゴル語で「交渉する」ことを「ヤリハ〈yarikh〉」という。市場などで値引きを要求する際には、「ヤリホー〈yarikh uu〉？」と声をかける。直訳すれば「話すか？」である。辞書で「ヤリハ」の意味を引くと、「話す、物語る、対話する」とある。つまり、モンゴル人にとって人と「話す」こと、コミュニケーションをとることはすなわち、「交渉する」ことなのである。

遊牧社会が交渉社会であることが情報への関心を高めていると筆者は考える。交渉に先立つものは情報収集である。情報を持つ者は有利に交渉を進めることができる。それゆえ情報自体が価値をもち、情報をめぐる交渉へと展開する。そのような前提を社会基盤として共有しているからこそ、モノの情報を見せる行為が分配とみなされ得るのである。もちろん、ただ見せるのではなく、ダルド・ヒーヒ、お披露目、ガエホーラハ、陳列という四段階の情報管理、情報発信方法を、対象となる人物に応じて効果的に使い分けることで人間関係をも操作しようとする。

また、遊牧民の空間認識や住居内の空間構成は、これまで単に伝統の踏襲として紹介されてきたが、家財道具の配置が情報収集・情報発信の際に主要な役割を果たしていることを本論文ではじめて提示した。情報収集者に対して新奇なモノの発見を効率化すると同時に、管理者にとっては情報の陳列棚として利用されることで、交渉可能性（そこにはないモノには交渉の不可能性）を明示し、交渉の展開を方向づける。

モノに着目することによって明らかになった、必要なモノは自ら取りに行くという遊牧民の生き方は、家畜に必要な水と牧草を取りに行くという遊牧民の姿に主眼をおいてきたこれまでの研究成果を補完するものである。そしてモノと家畜両者に共通するのは、その手立てとして情報と交渉が駆使されるという点である。遊牧民が常に情報を収集し管理し発信する、情報の扱いに長けた人々であることを織り込めば、「簡素で素朴」と誤解されがちな遊牧民のモノの世界が、モノの管理と情報統制の結果としての戦略的空間としてたち現れるはずである。

最後になるが、本論文では一貫して、モンゴル遊牧民のモノの世界を読み解く際にモノの情報性に着目する有効性を主張してきた。実際には、遊牧社会全体が情報によって動いていると筆者は考えている。しかしながら、モノのように物質性をもたない情報を可視化することは困難であり、彼らの扱う情報のすべてを把握することは不可能に等しい。

可視化が困難であるという物理的な問題だけでなく、遊牧民のテクニカルな情報リテラシーの高さが情報の把握を一層難しくしている。例えば、筆者が他の宿営地に住む E の友人世帯の固定電話を借りて UB に連絡を取った際には、電話口では「日本語で話せよ」と E に事前に忠告されていた。電話を借りた家族に E 家が筆者を通じて何を手に入れようとしているかを聞かれないようにするためにである。また、秘匿すべき事柄のやり取りは人目を避けて行われ、声が風によって流れることを警戒し、昼間にも関わらず天窓の覆いと扉を閉めきったうえで、声を落として話すこともあった。国立民族学博物館に彼らのゲルが買い取られる価格交渉の際がそうであった。声を落として話しながらも、常にゲルの外の人の気配に気を配っていた。ゲルの売却は E 家にとってトップシークレットだったため、E 家の意図しないタイミングで話が漏れることには細心の注意が払われた。

このように、筆者がたまたま片棒を担ぐ当事者であったがゆえに知り得た情報がある一方、彼らが意図して秘匿している情報に、血縁でもない人間がアクセスすることは困難である。彼らの日常生活全般を覆う情報活動の全容を論述することを今後の課題としつつ、本稿ではその一部を、モノのやり取りに焦点をあてることによって可視化することに成功した。情報志向性の強い交渉社会において、モノをめぐる相互行為から明らかにしたのは、モノが交渉財として扱われている実態であり、モノの情報の交換や分配を通して世帯間のマイクロ・ポリティクス [杉山 1987] が繰り広げられている可能性である。モノの情報をめぐる交渉の場は、自立した各世帯が互いに情報力（収集および管理能力）を発揮し自家のプレゼンスを高める機会でもあるのである。

謝辞

想像してみて欲しい。もし、自分の家に突然外国人の調査者が現れて、「あなたの家の中にあるモノ全てを見せて下さい。住み込みで」と言ってきたら、果たして受け入れを即断できるだろうか。見られたくないモノが脳裏を過って躊躇してしまうのではないだろうか。そんな筆者の願いを快く聞き入れ、時に不思議がりながら時に面白がりながら辛抱強く付き合ってくれた E 家の協力なしに、この研究を進めることはできなかった。何よりもまずはじめに、E 家の皆様とサントの遊牧民の方々に心からの敬意と謝意を表したい。

そして、E 家の皆様に筆者を引き合わせて下さったモンゴル国立科学技術大学の I. Lkhagvasuren 先生、調査地への行き来に最大限の協力をしてくれた友人の T. Narmandakh 博士、首都でいつも温かく筆者を受け入れ体調を気遣って下さった Ts.Togookhüü 医師に感謝を捧げたい。

ただのモンゴル好きとして総研大の門を叩いた筆者に、調査の心得にはじまり、見聞きし感じたことを学問に昇華させる喜びを教えて下さった国立民族学博物館の小長谷有紀教授（現：人間文化研究機構理事）には、感謝の念を禁じ得ない。小長谷先生から賜った指導と的確な助言は、一生の宝である。また、副指導教官を引き受けて下さり、研究に不可欠な文化人類学の知識を一から丁寧にご教授下さった国立民族学博物館の岸上伸啓教授、論文に対して惜しみなく建設的なご助言を下された滋賀県立大学の島村一平准教授にも感謝する。

事あるごとに議論し、常に励まし合える総研大の院生および外来研究員諸氏の存在も得がたいものであった。別けても、博士論文の提出の瞬間まで助力を惜しまず支えてくれた金セッピョル氏にこの場を借りて感謝したい。その他にも、今日に至るまでに多くの方々から知的刺激や激励を賜った。ここにお名前を挙げきれない非礼をお許しいただきたい。

なお、本論文が依拠するデータを収集するためのフィールド調査は、総合研究大学院大学平成 21 年度文化科学研究科「スチューデント・イニシアティブ事業」および「学生派遣事業」、平成 22 年度文化科学研究科連携事業「リサーチ・トレーニング事業」の助成と、日本学術振興会の平成 23 年度および平成 24 年度の科学研究費補助金（特別研究員奨励費）によって行ったことを明記するとともに、改めて謝意を表する。

最後になったが、研究者としての道を歩むことを喜んで応援してくれた家族と金子利子氏、同じ研究者を志す仲間として論文の完成を楽しみにしてくれていた故大森裕巳氏に言葉にできないほどの感謝をもって、この論文を捧げる。

2015 年 6 月 9 日

堀田あゆみ

参考文献

〔日本語〕

赤塚雄三、高橋盛親

- 2003 「モンゴル:ウランバートル首都圏一極集中による都市居住環境の変容」『国際地域学研究第6号』東洋大学国際地域学部、pp.25-57。

朝倉敏夫、佐藤浩司編著

- 2002 『2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔のくらし』国立民族学博物館。

阿拉坦宝力格

- 2007 「モンゴルの文様から見える民族性—美意識の継続と変化」煎本孝、山田孝子編著『北の民の人類学—強国に生きる民族性と帰属性』京都大学学術出版会、pp.247-286。

ア・ロナ・タシ

- 1966 『蒙古の遊牧民をたずねて』佐藤清郎訳、ベースボール・マガジン社。

泉靖一編

- 1980 『マリノフスキー レヴィ＝ストロース』中央公論社。

磯野富士子

- 1986 『冬のモンゴル』中央公論社。

伊藤幹治

- 1995 『贈与交換の人類学』筑摩書房。

伊藤幹治、栗田靖之編著

- 1984 『日本人の贈答』ミネルヴァ書房。

今岡良子

- 2007 「第4章移住家族の生活困難／第3節乳幼児の発育障害と移住」長沢孝司、今岡良子、島崎美代子、モンゴル国立教育大学 SW 学科編著『モンゴルのストーリー—チルドレン—市場経済化の嵐を生きる家族と子ども達』朱鷺書房、pp.138-158。

今西錦司

- 1974 『今西錦司全集第二巻 草原行／遊牧論そのほか』講談社。

今村薫

- 1998 「人が住まない小屋—ブッシュマン／カラハリ砂漠の狩猟採集民／ボツワナ」佐藤浩司編『住まいをつむぐ』学芸出版社、pp.49-70。

今村仁司

- 2000 『交易する人間（ホモ・コムニカンス）』講談社。

ウィーナー・ノバート

- 1956 『人間機械論—人間の人的利用』鎮目恭夫、池原止戈夫訳、みすず書房。

内川芳美、岡部慶三他編

- 1974 『現代の社会とコミュニケーション2 情報社会』 東京大学出版会。
- 内堀基光他
- 1997 『岩波講座文化人類学第3巻「もの」の人間世界』 岩波書店。
- 梅棹忠夫
- 1976 『狩猟と遊牧の起源』 講談社。
- 1990 『梅棹忠夫著作集 第2巻モンゴル研究』 中央公論社。
- 小川さやか
- 2011 『都市を生きぬくための狡知—タンザニアの零細商人マチングの民族誌』 世界思想社。
- 奥野卓司
- 2009 『情報人類学の射程—フィールドから情報社会を読み解く』 岩波書店。
- 尾崎孝宏
- 2008 「モンゴル牧民社会における郊外化現象—ポスト「ポスト社会主義」的牧民の出現に関する試論」 高倉浩樹、佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程』 国立民族学博物館調査報告 78、国立民族学博物館、pp.481-499。。
- 2011 「ゾド（寒雪害）とモンゴル地方社会—2009／2010 年冬のボルガン県の事例」『鹿大史学』 58 巻、pp.15-33、鹿児島大学リポジトリ <http://hdl.handle.net/10232/10417>。
- 小沢重男編著
- 1994 『現代モンゴル語辞典』 大学書林。
- 小澤重男
- 1972 『現代のモンゴル—草原と砂漠の国』 日本交通交社。
- 小澤重男訳
- 2007a [1997] 『元朝秘史（上）』 岩波書店。
- 2007b [1997] 『元朝秘史（下）』 岩波書店。
- 小澤重男、鯉渕信一
- 1992 『モンゴルという国』 読売新聞社。
- 風戸真理
- 1999 「遊牧民と自然と家畜—遊動と家畜管理」 島崎美代子、長沢孝司編『モンゴルの家族とコミュニティ開発』 日本経済評論社、pp.21-50。
- 2009 『現代モンゴル遊牧民の民族誌—ポスト社会主義を生きる』 世界思想社。
- 樺山紘一
- 1988 『情報の文化史』 朝日新聞社。
- 神谷康雄、松本武司他
- 2011 「モンゴル国におけるゾド（雪寒害）の発生」『畜産の研究』 65 巻 8 号、農林水産省農林水産技術会議事務局筑波事務所、pp.859-869。
- 加茂義明

- 2003 「第Ⅱ部第3章アジア内陸地域／3. モンゴル／, 3-2. モンゴルの都市部における環境問題」『アジア環境白書 2003/04』日本環境会議・アジア環境白書編集委員会編、東洋経済新報社、pp.210-215。
- 辛嶋博善
- 2010 「取引費用の引き下げ方—モンゴル遊牧民と市場」中野麻衣子・深田淳太郎編『人＝間の人類学—内的な関心の発展と誤読』はる書房、pp.191-209。
- 川上和久
- 1994 『情報操作のトリック—その歴史と方法』講談社。
- 岸上伸啓
- 2003 「狩猟採集民社会における食物分配の類型について—「移譲」、「交換」、「再・分配」—」『民族学研究』68巻2号、pp.145-163。
- 2005 『カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究—先住民社会の変容と再生産』総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻、博士論文。
- 木村理子
- 2010 『朝青龍よく似た顔の異邦人』朝日新聞出版。
- 草野耕一
- 1994 『ゲームとしての交渉』丸善株式会社。
- 久保正敏
- 1992 「情報に対する価値意識の変容」『情報の科学と技術』42巻6号、情報科学技術協会、pp.564-571。
- 1995 『コンピュータ・ドリーミング—オーストラリア・アボリジニ世界への旅』明石書店。
- 鯉渕信一
- 1995 [1992] 『騎馬民族の心—モンゴルの草原から』日本放送出版協会。
- 国際協力事業団
- 1997 『モンゴル 国別援助研究会報告書』国際協力事業団。
- 国際協力推進協会
- 1994 『モンゴル 開発途上国国別経済協力シリーズ第2版』
- 1999 『モンゴル 開発途上国国別経済協力シリーズ第3版』
- 湖中真哉
- 2006a 『牧畜二重経済の人類学—ケニア・サンプルの民族誌的研究』世界思想社。
- 2006b 「グローバル化と廃物資源利用—ケニア中北部サンプルの事例」小川了・周永河編『資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築—グローバル化する世界の中の小生産物』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.51-70。
- 2007 「小生産物（商品）の微細なグローバリゼーション—ケニア中北部・サンプルの廃物資源利用」小川了編『躍動する小生産物 資源人類学 04』弘文堂、pp.25-62。

小長谷有紀

- 1991 『モンゴルの春—人類学スケッチ・ブック』 河出書房新社。
- 1992 『モンゴル万華鏡—草原の生活文化』 角川書店。
- 1996 『モンゴル草原の生活世界』 朝日新聞社。
- 2003 「生まれ変わる遊牧論—人と自然の新たな関係をもとめて」『科学』Vol.73-No.5、岩波書店、pp.520-524。
- 2005 『世界の食文化③モンゴル』 農山漁村文化協会。
- 2012 「梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料」国立民族学博物館研究報告 37 巻 1 号別刷。

小長谷有紀編著

- 1997 『アジア読本 モンゴル』 河出書房新社。
- 2002 『遊牧がモンゴル経済を変える日』 出版文化社。

小長谷有紀、辛嶋博善、印東道子編

- 2005 『モンゴル国における土地資源と遊牧民—過去、現在、未来』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

小長谷有紀、堀田あゆみ編著

- 2013 『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』 国立民族学博物館調査報告 111、国立民族学博物館。

今和次郎

- 2006 [1987] 『考現学入門』 筑摩書房。

近藤雅樹

- 2003 『日用品の二〇世紀—二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容 8』 ドメス出版。

小馬徹

- 2000 『贈り物と交換の人類学—人間はどこから来てどこへ行くのか』 神奈川大学評論編集専門委員会編、お茶の水書房。

後藤富男

- 1968 『内陸アジア遊牧民社会の研究』 吉川弘文館。
- 1970 『騎馬遊牧民』 近藤出版社。

ゴッフマン・アウイング

- 1986 『儀礼としての相互行為』 広瀬英彦・安江孝司訳、法政大学出版局。

ゴドリエ・モーリス

- 2007 『贈与の謎』 山内昶訳、法政大学出版局。
- 2010 『想像的なものの人間学』 山内昶、山内彰訳、文化科学高等研究院出版局。

サーリンズ・マーシャル

- 1984 『石器時代の経済学』 山内昶訳、法政大学出版局。

佐々木史郎

- 1998 「ポスト・ソ連時代におけるシベリア先住民の狩猟」『民族學研究』63（1）、pp. 3-18。
- 佐藤浩司
- 2009 「思い出をアーカイブする—二〇〇二年ソウルスタイル展と李家」『歴博』国立歴史民俗博物館、pp.15-18。
- 佐藤浩司他
- 2002 『2002 年ソウルスタイルその後—李さん一家の 3200 点 普通の生活』INAX 出版。
- 鮫島和男
- 2011 「モンゴル、ウランバートル 遊牧民に会う、草原の休日」『VISA』459: 12-29。
- 島崎美代子、長沢孝司編
- 1999 『モンゴルの家族とコミュニティ開発』日本経済評論社。
- 島村一平
- 2009 「ハイカルチャー化するサブカルチャー？—ポスト社会主義モンゴルにおけるポピュラー音楽とストリート文化」関根康正編『ストリートの人類学』下巻、国立民族学博物館調査報告 No.81 別刷、pp.431-461。
- 2011 『増殖するシャーマン—モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』春風社。
- 杉山正明
- 2003 『遊牧民から見た世界史—民族も国境もこえて』日本経済新聞社。
- 杉山裕子
- 1987 「『白を貸してください』—生活用具の所有と使用をめぐるベンバ女性のマイクロ・ポリティクス」日本アフリカ学会『アフリカ研究』第 30 号、pp.49-69。
- 滝口良
- 2009 「土地所有者になるために—モンゴル・ウランバートル市における土地私有化政策をめぐる」『北方人文研究』第 2 号、pp.43-61。
- 2014 「勤勉な転売屋:現代モンゴルにおける商売と倫理」『日本オーラル・ヒストリー研究』第 10 号、pp.57-76。
- 田崎篤郎、船津衛編著
- 2001 [1997] 『社会情報論の展開』北樹出版。
- 丹野正
- 2006 「シェアリング、贈与、交換：共同体、親交関係、社会」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第 1 号、pp.63-80。
- チクセントミハイ・ミハイ、ロックバーク=ハルトン・ユージン
- 2009 『モノの意味—大切な物の心理学』市川孝一・川浦康至訳、誠信書房。
- 津江篤典

- 2013 「資源収入再配分の一例—モンゴル人間開発基金」『龍谷大学大学院経済研究』No.13、pp.3-4。
- 東郷美香
- 2011 『モンゴルにおける「家族」の動態に関する文化人類学的研究』滋賀県立大学大学院人間文化学研究科地域文化学専攻、修士論文（改訂版）。
- 床呂郁哉、河合香史編
- 2011 『ものの人類学』京都大学学術出版会。
- 富田敬大
- 2010 「家畜とともに生きる—現代モンゴルの地方社会における牧畜経営」『生存学』生活書院。
- 2013 「モンゴル牧畜社会における二つの近代化—開発政策の転換と都市近郊の牧畜経営をめぐって」天田城介、角崎洋平、桜井悟史編『体制の歴史』洛北出版。
- 中川敏
- 1992 『交換の民族誌—あるいは犬好きのための人類学入門』世界思想社。
- 中沢新一
- 2003 『愛と経済のロゴス カイエ・ソバージュⅢ』講談社。
- 中嶋洋介
- 2000 『交渉力』講談社。
- 長沢孝司、尾崎孝宏
- 2008 『モンゴル遊牧社会と馬文化』日本経済評論社。
- 野沢延行
- 1991 『モンゴルの馬と遊牧民—大草原の生活誌』原書房。
- 野村雅一編
- 1992 『現代日本文化における伝統と変容 8 情報と日本人』ドメス出版。
- 橋本茂
- 2007 [2005] 『交換の社会学—G・C ホーマンズの社会行動論』世界思想社。
- 橋元良明
- 1990 「ミクロ的視野からみた「情報」と「意味」—「情報行動学」と言語哲学との架け橋」東京大学新聞研究所編『高度情報社会のコミュニケーション—構造と行動』東京大学新聞研究所、pp.89-106。
- 蓮見治雄
- 1993 『図説モンゴルの遊牧民』新人物往来社。
- 2000 [1993] 「ゲルのコスモロジー」株式会社アルシーヴ社編『遊牧民の建築術—ゲルのコスモロジー』INAX 出版、pp.4-19。
- 日野千草

- 2001 「モンゴル遊牧地域における宿営地集団—モンゴル国中央県ブレン郡における事例から」 『リトルワールド研究報告』 17 号、pp.89-125。
- 藤本泰子
- 2005 「モンゴル国における首都移住問題—元遊牧民移住者のこれから」 『モンゴル研究』 No.22、pp.46-62。
- 船矢健喜智
- 1988 『社会生活と人間関係—二種類の人間関係について』 勁草書房。
- ブラウ・M・ピーター
- 1974 『交換と権力—社会過程の弁証法社会学』 間場寿一、居安正他訳、新曜社。
- プルジェワルスキー
- 1978 『世界探検全集 9 黄河源流からロプ湖へ』 加藤九祚訳、河出書房新社。
- 堀田あゆみ
- 2010 「よく死んだよ、今年は—2010 年モンゴル・ゾドの現場から」 生き物文化誌学会 『BIOSTORY』 (14) 誠文堂新光社、pp.102-105。
- 2012 「モノに執着しないという幻想—モンゴルの遊牧世界におけるモノの利用をめぐる攻防戦—」 『総研大文化科学研究』 総合研究大学院大学文化科学研究科。
- ボードリヤール・ジャン
- 1980 『モノの体系—記号の消費』 宇波彰訳、法政大学出版局。
- ボルガンザヤー・T
- 2007 「第 4 章移住家族の生活困難／第 2 節移住家族に現れた家庭不和」 長沢孝司、今岡良子、島崎美代子、モンゴル国立教育大学 SW 学科編著『モンゴルのストーリー—チルドレン—市場経済化の嵐を生きる家族と子ども達』 朱鷺書房、pp.120-137。
- 真島一郎
- 1997 「憑依と楽屋—情報論による演劇モデル批判」 『岩波講座文化人類学第 9 巻 儀礼とパフォーマンス』 岩波書店、pp.107-147。
- 益子待也
- 1992 「トリニンギットの社会と儀礼—南東アラスカの「ポトラッチ」における言葉の交換」 『北の人類学—環極北地域の文化と生態』 アカデミア出版会、pp.79-105。
- 増原良彦
- 1983 『説得術』 講談社。
- 松井健
- 2001 『遊牧という文化—移動の生活戦略』 吉川弘文館。
- 松川節
- 1998a 「移動と定住の狭間で—モンゴル／北アジア草原地帯の遊牧民／モンゴル」 佐藤浩司編『住まいをつむぐ』 学芸出版社、pp.195-214。
- 1998b 『図説モンゴル歴史紀行』 河出書房新社。

松原正毅

- 1991 「遊牧社会における王権」『王権の位相』松原正毅編、弘文堂。

松村圭一郎

- 2008 『所有と分配の人類学—エチオピア農村社会の土地と富をめぐる力学』世界思想社。

マテリアルワールド・プロジェクト

- 2008 [1994] 『地球家族—世界 30 か国のふつうの暮らし』近藤真里・杉山良男訳、TOTO 出版。

マルコ・ポーロ

- 1996 『東方見聞録』長澤和俊訳、株式会社小学館。

三秋尚

- 1995 『モンゴル遊牧の四季—ゴビ地方遊牧民の生活誌』鉱脈社。

メイヤスー・C ほか

- 1980 『マルクス主義と経済人類学』山崎カヲル編訳、拓殖書房。

モース・マルセル

- 2009 [1962] 『贈与論（新装版）』有地亨訳、勁草書房。

森真一、ガントゥムル・B

- 2002 「Ⅱ部遊牧の市場経済化への試み／第3章食肉流通革命・計画編」小長谷有紀編著『遊牧がモンゴル経済を変える日』出版文化社、pp.67-91。

森永由紀、篠田雅人

- 2003 「モンゴルの自然災害ゾド—気候学からみたモンゴル高原」『科学』Vol.73-No.5、岩波書店、pp.573-577。

矢野直明

- 2010 『情報文化論ノート—サイバーリテラシー副読本として』知泉書館。

山崎正和

- 2003 『社交する人間—ホモ・ソシアビリス』中央公論新社。

楊海英

- 2011 「内陸アジア遊牧文明の理論的再検討—今西錦司『遊牧論そのほか』と梅棹忠夫『文明の生態史観』の現在」静岡大学哲学会『文化と哲学』28号、pp.21-45。

ルブルク

- 1989 「ルブルクのウィリアム修道士の旅行記」カルピニ、ルブルク『中央アジア・蒙古旅行記—遊牧民族の実像の記録』護雅夫訳、光風社出版、pp.131-340。

ロッサビ・モリス

- 2007 『現代モンゴル—迷走するグローバリゼーション』小林志保訳、小長谷有紀監訳、明石書店。

[モンゴル語]

Avarzed Ü., Sodnoi T.

2008 *Mongolyn Nüüddiin Soyol Irgenshil Belcheeriin Mal Aj Akhu.*, Ulaanbaatar.

Ar'yasüren Ch.

2000 *Mongol Yos Zanshlyn Ikh tailbar Tol'*, Ulaanbaatar.

Baatarbileg Yo., Chadraa B. (ed.)

2009 *Arkhangai Aimag—Baigal' • Tüükh • Soyol • Khümüüs*, Arkhangai.

Badamkhatan S.

1987 *BNMAU-yn Ugsaatny Züi. Shinjlekh Ukhaany Akadyemiin Tüükhiin khüreelen*, Ulaanbaatar.

Batsaikhan Ts., Mend-Ooyoo G.

2009 *Mongol Nüüdelchdiin Soyol*, Ulaanbaatar.

Bayarsaikhan B., Orshikh N. (ed.)

2011 *Arkhangai Aimag—Tsvral gazryn zurag*, Ulaanbaatar.

Daajav B.

2006 *Mongolyn Uran Barilgyn tüükh — Ger- Mongol Uran Barilgyn Ündes*, Ulaanbaatar.

Dorjgotov A., Songino Ch.

1998 *Zuragt Tol' — Ed Möriin Barimtyн Tovch Ner Tom-yoo, Khuul' Züin Yaam, Shinjlekh Ukhaany Akadyemiin Khel Zokhiolyn khüreelen*, Ulaanbaatar.

Jukovskaya N. L.

2011 *Nüüdelchdiin Mongolchuud —Soyol, Ulamjlal, belgedel*, Orchuulsan n' Ch.Baasanjargal, Ulaanbaatar.

Khangainkhan KLUB

2003 *Aryn Saikhan Khangai — Tüükhen Tovchoo*, Ulaanbaatar.

Maidar D., Dar'süren L.

1976 *Ger — Oron Suutsny Tüükhen Toim IV*, Ulaanbaatar.

Namjin T.

1996 *Mongolyn ert ba edügee*, Ulaanbaatar.

Sandagdorj Ya., Oyuunkhand B.

2008 *Avto zamyn süлjeenii gazryn zurag—Road map MONGOLIA*. Ulaanbaatar.

Sharavdorj Kh.

1999 *Mongol ger*, Ulaanbaatar.

Sonomtseren L.

1992 *Mongolyn Ediin soyol, Ardyn Urlagiin Züilchilsen Tailbar Tol' Tergüün devter*, Ulaanbaatar.

Tserenkhand G.

- 2005 *Mongolchuud: Ugsaa-Soyol, Zan Zanshil I*, Ulaanbaatar.
Tsogbadral Kh., Sed-Od Ts., Dulamdorj S., Bat-Erdene Ts.
- 2006 *Gazarzii II*, Ulaanbaatar.
- [英語]
- Appadurai, A.
1986 “Introduction: Commodities and the Politics of Value.” A. Appadurai (ed.), *The Social Life of Things — Commodities in a Cultural Perspective*. Cambridge University Press.
- Bacon, Elizabeth, E.
1958 *OBOK—A Study of Social Structure in Eurasia*. Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research, Incorporated, New York.
- Endicott, Elizabeth
2012 *A HISTORY OF LAND USE IN MONGOLIA*, PALGRAVE MACMILLAN.
- Empson, R.
2007 “Separating and containing people and things in Mongolia” Amiria Henare, martin Holbraad and Sari Wastell (eds.) *Thinking Through Things — Theorising artefacts ethnographically*. pp.113-140, New York.
- Fijn, Natasha
2011 *Living with Herds—Human Animal Coexistence in Mongolia*, Cambridge University Press.
- Hendry, J.
2008 [1999] “Gifts, Exchange and Reciprocity.” *An introduction to social anthropology—Sharing our worlds*, PALGRAVE MACMILLAN.
- Humphrey, C. and Sneath, D.
1999 *The End of Nomadism? —Society, State and The Environment in Inner Asia*. Duke University Press.
- Humphrey, C. and Hugh-Jones, S. (ed.)
1992 *Barter, exchange and value—An Anthropological approach*. Cambridge University Press.
- Hurdley, R
2013 *Home, Materiality, Memory and Belonging—Keeping Culture*, Cardiff University, UK.
- Kopytoff, I.
1986 “The cultural biography of things: commoditization as process” Appadurai, A. (ed.) *The Social Life of Things—Commodities in a Cultural Perspective*, pp.65-91, Cambridge University Press.
- Miller, D.
2009 *Anthropology and the Individual —A Material Culture Perspective*. New York.

National Statistical Office of Mongolia (NSOM)

2010 *MONGOLIAN STATISTICAL YEARBOOK 2010*, Ulaanbaatar.

2008 *MONGOLIAN STATISTICAL YEARBOOK 2008*, Ulaanbaatar.

2004 *MONGOLIAN STATISTICAL YEARBOOK 2004*, Ulaanbaatar.

Pedersen, M, A.

2007 “Shamanist ontologies and extended cognition in Northern Mongolia.” Amiria Henare, martin Holbraad and Sari Wastell (eds.) *Thinking Through Things — Theorising artefacts ethnographically*. pp.141-166, New York.

Tanaka Jiro

1980 *The SAN Hunter-Gatherers of the Kalahari —A Study in Ecological Anthropology*, University of tokyo press.

UN Mongolia Country Team Consolidated Appeal

2010 *MONGOLIA DZUD APPEAL*.

Urtnasan, N. (eds.)

2010 *INTANGIBLE CULTURAL HERITAGE OF THE MONGOLS*. Ulaanbaatar.